

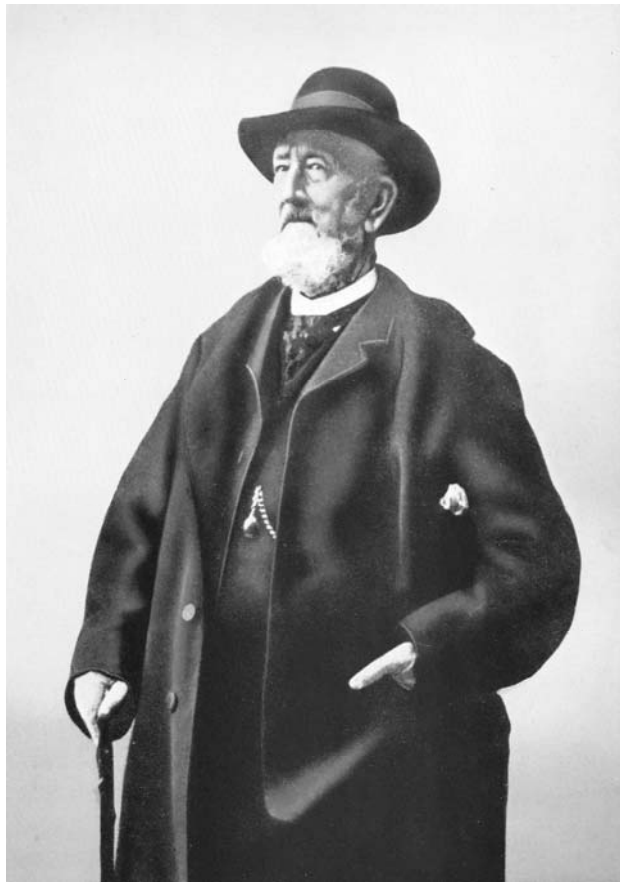
19 世紀フィレンツェにおける
建築家ジュゼッペ・ポッジの都市改造に関する研究

東京藝術大学美術研究科
2013 年度学位請求論文

會田涼子

19 世紀フィレンツェにおける
建築家ジュゼッペ・ポッジの都市改造に関する研究

會田涼子



Giuseppe Poggi (1811-1901)

19世紀フィレンツェにおける建築家ジュゼッペ・ポッジの 都市改造に関する研究

<目次>

序章	5
1 本論の背景と目的	
2 論文の構成と分析の視点	8
3 史料について	10
4 3つの時代の交錯点としての近代都市フィレンツェ（時代的背景）	12
第1章 建築家ジュゼッペ・ポッジのフィレンツェ拡大事業における計画範囲	22
はじめに	
1 ポッジ著『フィレンツェ拡大事業』	
2 新街区建設の基盤となる治水事業	
3 新街区建設と道路建設	
3-1 理想の広場設計（カヴール広場、クローチェ門広場）	
3-2 計画決定への政治的影響（プラート門広場、ヴィットーリオ・エマヌエーレ広場、英国人墓地）	
3-3 丘陵地帯への市域拡張（コッリ大通りとミケランジェロ広場の建設）	
4 未実施事業	
小結	
第2章 ミケランジェロ広場の形態と機能	43
はじめに	
1 ミケランジェロ広場建設の土地	
2 地盤と排水	
3 衛生的観点	
小結	
第3章 コッリ大通りの路程と機能	59
はじめに	
1 交通インフラとして的大通り	
2 洪水対策・飲料水の問題と大通り	
3 土地収用問題	
4 風景をつくる丘陵地帯の大通り	
小結	

序章

1 本論の背景と目的

本論は近代イタリアの国家統一後のフィレンツェにおいて都市改造を指揮した、建築家ジュゼッペ・ポッジによって策定されたマスタープラン「プロジェクト・デイ・マッシマ」を、実務的側面に着目して、計画の実態と理念の解明を試みるものである。

国内におけるイタリアの建築史、都市形成史に関する研究は、建築様式研究から類型学研究まで多岐にわたり進んでいる。フィレンツェに関しては、中世後期ヨーロッパにおいて商業・金融業が最も発達した都市のひとつとして、またルネサンス文化発祥の地として重要度が高く、建築史、都市形成史のみならず、他領域の分野でも非常に多く取り上げられてきた。しかしながら、近代都市に関する研究としては、明治以降の日本が主に都市計画を参照したイギリス、フランス、ドイツに関する研究が先行したため、イタリアに関する研究は極僅かである。特に、フィレンツェの都市改造を取り上げた研究は未だ着手されていない。

現代都市としてのフィレンツェは、中世・ルネサンスの時代に形成された建築や美術作品を主な対象に、歴史的都市、保存・修復都市として認識されることが多い。しかし、このような歴史都市フィレンツェとしての認識は、18世紀以降のオーストリア占領期、リソルジメント、イタリア国家統一、ファシズム期の激動の時代を経て獲得されたものである。しかも、フィレンツェは1865年から1871年までイタリア王国の首都になるという非常に特異な経験をしている。その流れの中で、都市の輪郭を方向付けた最後の建築的介入が、本論で扱うポッジの都市改造であり、歴史的都市が近代化の波を迎えた重要な転換点にあたる。

また、イタリア近現代建築史においては、最初に工業化が進んだトリノやミラノ、ファシズムの拠点であったローマが重要な都市として取り上げられることが多い。これらの都市は、フィレンツェに比べて経済発展や資本の流入があったために、建築件数が比較的多いことから、分析の対象となり易かったといえる。しかし、中央集権化が他のヨーロッパ諸国から遅れ、文化的統一も困難であったイタリアの場合、近代化以前の多様性や複雑性が、一種の文化的特長となっており、国家統一前後の近代都市フィレンツェを比較対象としての一例として特筆することが重要であると考えている。

フィレンツェにおける都市の近代化は、3つの特徴を挙げることができる。1つは、中世、ルネサンス期に成熟した都市構造が、その後500年間という長期間に渡って物理的に変化をしていなかったことが挙げられる。これは、近代化によって初めて既存の都市に手が加えられたということであり、歴史的都市の近代化としてのテーマ設定が可能である。2つ目は、上記の通り、一時的な首都を経験し、緊急に首都化へ向けた都市改造が行われたことである。そのため、首都として最も優先

された計画が如実に読み取れることが期待できる。3つ目は、フィレンツェが緩やかな丘陵地帯に囲まれた土地に位置しているという地形的条件を挙げることができる。これを考慮することによって、システムとしての都市の近代化のみによらない、都市の固有性に着目した考察が可能であると考えられる。

イタリアでのフィレンツェの近代都市に関する最初期の研究は、1960年後半から70年代にかけて展開される。この時期の研究の視点は主に、建築史、都市計画史、社会史に関するものが中心で、都市の大きな変化に着目した総括的な研究が目立つ。ジュゼッペ・ポッジに関する研究は、まず建築史の視点から、イタリア国家統一期の建築に関して、建築家の作品に注目した F. ボルシの研究（1966年）¹のなかで触れられている。その後1970年代に入り、重要な研究が展開されていく。同ボルシの首都フィレンツェとポッジに関して建築家の作品として分析された研究（1970年）²、E. デッティの首都直前からファシズム期までの都市の変化を社会的背景に着目した研究（1970年）³、G. ファネッリの古代から現代までを社会的背景と建築・都市の形成を並行して分析された研究（1973年）⁴が主要なものである。また、社会史分野では、S. フェイの研究（1971年）⁵で、フィレンツェ首都期の社会階層に起こった現象に関して分析されている。

これらのポッジに関する研究は、80年代に入って2回の展覧会で総括されている。第1回目の展覧会（1986年）⁶では主に都市計画に、第2回目の展覧会（1989年）⁷では建築作品に焦点が当てられており、それぞれ論文集が発行されている。フィレンツェでは1980年代後半から90年代初めにかけて、建築史や都市計画史分野のみならず、他分野でも19世紀から20世紀前半における研究が総括される動きがあった⁸。

この展覧会を境にして、1990年以降は、ランドスケープや庭園史、土木史からなどへ視点が移っていき、分析対象もより詳細なものが取り上げられるようになってきている。特に、近年イタリアで注目されているパエサッジョ研究や、テリトリオ研究の流れのなかでも、風景の構築という視点から分析した E. M. アゴスティーニの研究（2002年）⁹や、緑地計画として分析した C. パオリーニ（2004年）¹⁰などでポッジの計画が再考されている。

また、2011年はイタリア国家統一150年の年であり、また、ポッジ生誕200年でもあり、フィレンツェ市立文書館でポッジに関する展覧会がおこなわれた¹¹。また、トスカーナの近現代の都市計画を扱った学術誌でも国家統一期のフィレンツェに関して特集が生まれ¹²、これまでの研究史を概観し、またパエサッジョや技術的視点による新しい論考が展開されている。

以上のように、フィレンツェで展開されているポッジ研究は非常に分厚いものであるが、これらの研究は、社会史的観点による分析や建築家の作品としての価値に重きが置かれるあまり、計画の裏舞台ともいえる設計上の技術的な側面への配慮は

あまりとり上げられていない。ゆえに、これらの研究で扱われている史料は、報告書や議事録、図面はマスタープランや最終案をもとにした分析が主流である。そこで、本論では設計上の技術的観点に焦点を当てて、より詳細な実施図面等を探索し、図式化を試みながら分析をすすめていく。

ポッジの近代都市改造計画は、イタリアにおける近代初のマスタープランであり、19世紀に行われた都市改造では唯一都市全体を計画したものであるため、近代イタリアの社会的背景や文化的背景の変遷を最もよく反映した計画であるといえる。しかも、ポッジは建築家でありながら土木的事業も多く行っている。このことは、本論でとりあげる都市改造計画がイタリア近代における建築家と技師という職能分類の分岐点にたつものであったであろうことを示唆している点で重要である。

2 論文の構成と分析の視点

本論は、以上の背景と目的から、補章を含む 5 つの章から構成されている。この内、第 1 章では、ジュゼッペ・ポッジのマスタープラン全体を概観しポッジの意向が最も反映された計画を抽出し、第 2 章から第 4 章までは第 1 章で抽出した計画を各個にとりあげ、特に技術的観点に焦点をおいて分析している。補章では、ポッジが図面ではなく文書で都市改造をコントロールしようとした計画部分について、同様の視点で分析している。

まず第 1 章では、ポッジのマスタープラン「プロジェクト・ディ・マッシマ」の全容が記述された報告書『フィレンツェ拡大事業』(Poggi, G., *Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze*, 1882) を精査し、都市改造の全容を明らかにしている。そのなかで、各計画内容や形態決定の根拠、ポッジの言動に影響された政府や市の決定事項、また政治的・経済的背景による決定事項を抽出し、ポッジの意向が最も反映された計画を抽出している。

第 2 章では、第 1 章で抽出した計画のうち、ミケランジェロ広場を分析対象としている。ミケランジェロ広場については、ポッジの報告書や他の著書では象徴性や公共性に関する記述は多く見られるが、実際の位置や形態に関してはあまり述べられていない。環状道路の一部であることや、眺望を獲得したこと、象徴性に加えて、建設地の土地所有状況、地盤と排水、衛生状況という広場計画上の技術的側面からの視点を設けて分析を行うことで、広場が果たした機能と形態決定の要因について検討している。

第 3 章では、第 1 章で抽出した計画のうち、コッリ大通りを分析対象としている。コッリ大通りは、優雅さや景観の確保を主眼として設計されたものとして知られている。第 2 章と同様、計画上の技術的側面から、交通インフラとしての役割、洪水対策・飲料水問題、土地収用問題の視点を設け、実施設計図面や地形図の作図を用いた分析を行い、大通りの路程の形状決定の要因と要求された機能について検討している。

第 4 章では、第 2、3 章で扱ってきた丘陵地帯の計画に対して、都市部の計画である市門周辺の整備事業であるカヴール広場（現リベルタ広場）とクローチェ門広場（現ベッカリア広場）の計画を取り上げ、市門に対するポッジの歴史的視座と市門の取り扱い、街区形状の決定要因、広場に面した建築に採用されたファサード、既存建築の転換方法について、機能や用途に着目して分析している。

以上の 4 章では、ポッジが実際に設計図を作成した計画であるのに対して、補章では計画図案を示すのではなく、土地所有規定書という文書でコントロールしようとした計画部分を取り上げ、広範囲の地区に対してどのような首都としての理想像を繁栄させようとしたのかを分析している。

終章では、第 1 節で第 1 章から第 4 章までの各章で行った分析を通して、ポッジ

がイタリア国家統一期のなかで、首都フィレンツェの理想像をいかに都市改造のなかで実現しようとしていたか、またその手法と理念を総括している。第2節では、本論の結論と今後の課題について述べている。

本論は、ジュゼッペ・ポッジの都市改造計画に関するものであるが、ポッジが建築家であることを重要視し、そのことを踏まえた分析を行ったことから、本論では扱えなかった建築作品を巻末に収録した。

本論の構成



3 史料について

ここでは、分析に用いた史料と、図式化に使用した主な史料を挙げている。

- ・ジュゼッペ・ポッジ『フィレンツェ拡大事業』（未邦訳）

Poggi, G., *Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze*, Tipografia di G.Barbèra, Firenze, 1882.

本論において、ポッジのフィレンツェ拡大事業の全容を知ることができる最重要資料である。都市改造が完全に終了してから刊行されたもので、コムーネへの報告書としてまとめられたものである。オリジナルはフィレンツェ国立図書館、フィレンツェ市立図書館、フィレンツェ大学図書館等に保存されている。1992年にジュンティ社から復刻版が出版されており、フィレンツェの古書店等で流通している。

- ・ジュゼッペ・ポッジ『人生と芸術作品の回想録』（未邦訳）

Poggi, G. (per cura dei nipoti), *Ricordi della vita e documenti d'arte*, R. Bemporado e figlio, Firenze, 1909.

ポッジの建築作品を知るうえで重要な資料である。建築家としての初期の作品から、計画案のみで終わったものまで、ポッジ自身が記述している。この著書を作成中にポッジは没しており、最終的に甥によって編纂された。巻末には親族や同僚、建築家等とのやり取りが読み取れる主要な書簡が付されている。

- ・トスカーナ課税用不動産登記台帳、地図（カタスト）

Catasto Generale Toscano (tavola, mappa)

フィレンツェにおけるカタストに関する史料は、すべてフィレンツェ国立文書館に収められている。本研究で使用した1834年から1835年にかけて作成されたカタストは、フィレンツェにおいては都市部全域で作成されており、保存状態も良好なため、近代都市を研究する上で重要な史料となっている。イタリア国家統一後にフィレンツェ市に併合された共同体であるフィエーゾレ（一部）、ロヴェッツァノ、ペッレグリーノ、バーニョ・ア・リポリ、ガルツツォ、レニャイア、セスト（一部）、ブロッツィ、カゼリーナ・エ・トッリもこれに含まれる。

1834/35年の地図部門はすべてコンピュータ上で画像として閲覧することができるようになっており、台帳はマイクロフィルムによる閲覧が可能である。次いで使用した1875年頃と1884年のカタストは、地図、台帳ともマイクロフィルムによる閲覧のみである。一部は1966年の洪水で損傷が激しく、解読できない箇所がある。

本論で使用した史料のうち、所蔵場所を略名で記載したものを以下に挙げる。

- ACGV Archivio Contemporaneo del Gabinetto G. P. Vieusseux di Firenze フィ
レンツェ・ヴィュッスー文書館
- AMFC Archivio del Museo di "Firenze com'era" フィレンツェ・コメラ美術館
- ASF Archivio dello Stato di Firenze フィレンツェ国立文書館
- ASCF Archivio Storico del Comune di Firenze フィレンツェ市立文書館

注釈

-
- ¹ Borsi, F., *L'architettura dell'Unità d'Italia*, Firenze, 1966.
- ² Borsi, F., *La capitale a Firenze e l'opera di Giuseppe Poggi*, Colombo Editore, Firenze, 1970.
- ³ Detti, E., *Firenze scomparsa* (con la collaborazione di Tommaso Detti), Vallecchi Editore, Firenze, 1970.
- ⁴ Fanelli, G., *Firenze Architettura e città*, Vallecchi editore, Firenze, 1973.
- ⁵ Fei, S., *Nascita e sviluppo di Firenze città borghese*, G. & G., Firenze, 1971.
- ⁶ AA. VV., *Il disegno della città: l'urbanistica a Firenze nell'Ottocento e nel Novecento*, Alinari, Firenze, 1986.
- ⁷ AA. VV., *Giuseppe Poggi e Firenze. Disegni di architettura e città*, Alinari, Firenze, 1989.
- ⁸ Mori, G., Roggi, P. (a cura di), *Firenze 1815-1945. Un bilancio storiografico*, Le Monnier, 1990.
- ⁹ Agostini, E. M., *Giuseppe Poggi: la costruzione del paesaggio*, Edizioni Diabasis, Reggio Emilia, 2002.
- ¹⁰ Paolini, C., *Il sistema del verde: Il viale dei colli e la Firenze di Giuseppe Poggi nell'europa dell'ottocento*, Edizioni Polistampa, Firenze, 2004.
- ¹¹ *Verso la Capitale. La Nuova Firenze di Giuseppe Poggi*, a cura di G. Orefice e G. C. Romby, Archivio Storico del Comune di Firenze, 14 dicembre 2011-29 febbraio 2012.
- ¹² Orefice (a cura di), *Firenze e l'Unità d'Italia: un nuovo paesaggio urbano*, in «Sotria dell'urbanistica/Toscana XIII», Firenze, 2011.

4 3つの時代の交錯点としての近代都市フィレンツェ

ここでは、本論の前置きとして、ジュゼッペ・ポッジの都市改造計画が行われた近代フィレンツェの時代性を確認するため、既往研究を用いながら社会的背景、地形的背景、文化的背景の3つの視点から、統一前後の都市フィレンツェをとりまく様相の概略を整理しておきたい。

4-1 イタリア国家統一とフィレンツェ首都化

近代における都市フィレンツェにとって、もっとも重大な史実となっているのは、イタリア国家統一の流れの中で起こった事件ともいえる、一時的な首都化である。イタリア半島は、1796年のナポレオンのイタリア遠征から、徐々にフランスとオーストリアの領土争いに巻き込まれていった。1840年代のヴィンチェンツォ・ジョベルティやチェザレ・バルボらに代表されるナショナルな運動の機運が高まり、1848年の第一次独立戦争、1859年の第二次独立戦争を経て、1861年1月に教皇領とヴェネトを残して国家統一を果たし、同年3月、イタリア王国として成立した。この独立への高まりは、フランスとオーストリアの脅威から触発されたものであったため、地理的に近いサルデーニャ王国でナショナルな運動は始まり、徐々に半島へ広まった。

トスカーナは、1799年にフランス軍に占領され、1801年のエトルリア王国、1807年のフランス帝国併合を経て、1814年のナポレオン失脚までフランスの支配が続いた。ナポレオンが失脚すると、ウィーン体制下に入り9カ国に再編成、トスカーナ大公としてオーストリア皇帝の弟フェルディナンド3世が復帰した。しかしながら、1859年3月にはフィレンツェでの民衆蜂起により、大公レオポルド2世は国外退去となり、穏健派と国民協会の提携による臨時政府が樹立されることとなった。そして同年、8月に議会選挙が行われ、トスカーナはサルデーニャ王国と合併することがイタリア国家統一以前に決定していた。

フィレンツェの首都化は、イタリア半島の各国のサルデーニャ王国の合併に反対していたナポレオン3世との駆け引きの中で決定されることとなる。新国家となったイタリア王国の議会は、おおまかに土地所有貴族で構成された右派とガリバルディやマッツィーニと活動をともにした民主派のグループで構成された左派の勢力にわかれており、左派グループはフランス軍に占領されていたローマの解放を機に、民主派の主導権を握ろうとしていた。一方、右派はフランスとオーストリアの2大強国を相手に慎重に政治を進めようとしていた。このため、政府とフランスの間では秘密裏に進められた交渉によって、1864年9月の協定でイタリアが教皇領を攻撃しないことを条件に、フランスは2年以内にローマから撤退することに合意が得られていた。しかしながら、この協定には秘密条項が盛り込まれており、そこにローマを首都としないことの表明として、フィレンツェを首都とすることが決定されたの

である¹。

フィレンツェへの首都移転は、トリノで暴動がおきるなどピエモンテの党派や聖職者、共和党から反対を受けた。しかし、トリノやローマが首都としてふさわしくない理由が挙げられ²、首都移転は実現へむかっていく。フィレンツェが首都にふさわしい理由は、①フィレンツェはイタリアの中心にある、②陸路か海路で、ミラノ、トリノ、ジェノヴァ、ヴェネツィア、ナポリ、パレルモから近い、③外部からの攻撃に備えて、ミラノ、ジェノヴァ、ヴェネツィアに軍を配備しやすい、④フランス・オーストリアの侵入に対して3重のバリアがある（アルプス山脈、ポー川、アペニン山脈）⑤海からの脅威にはさらされておらず、2つの海へのアクセスが容易で沿岸の上に船着場を晒さないでよい、⑥地中海側は海洋都市リヴォルノの恩恵があり、アドリア海側はラヴェンナやリミニに鉄道を通すことができる、といった軍事的利点が強調されていた。また、政府は1861年のイタリア万博をフィレンツェで開催し、首都移転に邁進した³。

以上のような経緯でフィレンツェはイタリア王国の首都となったのである。

フィレンツェの主力となっていた党派は穏健派で、その中にはイタリア王国2代目首相のベッティーノ・リカーソリ（1861年6月～1862年3月在位）も含まれていた。リカーソリが出した1861年10月の政令は、地方行政度を適用するもので、この措置は中央政府の派遣する県知事に強い権限が認められるものであった⁴。

本論でとり上げるジュゼッペ・ポッジの都市改造計画は、フィレンツェ首都化計画のなかでもっとも大規模なものであるが、その他にも首都となったことで発生した重要な都市や建築の変化があった。それらを以下に挙げ、ポッジの計画の位置づけを確認しておきたい。

<官庁街計画なしの首都化計画>

フィレンツェ首都化計画の重要な特徴のひとつとして、首都として新規に建設される官庁街計画が存在しなかったことが挙げられる。この理由として、首都化の決定が秘密裏に進んだこと、また上記の9月協定から実際に遷都するまでわずか3ヶ月という迅速さゆえに、ハード面の準備期間が充分でなかったことが挙げられる。もうひとつは、フィレンツェがイタリア王国成立以前にトスカーナ大公国の首都であったことが挙げられる。国会はパラッツォ・デッラ・シニョリーア（パラッツォ・ヴェッキオ）とウフィッツィに入った。ただし、トスカーナ大公国時代の政府機関が利用していた器のみでは充分ではなく、他各省はパラッツォや修道院に入ることとなった⁵（図0-1）。また、これにともなって、各省のために建築物の内部に機能に準じるための改築が施された⁶。

また、公共の施設としては、美術館や劇場が次々と整備され、パラッツォ・デル・ポDESTA（バルジェッロ）内の国立美術館やサン・マルコ修道院内フィレンツェ美



- | | |
|------------------------------|----------------------------------|
| ①国会
(パラッツォ・デッラ・シニョリア) | ⑨会計検査院
(旧クロチェッタ修道院) |
| ②上院・郵便局
(ウフィッツイ) | ⑩国防省
(旧サンタ・カテリーナ修道院) |
| ③下院 | ⑪財務省
(小パラッツォ・デッラ・リヴィア) |
| ④教育省
(サン・フィレンツェ修道院) | ⑫破毀院・公共事業省
(サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院) |
| ⑤国務院
(パラッツォ・ノン・フィニート) | ⑬海軍省
(バルベッティ修道院) |
| ⑥司法省
(パラッツォ・ダ・チェツパレツリ) | ⑭兵舎
(カルミネ聖堂付属施設) |
| ⑦内務省
(パラッツォ・メディチ・リツカルディ) | ⑮関税局
(旧レオポルド駅) |
| ⑧国庫・税務局
(小パラッツォ・ブオンタレンティ) | |

図 0-1

表 0-1 18 世紀末から 19 世紀後半にかけてのフィレンツェの人口

年	人口 (人)	増加数 (人)	年	人口 (人)	増加数 (人)
1781	89,200	+3,400	1866	174,774	+29,789
1791	94,700	+5,500	1867	176,230	+1,456
1801	79,200	-15,500	1868	177,284	+1,054
1811	95,000	+15,800	1869	191,135	+13,235
1821	84,791	-10,209	1870	194,001	+2,766
1831	94,156	+9,365	1871	182,714	-11,287
1841	102,154	+7,998	1872	167,093	-15,621
1851	110,343	+8,189	1873	166,464	-629
1861	114,568	+4,225	1874	164,167	-2,297

出典 : Redi, P., *Espansione e speculazione edilizia in Firenze capitale*, in *La Toscana nell'Italia unita*, Firenze, 1962, p.454.

表 0-2 フィレンツェ近代都市改造史年表 (筆者作成)

フィレンツェ (トスカーナ)		衛生・災害関連	イタリア半島の社会背景
社会背景	都市改造計画		
<ul style="list-style-type: none"> 1799 フランス軍占領 1801 エトリア王国建国 1807 フランス帝国に併合 (皇帝ナポレオン) 1809 エリーザ (ナポレオン妹) 即位 1814 ナポレオン失脚 フェルディナンド 3 世復位 1824 レオポルド 2 世 1859 民衆蜂起、臨時政府樹立 フェルディナンド 4 世 1860 住民投票でサルデーニャ王国へ併合 	<ul style="list-style-type: none"> 1802 フランスと同様の県・コムネ法適応 1820-50 道路拡幅・新設工事 1840-60 新住居地区建設 1840-60 鉄道路敷設 1830 サルデーニャ王国建築規制法 1859 ラタッツィ法 (県・コムネ法) 	<ul style="list-style-type: none"> 1835 コレラ発生 1844 アルノ川氾濫 1854 コレラ発生 	<ul style="list-style-type: none"> 1848 第 1 次独立戦争 1859 第 2 次独立戦争 1860 イタリア統一
<ul style="list-style-type: none"> 1865 首都フィレンツェ誕生 	G. ボッジ「プロジェクト・ディ・マッシマ」 <ul style="list-style-type: none"> 周辺河川の堤防増強 環状道路建設・新住居地区建設 丘陵地帯整備 など 1865 公用収用法 1867 宗教団体の財産没収・売却の法 	<ul style="list-style-type: none"> 1864 アルノ川増水 1865 コレラ発生 	<ul style="list-style-type: none"> 1866 ヴェネト獲得
<ul style="list-style-type: none"> 1871 ローマ遷都 	<ul style="list-style-type: none"> 1881-98 中心地再整備「リサナメント」 	<ul style="list-style-type: none"> 1873 コレラ発生 	<ul style="list-style-type: none"> 1871 ローマ併合
<ul style="list-style-type: none"> 1914 第 1 次世界大戦開戦 			

術館、考古学博物館のエトルリア部門が開館し、ヴァザーリの回廊も公開されることとなった⁷。

一般に都市の近代化は、産業の近代化に伴う都市部の就労人口の増大に対応するため、あるいはその近代産業を牽引補強するための近代的な大量輸送を可能にする交通インフラの導入に起因するものである。しかし、フィレンツェの場合、都市の近代化自体、首都化が決定する以前の1840年代の鉄道の導入時期に始まったものであったが、この時点での人口増加はロンドンやパリのような爆発的なものではなかった。フィレンツェと周辺地域における工業化は、タバッキ工場の建設などが見られるものの、都市内部に大量の人口が流入するという現象はあまり起こらなかった。18世紀末から19世紀後半にかけてのフィレンツェの人口の推移を示した表(表0-1)を見ると、最も増加したのは1866年で、首都化によって増加していることがわかる。

具体的にフィレンツェにおいて都市の近代化が進められた時期を見てみると(表0-2)、フランスの占領期が始まる1799年から第一次世界大戦が開戦するまでの1914年を、首都期をはさんで第一期(1799～1865年：占領時代)、第二期(1865～1871年：首都時代)、第三期(1871～1914年：ローマ遷都後)と区分することができる。第一期は、近代的都市計画手法がフランスから持ち込まれたことによって、直線的な道路を開通させるための拡幅作業や、幾何学的な街区による住居地区の建設など、部分的改造が行われたほか、鉄道の導入や鉄橋の建設など、新たな素材と手法による建築が登場し始め、後の都市改造の基礎となった。また、第三期では都市の中心地の再整備が行われたほか、市場が設置されるなど生活インフラが整備されていた。本論で扱うジュゼッペ・ポッジの都市改造は、第二期の首都時代にあたる。

4-2 首都フィレンツェをつくる人

では、第二期の首都化の計画主体はどのようなものだったのか。

首都化が決定した1864年、フィレンツェではコムーネによって、都市改造を推進する特別委員会 *Commissione Comunale* が設置され、翌1865年1月の遷都のとき、市長はフィレンツェ出身のルイーギ・グリエルモ・カンブレレー＝ディニーであった。彼は後にイタリア王国の農業・工業・商業大臣となった人物である。

イタリア国家統一後に制定された都市計画に関する法律では、都市調整計画はコムーネが作成することとされた。基本方針や前提条件認可といったソフト面は、この市長を中心とするコムーネによって進められる。このコムーネによる決定に従いながら、都市改造のハード面といえる部分を監修したのが、本論で扱う建築家ジュゼッペ・ポッジなのである。

<都市改造の設計者>

ここで、建築家ジュゼッペ・ポッジの経歴と都市改造の設計者として任命された経緯について述べたい。

ジュゼッペ・ポッジは1811年、フィレンツェに生まれ、弁護士である父をもち、弟のエンリコは後のイタリア王国の上院議員となる人物である。高等教育を終えた後の1828年から1835年、バルトロメオ・シルヴェストリ (*Bartolomeo Silvestri*, 1781-1851)の事務所で修養する傍ら、フィレンツェ美術学校へ通い、1835年からはフェリーチェ・フランコリーニ (*Felice Francolini*, 1809-1896)と共同で、技術士として裁判所の修復に携わった。1838年から独立して仕事を開始した後の1843年に建築科の学士号を修めている。また、インギラーミ司教とタンツィーニの弟子であった。

ポッジは、独立してから1864年にフィレンツェ拡大事業を委任するまでの間、数多くのパラッツォやヴィラの設計、または修復に携わっているが、その代表的な設計作品に、パラッツォ・ファヴァール (1857年)、パラッツォ・カルカニーニ (1857年) などがあり、修復・増改築ではパラッツォ・グイッチャルディーニ (1843年)、パラッツォ・ストロツィ (1864年)、パラッツォ・ゴンディ (1874) などフィレンツェの歴史的 중요性の高いパラッツォを請け負っている。これらの建築作品の一覧は、本論の巻末資料として添付している。

1845年にはフランスとイギリスへ旅行し、当時オスマンによる都市改造が進行していたパリを視察しており、その様子を弟エンリコに書簡で伝えている。1860年には再び旅行をし、このときはイタリア内、東方、フランス、イギリス、ベルギーを訪れている。1848年のイタリア第二次独立戦争へ出兵、1855年には農事家アカデミーの会員となった。また、19世紀トスカーナにおける復古様式 *Restaurazione* の創始の一人である建築家パスクアーレ・ポッチャンティ (*Pasquale Poccianti*,

1774-1858) の娘と結婚した。

1862 年には、本論で扱うフィレンツェ首都化のための都市改造計画に先駆けて、都市部の開切による大通り計画を提案しているが⁸、これは実現しなかった。

1864 年からは、首都化のための都市改造に着手するが、これは、1864 年 11 月 22 日にゴンファロニエーレ（イタリア国家統一後の市長）が、拡大事業の依頼文書を送り、翌 23 日、依頼受諾の文書をポッジが返信することで都市改造の設計者が決定された。ポッジがこの任に抜擢された理由は明らかにされていないが、行政側に建築系の人材が不足していたことで外部の建築家が要請されたことが、ポッジ自身によって述べられている。また、ポッジが技師としての業績を持ち、当時、最も傑出した評価を得ていた建築家であり、拡大事業の適任者であったことは、後の研究者によって指摘されているところである。

拡大事業後、1876 年にはサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のファサードの推進委員会の委員となるものの、1878 年にはコムーネが破産したため、心労によって私生活に身を引いた。その後も州議会には残っていた。

1897 年トスカーナ建築家・技師組合の名誉会長になった後、1901 年、90 歳でその生涯を閉じた。

<19 世紀フィレンツェの建築教育>

以上のような経緯から、建築家であるジュゼッペ・ポッジが都市改造の設計者として選出されたのであるが、ポッジをはじめとする建築家という職能はどのようなものとして認知されていたのであろうか。

ポッジが教育を受けたのは、フィレンツェ美術アカデミー Accademia di Belle Arti di Firenze の建築科で、後にポッジが都市改造計画で使用する都市図を製作したジュゼッペ・ヴァンニーニが指導にあたっていた。この建築科の教育指針として、以下の 3 つがあげられている。①ギリシャのオーダーで最も美しく、歴史的にも近代的にも最高の建築物を模範とし、新しい建築物はもっとも有効な建設法を示すものとして重要である。②土木測量技師、技師、建築家が教鞭をとる。③初級者は火・木・土の午前中 10-13 時に開校し、上級者には連日開校し、指導者マエストロの助言を受ける。

この建築科はアカデミーがデザイン・音楽吟詠・機械の 3 つの母体に区分されていたもののうちのデザインに含まれ、建築科ともうひとつ数学・水理学科が設けられていた。これは、建築に必要な数学や構造計算を学ぶところで、以下の 3 つの教育指針があげられている。①数学も水理学も現代においてもっとも信頼できる分野である。②技師または建築家に従事する若者はアーチやヴォールトに必要な曲線、三角法、面積計算、てこの原理、機械の原理、流量計算を学び、最終的には溪流や河川を整備、管理する理論と実践を学ぶ。③月・火・金の午前中 10-13 時に開校

する。

このアカデミーのシステムは、フランス占領時に導入されたコンセルヴァトリオの方式を取り入れられているが、最初の母体となったのは、ピエトロ・レオポルドがフランスのパリ国立土木学校に影響を受けて、コジモ 1 世時代の美術アカデミーを刷新したものであった。ピエトロ・レオポルドの時代のヴァンニーニの世代の指導者はガスパロ・マリア・パオレッティで、ヴィニョーラへの傾倒があり、水理学と機械学の知識に富んだ建築家であった。

このように、当時の建築家教育では、水理技術を学ぶ科が建築科と併設されていたことなど、土木技術が重要視されており、意匠よりも技術が先進的で重要であるとされていた。

4-3 丘陵に囲まれたフィレンツェとアルノ川

<地形に関わる建築家・技師の仕事>

以上の建築教育を見ると、建築の意匠のみではなく土木技術が重要視されてきていたことがわかる。ポッジも建築家としての青年期に、マレンマ沼地の調査に同行している。

このマレンマ沼地の開墾は、コジモ 1 世時代から注視されており、ピエトロ・レオポルド時代には法の整備と経済面からの介入によって運河建設を行うなどしていた。本格的に調査や事業に乗り出したのは 1829 年のレオポルド 2 世の勅令からで、建築家アレッサンドロ・マネッティはマレンマの調査を始めた⁹。このアレッサンドロ・マネッティはパリの国立土木学校に留学し、最新の土木技術や数学を学び、フィレンツェに帰国した後ヴァル・ディ・キアーナの開墾事業を任された人物で、その他、ビエンティーナ湖の干拓やフチェッキオの開墾も担っていた。

これらの開墾事業では運河の掘削や沼地の排水が行われており、ここで利用されていた技術は、河川の洪水対策とも共通するものであった。

ここで、フィレンツェ首都化以前のアルノ川の洪水対策を簡単に確認しておきたい。歴史上、大規模とされているのは 1333 年、1557 年、1589 年、1740 年、1758 年、1844 年の洪水である。このうち、18-19 世紀の洪水対策¹⁰をみると、まず、1762 年に建築家フェルディナンド・モロツィ¹¹の調査報告書がある。この調査を基盤に、1767 年にジョヴァンニ・タルジョーニ・トツェッティのアルノ川迂回案¹²がトスカーナ大公へ提案される。さらに、この報告書と提案書には過去の洪水に関する記述もあり、アルノ川迂回案は 16 世紀からあったとしている¹³。しかしながら、トツェッティ自身も述べているように、この計画実現には莫大な工費がかかることが算出されていたため、おそらく財政的困難さから実現されなかった。

次に、1777 年に河川の堤防の設計競技が行われ、10 案が競技した結果、アントニオ・ベッローニの案が当選した。これは 2 部構成で第 1 部は堤防が機能しなくなっ

たときのことに関して、川床が上がってきたときのことに関してが記述されていて、第2部では第1部で展開された論理の実施応用について記述されている。

続いて、1782年のジョヴァンニ・フランチェスコ・モリネッリ、1823年のフランチェスコ・フォカッチの案が出されていた。1849年には、ピエトロ・ロッシーニは、伐採によって引き起こされた河川の被害を修繕するため、農事家アカデミーに政府に計画を実行するよう催促している。

このように、アルノ川は都市を潤す水源であったとともに、一瞬で都市を壊滅させる脅威であり、常に対策が講じられていたが、規模が非常に巨大なため、どの時代においても実現可能なものではなかった。

このように、低地では土木技術を必要とする沼地の開墾や河川の整備が徐々に展開されつつあった。

一方、18世紀から19世紀にかけて高地の丘陵地帯ではハード面における変化は起こっていなかったが、グランド・ツアーでフィレンツェを訪れた上流階級の人々が丘陵地帯に建てられた既存のヴィラを滞在先として利用するというソフト面の変化がおこっていた。また芸術家は屋外で活動するようになり、トスカーナの丘陵地帯も絵画のモチーフとなった。観光客は19世紀に入ると、中流階級の台頭や鉄道の敷設などによって増加し、アメリカ人を含む多くの外国人がフィレンツェを訪れるようになり、丘陵地帯は文化的活動の場ともなっていた。

以上のような時代背景のもと、ジュゼッペ・ボッジによってフィレンツェは大きく変容を遂げることとなった。

注釈

¹ 北原敦編, 『イタリア史』, 山川出版社, 2002, p.412.

² 1. トリノは国境の接した都市であり、防備が取り除かれているので、容易に奇襲的になってしまう。2. トリノはイタリアの中心ではないので、政府にとって不便なことが多い。3. トリノは近代的な都市であるので、芸術的な伝統がない。という3点が挙げられている。Macario, D., *Perché Torino non può più essere capitale?*, Tipografia Franco-Italiana, Torino, 1864.ローマが首都としてふさわしくない理由としては、1. 気候が十分健康的か: マラリアの危険性がある (ほかの都市同様に) 2. 海から近いか: オステリアはもはや海沿いでない。3. イタリアの中心か: パルマやロンバルド、ヴェネトを獲得し、ピエモンテを含めばそうである。などが挙げられている。Casati, C., *Roma o Firenze qual esser debba la capitale dell'Italia?*, Unione tipografico editrice: Torino, Libreria Gianini e Fiore: Firenze, Lapi, Papini e compagnia, [1861?].

³ *Ibid.*, p. 15.

⁴ 前掲書, pp.409-410.

⁵ Brilli, A., *Il viaggio della capitale. Torino, Firenze e Roma dopo l'Unità d'Italia*, UTET Libreria, Torino, 2010, p.4.

⁶ Fantozzi Micali, O., *La città desiderata. Firenze come avrebbe potuto essere: progetti dall'Ottocento alla seconda guerra mondiale*, Alinea, Firenze, 1992, pp. 52-53.

- ・国会議事堂: パラッツォ・デッラ・シニョリーア (パラッツォ・ヴェッキオ) のチンクエチェント広間の縮小←これ以前は別の建物も考えられていた (アントニオ・コラッツィ)
- ・サン・フィレンツェ修道院の縮小と階層増築: 教育省? (l'Istruzione)
- ・カジーノ・ブオンタレンティの増築: 国庫と税務を扱う局 Direzione Generale Demanio e Tasse c
- ・カヴール通りの建物 (おそらく旧サンタ・カテリーナ修道院) の再建: 国防省 Ministero della Guerra
- ・スカーラ通りの建物内部の縮小と増築: 公共事業省 Lavori Pubblici
- ・旧クロチェッタ修道院の縮小と新築: 会計検査院の文書館 Archivio della Corte dei Conti
- ・サンタ・クロチェ修道院の縮小: 関税局 Direzione Generale delle Gabelle
- ・プラート門付近の駅の縮小と拡張: 関税地方局 Direzione Locale delle Gabelle
- ・カルミネ聖堂に付属した小パラッツォの縮小: 大統領護衛騎馬憲兵の兵舎とパラッツォの警備隊
- ・パラッツォ・ヴェッキオの縮小と増築 (レオーニ通り側): 外務省 Ministero degli Affari Esteri と下院 Camera dei Deputati
- ・ウフィッツィの一部縮小: 上院
- ・サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院の縮小: 公共事業省の別の部 Ministero dei Lavori Pubblici と破毀院 Corte di Cassazione

- ・パラッツォ・メディチ・リッカルディの縮小: 内務省 Ministero dell'Interno

- ・パラッツォ・ノン・フィニートの縮小: 国務院 Consiglio di Stato

- ・ウフィッツィの縮小: 郵便局 la Posta

- ・コロソ通りのパラッツォ・ダ・チェッパレッコ (ボルティナリー・サルヴィアーティ) の再整備: 司法省 Ministero della Grazia e Giustizia e dei Culti

- ・バルベッティ修道院(サン・ヤコボ・ソプラルノ聖堂)の再整備: 海軍省 Ministero della Marina

- ・ヴィラ・ポッジョ・インペリアーレの再整備: サンティッシマ・アヌンツィアータ Istituto della S.S. Annunziata

⁷ Boralevi, A., *Musei di Firenze Capitale*, in 《Architettura in Toscana dal periodo napoleonico allo stato unitario》, (a cura di Gabriella Orefice), UNIEDIT, Firenze, 1978, pp. 79-90.

⁸ Poggi, G., *Alcune parole sopra uno dei grandi miglioramenti della città di Firenze*, Coi Tipi di M. Cellini E C., Firenze, 1862.

⁹ *Sulla sistemazione della Val di Chiana e sul Bonificamento della Maremma*, 1849.

¹⁰ Bigliuzzi, Lucia., Bigliuzzi, Luciana (a cura di), *Fiumi, inondazioni e "idraulica pratica"*, catalogo della mostra di 3-8 aprile 1995, Nuova Stamperia Parenti, Firenze, 1995.

¹¹ Morozzi, F., *Dello stato antico e moderno del fiume Arno e delle cause e de' remedi delle sue demolizioni...*, Gio. Battista Stecchi, Firenze, 1762.

¹² Targioni Tozzetti, G., *Disamina d'alcuni progetti fatti nel secolo XVI. per salvar Firenze dalle inondazioni dell'Arno umilmente presentata all'Altezza reale del serenissimo Pietro Leopoldo...*, S. A. R. per Gaet. Cambiagi, Firenze, 1767.

¹³ *Ibid.*, p.6.

第1章

建築家ジュゼッペ・ポッジのフィレンツェ拡大事業における計画範囲

はじめに

本研究は19世紀のフィレンツェにおける都市改造による変容を探るものである。フィレンツェはルネサンス文化が栄華を誇り、都市単位の歴史的遺構が現在でも色濃く残っている有数の都市である。しかしルネサンス期の経済発展の衰退以降、他国の占領や独立戦争を経たイタリア国家統一、ファシズム期といった様々な時代を経験して、今日のフィレンツェの姿となっている。

フィレンツェにおける近代都市改造は、非常に特徴的な三つの側面をもっている。第一に、フィレンツェは、イタリア国家統一後の1865年から1870年の6年間、一時的に首都を経験したことである¹⁾。これは近代以降、他に類を見ない希有な例である。また、フィレンツェは、後に首都として機能しなかったために、首都化のための継続的な都市計画が遂行されなかった。そのため、初期段階の計画が顕在化していると言え、首都化のための都市改造が都市と建築へ与える影響を分析できる非常に貴重な研究対象である。

また、第二に、フィレンツェが丘陵地帯に囲まれていた²⁾ことが挙げられる。フィレンツェの近代都市改造箇所を単純に見ただけでも、丘陵地帯に計画が及んでいること、また丘陵地帯に眺望が確保できる場所を計画していることがわかる。現在、フィレンツェを含むイタリア全土では、建築やモニュメントに留まらず、都市自体や地形・自然を含む景観保護の整備が進められている³⁾。このような背景には、イタリア国家統一以降、大規模な都市改造や乱開発が進んだことが理由の一つとして挙げられる。統一直後は、建築や古代モニュメントに対する保護法は策定され始めていたものの、都市構造や地形までは含まれていなかった。しかし、ルネサンス期において、メディチ家のヴィラがフィレンツェの都市全体を望める場所に建設されていることや、L. B. アルベルティが歴史的建造物だけでなく風景をも重視していたとされるように⁴⁾、風景を考慮した設計は、フィレンツェでは国家統一以前から行われていた。そこで、ルネサンス期の流れを汲む、フィレンツェ独自の地形の読み方が、近代の都市改造においても適用されたのではないかと考えられる。この考察は、ルネサンス期における風景への視点と1900年以降の景観保護整備の視点との歴史的繋がりを理解することに成り得る。

第三に、歴史的遺産を多く有していたことが挙げられる。ヨーロッパ諸国における近代都市改造の手法は、パリ都市改造で行われたオスマンの手法に負うところが多い。フィレンツェの近代都市改造においてもまた、市壁を解体した都市拡大、環状並木道路の建設、土地収用と売却の手法等において踏襲されている。とはいえ、新たに建設された建築物の様式や広場の構成、都市の象徴とされた建造物や歴史上の人物はパリのそれとは異なる。L. ベネヴォロがフィレンツェの近代都市改造に関して、「新しく統合された国の現実と、古い都市自身のもっている特殊な要求とに適合させるために、いろいろな試みがなされた」⁵⁾と指摘しているように、単に輸入された都市計画手法をそのまま

適用させるのではなく、過去に培ったフィレンツェ文化をいかに近代都市に読み替え、適合させるかという視点があったと考えるのは不自然なことではないだろう。このことから、フィレンツェの近代都市改造の研究は、新たな時代の転換点における、歴史的都市の変容を理解する一端になり得るのではないかと考えている。

以上の3つの特徴的側面の中で開始された、フィレンツェの近代都市改造は、フィレンツェの建築家ジュゼッペ・ポッジ Giuseppe Poggi, (1811-1901)によって指揮された。ポッジによって作成された「プロジェクト・ディ・マッシマ Progetto di massima (マスタープラン)」は、フィレンツェ首都化が強く意識されたものであり、近代における理想のフィレンツェ像が表象されていると言える。また、ポッジがおそらくイタリアで最初の都市計画家であろうという、建築史・都市史家 F. ボルシの指摘のように⁶⁾、ポッジの都市改造計画からは、フィレンツェのみならず、イタリアにおける近代都市の萌芽を見ることができると言えるであろう。

しかし、近代における都市計画は一人の建築家の意向のみで決定されるものではなく、常に国家、地方行政、法律と結びついており、公共性の反映が求められ、さらには土地所有者、建設会社との契約のもとに成立するものである。ゆえに、ポッジが首都フィレンツェとして描いた理想と、実現された計画には、相違があると考えられる。ポッジの理念と社会状況の影響を理解するには、各計画においてポッジの意志を反映できたかどうかを検証する必要がある。

無論、近代という時代を通じての一人の建築家の役割や決定権の及んだ範囲、また社会と都市に与えた影響を推し量るには、膨大な資料に基づく分析と考察が必要であり、本稿のみでは到底扱いきれる範囲ではない。しかし、複雑な都市の近代化を紐解く一端として、まず、マスタープランとして作成された都市改造がいかに決定されていたかを観察ことに意義があると考えている。

本稿では、建築家ジュゼッペ・ポッジの「プロジェクト・ディ・マッシマ」に限定し、各計画内容や形態決定の根拠、ポッジの言動に影響された政府や市の決定事項、また政治的・経済的背景による決定事項を抽出し、計画範囲の明確化を試みる。

既往研究

フィレンツェの近代都市計画の評価は現在も賛否両論である。計画実施直後には歴史家 G. カロッチ⁷⁾によって歴史的都市の破壊に対する痛烈な批判を受ける。そして戦後の研究の一端は 1970 年代に E. デッティの研究⁸⁾、F. ボルシの研究⁹⁾に見られ、1980 年代には比較的大規模な展覧会¹⁰⁾が開かれている。この時期の研究の焦点は歴史的建造物の取り扱い方に関しては批判的な部分も多いが¹¹⁾、同時に批判的な計画となった社会的背景を描き出している。また、G. ファネッリ¹²⁾による、フィレンツェの建築と都市の通史を網羅した大著があり、各時代における社会的背景と共に、建築と都市の変遷

をまとめ上げている。この中では、ポッジの都市改造に関しては、主要な計画が取り上げられており、マスタープランの全体像が明らかにされている。また、その他社会史分野から中心地改造の研究¹³⁾、美術史分野で市門の調査¹⁴⁾が行われており、解体・改修された建造物の連続平面図・立面図等が実測をもとに作成されており、市門の構造が明らかにされている。1990年代以降は、G. コルサーニ¹⁵⁾、E. M. アゴスティニ¹⁶⁾、P. クラウディーニ¹⁷⁾の論考があり、社会的都市計画の視点、文学的視点、緑地計画の視点など多角的な視点で分析されるようになった。

上記のジュゼッペ・ポッジに関する研究はすべてイタリア国内、しかもほぼフィレンツェのみで展開されている。現代のフィレンツェにおいて都市・地域計画を行う場合、近代都市改造が直接的な決定基盤となるため、フィレンツェにおいてこのような研究がなされていることは当然ともいえる。そのため、都市改造の全貌は明らかにされており、建築家や技術者の組織も綿密に整理された上で、各計画においての評価付けも行われている。首都化に向け実現した計画に関する考察は数多く、また複数の提案があった計画案の比較検討は行われているが、修正された案についての言及、構想段階で中断された計画や、実施には至ったが初期段階の意図とは異なる形で実現された計画について言及されている研究は限定的である。しかし、理想と現実のずれこそが、首都化による都市と建築への影響を考察する上で非常に重要な要素であり、これを含めて考察することで、フィレンツェの近代都市改造の理念がより鮮明に見えてくるのではないかと考える。

イタリア国家統一後の都市計画に関しては、国王の勅令や県議会、市議会による議決で進行しており、幸いにしてその議事録や設計者に求められた市への報告書が残っているため、計画の経緯を知ることが可能である。フィレンツェの首都化にむけた都市改造については、計画者であるポッジ自身がまとめた報告書『フィレンツェ拡大事業』*Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze*¹⁸⁾が残っており、本研究ではこの報告書の精査に基づき、計画の経緯を明確にしていく。

1 G. ポッジ著『フィレンツェ拡大事業』

まず、本研究の分析に重要な史料である、拡大事業の全容をポッジ自身が報告書としてまとめた大著、『フィレンツェ拡大事業 *Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze*』について概説しておく。この報告書はポッジの事業が完全に終了した後の1882年にフィレンツェで出版された。本編・巻末資料を合わせた、全374項から成る。第1章から第3章で、都市拡大事業着手の経緯、ポッジの計画判断基準、主要な計画の概要が記述されており、第4章から第8章までは、都市計画洪水対策、環状通り、都市調整計画 *Piano Regolatore*（住居地区計画）の実施経緯がまとめられている。その他、入市税徴収の境界、掘削工事による古代ローマ時代の遺跡・遺物、建設会社との抗争の章などが

続く。この報告書は、各計画の実施経緯に重点が置かれて記述されており、計画の前後の状況を重ね合わせた図 *sovrapposto*、排水溝断面図、建設する建物の平面図と立面図が文中に挿入されている。これら一連の都市計画は、1865年1月31日にポッジが提出した「プロジェクト・ディ・マッシマ」¹⁹⁾ (図1-1) と名付けた計画図面に集約されており、巻末資料として付されている。

本書の冒頭で述べられている事業着手の経緯について以下に要約する。1864年の9月にフィレンツェへの遷都が議決された後、迅速な首都化へ向けたコムーネ委員会 *Commissione Comunale* 結成された。都市計画設計をポッジに依頼する文書でこの著書は始まる。ここでコムーネがポッジに指示しているのは、市壁を解体して都市を拡大すること、市壁跡に公共の大通りを建設することである²⁰⁾。加えて、新住居地区への快適なアクセス、洪水対策の計画が示唆されている。さらに、ポッジの補佐として T. ゴーリ²¹⁾が任命されており、各計画の実施設計に若い建築家が選出されている。その他、実施設計担当にコムーネ建設局 *Uffizio d'Arte Comunale di Firenze* が任命され、二次的な計画を設計・管理している。また、丘陵地帯の測量は基本的にポッジの設計事務所で行われているが、測量の困難な箇所は専門家に依頼されている²²⁾。この報告書には、都市拡大事業に関わる計画のうち、ポッジが直接設計していない計画も羅列されているが、それらについては設計責任者の名と、ポッジの計画に対する感想が述べられているのみである。

この報告書の文章と構成から読み取れることとして、ポッジの首都フィレンツェとしての近代化計画への期待が随所に窺える²³⁾ことが挙げられる。さらに、本書の終章はコッリ大通りの事をうたった詩で締めくくられていることなど、文学的要素も見られることから、当時のフィレンツェの都市事業が、技術的解決のみでなく、文化的視点を持って近代化を目指していたことがわかる。

では、実際の事業の展開について、都市改造の基盤となる治水事業から順に確認したい。

2 新街区建設の基盤となる治水事業

ヨーロッパの他の主要都市と同様に、フィレンツェにおいても市壁を解体して住居地区の拡大がなされたが、ここで、市壁解体に伴う洪水対策という難題が発生した。フィレンツェでは、アルノ川の洪水時には市壁が都市防衛の役割を果たしていたため、その解体は同時に堤防を失うことを意味していた。ポッジの都市拡大事業の20年前にあたる1844年の洪水をきっかけに行われた水域調査²⁴⁾の結果、アルノ川のみならず周辺の河川の危険性が確認されており、この問題はより一層重要視されるようになった。加えて、首都移転直前の1864年の河川の増水により、治水事業の必要性は決定的なもの

なったのである。さらに、この時期のヨーロッパ全域のコレラの発生により、ヨーロッパ諸都市で衛生的観点によるインフラの整備が急がれることとなったが、フィレンツェもその例外ではなかった。近代都市計画において、インフラの整備が最重要事項であるのは周知の事実であるが、フィレンツェの都市計画において注目したいのは、先行すべき治水事業によって新しい都市の外形が決定されていくことである。

コムーネによって最初に要求されたのは、市壁を解体して住居地区を建設し、市壁の跡には環状通りを建設すること、それに伴う洪水対策、住居地区への快適な接続路の確保である²⁵⁾。これをポッジは具体化し、1865年2月に提出した「プロジェクト・ディ・マッシマ」で、a) 都市の市壁だった入市税徴収境界をどこに、そしてどのように移動するか、b) 市壁解体後、洪水からの防衛策を講じるために、どこに、そしてどのように堤防を建設するか、c) 2つの鉄道駅を実現させるために諸々の障害をどう克服するか²⁶⁾、という主題を提起した。ポッジは洪水対策にアルノ川の堤防の増強だけでなく、周辺の河川の護岸工事が非常に重要であると主張している。この提案は1865年2月18日の市議会で承認され、ポッジは治水事業のための調査を行い、併せて排水溝・下水道の整備を計画していった。

ポッジは堤防建設の機会を、かつて第5市壁から第6市壁（最終市壁）²⁷⁾へ都市を拡大する際の位置決定と同様の事態であると捉えていた²⁸⁾。既存の市壁は、都市の境界、洪水対策、軍事的防衛の機能を果たしていたが、近代の強大な軍事兵器の登場によって不要の産物となった市壁は解体されることが決定し、これに替わるものとして、堤防が建設されることとなったのである。このことは、サン・ジェルヴァジオ溪流の整備において担保される。アルノ川右岸の都市部の東西にはムニョーネ溪流、アフリコ溪流が流れており、この両溪流によって東西の市の境界は確保される。しかし、北側は水流で閉じられていなかったため、サン・ジェルヴァジオ溪流の水路を変更し、二つの溪流を繋ぐ運河として開設することで、市の境界と排水の両機能を持たせたのである²⁹⁾。このようにして都市部を水流で囲い、新たに建設・増強された堤防によって、新住居地区、旧都市部の双方を洪水から防衛する策を立てた。このように、堤防は軍事的機能を持たない新たな市壁と考えることができるであろう。

この治水事業はコムーネによって発案されているが、具体的な水域調査と、建設・増強すべき河川と範囲の決定は、ポッジに委ねられていた。それらを以下に要約する。

1. 旧造幣所 *Zecca Vecchia* 周辺の整備においては、水域調査の結果³⁰⁾から、造幣所を解体してパラペットのついた堤防壁の建設を提案した。ポッジはこの道路を「テラスのような歩道 *marciapiede nelle condizioni di una terrazza*」と呼び、グラツィエ橋から鉄橋に向かって、極力緩やかな登り斜面とすることとした³¹⁾。

2. 市壁に代替する物理的な入市税境界が必要であることはコムーネにとって重要事項であったので、これに対して河川を利用することを示唆しているが、具体的な位置は熟考されていなかった。ポッジはこの重要性を指摘し³²⁾、どの河川を境界とするかを計

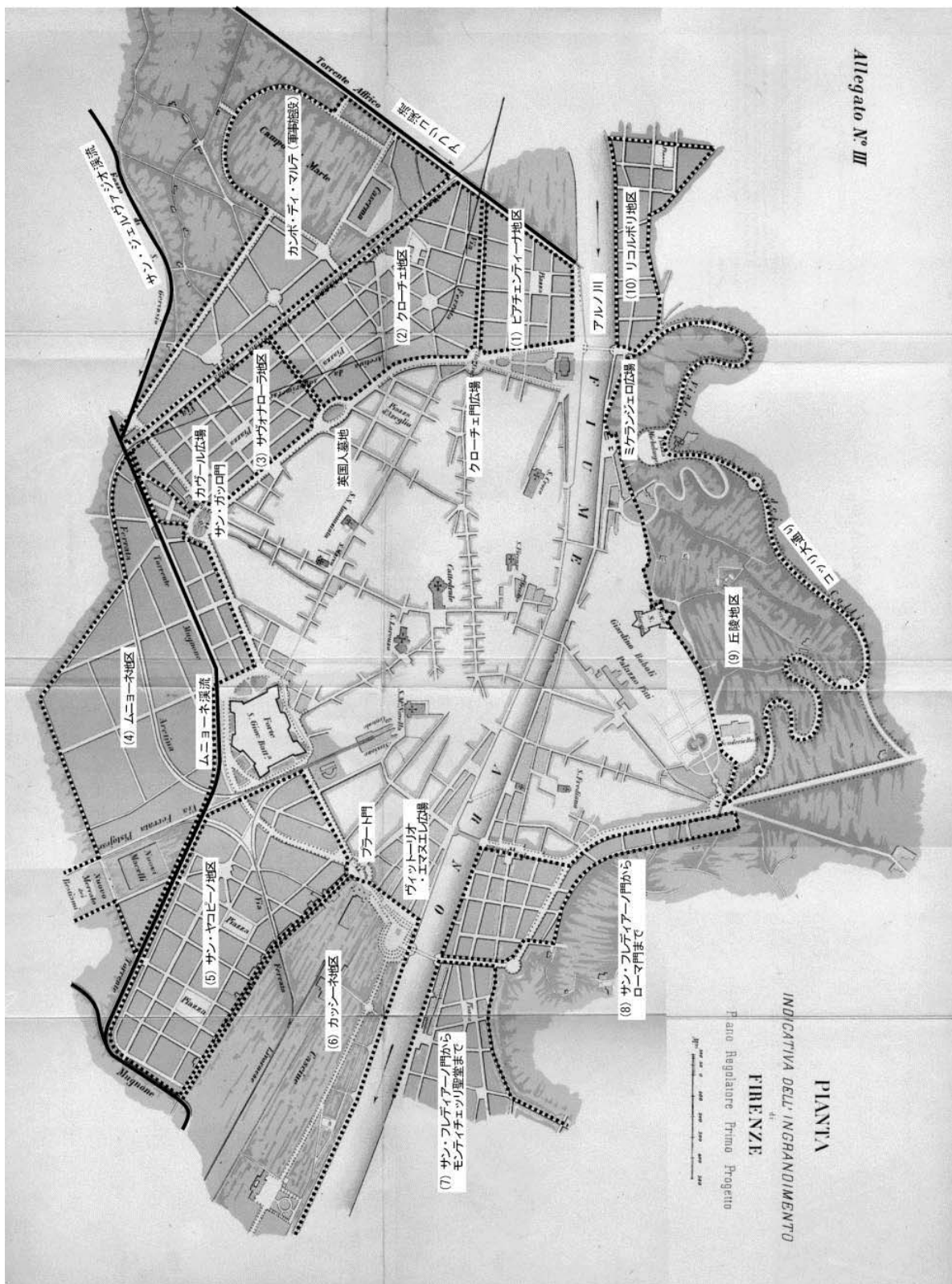


図1-1 G. ポッジによる作業区分(「プロジェクト・ディ・マッシマ」修正案をもとに作成、括弧番号は表1-1に対応)
 (Poggi, G., *Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze*, Allegato N.III)

表1-1 ジュゼッペ・ポッジの計画一

事業	地区	計画箇所	計画年	決議年	
洪水対策 (アルノ川堤防)	-	アルノ川右岸の堤防:全長702m	1865.1.31	1865.2.18	
	-	アルノ川左岸の堤防:全長228.36m	"	"	
	(支流)	-	ムニョーネ溪流	"	"
		-	アフリコ溪流	"	"
		-	サン・ジェルヴァジオ溝	"	"
		-	エルタ水源の排水路	"	"
		-	ピアチェンティーナ溝	"	"
		-	ラルコヴァータ溝	"	"
		-	ガンペライア溝	"	"
大通り・広場 (アルノ川右岸)	(1)	第1区(クローチェ門～アルノ川)	1865.1.31	1865.2.18	
	(2)	第2区(クローチェ門～ピンティ門)	"	"	
	(3)	第3区(ピンティ門～S. ガッロ門)	"	"	
	(4)	第4区(サン・ガッロ門～サン・ジョヴァンニ要塞)	"	"	
	(5)	第5区(要塞周辺～ロミト坂)	"	"	
	(6)	第6区(クルヴァ大通りと周辺地区)	"	"	
	(アルノ川左岸)	(9)	コッリ大通り(5690m)	"	"
		(9)	大通りの施設一式の工事(ロジリア、モニュメント等)	"	"
		(9)	大通り整備のためのガンペライア水道	"	"
		(9)	山留め工事	"	"
		(9)	「斜面」(ルンガルノ・セリストリ～ミケランジェロ広場)	"	"
		(9)	大通り隣接地区の費用	"	"
		-	ベッロズグワルド大通り(未実施)	1868. 9. 6	1869. 7. 2
		-			
地区計画	(1)	ミリターレ大通り(長さ1730m、幅平均30m、含歩道/ダゼーリョ広場方向:長さ500m)	1872.9.7	-	
	(1)(2)(11)	ルンゴ・アフリコ通り	-	1867.1.29	
	決議1866.6.26)	(1)(2)(11)	デッラ・フォンテ・アッレルタ通り、ディ・マイアーノ通り	-	-
		(1)(11)	サン・ドメニコ通り(後パローネ通り、デッリ・アルティステイ通り)	1871.2.6	1873.3.14
	(1)	ピアジェンティーナ地区の2つの通り	-	1867.1.26	
	(3)	サヴォナローラ地区の通り	-	1869.6.26	
	(4)	ムニョーネ地区	-	1867.12.20	
	(2)(3)	ピンティ門近隣のプロテスタント墓地	-	1867.7.21	
	(3)	球技場、スケート練習場	1869.7.10	1870.1.19	
	(4)(5)	クルヴァ大通りの陸橋	-	1871.2.6	
	(11)	デッレ・チェント・ステッレ通り	-	-	
	(1)*市壁内	(1)	トウアル通り	-	-
		(1)	アルノルフォ通り	-	-
		-	諸工費	-	-
	建築物	市壁内	カルロ・アルベルト橋(未実施)	1865.2.24	-
(1)		公共浴場(未実施)	1865.10.6	-	
駅付近		出荷用倉庫(未実施)	-	1869.8.28	
(6)		カッシーネ再整備(未実施)	1865.2.24	1870.3.16	

画して、監視所の設置や、河川の拡幅などの処理をした。このようにして、新しい都市の輪郭が獲得され、その内側に新住居地区が建設されていった。

市の境界に関する唯一の問題は、サン・ジェルヴァジオ運河を都市の境界とするには北部の範囲が広すぎたことである。この位置については市議会で何度か議論されたが、最終的に都市の北部はポッジの提案による新しい鉄道路線を都市の境界とすることがコムーネによって決定され、その内側に住居地区を建設することとなった³³⁾。

以上のようにフィレンツェにおける洪水対策は、最終市壁に替わる堤防であるとともに、新しい住居区分を決定する基準でもあった。その中でポッジは、技師として技術的な快適さを追求するとともに、機能的な解決と美観的操作を同時に遂行しようとしていた。それはポッジがサン・ジェルヴァジオ溪流周辺に関して、予算が削減されたために、外観が美しくならなかったことを敢えて報告書の中で述べていることからわかる³⁴⁾。また、土木工事に関する基準の正確な判断は土木技師との相談の上に基づいており、そこに役職の境界を確認することができる。

3 新街区と道路建設

3-1 理想の広場設計（カヴール広場、クローチェ門広場）

このような治水事業と平行して行われたのは、市壁解体跡を転用した環状道路である。この案はコムーネからポッジに指示されたものであるが、市門の処理やその周囲広場の形態は特に指示されていなかった³⁵⁾。ポッジが決定した箇所は、1) 市門をモニュメント化して周囲を広場とすること、2) 門の両側に隣接していたロτζア³⁶⁾の解体、広場の形態（楕円、長方形）、広場周囲の建築物のファサードのデザイン（様式、材質、機能）、カヴール広場（現リベルタ広場）においては凱旋門を残すこと、3) 広場の緑地化、公共浴場・プールの提案が挙げられる。これらの決定が顕著に表れていると考えられるのが、クローチェ門広場（現ベッカリア広場）とカヴール広場の整備である。

カヴール広場の計画で特徴的であるのは、市門であるサン・ガッロ門の外側に、ハプスブルク＝ロートリンゲン家時代の凱旋門³⁷⁾があったことである。ポッジによると、市門に加えてこの凱旋門も同時に考慮すべきであり、2つの中心が大通りのパースペクティブの焦点となるように計画したとしている³⁸⁾。市門は移動させず、周囲の街区の形状を整備することで実現させており、2つの門の間を緑化して、中央に噴水、両脇にオベリスクを配置している。この計画のためには、プレゼンテーション用の巨大な透視図³⁹⁾が描かれており（図1-2）、2つの門が対峙する構図がとられている。

また、クローチェ門広場では、市門は一つであったが、環状道路の鉄橋への接続のため、門を基点に道路を分岐させており、それにより形成された三角形の空間を緑地とし、アルノ川側に公共浴場とプールを計画した。アルノ川手前の市壁の端には造幣所の建物



図1-2 カヴール広場の透視図 (画家 N. サネージ作, AMFC n. 3895, 740×1010mm)



図1-3 ベッカリア広場の透視図 (画家 N. サネージ作, AMFC n. 3892, 740×1010mm)

が建っていたが、これは解体されることとなった。ポッジはこの造幣所で使用されていたモーターを利用して川から水を汲み上げ、広場内の公共浴場とプールへ引くという計画を提案した。この計画においても同様に透視図が描かれており、クローチェ門と公共浴場の建物が三角形の頂点と底辺で向かい合う構成をとっていることがわかる(図1-3)。

このように、プレゼンテーション用の透視図が描かれており、計画の内容が著書に詳細に述べられていることから、ポッジにとってこれらの計画が重要であり、実現の欲求が強かったことが推測される⁴⁰⁾。クローチェ門広場に関していうと、近代国家には公共建築が必要であると考えていたポッジは、フィレンツェに浴場が欠如していることを主張し、造幣所の既存の動力を利用するという合理性を説いてこの計画を提案した⁴¹⁾。しかし実際には1866年9月4日の市議会で、この土地は民間の工場用の建物に割り当てることが好ましいと決断されて、ポッジの提案は門周辺整備と大通りは実現したものの、浴場とプールは実現しなかった。この計画において、近代都市フィレンツェにおける公用性の重視が表出しているが、コムーネとポッジの考えに相違がみられることがわかる。コムーネは民間企業が収益を上げられる土地の整備を、ポッジは民間に開かれたコムーネ運営の施設の建設をそれぞれ意図していたということである。このような未実施の計画からポッジの構想していた理念が表れている箇所が他にもあるが、それらは未実施計画の項で後述する。

また、広場の形態と建築物のデザインの決定に関して、不十分な予算による制約が確認できる。収用する土地と解体する建設物を最小限にとどめるために、広場の平面形には長方形と楕円形が選ばれている。さらに、広場に面する建築物のファサード様式を、トスカーナ・リソルジメント様式 *lo stile toscano del Risorgimento*⁴²⁾とし、そこに用いられる柱頭はもっともシンプルで工費が節減できるという理由でドーリア式が選ばれている⁴³⁾。

国家統一直後のイタリアの財政は厳しく、当然フィレンツェの首都化においても、限られた時間と予算⁴⁴⁾の中で計画するしかなく、未実施に終わったものや妥協案で実施された計画も多い。また、激動の政治状況下において、必要性の有無や、新国家の象徴性が厳しく問われた。特に1871年のローマ遷都によって不要となった計画は即座に中断され、再考慮されることもなかった。しかし逆に考えると、都市計画や建築様式に政治的効力が要求された時期であるが故に、財源の厳しい制約によって、近代国家の首都として最優先された都市計画上の整備、建築様式、国家の象徴などが明確に顕在化したといえる。

3-2 計画決定への政治的影響（プラート門広場、ヴィットーリオ・エマヌエーレ広場、英国人墓地）

では、政治的・社会的状況がどのように計画に影響したのかを確認したい。都市の東側に位置するプラート門周辺の整備では、前項の2箇所の整備に比べると、中途半端な状態で工事が放棄されており、広場に面した建築物を再建するまで至っておらず、街区の統制がとれずに終わった⁴⁵⁾。ポッジは、統制のとれた美しい建物でない限り、不動産価値の上昇は見込めないと考え⁴⁶⁾、市門付近の旧パラッツォ・ポニャトフスキ⁴⁷⁾の高さとヴォリュームを基準とした建築物を計画し、多角形の広場となるよう街区を計画した⁴⁸⁾。しかしこの地区の土地建物収用⁴⁹⁾が容易に進まないことが判明し、コムーネの行政部 *Amministrazione* と執行部 *Giunta* は建築物の様式等は所有者の任意決定とし、唯一、鉄柵が設置された渦巻き装飾のついた石壁で囲むことを義務づけたのみであった。これに対してポッジは、広場の周囲だけでも整備させるため、コムーネの執行部に説明を求めたが⁵⁰⁾、現状の建築物と同様にするようにとコムーネに返答されており、その理由の十分な説明は与えられていない。この場所は後のローマ遷都後には、ウンベルト王子大通り（現フラテッリ・ロッセリ通り）の道路幅縮小が決定したため、収用していた土地や建物は無駄となり、周辺に建設した住居も高値が付かず、見込まれていた経済効果は得られなかった。

その他、政府の意向を配慮した提案からも、ポッジの計画範囲を確認することができる。それは、政治上重要であった新国王の象徴となる、ヴィットーリオ・エマヌエーレ広場（現ヴィットーリオ・ヴェネト広場）と騎馬像の配置である。イタリア国家統一に先立つ1859年、既にトスカーナ臨時政府によってインディペンデンツァ（独立）広場に設置するヴィットーリオ・エマヌエーレ2世の騎馬像制作のコンペ⁵¹⁾が開催されていた。そこでポッジは、円形劇場（アンフィテアトロ）型のヴィットーリオ・エマヌエーレ広場をカッシーネ公園の入口に計画し、石柱のモニュメントで囲まれた騎馬像の配置を提案した⁵²⁾。政府にとっては広場の名称と騎馬像の意味を一致させることが最も重要であったので、ポッジの案に同意してこの計画が市議会で承認された。

「プロジェクト・ディ・マッシマ」に記されているポッジの計画の中で、特に機能的な要因から配置されたのは、都市の中で広い面積を占めるカンポ・ディ・マルテ（軍事施設）と鉄道駅である。最初の案では、カンポ・ディ・マルテをカッシーネの対岸に位置させていたが、修正案で都市の東側に移動させた。その理由として、報告書には「いくらかの困難」⁵³⁾があったとしか述べられていないが、おそらく第2の駅が都市東側のクローチェ門付近に建設されたため、輸送に最も近い広範囲の土地が利用できる場所として新しい場所が選ばれたと考えられる。この軍事施設からの中央駅と第2の駅へのアクセスは軍隊技師との相談によって決められており、美観的な決定要因は軽視されていると言えよう。

鉄道路線に関しては、ポッジは以下の2つの提案をしていることが「プロジェクト・ディ・マッシマ」からわかる。第一に、クローチェ門付近において、大通りと鉄道路線の間に住居地区を建設するために、既存の路線を移動させている。第二に、中央駅を要塞の北側へ移動することを提案している。前者は採用されたが、後者はコムーネが現状維持を指示したため採用されなかった。これについては、当時のフィレンツェを走っていた鉄道は民間のローマ鉄道会社によるものであり、会社側に駅の位置決定の権限があり、コムーネには主導的する決定権はなかったと考えられる。

また、市門の処理に関しても様々な制限による決定が下されている。ピンティ門、グェルファ門（塔）、セルヴィ門は解体されたが、その理由としては、ピンティ門については、外側に英国人墓地が隣接していたため、これを移動するのは技術的には可能であったが、政治的・宗教的な問題で不可能であったことが挙げられる⁵⁴⁾。最初の案でポッジはクローチェ門同様に、ピンティ門も孤立化して残すことを「プロジェクト・ディ・マッシマ」に記していたが、最終的にはピンティ門は残さず、墓地のみを孤立化して大通りで取り囲んだ。大通りの建設が優先されたことに加え、門の構造の弱さ、内外の高低差があったこと、既存状態が劣悪だったことが解体決断の後押しとなった。グェルファ門、セルヴィ通用門の扱いについては報告書で述べられていないが、グェルファ門はクローチェ門とアルノ川までの距離が短く、その間に新たに広場を設ける面積が確保できなかったため、円滑な交通網建設にとって障害であると判断されたと考えられる。

3-3 丘陵地帯への市域拡張（コッリ大通りとミケランジェロ広場の建設）

環状道路において、実施段階では右岸の工事が先行して行われたが、計画段階で先行していたのは左岸の大通りである。著書の冒頭でポッジは、新しいフィレンツェのためには丘陵地帯の事業がいかに重要かを述べている。既存都市の湾曲した道路の狭さや排水溝の欠点を述べた後、「フィレンツェを取り囲む心地よい丘、とても楽しいクラブや歴史的なヴィラやモニュメント、楽々とした快適で品格のある接続路がある丘を望む日が来るのを想定していた」⁵⁵⁾と述べている。ここでいうアクセスとは、丘陵地帯開発の鍵となるコッリ大通り⁵⁶⁾のことを指す。都市拡大事業を委託したコムーネ委員会では、1864年11月22日の文書では丘陵地帯については特別触れられず、「何の制約も規定もなかった」⁵⁷⁾とポッジ自身も述べている。

丘陵地帯に大通りを通す案は、アルノ川右岸の環状道路を完成すべく考えられた案であるので、本来であれば市壁を解体してその路程に大通りを通すという方法が取られるべきであったが、その場所は諸々の問題を抱えていたため不可能であった。これは市壁にパラッツォ・ピッティとボーボリ庭園が隣接していたこと、市壁のすぐ外側が急斜面で下がっているため道路建設が困難なことが原因である⁵⁸⁾。また、この丘陵地帯はもと

もと歴史的な建物のある場所であったが、フィレンツェへの首都移転の勅令の後、議員やイタリア内外の上・中流階級による丘陵地帯の土地や住居・ヴィラの購入や賃貸契約が増加していった⁵⁹⁾。

コッリ大通り建設は、丘陵地帯を利用した新政府拠点建設における重要な一片であった。路程の決定はポッジに委ねられており、認可条件は右岸の環状通りや他の地区への接続を確保することのみであった。「プロジェクト・ディ・マッシマ」を提出した後に修正が要求されることもなく、市議会、県議会、労務省、勅令で承認され、1865年6月25日の公用収用法⁶⁰⁾の運用によってコッリ大通りの事業は順調に進行したのである。

この大通りの計画においてポッジが一貫して考慮していたことは、大通りからの眺望を確保することであった。大通りからの建築後退距離を一定に保つことや、庭園部分の所有地を鉄柵で囲うことなど、眺望を妨害しないための規定を設け、それを土地所有者に義務づけていた⁶¹⁾。これらは、首都として品格 *decoro* のある場所とすることが意図されているためである。これらのポッジの意図の背景には、政府の意向も反映されている。上院議員の G. パゾリーニ (Giuseppe Pasolini, 1815-1876) は 1868 年の市議会でも、丘陵地帯には「下宿部屋や作業場などのある地区ではなく・・・(中略)・・・静かさ *quiete*、清潔さ *netezza* と優美さ *eleganza* が必要である」⁶²⁾と述べ、首都の品格を保つためにコムーネは容易に土地を民間に分割売却すべきではないと忠告している。これは先に述べた公共浴場の計画案でコムーネが土地を民間に引き渡した例とは拮抗している。ここから、政府側とコムーネ間で、国家統一が成立したとはいえ未だ都市計画の指針が定まっていなかったことが読み取れるであろう。

全長 5690m のコッリ大通り沿いの計画を西側から確認しておくと、ローマ門からマキアヴェリ広場までの路程には、市壁を隔ててパラッツォ・ピッティに隣接する王立の厩舎⁶³⁾、娯楽施設「ティヴォリ」⁶⁴⁾、丘陵地帯の斜面を利用した立体的な公園が計画された。その先、サン・レオナルド聖堂への道を横切り、等高線に沿ってサン・ミニアート聖堂の下を通り、眺望のクライマックスであるミケランジェロ広場へと続いていく。

ミケランジェロ広場からは、パラッツォ・ヴェッキオ、サンタ・マリア・デル・フィオーレ聖堂、サンタ・クロチェ聖堂、ポンテ・ヴェッキオなど、中世・ルネサンス都市フィレンツェを特徴づける建築群が、その背後の地形とともに、一幅の風景として一望できる。この場所は広場建設以前から都市を見下ろせる場所として知られていた⁶⁵⁾。しかし、そこへの道路は未舗装であったため、上・中流階級の人々はピクニックや散歩の場所として徒歩で訪れているのみであった⁶⁶⁾。ポッジはこの場所を、馬車などの公共交通によって、コッリ大通りから直接辿り着ける場所として意図していたのである⁶⁷⁾。

4 未実施事業

「プロジェクト・ディ・マッシマ」にまとめられた計画の中でも、ローマ遷都決定によるコムーネの財政悪化や必要性の欠如によって、実現に至らなかったが計画がいくつかあり、そこからもポッジの都市計画設計の理念が読み取れる。未実施計画の中には、実施設計までなされたもの、構想のみで中断されたものの両方がある。

構想段階で中断された計画のひとつに、ベッロズグワルド大通りの計画がある。これは、アルノ川左岸のコッリ大通りの中間地点からポッジョ・インペリアーレ⁶⁸⁾への道路を経由し、サン・ガッジョ、西側の丘陵地帯ベッロズグワルドを通り、ヴィットーリオ・エマヌエーレ広場に辿り着くまでの、全長 4419m の大通りである。これは広範囲の丘陵地帯を都市域に取り込んだ計画である。ベッロズグワルド地区には歴史的なヴィラがいくつか点在していたが⁶⁹⁾、都心部からのアクセスが以前より必要とされていた場所である⁷⁰⁾。

ポッジは著書『フィレンツェ拡大事業』の中で、この大通りをコムーネに委託されたと述べているが、この通りもコッリ大通り同様に具体的な指示は与えられていなかった。ポッジはこのプロジェクトの委託を非常に喜んでいることが報告書に記されている⁷¹⁾。彼はコッリ大通り同様、ベッロズグワルド大通りを自らの力量が示せる仕事だと認識していたのである。この計画は「プロジェクト・ディ・マッシマ」が実施に移って3年後の1868年9月6日に提案され、コムーネ執行部に1868年9月21日に議決されおり、建設請負業者も決定しかけていた⁷²⁾。しかし、計画以前にローマ遷都が決定したことで未実施に終わったのである。そもそも、丘陵地帯は都市部に比べて土地建物の収用期間が長いため⁷³⁾、計画実施も長い期間が必要とされる。コッリ大通りの建設は、フィレンツェ首都化が決定してから迅速に議決されたため、工事着手はローマ遷都決定までに間に合った。一方ベッロズグワルド大通りがコムーネに提案されたのはコッリ大通りの実施決定よりも3年遅れた1868年であったため、1869年7月27日の勅令⁷⁴⁾までに十分な準備期間が確保できず、すぐに土地建物収用に着手できなかったのである。

この大通りが完成していれば、フィレンツェの都市の輪郭は現在とは大幅に異なる形態になっていたことが予想できる。もし、フィレンツェが首都であり続けたならば、と著書の中でポッジが何度も繰り返した想像のように⁷⁵⁾、この仮定は非常に興味深い。コッリ大通り周辺が行政地区となっていれば、当然ながら容易にアクセスできるベッロズグワルド大通り周辺もまた新たな意味を持った地区となっていたであろう。コッリ大通り計画以後に、ローマのジャンニコロの丘が整備されていくことを考えると、フィレンツェの丘陵地帯の計画は未実施になった部分があったとはいえ、その後のイタリアの都市における都市改造の手法に大きく影響を与えたとも考えられる。

その他の未実施計画としては、カルロ・アルベルト橋、カッシーネ地区の再整備⁷⁶⁾、鉄道駅の倉庫があるが、そのうちカルロ・アルベルト橋は市長に指示を受けて設計した

ものであったが、これもローマ遷都による必要性の欠如が理由で中止され、またカッシーネ地区の再整備も同様であった。鉄道駅倉庫に関しては、民間の団体が建設を申し出て事業を請け負ったが、ローマ鉄道会社との抗争によって実現しなかった。各計画とも、実施設計までは至っていない。

小結

以上のように、大著『フィレンツェ拡大事業』*Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze* の精査によって、建築家ジュゼッペ・ポッジの都市改造における計画範囲を確認することができた。それを以下に要約する。

1. 計画の指針はコムーネによって決定され、ポッジがコムーネに委託される形で具体的計画を行い、事業を指揮していた。そこでは、決定は一方向に行われるのではなく、ポッジが提案することで、コムーネや政府に重要な決定を促すという形がとられていた。

2. 新住居地区の形状決定の基盤となる治水事業がポッジによって監督された。それは建築物や街区の形態のみならず、都市域を決定する上で非常に重要性の高い事業であったといえる。また水域調査や護岸工事の土木的作業は、技術者との相談によって遂行された。

3. 建築物の建設や道路、街区、広場の具体的な形態はポッジに完全に委託されたとはいえ、多くの計画が政治的状況や経済的制限、土地収用問題により、最終的には市議会によって決定された。

4. ポッジによる未実施の計画の中で、丘陵地帯への都市域の拡張を示唆する、重要な計画があった。

以上のことは、ポッジの首都化にむけたフィレンツェ拡大事業では、すべての計画において設計者の意図が反映されているわけではないということを示している。マスタープランの外形の基礎となっているのは、水流や丘の起伏といった地理的条件を優先させた結果であり、既存建造物が存在していた箇所においては、土地収用と経済効果の観点におけるコムーネと設計者の意向のずれが、統制のとれない形態を生み出していた。また、未実施に終わった計画が、コムーネの財政が回復していった後の時代にも実施されなかったことは、その計画が首都であるからこそ必要とされたものであったことを示している。

以上を踏まえて、ポッジの都市設計理念を読み取れる箇所を抽出すると、右岸のクロッチェ門広場の整備、カヴール広場の整備と、左岸の丘陵地帯のコッリ大通りとミケランジェロ広場の計画、未実施のベッロズグワルド計画であると言えるであろう。

注釈

- 1) 1861年のイタリア国家統一後、首都はサルデーニャ王国の首都であったトリノに置かれていた。その時点で、ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世はイタリア王国の首都をローマに置くことを宣言しているが、この時、教皇領はフランス軍に占領されていた。1864年6月21日のナポレオン3世との間で結ばれた9月協定において、軍の撤退の条件として教皇を攻撃しないことなどが規定されており、その中でもイタリア王国がローマを首都としない表明として、6ヶ月以内にフィレンツェ遷都を協定発効の条件とした秘密条項が付記されていた。この協定発行のため、フィレンツェ遷都が行われた。
- 2) Colline toscane トスカーナ地方の領土の66.5%を占める。
- 3) イタリアの文化財保護活動はイタリア統一後に本格化するが、現在の文化財保護の基礎となっているのは1939年に制定された法律で、同年、現在の景観保護制度の基礎となる1939年法律1497号「自然美の保護」が制定された。その後、より広域の景観に対する規制を可能にした1985年法律431号（通称ガラッソ法）が世界的に知られるようになり、1999年立法令490号「文化財・環境財統一法典」、2004年立法令42号「文化財景観法典」を経て、現在の景観財保護が規定されている。詳しくは独立行政法人文化財研究所他編『ヨーロッパ諸国の文化財保護制度と活用事例〔イタリア編〕』、2006参照。
- 4) ユッカ・ヨキレット『建築遺産の保存 その歴史と現在』、益田兼房監修、秋枝ユミ イザベル訳、アルヒーフ、2005、p64.
- 5) レオナルド・ベネヴォロ『近代建築の歴史（上）』、鹿島出版会、1978、p112.
- 6) Borsi, F., *L'architettura dell'Unità d'Italia*, p. 111.
- 7) Carocci, G., *Firenze scomparsa*, ristampa dell'edizione originale Firenze 1897, Multigrafica Editorice, Roma, 1985 他参照。彼は近代都市計画において消滅した建造物・中心市街地を懐古主義的に取り上げているが、その中でポッジの名を一語とも出していない。
- 8) Detti, E., *Firenze scomparsa (con la collaborazione di Tommaso Detti)*, Vallecchi Editore, Firenze, 1970.
- 9) Borsi, F., *La capitale a Firenze e l'opera di Giuseppe Poggi*, Colombo Editore, Firenze, 1970.
- 10) 1986年には *Il disegno della città: l'urbanistica a Firenze nell'Ottocento e nel Novecento*. 1989年には *Giuseppe Poggi e Firenze. Disegni di architettura e città*. と題した展覧会がフィレンツェで開催されている。
- 11) これらの研究の時期は1960年代のボローニャに代表されるチェントロ・ストリコ（歴史的保存地区）の整備事業時期と重なっている。
- 12) Fanelli, G., *Firenze Architettura e città*, Vallecchi editore, Firenze, 1973.
- 13) Fei, S., *Firenze 1881-1898: la grande operazione urbanistica*, Officina Edizioni, Roma, 1977.
- 14) Manetti, R., *Firenze le porte dell'ultima cerchia di mura*, CLUSF Cooperativa Editrice Universitaria Firenze, Firenze, 1979.
- 15) Corsani, G., "Giuseppe Poggi e il Viale dei Colli a Firenze", in *Storia Urbana Rivista di studi sulle trasformazioni della città del territorio in età moderna*, 16, Numero 60, luglio-settembre 1992, pp. 37-58.
- 16) Agostini, E. M., *Giuseppe Poggi: la costruzione del paesaggio*, Edizioni Diabasis, Reggio Emilia, 2002.
- 17) Paolini, C., *Il sistema del verde: Il viale dei colli e la Firenze di Giuseppe Poggi nell'europa dell'ottocento*, Edizioni Polistampa, Firenze, 2004.
- 18) Poggi, G., *Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze*, Tipografia di G.Barbèra, Firenze, 1882.
- 19) 監督者の指名から、わずか2ヶ月後の1865年1月31日に「プロジェクト・ディ・マッシマ」が提出されていることから、極めて緊急に計画されたことがわかる。図面は1865年にヴァンニーニにより石版された。
- 20) Ibid., pp.19-21. コムーネは最初にフィレンツェ全域をカテゴリーごとに6区画に分けて、ポッジに計画を依頼している。これに対してポッジは平面上の10区画に分けてコムーネに提案している。
- 21) Tito Gori (?-1907). フィレンツェの建築家。フィレンツェ美術学校卒業。

- 22) Poggi, op. cit., p. 11. シメネス観測台 Osservatorio Ximeniano の支援を受け、技師 P. パスタによって測定された。
- 23) Poggi, op. cit., p. 3. フィレンツェ拡大事業の依頼する行政長官代理へのフィレンツェ拡大事業の依頼する行政長官代理への返答文書に以下のように述べている。「名誉ある依頼を喜んで引き受けるとともに、私の能力が計画すべき事業に及ばないのではないかという懸念を隠すことができません。計画の調査のための測量作業や他の必要作業に関して、非常に優秀な技師ティト・ゴリ氏と共に、喜んで取り組もうと思います… (後略)」。
- ‘Mentre con piacere accetto una sì onorevole commisione, non posso nascondere il timore che la mia capacità sia al disotto dell’opera da progettarsi. E quanto alle operazioni geodetiche, ed altre necessarie allo studio del Progetto, m’intenderò ben volentieri coll’egregio ingegnere architetto signor Tito Gori...’
- また、この事に関して以下のように述べている。
- 「この依頼を受けて、大事業の調査のため、喜んで準備をした。なぜなら、都市周辺部や郊外の古い道路や新しい建築物沿いの建設手法に抑制をかける待望の瞬間に到達するのを想定していたからである」。
- ‘Accettata questa commissione, mi accinsi volentieri allo studio del Progetto, perchè vedeva giunto il sospirato momento di porre un freno al modo con cui si costruivano presso la città’ (Ibid., pp. 3-4) と述べている。
- その他、市門に対して、「(前略)…私は歴史的市門が、修復されて、最大の評価を得る時代がくることを望みながら、歴史的記憶として、また芸術的価値のある作品として、適切な保存を考えた」。
- ‘...ritenni conveniente la conservazione delle antiche Porte della città, come memorie storiche, e come opere degne dell’arte, nella speranza che sarebbe venuto il tempo del loro restauro e del maggiore loro apprezzamento.’ (Ibid., p. 11) と既存の建築物に対する期待も述べている。
- 24) 1844年のアルノ川増水時には堤防からわずか14cm水面が低いだけであると報告した。
- 25) Poggi, op. cit., pp. 2-3.
- 26) Ibid., p. 6.
- 27) フィレンツェはエトルリア人が建設した植民都市を古代ローマ人が支配して形成された都市である。B. C. 59年にまず第1市壁が建設され、その後545年の第2市壁、10世紀頃の第3市壁、1078年以降の第4市壁、1175年の第5市壁を経て、1333年に第6市壁(最終市壁)が建設されて拡張した。最終市壁はアルノルフォ・ディ・カンピオの指揮とされる。
- 28) Poggi, op. cit., pp. 6-7.
- 29) サン・ジェルヴァジオ溪流はカメラータ丘の間を流れ降りてきて東側の市壁沿いを流れてアルノ川へ注いでいたが、旧造幣所の手前に水門があり、氾濫時には周囲の田畑に被害を及ぼし、また周辺の汚水を受けていたため悪臭を放っていた。そのため下水道は同位置の地下に埋め、雨水はムニョーネ溪流を経由してアルノ川へ流す計画としたのである。
- 30) 1844年のアルノ川増水時には堤防からわずか14cm水面が低いだけであると報告した。
- 31) Poggi, op. cit., pp. 35-6.
- 32) Ibid., p. 201.
- 「このテーマ(入市税境界)の重大性は、政府によって十分に理解、認識されていなかった。水理的な状況に次いで、最も重要なものである。」
- ‘Non fu appresa e conosciuta abbastanza dal Governo la gravità di questo soggetto, che, dopo quelle condizioni idrauliche, può dirsi il più importante.’
- 33) Ibid., p. 165.
- 34) Ibid., p. 209.
- 「(入市税)境界に関して、もっと残念なことは、予算が全く無くなってしまったので、あまり美しい外観にならなかったことである。というよりもむしろその場所の台無しになってしまった。」
- ‘...quello che più dispiace è il vedere che, con la riforma della Cinta, quella spesa è affatto perduta, essendo stata resa meno bella, anzi deteriorata, la condizione di quella località.’
- 35) Ibid., p. 113.
- 36) クローチェ門、サン・ガッロ門の両脇にはハプスブルク=ロートリンゲン時代のロジgiaがあり、

市場として機能していた。

- 37) 1737年に建立。ロレーヌ（ロートリンゲン）出身のフランス人建築家ジャン・ニコラ・ジャド（Jean-Nicolas Jadot, 1710-1761）設計。
- 38) Poggi, op. cit., p. 118.
- 39) 740×1010mm フィレンツェ・コメラ美術館所蔵。クローチェ門広場の透視画についても同様。
- 40) Poggi, op. cit., p. 285. 加えて、計画決定の審議中にポッジはフィレンツェ市長からミラノ市長への挨拶状を持って、公共の浴場やジム施設を自費で視察しにミラノへ赴いていることから、その熱心さが伺える。
- 41) Poggi, op. cit., p. 284.
- 42) ここで、リソルジメント *Risorgimento* という表現をポッジは使用している。これは、実際の様式はフィレンツェのネオ・ルネサンス様式を指す。イタリア国家統一に際して、どの様式が新国家に相応しいかという C. ボイトの中世主義理論に代表される重要な議論が展開されたが、国家統一以前にトスカーナで展開された新古典主義様式を、ポッジは新国家の新しい様式を暗示していると解釈される。イタリア中世主義に関しては、『イタリア建築の中世主義—交錯する過去と未来』（横手義洋、中央公論美術出版、2009年）を参照した。
- 43) Poggi, op. cit., p. 119.
- 44) Mari, A., *La questione di Firenze*, Tipografia di L. Niccolai, Firenze, 1878. 参照。フィレンツェ遷都の際の道路建設費、土地建物収用費に関する財政状況がまとめられている。
- 45) Poggi, op. cit., p. 123. ポッジ自身も「(前略) 不規則で広場の美観的重要性のほとんどなさが明らかになる結果ともなった」‘...resultò anco più manifesta la irregolarità e la poca importanza estetica della piazza’ と評している。
- 46) Ibid.
「(前略) 広場を囲っている建物の形態や配置が良く整っており、重要性がなければ、広場は値打ちを勝ち得ない」。
‘... le piazze non acquistano pregio se non in ragione dell’importanza e della ben regolata distribuzione e conformazione degli edifizii che le circondano’.
- 47) ポッジが1844年に改修したパラッツォ。ポーランド・リトアニア共和国国王の甥スタニスワフ・ポニャトフスキ (1754-1833) が購入。ポーランド分割後ローマに亡命後フィレンツェに移り住み、同地で没。
- 48) Poggi, op. cit., p. 123.
- 49) この地区の土地建物の収用はコムーネ建設局に委託されている。
- 50) Ibid.
「しかし私は、1875年3月18日の文書で、同広場（プラート門広場）の平面計画と周辺部の整備を完成させるために、執行部への説明要求を怠らなかった」。
‘Non mancai peraltro, con la lettera del 18 marzo 1875, di domandare schiarimenti alla Giunta, per completare e regolarizzare almeno il perimetro ed il piano della piazza medesima...’
- 51) 1859年9月23日と10月4日の勅令をもって開催された。ナポレオン3世の騎馬像の競技も兼ねていた。サルヴィーニが一等。この銅像を巡っては競技の段階では州の財源で銅で制作することになっていたが、後にコムーネが国王の銅像であるので財源は国家から出すことを主張し、政府側はそれを拒否して試作品を壊すなど問題を引き起こした。最終的には政府側が折れて予算を捻出して完成まで至った。
- 52) ポッジはこの案は古代ローマ皇帝の像から着想を得たとしている。石柱は建築家 P. ポッチャンティ設計で、ピサのカヴァリエーリ聖堂から持ってきたもので、ポッジはこれをフィレンツェ式として称した。ポッチャンティはビッビエーナ生まれのフィレンツェで活躍した建築家。主な作品はポッジョ・インペリアーレの縮小計画（1806年）、パラッツォ・ビッティの大階段（1815年）、ラウレンツィアーナ図書館の拡張（1817年）等。ポッジはこのポッチャンティの娘と結婚した。
- 53) Poggi, op. cit., p. 12.
「いくらかの困難の理由で、そのような位置は受理されず、アルノ川右岸に示した私の別案が好まれた」。
‘In seguito ad alcune difficoltà, tale posizione non fu accolta, e fu preferita l’altra mia proposta

sulla destra dell'Arno'.

- 54) Ibid., p. 115.
- 55) Ibid., p. 4.
「フィレンツェを取り囲む心地よい丘、とても楽しいクラブや歴史的なヴィラやモニュメント、楽々とした快適で品格のある接続路がある丘を望む日が来るのを想定していた」。
‘...vedeva arrivato il giorno di dare agli ameni colli che circondano Firenze, e su i quali risiedono casini deliziosi, ville storiche e monumentali, un accesso facile, piacevole e decoroso’.
- 56) コッリ大通りの名は通称であり、丘の通りの意。実際の名前はマキャヴェッリ大通り、ガリレオ大通り、ミケランジョロ大通りの3本。
- 57) Poggi, op. cit., p. 132.
- 58) Ibid., p. 10.
- 59) この時に議会に関係する者の購入は、ラ・マルモラ、アルフィエーリ、クリスピ、アステンゴ、等で、その他約70件の購入があった。
- 60) Legge 25 giugno 1865, n. 2359. 建築調整計画については人口1万人以上の市町村は衛生・交通整備のための調整計画を策定できるものとし、これを達成するために建物の位置の不備を矯正するため遵守すべき建築線が指定されるものであり、この計画に含まれる不動産所有者は建物を規定に沿わせねばならないとした。イタリア近代の都市計画法・不動産法については、岡本詔治『イタリア不動産法の研究』（晃洋書房, 2006）に詳しい。
- 61) Poggi, op. cit., pp. 132-137. 土地所有者への土地配分図、その際の議事録等をまとめた Poggi, G., *Servitù attive e passive interessanti il Viale dei Colli*, manoscritto, s. n. t., [1868] に記述されている。
- 62) Poggi, op. cit., pp. 135-6.
- 63) フィレンツェが首都である間、国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世はパラッツォ・ピッティに居住していた。
- 64) メイヤー兄弟 *fratelli Mayeri* がコムーネに土地譲渡を要求して計画した。「ティヴォリは、庭園、コンサートホール、カフェ、東洋のバザール、昼間上演の劇場、ビアホール、射的場、各建物のガス灯照明、メリーゴーランドなど小規模娯楽施設 *Tivoli, con giardino, salone da concerti, caffè, bazar orientale, teatro diurno, fabbrica per birreria, tiro al bersaglio, gasometro per illuminazione dello stabilimento, e con una giostra ed altri piccoli divertimenti*」のある娯楽地区としている。レストラン完成時点でローマ遷都を理由に建設中止となり、公園として整備されることとなった。レストランの建物はポッジと G. ロスターの共同設計である。
- 65) コッリ大通り建設直前のガイドブックの挿絵に都市を一望した図が掲載されている。 *Guida di Firenze e suoi contorni con vedute e nuova pianta della città*, Andrea Bettini Librajo-Editore, Firenze, 1868. 参照。
- 66) 1700年代にグランド・ツアーで訪れる外国人に向けたガイドブックが作成されるが、風景画 *veduta* の描かれた葉書等が販売された。トスカーナではジュゼッペ・ゾッキ (Giuseppe Zocchi, 1716-1767) が代表的。
- 67) Poggi, G., *Sul Progetto di Tramvia del Chianti pel Viale dei Colli*, Tipografia di G. Barbèra, Firenze, 1888.
- 68) *Villa di Poggio Imperiale* アルチェトリに建つ大規模なヴィラ。1427年に既に建っていた記録がある。1548年にサルヴィアーティ家、1576年にコジモ1世の仲介でオルシーニ家、18世紀になるとオーストリアの所有となる。フィレンツェ首都時代はイタリア政府の労務省を迎え入れた。
- 69) ヴィラ・デッロンブレリーノ、ヴィラ・マリアなど。ヴィラ・ストロツィは1857年にポッジにより計画されたが、ストロツィ家は14世紀に既にベッロズグワルド丘陵地帯がヴィラ建設に適切な地区として興味を示している。
- 70) Poggi, op. cit., p.161.
- 71) Ibid.
「これらの（ベッロズグワルド地区の土地所有者の要望などに対する）配慮によって、コムーネが私に『プロジェクト・ディ・マッシマ』を委ねてきたので、私は喜んで従事した」。
‘Queste premure indussero il Comune a commettere a me un Progetto di massima, del quale

mi occupai con piacere...」

- 72) フローレンス・ランド・カンパニー社最初にがコムーネに建設を申し出たが、土地の調査不足また時間超過、土地収用と引き渡しの遅滞の問題のため不採用となった。その後ラツェーリ・チャンピ社が名乗り出た。
- 73) Poggi, op. cit., p. 158.
- 74) 勅令から3年以内に土地収用と大通り建設完了が示されている。
- 75) Poggi., op. cit., p.67
「もし、フィレンツェがもう5年、首都として存続していたら、この運河（アルコヴァータ運河）はロッソ橋と畜殺場付近のリフレディ通り間を繋ぐ、きれいで便利な道路に沿う一部分となっていただろう」。
‘Se Firenze fosse rimasta Capitale ancora un lustro, questo canale sarebbe stato in gran parte fiancheggiato da una bella ed utile via di congiunzione fra il Ponte Rosso e la Via di Rifredi presso i Macelli...’
「もし、フィレンツェの状況が突然変わっていなかったら、（ポッジョ）インペリアーレ大通り沿いの私有地には、もっと多くの建物が立ち上がっていたであろう」。
‘Se le condizioni di Firenze non fossero improvvisamente cambiate, anco lungo lo Stradone dell’Imperiale molte altre fabbriche sarebbero sorte nei terreni dei privati che lo fiancheggiano’ (Ibid., p. 162).
- 76) 1870年3月16日の市議会で決議された。道路の拡幅、快適な散歩道の建設、衰弱した植樹の改善がカッシーネ地区整備の主な目的である。

第2章

ミケランジェロ広場の形態と機能

はじめに

前章¹⁾ではフィレンツェ拡大事業の中で、ポッジの意向が反映された計画範囲を明らかにした。本章では、そのポッジによる計画の中で、特にミケランジェロ広場とその周辺地区の計画に焦点をあて、分析を試みるものである。

ミケランジェロ広場は、現在フィレンツェの最も有名な観光名所のひとつであるが、1865年から1871年の一時的なフィレンツェ首都期に、都市拡大事業の一環として建築家ジュゼッペ・ポッジによって計画されたものである。ミケランジェロ広場はアルノ川南側の丘陵地帯を貫くコッリ大通りに接続して建設されることで、フィレンツェの環状道路の一部としての役割を果たしている。広場には南側に噴水とロτζア、中央にミケランジェロのダヴィデ像のブロンズ製レプリカが設置され、その規模は幅167m、奥行き108m（ロτζアまで含むと143m）と、フィレンツェで最も大きな広場のひとつとなっている。この広場へのアクセスは2箇所計画され、そのひとつはコッリ大通りに接続した馬車利用を目的としたものと、もうひとつは北側に位置するサン・ニコロ門（現G.ポッジ広場）とを繋ぐ、大階段と緩やかな坂道によって構成された徒歩によるものである。

環状道路の一部をなす役割に加えて、ミケランジェロ広場の重要な機能として、歴史的都市フィレンツェの全容と都市を囲む緩やかな丘陵を見渡せることが挙げられる。

ミケランジェロ広場を新しい首都フィレンツェに相応しい場所として計画されたことは、ポッジ自身が全計画を報告書としてまとめた大著『フィレンツェ拡大事業』の中で述べられている²⁾。また既往のポッジ研究の中でも、この広場や周辺の大通りからの眺望を彼が強く意識していたことが指摘され、既に評価が与えられている³⁾。

しかし、フィレンツェがイタリア王国の首都となった1865年から1871年の間に、巨費を投じて計画された⁴⁾このミケランジェロ広場の形態と機能については、環状道路の一部であったことや、眺望を提供したという観点からのみでは、十分に論じられたとはいえない。

オーストリアの美術史家カミロ・ジッテは広場空間の分析の中で、ミケランジェロ広場のダヴィデ像と広場のバランスを酷評しているが⁵⁾、それは美的観点と視覚的効果による評価であり、その社会背景は十分に考察されていない。また、上記のポッジの報告書の中でも、広場に関しては主にその象徴性や公共性に焦点を当てて語られ、実際の位置や形態に関しては省略されている。ミケランジェロ広場の実施過程については別の小冊子で語られていたが、これまでの研究では深く取り上げられていなかった。近年のG.コルサーニの研究⁶⁾によって、ミケランジェロ広場周辺の計画におけるポッジの技術者としての側面が指摘され、19世紀の都市改造設計の複雑性が明らかになってきている。

このような状況を踏まえ、本章ではミケランジェロ広場について、環状道路の一部であることと、眺望を獲得したことに加えて、建設地の土地所有状況、地盤と排水、衛生状況という広場計画上の技術的側面からの視点を設け、それぞれの視点から分析を行うことで、広場の形態と機能について再検討を試みた。

1. ミケランジェロ広場建設の土地

ミケランジェロ広場の建設地は、最終市壁の南東に位置するモンテ・アッレ・クローチの丘の中腹にあたり、丘の最も高い位置から、11世紀建造のサン・ミニアート・アル・モンテ聖堂（以下サン・ミニアート聖堂）⁷⁾の修道院と共同墓地の複合施設、13世紀建造のサン・サルヴァドーレ・アル・モンテ聖堂（以下サン・サルヴァドーレ聖堂）⁸⁾と修道院、ミケランジェロ広場と南北にならんで、先に述べたコッリ大通りが広場とサン・サルヴァドーレ聖堂の間を東西に貫くように計画された（図2-1）。

広場の建設計画について、ポッジは以下の2点を述べている。ひとつは、コッリ大通りの路程を決定するための現地調査の際に非常に眺望の素晴らしい地点を発見し、大きな広場を建設することを思いついたことと⁹⁾、もうひとつは、この広場にミケランジェロ美術館を建設する構想があったことである¹⁰⁾。ここで浮かぶ疑問としては、眺望の獲得と美術館建設の実現のためのみとしては、計画された広場の規模が大きすぎるのではないかということである。

ここで、ミケランジェロ広場の計画を含んだ丘陵地帯の計画進行過程を確認しておく。この計画の発案は1865年1月31日にポッジが提出した都市改造案「プロジェクト・ディ・マッシマ」の中で既に提示されていた。ここでは大通りと広場の建設のため、一旦、道路建設周辺地区を全て地帯収用し、道路整備による地価上昇後に土地を再度売却するという方法が採られた。土地売却のための競売組織は1865年5月に組織され、丘陵地帯の土地建物収用が始まった。この土地建物収用に関する1869年7月27日の勅令では、「勅令から3年以内に土地収用と工事を完了させる」¹¹⁾ことが、またミケランジェロ広場建設予定地に関しては、1869年12月22日の勅令で「公益を上げるため、サン・フランチェスコ・アル・モンテ（サン・サルヴァドーレ・アル・モンテ）の国有農地を事業遂行のために収用すること」¹²⁾が命ぜられたため、その後、次々と土地建物収用が進み、事業自体も進行していった¹³⁾。

以上の計画進行過程を踏まえて、ミケランジェロ広場が計画された土地に着目してみる。広場計画以前の状況を示す1843年のファントツィの都市図と広場の計画地を重ね合わせてみると、敷地は点線で示したコムーネ所有地となった場所にあた

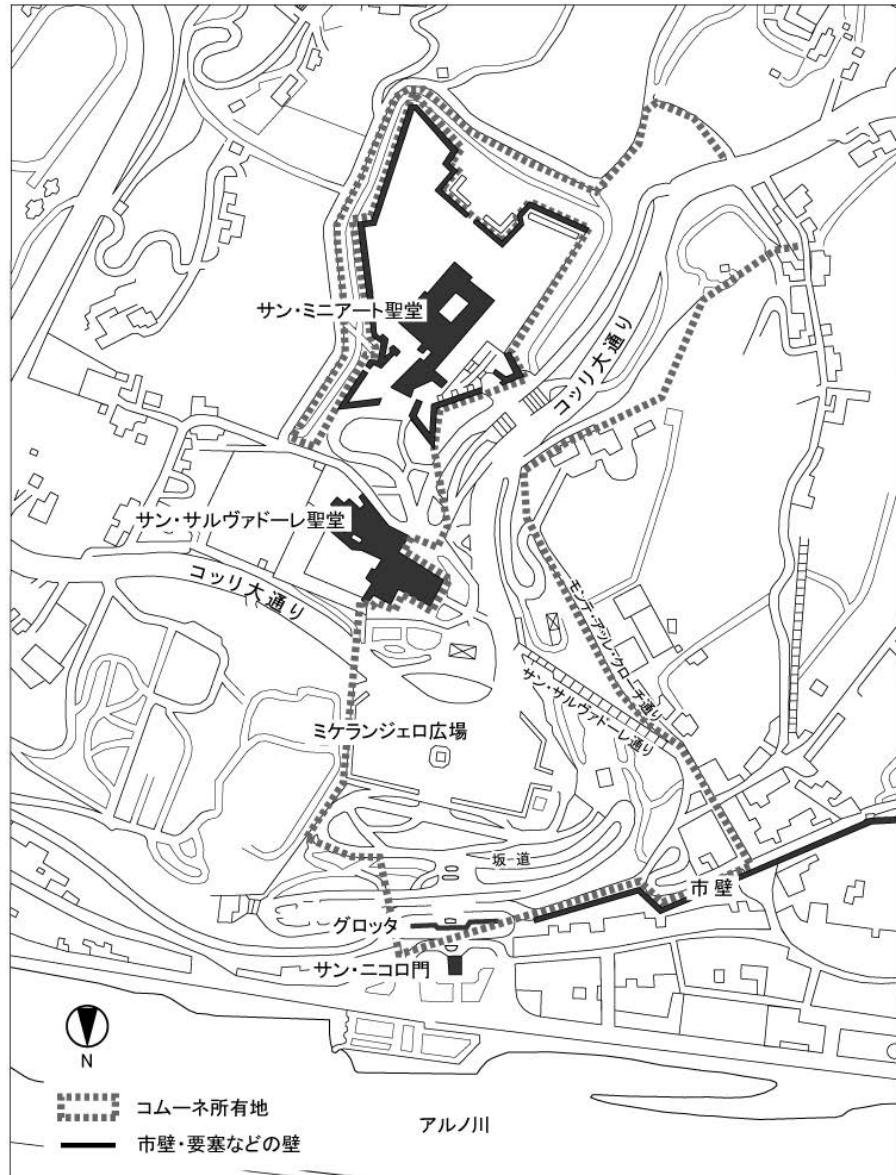


図2-1 ミケランジェロ広場周辺図

(軍事地理院(I.G.M.)2010年発行都市図, Poggi, G., *Piazzale Michelangelo*, Tav. III
“Pianta Catastale della Collina del Monte alle Croci e S. Miniato”をもとに作成)

ることがわかる（図2-1）。この敷地は、サン・ミニアート聖堂とサン・サルヴァドーレ聖堂を囲っている要塞内側のサン・サルヴァドーレ修道院と慈善事業団体所有の菜園であった場所であったが¹⁴、1867年の宗教財産没収の法令によって国有財産となり、その後コムーネに譲渡されている¹⁵。この法令は、同年、ローマ教皇領がイタリア王国に併合される前提となったものであり、イタリア国家統一の激動の社会状況を象徴する土地の動きといえる。

再び図1を見ると、ミケランジェロ広場の東側の形状はコムーネ所有地の境界線と重なっていることが読み取れる。また、広場の範囲は、西側はポッジがヴィラと呼んでいる建物¹⁶までで、北側は既存の小道まで、南側はサン・サルヴァドーレ聖堂の手前までとなっており、敷地境界線と既存の道路形態を踏襲した形態となっていることがわかる。

このように、丘陵地帯のコッリ大通りと周辺地区の計画は、国有地と私有地をコムーネが収用する形で行われ、コッリ大通り建設の総工費約330万リラのうち約75万リラが、土地建物収用に充てられた¹⁷。この丘陵地帯の土地収用と大通り建設計画には、再度売却することによって収益を上げるという目的があったが¹⁸、ミケランジェロ広場計画においては採用されなかった。これに対して、同都市拡大事業の広場計画のうち、クローチェ門広場（現ベッカリア広場）計画では、ポッジの公共浴場と緑地が設置された広場とする初期案は実施されず、計画対象地は商工会議所に売却され、民間の工業用地として使用されることとなった¹⁹。この例と比較すると、ミケランジェロ広場計画においては、元々修道会の所有地を買収ではなく没収・譲渡という形でコムーネが獲得できたため、収益性を度外視して本来建設後に直接の利益とならない広場という公共施設が実現したと考えられる。これはまた、環状道路整備計画で、土地建物収用費を最小限にするために市壁が存在していた空間を利用して環状道路としたのではないか、というE. デッティの指摘²⁰からも推測できる。

このように、ミケランジェロ広場の場所と規模は、教会所有地没収の法というイタリア国家統一の特殊な状況下で成り立ったものであり、財源が厳しい中で、眺望の獲得という目的に、土地所有状況が合致して位置決定がなされた²¹といえるであろう。

それではなぜ、財政が悪化しているにもかかわらず、広場の建設地をコッリ大通り周辺地やクローチェ門広場（現ベッカリア広場）の計画のように、宅地として売却せず、公的なものとして保持し続けたのだろうか²²。

2. 地盤と排水

ミケランジェロ広場の位置と形態に関する以上の疑問に答えるものとして、地盤と排水が重要な視点として挙げられる。ポッジのフィレンツェ拡大事業では、洪水対策を中心とする水理事業が、街区・道路建設に先行して計画されていた。また、土地収用費を別にすれば、水理事業費は拡大事業の総工費の約2割を占め、ポッジが全計画をまとめた大著『フィレンツェ拡大事業』でも、水理事業に関する記述が全体の3分の1を占めており、ポッジの土木的知識が深かったことが伺える²³⁾。

加えて、ミケランジェロ広場とコッリ大通り完成後の1876年に発行された小冊子『ミケランジェロ広場』²⁴⁾には、広場計画地の地盤と排水状況について詳細に記述されている。ここでは、主に1499年、1652年、1695年、1853年に起こった地滑りの危険性が指摘されている²⁵⁾。ここで注目すべきは、ミケランジェロ広場建設地が、歴史的に地盤がゆるく、その結果、水路や建築の状態が劣悪であることが当時既に認識されていたことである。例えば、ポッジがジュリアーノ・ダ・サンガッロやレオナルド・ダ・ヴィンチ、ヤコポ・デル・ポッライオーロらの証言を冊子に掲載し²⁶⁾、歴史的に地盤が弱く、排水状況が劣悪だったことを主張している。

これまでの研究でも、サン・サルヴァトーレ聖堂の建設が計画された16世紀初頭、地盤が不安定なために工事が中断したとされ、1499年の地滑りのあった年にクロナカ²⁷⁾によって拡張・改修工事が行われた際も、同時に水理・地質調査が行われたことが明らかになっている²⁸⁾。また、フィレンツェの都市部が歴史的にこの丘陵地区の北側に拡大してこなかったこともその証明のひとつといえよう。

また、1652年の地滑りでは、後に地質と水路の状態に関する調査が行われ、サン・サルヴァドーレ聖堂の北側一体が地滑りを起こしやすく、水路も良好な状態でないとし、その該当エリアを掘削することや、耕作することを禁止し、必要ならば罰則を与えるべきであると調査担当技師がトスカーナ大公へ提案している²⁹⁾。この1652年の調査は、フィレンツェ古文書館に資料提供を要求し、ポッジと担当技師とのもとの再検討され、水路の位置や距離、地滑りを起こす箇所を地図上にプロットしたものが作成された(図2-2)。これを見ると、2つの聖堂の北側一体には地滑りのある箇所を示す筋状の線が多く引かれており、この一体の地盤が不安定であることを示している。さらに、サン・ミニアート聖堂を囲う五角形の要塞とフィレンツェ最終市壁を結ぶ2つの壁は、1529年頃にミケランジェロが設計したとされているが、要塞としての機能に加えて、地滑りを防ぐための壁として機能していた可能性が考えられる。

また、ミケランジェロ広場建設以後の1879年と1880年に地滑りがあり、同年、地滑り対策のための地質や水路調査が2度行われ³⁰⁾、防災的配慮がポッジの計画以降も継続的になされていたことがわかる。また戦後の研究では、A. ラピーニ(1957)

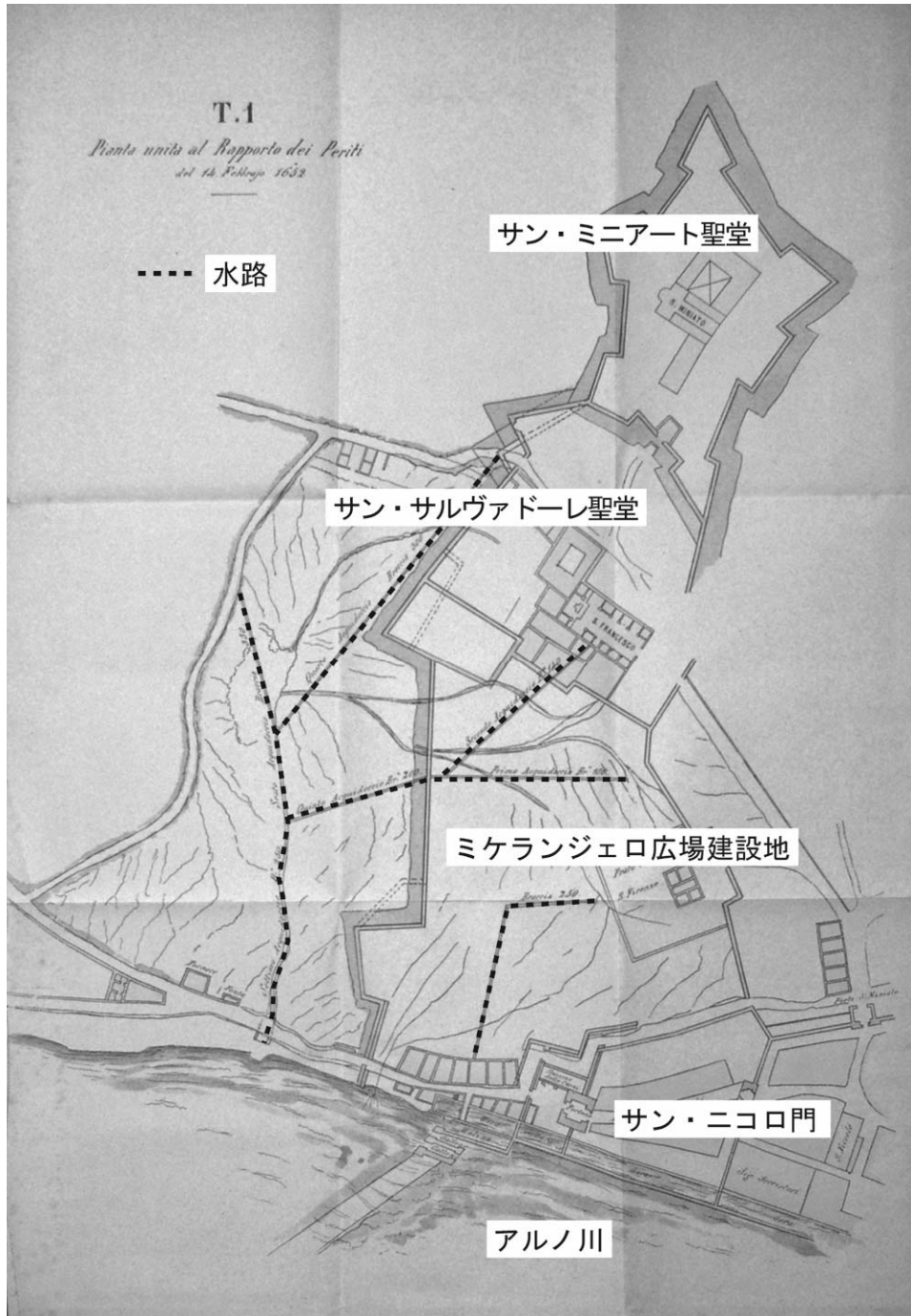


図2-2 『1652年2月14日の調査報告から描き起こした図』
(Poggi, G., *Piazzale Michelangelo*, Tav. Iに加筆)

31)やP. フォカルディ (1991年)³²⁾、G. ジュッピ (1996年)³³⁾の研究で歴史的に地滑りが起こっていたことが明らかにされており、保存計画分野からR. ベルトッチの研究 (1993年)³⁴⁾、(1995年)³⁵⁾において地質のモニタリング調査が行われ、地滑りの危険性が指摘されている。

以上のように、地盤に関する問題意識は広く共有され、ポッジも強く意識していたことがわかる。ミケランジェロ広場建設の際、コッリ大通り建設のためサン・ミニアート聖堂とアルノ川河岸の間の2つの壁は解体されたが、この壁の代わりとなる土留めの機能を果たすものとして、ミケランジェロ広場が計画されたと考えることはできないだろうか。

このことを示唆する事例として、広場の北側の坂道が擁壁として計画されていることが挙げられる。この計画では、市門であったサン・ニコロ門周辺が広場として整備され、そこから大階段を経由して、緩やかな傾斜の坂道がミケランジェロ広場に接続させている。この坂道は何度も折り返して湾曲することで緩やかなものとなっており、その側面は荒々しく削られた石積みの擁壁で支えられている。このミケランジェロ広場と坂道の周辺部に関しては、31枚の断面図が現存しているが³⁶⁾、この断面図を切り取った箇所を示す平面図は欠損しているため、断面箇所は高低差や広場の装飾から推定するしかない。この中で広場の断面を含んでいると思われる図を見ると (図2-3)、何箇所かに分節して擁壁が設置されていることが確かめられる。

ここで強調したいのは、ミケランジェロ広場が単純な擁壁としての機能のみによらず、擁壁のうち2箇所が巨大なグロッタとなっていることである (図2-4)。グロッタは主に16世紀に大流行したヴィラ建築の庭園につくられた人工的な洞窟状の装飾であり、多くの場合、そこに水を引いて水盤をつくるものであった。ポッジによる

グロッタの設置は、彼が計画した都市部の新しい住居建築のように、ルネサンスの建築言語を新たな近代建築の様式として採用したかのように見える。クローチェ門広場などの建築物に関してポッジ自身が述べているように³⁷⁾、新しい首都フィレンツェの建築様式をフィレンツェのルネサンス様式から引用していることは確かであろう。しかしながら興味深いのは、このグロッタにはモンテ・アッレ・クローチの丘の排水機能が付加されていることである。前述のレオナルド・ダ・ヴィンチらが指摘した劣悪な排水環境を整備し、このグロッタを通してアルノ川に流しているのである。

再び地滑りの箇所を示した図2に戻ると、1652年に行われた調査で確認された水路の位置が示されていることがわかる。この図に、ミケランジェロ広場の位置を重ねてみると、グロッタが設置された東側に水路があり、250ブラッチャ³⁸⁾(約146m)の水路がアルノ川に接続して流れていたことがわかる。

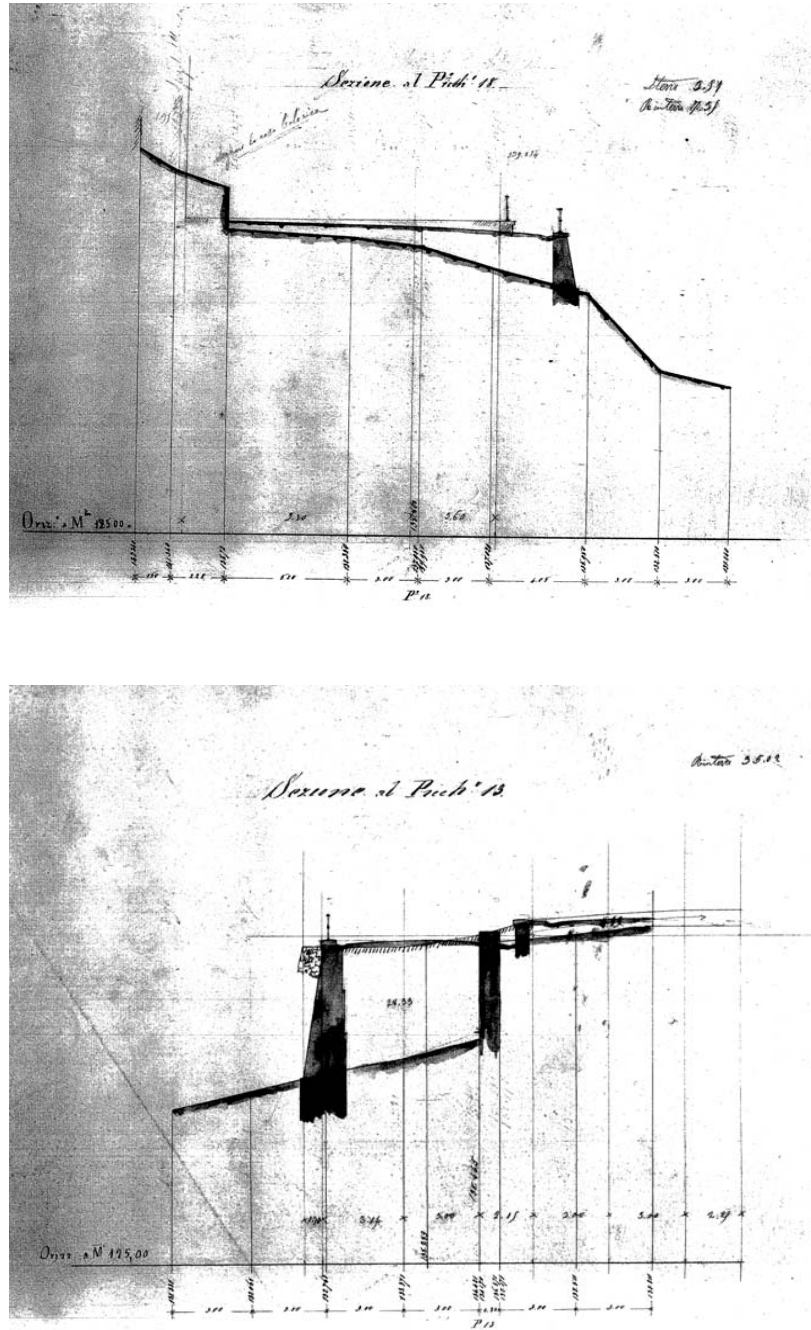


図2-3 ミケランジェロ広場周辺断面図
(上: ミケランジェロ広場, 下: グロッタ部分断面図と推測される,
Archivio dello Stato di Firenze, fondo Pianta Poggi, N/13, no.153, 151)



図2-4 ミケランジェロ広場へ続く坂道途中のグロッタ
(2010年11月筆者撮影)

このようにミケランジェロ広場は、歴史的に劣悪であった地盤の改良や水害・地滑りの防止とグロッタを用いた意匠上の工夫の両方が配慮されて計画されていたといえよう。

3. 衛生的観点

以上のように、ミケランジェロ広場の建設は、土地所有状況や地盤、排水などの条件によって大きく影響されていたが、さらに衛生的観点からも配慮されたものであったことが指摘できる。ミケランジェロ広場が接続するコッリ大通り計画の検討の記述から以下のように推測できる。

まず、水路の整備がアルノ川右岸（都市中心部）の都市改造事業においてのみならず、ミケランジェロ広場を含む左岸丘陵地帯でも重要視されていた³⁹⁾ことが挙げられる。丘陵地帯はもともと農地であったため、居住用の水路は宅地としての整備の際に初めて必要とされて敷設された。前節で述べたように、サン・ミニアート聖堂付近の地盤の改良に加えて、衛生環境も同時に整備する目的があったと考えられるのである。

次に、丘陵地帯の計画において、清潔な空気が吸える快適さを大通りに持たせることが考慮されていたことが挙げられる。大通りが完成して10年以上経過した後、大通りの上に蒸気トラムを敷設する計画が浮上した際に、ポッジが蒸気トラムによる空気汚染を危惧し、「我々の都市の一部であるコッリ大通りの散策路は最も健康に良いものなのです。有能な衛生士もそのように言うておりました」⁴⁰⁾と述べ、蒸気トラム導入に反対していることからわかる。また、ポッジが言うこの衛生士は、新聞『ラ・ファンフッラ』⁴¹⁾の記事の中でフィレンツェの郊外の公共散策路についてカッシーネ公園⁴²⁾とコッリ大通りを取り上げ、コッリ大通りに関しては、「100歩ごとに心地よい眺めを提供してくれ、ある地点では真のパノラマを提供する」⁴³⁾と述べ、「ピクチャレスクな巨大な劇場（ミケランジェロ広場）においては、今までに感じたことのない新たな生命力として機能するように、芳しい香りが胸いっぱい広がる」⁴⁴⁾と絶賛している。そしてこの環境は、「市民に相応しいこの散策路は、高い所では昼も夜も喜ばしく過ごせる快適さと美しさと、衛生的効用を多角的に提供する」⁴⁵⁾のものであるとも記述している。

また、この衛生士はカッシーネ公園とコッリ大通りを比較すると、前者は夏場の最も気温が上昇した日の夕方には、湿度が上がりすぎ、また付近の河川の水が乾いて川床の藻が沼状になり、空気が汚染されるために衛生環境として良好でない時間があると述べ⁴⁶⁾、これに対して後者には悪い条件はほとんどないとしている。その理由は、自由な通風を確保しているために、汚れた空気が樹木の間で柱状にこもる

ことがないからであると述べている。また、大通り沿いの植樹に関しても、酸素を多く放出する樹木の種類を賢明にも選んでいる、と設計者であるポッジを評価している⁴⁷⁾。このような叙述から、ミケランジェロ広場が清潔に一日を過ごせる場所であるべきとの衛生環境的視点で計画されていたことがうかがえる。

近代における公衆衛生観点からの都市改造の動機は、ロンドンやパリの例のような急速な工業化が引き起こした過密な住環境や、劣悪な空気環境による伝染病の蔓延、大火などが大きな引き金となっている。フィレンツェの場合においても、公衆衛生に対する関心が高まっていたことは、以上の記述に加えて、ポッジによるクローチェ門広場の計画で公共浴場が提案されたことなどから推測できる。ここで留意したい点は、フィレンツェにおいても公衆衛生の改善は大きな課題となったものの、1860年代のフィレンツェの主要産業は依然として農業と手工業であり⁴⁸⁾、工業生産による空気汚染はさほど深刻化していなかったということである。それにもかかわらず、フィレンツェの都市改造計画で、このように衛生的観点が重視された理由としては、1835年のコレラの発生、1844年のアルノ川と周辺河川の氾濫、1859年の増水で危機感が増幅されたこと⁴⁹⁾に加えて、1864年のフィレンツェへの首都移転時に、他の地域のイタリア人や外国人の大量の流入があったことを考えると、首都として相応しい近代都市を模索した結果と考えられるのではないだろうか。

上記の衛生士の記述の中でも、健康によい空気環境基準として、空気中のオゾン量が多くなると肺炎になる可能性が高まり、全く存在しないとコレラの温床を作り出す環境となる、と警鐘を鳴らしている⁵⁰⁾。まさにその適切な環境を提供する場所としてコッリ大通り一帯を挙げて、散歩によって清潔な空気を得ることを推奨したのである。

以上のように衛生環境の視点からみると、ミケランジェロ広場建設時に、サン・ミニアート聖堂とサン・サルヴァドーレ聖堂の前面の糸杉を大胆に伐採し、大きく開かれた場所としたことも、通風の良さを考慮した結果であり、また、広場南側の噴水やグロッタの水盤は、衛生的環境の改善を視覚化する装置としても機能していると理解することも可能であろう。

小結

以上のことから、ミケランジェロ広場の建設に関して、以下の3つの点が要約できる。

1. ミケランジェロ広場建設は、修道院の没収地を利用するなど、イタリア国家統一の流れの中ではじめて可能となったものであり、眺望の獲得という目的に、1860年代のイタリア国家固有の土地利用状況が合致して実現した計画であった。

2. ミケランジェロ広場と北側の坂道は、歴史的に建物が建設できなかった土地に当時の先進的な擁壁と水路整備技術を用いることで、土留めと排水機能を果たす装置が設置されたと同時に、ルネサンス時代の建築言語による新たな国家の建築様式を提示する美観的調整が行われた計画であった。

3. ミケランジェロ広場の計画は、丘陵地帯の計画と一体となって、酸素を多く発する樹木の選定など、清潔な空気を獲得できる場所として用意された、衛生的観点からの要求も満たすものであった。

以上のことから、ミケランジェロ広場建設における形態と機能は、近代的道路計画の実現や社会的象徴性の付与のみならず、むしろ土地所有状況や地滑り、洪水からの防災観点、また当時の衛生環境への意識が大きく影響していることがわかった。

仮に土木的な処置としてのみの観点からこの広場の計画を捉えると、単純に分厚い擁壁を何箇所かに設置し、排水は地下を通してアルノ川へ通す方が容易かつ合理的であろう。しかしながら、ポッジは「擁壁と排水の機能を持つグロッタ」という新しい機能を担う建築的工夫を採用した。また坂道の勾配を緩くすることで、散歩道として楽しみつつ、かつ清潔な空気を吸いながらミケランジェロ広場へ赴く道を設置した。結果的に近代的道路計画の実現を、美的観点、土木的観点、衛生的観点などが両立した計画を模索しようとしたところに、ポッジの歴史観と都市の近代化の捉え方があらわれているといえよう。それは近代初頭フィレンツェの都市の固有性として実現しているのである。

注釈

- 1) 拙稿「19世紀フィレンツェにおける建築家ジュゼッペ・ポッジの計画範囲」, 日本建築学会計画系論文集 2011年9月第76巻第667号に寄稿。
- 2) Ibid., p.4.
- 3) Borsi, F., *La capitale a Firenze e l'opera di Giuseppe Poggi*, Colombo Editore, Firenze, 1970, pp. 84-90.
- 4) 広場を含む丘陵地帯の総工費は約330万リラである。1865年のイタリア政府の収支は約840万リラで、その内公共事業の年間支出は40万リラ程度であることを見ると、莫大な費用が丘陵地帯の開発にかけられたことがわかる (Mari, A., *La Questione di Firenze, allegati*, Tipografia di L. Niccolai, Firenze, 1878, pp. 8-9)。また、丘陵地帯は4区分されて計画されているが、そのうちミケランジェロ広場を含む箇所の面積当たりの工費はその他の区画の約3~8倍であり、広場建設に巨額の工費が投じられたことがわかる (Poggi, G., *op. cit.*, p.154)。
- 5) カミロ・ジッテ『広場の造形』鹿島出版会,1983, pp. 28-29.
- 6) Corsani, G., “Giuseppe Poggi e il Viale dei Colli a Firenze”, in *Storia Urbana Rivista di studi sulle trasformazioni della città del territorio in età moderna*, 16, Numero 60, luglio-settembre 1992, pp. 37-58.
- 7) 1018-63年建造。フィレンツェのロマネスク様式聖堂の最高傑作のひとつとされる。トスカーナ特有の白と緑の大理石でできた幾何学模様ファサードを持つ。第6市壁(最終市壁)の外側に位置する。
- 8) 13世紀頃建造。サン・ミニアート聖堂同様、フィレンツェのロマネスク様式の聖堂。現在見られる形態は1499年から1504年にクロナカによって拡張されたもの。ミケランジェロが「ナポリの田舎娘 la Bella Villanella」と称し、愛好していた。これもサン・ミニアート聖堂同様に第6市壁の外に位置する。
- 9) Poggi, G., *Ricordi della vita e documenti d'arte*, R. Bemporado e figlio, Firenze, 1909, pp. 110-111.
- 10) 南側のカフェ・レストランとして使用されることとなった「カフェ・ラ・ロッジア」は、もともとミケランジェロ美術館として構想されたものであったが、これは財政困難のために用途変更となった。この構想において、ミケランジェロの試作品をロッジアの彫刻に使用するなどのポッジの案もまた中止となっている。Poggi, G., *Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze*, pp.145-146.
- 11) Poggi, *op. cit.*, p. 133.
“Col primo dei quali (Decreto Reale del 27 luglio 1869)...si ingiungeva 《che l'espropriazioni ED I LAVORI si compissero entro TRE ANNI dalla data del Decreto》”.
- 12) Ibid.
“Col secondo (Decreto Reali del 22 dicembre 1869), si dichiarava di pubblica utilità (si ingiungeva) la espropriazione 《del potere demaniale di San Francesco al Monte ALLEFFETTO DI COMPIRE I LAVORI PROGETTATI》”.
- 13) 丘陵地帯における土地建物収用総数38件のうち、29件が1869年の勅令の後、実施された。
- 14) Archivio dello Stato di Firenze, fondo Catasto Generale Toscano 1834-35, carta, n. 227/ tavola indicativa, Bagno a Ripoli, Sez. A.
- 15) Poggi, *op. cit.*, p.143.
- 16) Poggi, *Ricordi della vita...*, p.110.
- 17) Poggi, *Sui lavori...*, pp. 127-129.
- 18) Poggi, *op. cit.*, p. 123.
- 19) Poggi, *op. cit.*, p. 284.
- 20) Detti, E. (con la collaborazione di Tommaso Detti), *Firenze scomparsa*, Vallecchi Editore, Firenze, 1970, p. 35.
- 21) フィレンツェ拡大事業における土地建物収用は、コムーネ管轄の建設局によって行われた。ポッジは拡大事業のためにコムーネに起用された建築家であり、土地建物収用もポッジの事務所で計画さ

- れた都市調整計画をもとに実施された。Poggi, *op. cit.*, p. 3, 317.
- 22) 赤字財政克服のため、重税体制や国債発行、軍事費の削減などに加えて、国有地や没収教会財産の売却による収支増を図っていた（森田・重岡, 前掲書, p.141）。
- 23) ポッジは若い時期に建築家 F. フランコリーニに同行し、マレンマ地方の沼地の干拓事業の調査に同行し、その調査日誌をつけているなど、土木的事業に携わっていたことが知られている。Agostini, E. A., *Giuseppe Poggi. La costruzione del paesaggio*, Edizioni Diabasis, Firenze, 2002, pp. 15-16.
- 24) Poggi, G., *Piazzale Michelangelo*, Coi Tipi di M. Cellini, Firenze, 1872.
- 25) *Ibid.*, p. 6.
- 26) *Ibid.*, pp. 7-8.
 「ジュリアーノ・ダ・サンガッロ曰くーサン・フランチェスコ聖堂（サン・サルヴァドーレ聖堂）に関して、雨水の排水路を洗浄し、排水溝をつくる必要がある」。
 ‘Giuliano da S. Gallo disse per S. Francesco che bisognava levar via l’acque che piovano, e fare una fossa nel mezzo per vedere donde venivano i mancamenti’。
 「レオナルド・ダ・ヴィンチ曰くーサン・サルヴァドーレ聖堂の改善策を作成した。建物の不足が確認できる他、レンガ制作場で石を薄板に割るために流す水が不足していることが確認できる。その水は薄板を割ると同時に下水も清潔に保たせている。そしてその薄板を作る建物自体にも不足がある」。
 ‘Lionardo da Vinci disse quanto a S. Salvatore et a rimedi di quello secondo ha dato il disegno e per quello si vede da’ mancamenti dell’edifitij e delle acque che vanno tra le falde delle pietre in sino dove si fanno i mattoni, quivi in parte sono tagliate le falde, e quella parte dell’edifitio dove sono tagliate le falde è il mancamento, e che rifendendo e tagliando le falde si rimediarebbe e tenere nette le fogne’。
 「ヤコポ・デル・ポツライオーロ曰くーサン・サルヴァドーレ聖堂に関して評価すると、小高い丘は水によって汚れており、建物は劣悪な状態で建っており、中の水は全部浄化する必要がある」
 ‘Iacopo del Pollaiolo disse quanto a S. Salvatore haverne dato altra volta giudizio, et a lungo ragionando con Frate Lorenzo, e che il poggio è maculato dall’acque, e l’edificio mal fondato, et è necessario levar l’acque d’intorno...’
- 27) Il Cronaca（本名シモーネ・デル・ポツライオーロ Simone del Pollaiolo）（1457-1508）。フィレンツェで活躍した建築家、彫刻家。ジュリアーノ・ダ・サンガッロと親交を持ち、若い時期の数年をローマで過ごした。代表的な設計はサン・サルヴァドーレ聖堂以外には、パラッツォ・ストロツィの大コーニスがある。
- 28) Berti, G. F., *Cenni storico-artistici per servire di guida ed illustrazione alla insigne Basilica di S. Miniato al Monte e di alcuni dintorni presso Firenze*, Baracchi, Firenze, 1850, p. 127.; Neri, D., “S. Salvatore al Monte”, in *Rassegna del comune di Firenze*, 1933, p. 264.; Trotta, G., *San Salvatore al Monte: antiquae elegantiae per un’acropolis laurenziana*, Becocci, Firenze, 1997, pp. 9-14 など。
- 29) Poggi, *Piazzale Michelangelo*, pp. 23-25.
- 30) Giordano, F., *Relazione della commissione nominata nel giugno 1879 per lo studio dei rimedii alle frane del Monte alle Croci o di S. Miniato*, Tip. dell’Arte della stampa, Firenze, 1884.
- 31) Lapini, A., *Diario Fiorentino: dal 252 al 1596*, Sansoni, Firenze, 1900.
- 32) Focardi, P., “Geological considerations about the landslide of Monte alle Croci”, in *Studi di Geologia Applicata e Geologia dell’ambiente*, n.23, Firenze 1991.
- 33) G. Giubbi, *San Salvatore al Monte chiesa reale e virtuale*, Tesi di Laurea, unpublished, Università degli Studi di Firenze, 1996.
- 34) Bertocci, R., D’Amato Avanzi, G., “Il contributo dell’analisi storica dei dissesti del Monte alle Croci” in *Geologia Applicata ed Idrogeologia*, n. 28, pp. 99-110, Firenze, 1993.
- 35) Bertocci, R., Canuti, P., Focardi, P., Garzonio, CA., Trivisonno, R., “I problemi di instabilità

- della collina di San Miniato nella storia urbanistica e monumentale di Firenze” in *Geologia Applicata ed Idrogeologia*, n.30: 451-468, Firenze, 1995.
- 36) Archivio dello Stato di Firenze, fondo Poggi, disegno, N/15.
- 37) Poggi, *Piazzale Michelangelo*, pp. 117-119.
- 38) フィレンツェでは1ブラッチャ約0.584m。
- 39) Poggi, *Sui lavori...*, pp. 148-151.
- 40) Poggi, G., *Sul progetto di Tramvia del Chianti pel Viale dei Colli*, Tipografia di G. Barbèra, Firenze, 1888, p. 4.
“...il passeggio per il Viale dei Colli, fra quanti ne ha la città nostra, sia il più salubre. Lo hanno detto valenti igienisti...”
- 41) *La Fanfulla* 1870年6月にフィレンツェで発行された新聞。イタリアにおいて、政党と関連を持たない新聞の初期のもの。ローマ遷都で本部をローマに移した。1886年廃刊。
- 42) フィレンツェ西側に位置。1563年造設のメディチ家所有の禁猟地兼牛の飼育所であった。1869年にコムーネに公園として払い下げられた。
- 43) Chierici, L., *Le Cascine e il Viale de' Colli*, Tipografia Eredi Botta, Firenze, 1871, p. 4.
“...ogni cento passi vi offer amene vedute, e, in certi punti, dei veri panorama...”
- 44) Ibid.
“...in quell'immenso anfiteatro pittoresco...dove l'aria balsamica piacevolmente, e, direi quasi, etereamente vi dilata il petto come a funzion vitale novella, mai sentita.”
- 45) Ibid., pp. 4-5.
“...per render gli uni e l'altro benemeriti del pubblico vantaggio e del civile decoro: essendochè cotesta passeggiata offre un complesso d'igieniche utilità e di confortevoli cose belle da potersi colassù passar giornate e sere liete.”
- 46) Ibid., p.11.
- 47) Ibid., p.12.
“...onde perla libera ventilaione, non possan reggere –caso se ne formassero- delle statiche colonne d'aria viziata; osservando inoltre come le piante istesse, ivi poste, sieno state prescelte molto giudiziosamente dale famiglie delle così ritenute più ossigenifere, tanto quelle a foglie caduche, quanto l'altre a foglie sempre verdi. Cotalchè, anche per la loro forma costituzionale, quando ancora fosser cresciute al Massimo loro punto, lasceranno sempre passeggiata sommamente igienica il Viale de' Colli.”
- 48) 松浦保, 伊沢久昭, 上原一男, 竹内啓一, 林亮『イタリア経済』, 東洋経済新報社, 1968, pp. 1-4.
- 49) Poggi, *Sui lavori...*, p. 29.
- 50) Chierici, *op. cit.*, p. 9.

第3章

コッリ大通りの路程と機能

はじめに

前章では、フィレンツェ拡大事業におけるミケランジェロ広場の計画について、土地収用、地盤と排水、衛生状況という計画上の技術的側面からの視点を設けて、広場の形態と機能について分析した。

本章では、ミケランジェロ広場に接続している通称コッリ大通りについて、計画地周辺の地形に着目して路程の実態を詳細に検証し、そこに付帯された機能について考察することで、首都フィレンツェ拡大事業におけるコッリ大通りの役割を明らかにする。

コッリ大通りとは、アルノ川左岸の西側に位置するローマ門と、東側に位置するサン・ニコロ橋を繋ぐ、ニコロ・マキャヴェッリ大通り、ガリレオ・ガリレイ大通り、ミケランジェロ大通りという全長 5690m にわたり丘陵地帯を走るように計画された3つの大通りの総称である(図1、2)。フィレンツェがイタリア王国の首都となった1865年に都市拡大事業の一環として、アルノ川右岸の市壁跡の環状道路を補完させる目的で計画された¹⁾。

フィレンツェの都市研究史において、コッリ大通りの研究は1970年代に開始された。E. デッティ(1970年)²⁾による研究では、大通りと歴史的モニュメントとの接合部について、ポッジの歴史的なコンテクストの理解が不十分であったことが指摘されている。一方、同年のF. ボルシの研究³⁾では、コッリ大通りを含む周辺地区について、歴史的な中心地から独立した緑地との均衡を保ちつつ、都市に初めて娯楽の場を与えたとして、コッリ大通りがポッジのフィレンツェ拡大事業の中で最も成功した部分であるという評価がなされている。また、G. モロッリの論文(1989年)⁴⁾では、ポッジの建築と都市改造の建築様式に関する分析がなされ、G. コルサーニの論文(1992年)⁵⁾でコッリ大通りの技術的側面が明らかにされた。ついで、E. M. アゴスティーニの研究(2000年)⁶⁾では、景観の創造者としての建築家ポッジの側面が明らかにされた。その他、緑地計画の視点から分析したC. パオリーニの研究(2004年)⁷⁾では、コッリ大通りが交通機能のみならず、庭園としての機能を果たしていたことや、周辺のヴィラの使用状況などの機能的側面についての論考へと対象が広げられている。以上の既往研究では、周辺を構成する建築や風景に関する美的評価や都市の中で果たした機能に関して評価がなされているが、その考察の中での大通り計画実施における技術的側面に関する記述は断片的であり、十分とは言えない。本来、コッリ大通り計画の鍵となる周辺地形との関わりに関する具体的な検証はなされていない。そこで、本章では、地形に焦点を当てて路程を詳細に検証し、そこに付帯された機能を分析するために、交通インフラ、洪水対策、飲料水問題、土地収用といった計画上の技術的側面からの視点を設定し、コッリ大通り建設計画の実態とその役割を明らかにする。

1. 交通インフラとしての大通り

コッリ大通りは計画の当初、アルノ川右岸の市壁跡環状道路を補完するものとして、左岸の市壁を利用して舗設されるはずであったが、ポッジの1882年の報告書によると、結果的には以下の理由から別の路程を採ることとなったことがわかる⁸⁾。第一に、ポーボリ庭園に接している部分の市壁の保存が理由として挙げられている。その背景としては、当時のイタリア国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世が、庭園と同敷地内にあるピッティ宮に滞在していたという史実⁹⁾を考慮すると、防御や非公開への配慮があったと考えられる。第二に、既存の市壁の地形が急傾斜すぎるため、大通りの建設には不適當であるという理由が挙げられている。実際、高度が読み取れるトスカーナ州が1998年に作成したデジタル都市図CTR (Cartografia Tecnica Regionale) から傾斜を測定すると、市壁沿いで最も急な箇所¹⁰⁾で約17%の勾配、最も緩やかな箇所¹¹⁾でも、ポッジがコッリ大通りで目標としていた4%¹²⁾を超える4.9%の勾配と、大通りとしては不適切な急斜面であることが読み取れる。また、大通り周辺の整地が必要であることが報告書で述べられている¹³⁾ことから、住居の建設と各戸への大通りからのアプローチを考えると、より合理的な地形として緩勾配がとれる場所を選定した結果でもあると考えられる。

では、市壁部の傾斜に対して、実際にコッリ大通の路程の傾斜はどのようなものであったのかを検証したい。同CTR都市図とポッジによる計画図をもとにコッリ大通りの断面図を作成する(図3-1)。これを見ると、路程の両端で均質な緩勾配となっていることがわかる。しかしながら、ガリレオ広場からミケランジェロ広場の間はほとんど高度が変化せず、ローマ門とガリレオ広場間、サン・ニコロ橋とミケランジェロ広場間で、ほぼ最高地点まで昇り切るように工夫していることがわかる。また、大通りの路程図と等高線図¹⁴⁾を重ね合わせると、旧市壁内で最も高い地点にあるベルヴェデーレ要塞¹⁵⁾を迂回するかたちで、広場同士を繋ぐ最も高低差の少ない箇所を結んでいることがわかる。

このような緩勾配にした目的について、ポッジの報告書では、「首都にふさわしい優雅な大通りをつくり、美しい景色を確保するため」であると述べられているが¹⁶⁾、当然、大通りであるからには交通インフラとしての快適さも追求されたはずである。そこで考えられるのが、当時、都市内を移動する主要な交通手段であった馬車の走行に適切な傾斜角だったのではないかということである。19世紀に入り、ヨーロッパ諸国では馬車は改良が繰り返され、郵便馬車や乗合馬車といった大量輸送で、かつ時間制限のある運行といった新しい利用方法が登場し¹⁷⁾、都市における馬車の走行台数が急増していた¹⁸⁾。このため、1822年に起こったプロイセンの山岳地帯での郵便馬車転倒事故に代表されるように、転倒や歩行者への追突といった交通事故が多発していた¹⁹⁾。フィレンツェでも1872年には、1865年から営業開始された乗合馬車がコッリ大通りを双方向に走行していた²⁰⁾。このような当時の馬車という新しい交通手段の普及状況を考慮すると、個

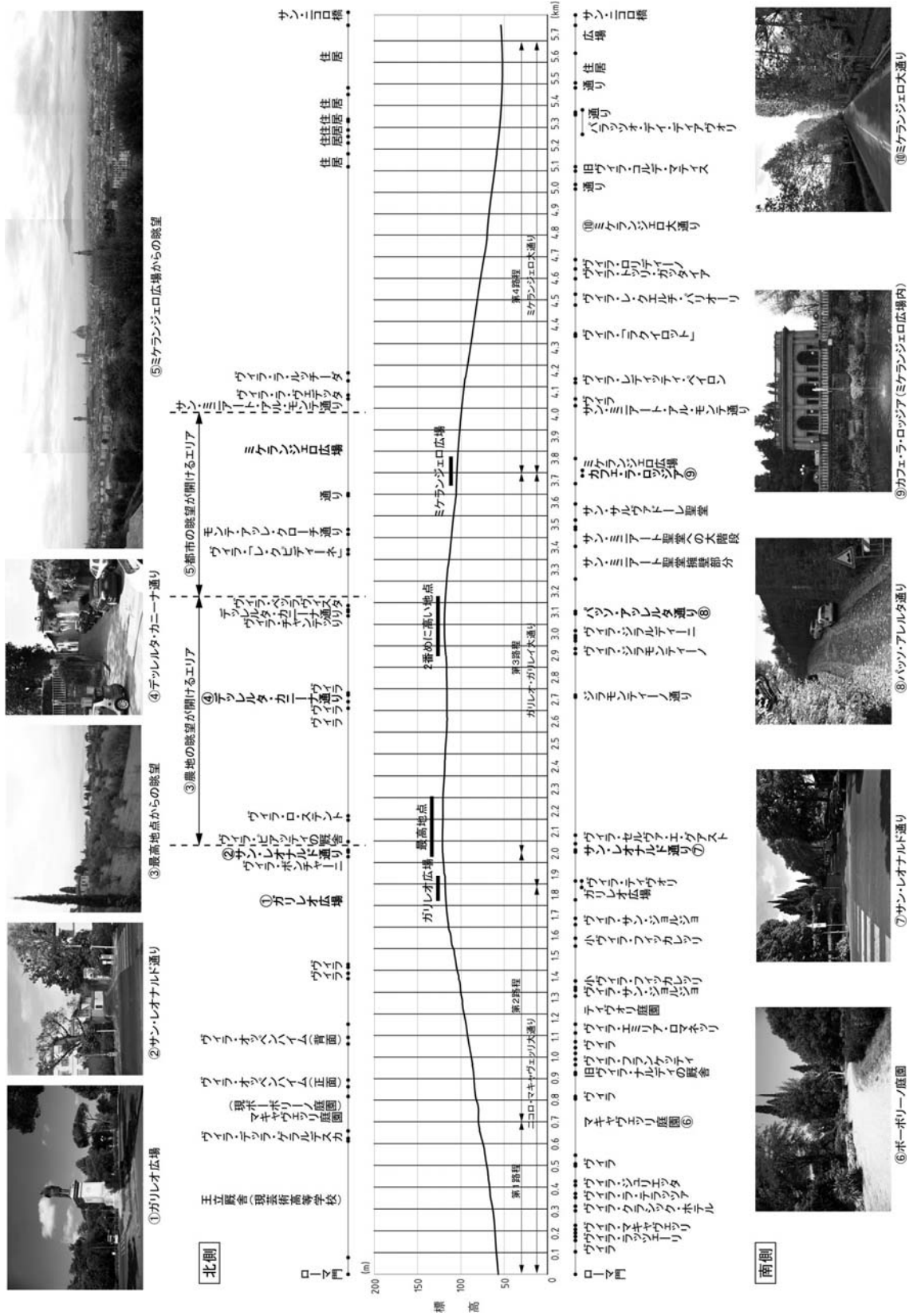


図3-1 コッリ大通り断面図

(1998年トスカーナ州作成都市図CTRとZangheri, L., *Ville della provincia di Firenze*, Rusconi, Milano, 1989.をもとに作成。写真は2012年筆者撮影)

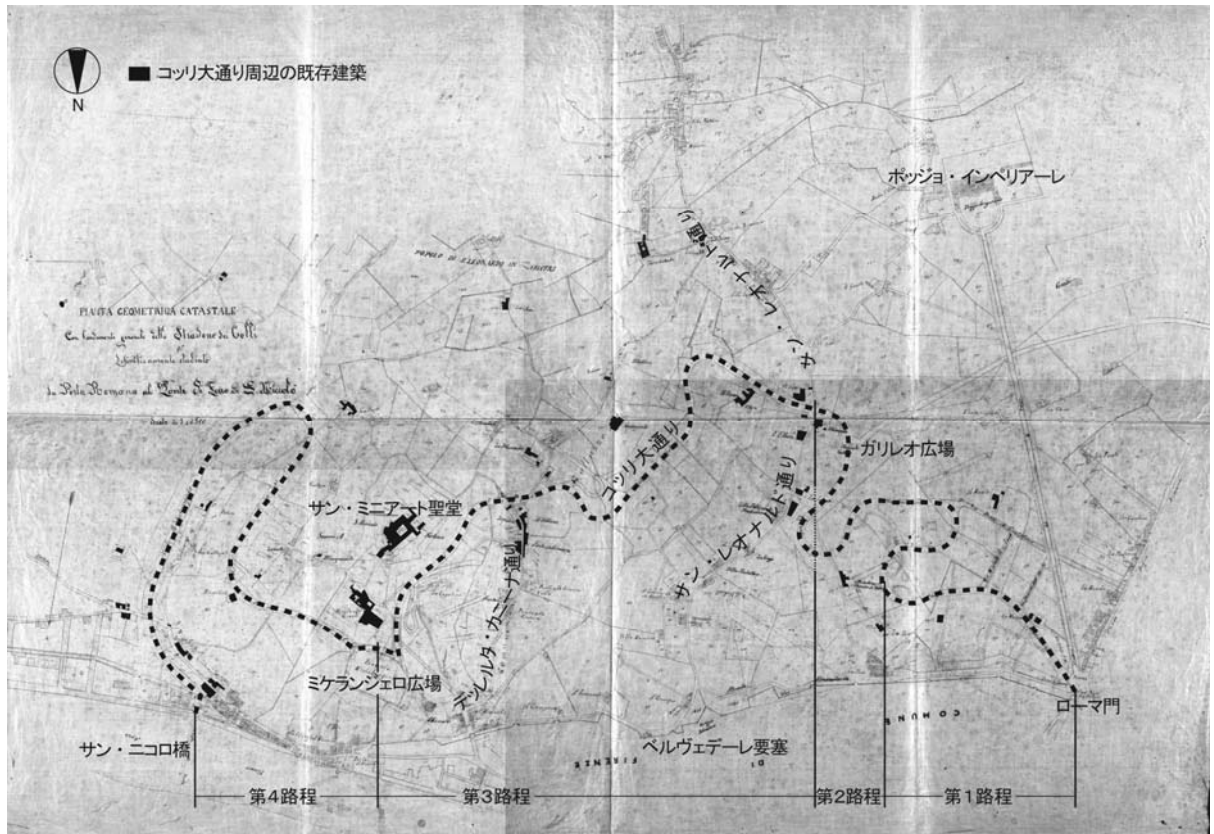


図3-2 『コッリ大通りの路程が示された地籍地図ーローマ門からサン・ニコロ門まで』に加筆
(Archivio dello Stato di Firenze, fondo Pianta Poggi, N. 140.1/1, scale=1:2500, 890×1265mm)

人の少人数用の馬車のみならず、大人数が乗ることができる乗合馬車で走行可能な勾配が配慮されていたことが考えられる。

ここで、コッリ大通りの断面図と平面計画図を用いて、傾斜と路程の関係を検証したい(図3-1、2)。断面図から第1、2路程と第4路程の傾斜を100mごとに算出すると、いずれも1.0~5.8%内であり、平均すると約3.09%と緩勾配を保ち、約1.7kmで広場まで上昇する路程となっている。このように断面形では非常に類似しているが、平面形をみると第1、2路程では第4路程に比べて半径の小さいS字型の路程を採っている。このS字内部の土地は庭園に当てられ、庭園を横切る形で直線的に徒歩でガリレオ広場まで登ることができる道が舗設されている。第4路程でも、初期案²¹⁾ではS字が採られていたが、最終案では図2のような路程となっている。第4路程の傾斜は第1、2路程よりも急であることから、大きな楕円状の路程として計画することで、緩勾配による路程を実現しているのだ。

このように、地形に則した勾配が交通インフラとしての快適さも確保しながら計画されていたが、当時ヨーロッパ諸国の近代都市改造における最重要な課題として、人口増加による都市拡大によって引き起こされたインフラ問題、衛生問題などが挙げられる。ポッジの書簡からも、フィレンツェ拡大事業着手以前の1845年に、ロンドンやパリなどを旅行して都市改造を冷静に視察し、都市の近代化に関する問題点を意識していたことが読み取れる²²⁾。フィレンツェ拡大事業は、首都移転決定を受けて計画された突発的な事業であり、それに対応するための緊急性と合理性が計画には求められたはずである。それにも関わらず、なぜ建物の建設が困難な丘陵地区が都市拡大対象地区に選定されたのだろうか。

2. 洪水対策・飲料水の問題と大通り

前述したように、コッリ大通りは路程の両端でほぼ最高地点まで登り切るよう路程が設定されている。この理由としては、アルノ川と周辺河川の氾濫に対する洪水対策が挙げられる。前稿²³⁾でミケランジェロ広場周辺の地盤の緩さから、土留めの役割を果たすような広場を建設していたことを明らかにしたが、報告書の中ではコッリ大通りの路程においては、地盤に関する指摘はなく、また洪水に関することも述べられていない。しかしながら、ポッジの事務所で作成された設計図面の中に、鉄橋(現サン・ニコロ橋)のあった地点からガンベライア水路²⁴⁾沿いの断面図が存在し(図3-3)、これを見ると、1844年のアルノ川洪水時の水面上昇地点が示され、新たに計画するコッリ大通りがそれより高い地点に位置するよう計画されていることがわかる。この1844年の洪水は首都化に向けて洪水対策が重要視されるきっかけとなったもので²⁵⁾、フィレンツェ史上、大規模な洪水として記録されている1333年、1557年、1589年、1740年の洪水に

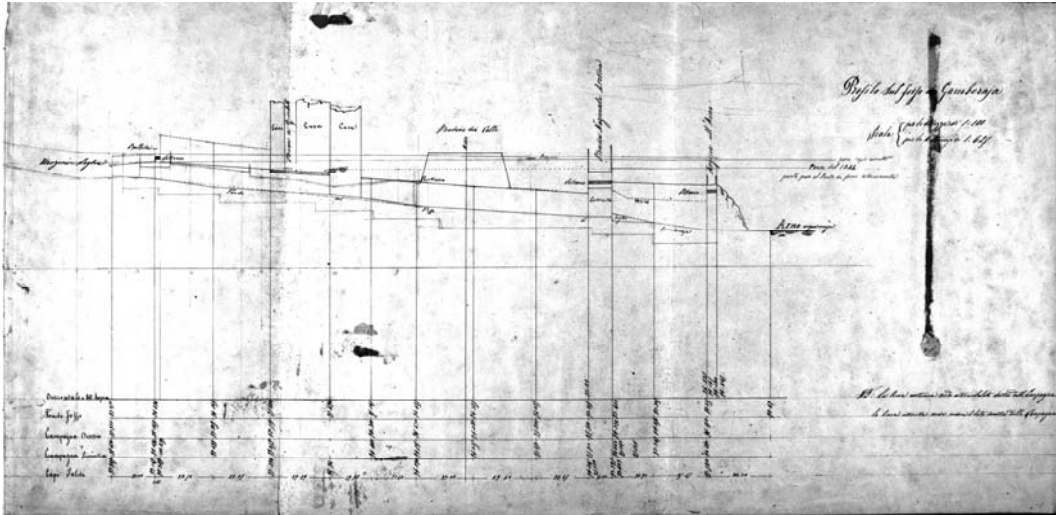


図3-3 『ガンベライア水路沿いの断面図』
(Archivio dello Stato di Firenze, fondo Piante Poggi, N. 140.1/3,
scale=垂直方向 1:100, 水平方向 1:625)

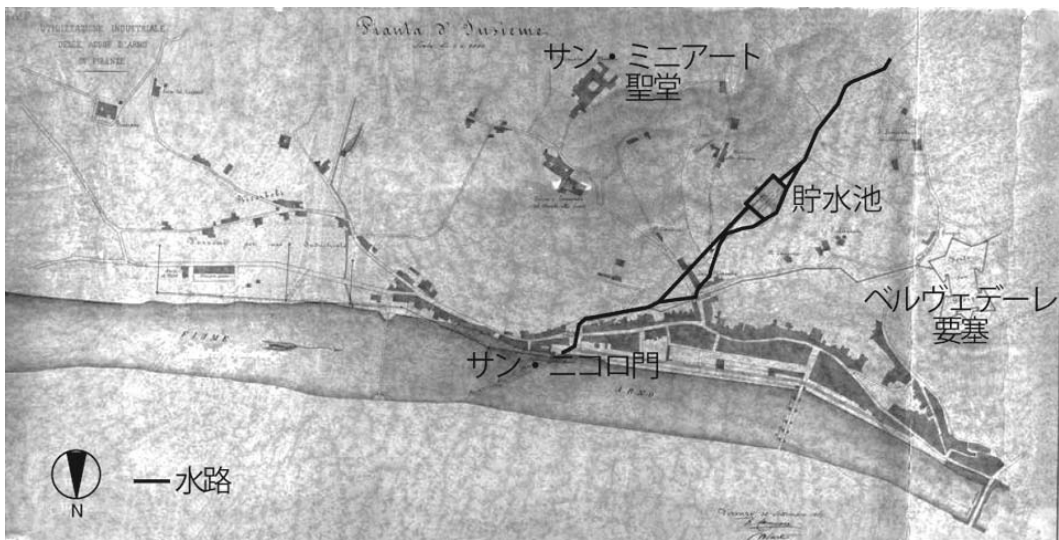


図3-4 R. カネヴァリ, M. サルティ作『フィレンツェにおけるアルノ川取水の工業的
利用』(1867年9月30日)に加筆
(Archivio Storico del Comune di Firenze, car. 033/88, 515×1010mm)

匹敵するものであった²⁶⁾。この水害で都市は大打撃を受け、住宅の賃料が高騰したため1848年には暴動が起きている²⁷⁾。特に、アルノ川に流していた下水の逆流が深刻な問題となり、下水道の拡張が求められた²⁸⁾。この1844年の洪水の後、浸水範囲が示された図が作成されているが²⁹⁾、この図ではサン・ニコロ門周辺も浸水していた。このことから洪水の危険性が指摘され、対策の対象とされていたアルノ川右岸のみならず、左岸においても洪水の非常に高い危険性があったことがわかる。このような洪水の危険性に配慮して、コッリ大通りは安全な住居地区へのアクセスとなるよう、その路程と勾配が計画されたのである。

しかしながら、新たな住居地区をより標高の高い地点に建設すれば、給水がより困難となる。コッリ大通り計画以前の周辺地区は、ほぼ全体が農地であり³⁰⁾、既存の水路を利用していましたが、大通り周辺の住居地区建設にあたり、農業用水だけでなく、大量の飲料水の供給が課題として浮上した³¹⁾。この飲料水確保の問題は、フィレンツェが首都となる以前から、丘陵地帯のみにとどまらず、フィレンツェの都市全域において問題視されていたものであった³²⁾。コッリ大通り自体にも、街路樹への散水と休憩地点の貯水池への給水が必要となった³³⁾。1867年に、技師 R. カネヴァリ³⁴⁾と、フィレンツェ都市改造計画における技師長であった L. デル・サルト³⁵⁾によってアルノ川左岸のコッリ大通りの中間地点付近に貯水槽が建設された（図3-4）。近代以前に丘陵地帯に建設されたヴィラは、限られた水路や井戸を独占的に使用して給水可能となっていたが、ここではじめて蒸気圧力ポンプという近代技術の導入によって³⁶⁾、低地から高地への給水が容易となった。

このように、地形を利用した洪水対策に配慮した路程を採ることで、洪水の危険性が低い住居地区が建設された。それを可能にしたのは、蒸気圧力ポンプという近代技術による給水問題の解決であった。

3. 土地収用問題

コッリ大通りと周辺住居地区は、上記で述べたように大部分が農地であったため、アルノ川右岸の都市拡張部分に比べて、建築面積が非常に少なかった。このため、2つの勅令が1869年7月27日と12月22日に出され、3年以内にコッリ大通り建設に関する土地収用と工事を完了させることが命ぜられたのである³⁷⁾。大通り周辺地区の土地建物収用状況を示した表1を見ると、収用すべき土地建物の区分全35箇所のうち、27箇所が1869年7月27日以降に収用され、勅令後に多くの土地建物が収用可能となったことがわかる。

また、アルノ川左岸の丘陵地区が都市拡大の対象として選定された理由には、農地の大部分をイタリア王室が所有していた³⁸⁾ことが挙げられる。ポッジの報告書の中でも、

表3-1 コッリ大通り周辺地区の土地建物収用
(Poggi, *Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze*, p. 158 を元に作成)

N.	売却者氏名	収用された不動産(m ²)		各収用相当金(リラ)	契約日
		土地	建物		
1	王室所有地	130,670	2,529	105,770.69	1866.11.15
2	カルロ・アレッサンドリ	21,676	491	71,796.02	1866.9.6
3	オラツィオ・ポーヰ	39,643	150	49,589.14	1866.11.9
4	ピエトロ・モレツリ	68,164	710	90,540.51	1866.12.4
5	ピエトロ・モレツリ	9,699	-	13,571.36	1870.12.24
6	ミケーレ・カバッチ	35,490	750	22499.01	1869.10.1
7	ピエトロ・ファルディ	10,868	-	20,600	1869.10.5
8	ロザリア・ピアッティ	6,800	-	11,913.30	1870.5.3
9	テイト・チャンテツリ	43,560	-	39,000	1870.8.29
10	カルロ・チェッキ	16,199	-	28,870.25	1869.8.20
11	クリストフ・シシャール／クラリー・シシャール	3,456	-	4,421.06	1872.12.26
12	エンリケッタ・トラヴェルシ	1,454	-	1,780.46	1871.8.22
13	アントニオ・チゼーリ	-	336	2,854.23	1870.6.28
14	マリアンナ・バルゼッキ	8,457	-	31,850.81	1870.10.25
15	ルイジ・ジョヴァンニーニ	15,340	-	14,250	1869.6.18
16	デッラ・ロツビア・ヴィヴィアーニ	1,810	-	2,999	1869.6.18
17	マルゲリータ・フルツリーニ	10,063	-	9,733.65	1872.11.18
18	ロモロ・ロモツリ	415	-	1,817	1870.7.8
19	ガリレオ・レデツティ／ルイザ・レデツティ	3,240	-	5,446.56	1871.5.29
20	アダモ・レデツティ	1,044	-	1,029.82	1871.6.12
21	ガリレオ・レデツティ他	1,210	-	1,371.88	1875.1.25
22	レオナルド・チューティ他	1,724	-	2,754	1870.10.10
23	バルダツサーレ・マツターニ	2,392	209	25,914.11	1869.6.25
24	バルダツサーレ・マツターニ	壁の補償金		5,494.60	1871.2.25
25	フェデリゴ・ブツチョリーニ	4,140	-	3,995.25	1869.7.13
26	エリザベッタ・ヴェントゥリーニ	3,747	-	4,972.79	1870.12.27
27	フィリッポ・コンタリーニ	7,055	-	10,354.09	1870.12.17
28	ジョヴァンニ・ルマーキ	10,355	-	13,503	1870.10.14
29	トマーゾ・モンツォーニ伯爵	46,446	1,386	179,471.67	1870.7.4
30	王室所有地	703.17	1,134	70,000	1867.6.20
31	レオポルド・バツカツチ他	1,440	654	23,001.61	1873.8.9
32	ガエタノ・ジョヴァノツチ／エミリオ・ジョヴァノツチ	4,458	-	34,600	1872.1.13
33	ガエタノ・ジョヴァノツチ／エミリオ・ジョヴァノツチ	1,491	-	12,721	1874.6.23
34	ルイジ・ミニアーティ	7,500	-	6,000	1871.9.2
35	フェルディナンド・モンツォーニ	4,542	-	3,653.48	1871.8.1
36	コスタンティーノ・モロッキ	陸橋の地役権	-	1,968	-
37	エレナ・モンツォーニ	"	-	3,013.50	-
38	ジローラモ・アリナリ	水源の地役権	-	13,500	1873.10.27
39	雑費	-	-	982.98	-

王室所有の農地買収には利点があったことが述べられている³⁹⁾。コッリ大通り周辺の土地と建物に関する詳細な分析は次稿で検討するが、ここでは一例を挙げる。同表から、王室所有地（表1-N.1）とそれに隣接するピエトロ・モレッリ氏の土地⁴⁰⁾（表3-1-N.4,5）を比較すると、面積が2倍の土地と3倍の建物がほぼ同額で収用されていることがわかる。また、土地のみを収用した項目を取り出して土地単価を算出すると、約0.8~8.5 リラ/㎡なのに対して、王室所有地は建物を含んでも0.79 リラ/㎡となっている。無論、土地と建物の査定額の内訳は定かでない上、農地の場合は収穫量などによって査定額が変動し得るため正確な比較とは言えないが、少なくとも王室所有地は他の土地所有者の土地に比べて、単価が非常に低く設定されていたといえるだろう。

ここでふたたび図2を見ると、コッリ大通りの路程は、点在していた既存建築物を避けるように計画されていることがわかる。ポッジはアルノ川右岸の計画において、財源不足や既存建築保存などの理由で建物を収用する部分が最小限となるよう配慮していた⁴¹⁾ことから、左岸においても同様の配慮をしていたと考えられる。

このように、アルノ川左岸の丘陵地帯が広範囲にわたる都市拡大部の対象となったのは、王室所有地が利用可能であったという地形的条件以外の前述の条件が備わっていたからこそであった。また、工費を抑えるために建物の収用部分が最小限となる路程を採りながら、既存の風景を再編集しようとしたと考えられる。

4. 風景をつくる丘陵地帯の大通り

次に、首都にふさわしい美しい風景をつくるための手段としてのコッリ大通り計画における技術的側面について考察した。ポッジは報告書の冒頭で、「(前略) フィレンツェを取り囲む、魅力的な小さな家々や歴史的でモニュメント性のあるヴィラがある心地よい丘に、容易に利用できる快適で品格のあるアクセスを与える日が来ることを想定していた(後略)」と述べ⁴²⁾、それは新しいイタリア王国の政府の拠点のための土地と建物を用意するためであったとしていた⁴³⁾。また、ポッジは報告書の中で終始、コッリ大通りを首都にふさわしい緩やかで優雅な道にすることを強調し、その傾斜を平均4%以下にすることに言及している。同報告書の別の項でも、大通りの「視界を遮らないよう」「美しい眺めのため」といった記述が多く見られる⁴⁴⁾。ここで注目したいのは、ポッジが大通りを交通インフラとしての役割に加えて、美観をつくる装置として捉えていることである。さらに注意したいのは、ポッジの述べる風景とは、ミケランジェロ広場から得られるフィレンツェ全体の眺望のみではなく⁴⁵⁾、大通り全路程のどの地点においても、近景・遠景の両方の美観を意識していたことである。では実際、どのように眺望に配慮していたのだろうか。

コッリ大通り計画進行中、上院議員 G. パズリーニの助言に基づき⁴⁶⁾、丘陵地帯の土

地所有者向けに、計 315 項の手書きの規定書『コッリ大通り 地役権と同大通りの保全に関する配置』“Viale dei Colli. Servitù Attive e Passive e Disposizioni Necessarie alla Conservazione di quel Passeggio”⁴⁷⁾が作成された。これは、コッリ大通り周辺地区の住居地区に割り当てられた各土地区画における地役権のありかたを示したものである。その他、各敷地と住居建築に関しての高さの規制、大通り隣接地の鉄柵の設置義務、大通りからの後退距離などを詳細に指定している。これによって、都市部とは全く異なる、道が湾曲した箇所における遠景が確保された。また、鉄柵を設けることで大通りへの跳び出しが制限されると共に、各戸のプライバシーが確保された。

この規定の特徴は、大通りに面した土地所有者全員に対して一律でなく、各土地所有者へ別個に設定していることである。これはフィレンツェという都市がパリやロンドンほど大規模でなかったからこそ可能であったと考えられる。

コッリ大通り全路程からの建設当初の眺望を確認できる史料は残っていない。そこで現状調査から確認すると、既存の道であるサン・レオナルド通り（図1-②⑦）、デッレルタ・カニーナ通り（南側はパツ・アッレルタ通り）（図1-④⑧）、サン・ミニアート・アル・モンテ通りを境に、異なった眺望が開けていることがわかる。前者2つの通りの間は農地の風景（図1-③）、後者2つの通りの間はフィレンツェ都市部の風景（図1-⑤）が広がる。すなわち、この既存の道を挟んで計画されたガリレオ広場とミケランジェロ広場で十分な高度をとり、標高の高い地点にあるベルヴェデーレ要塞から離れた南の山を通る路程を採ることによって、眺望を獲得することができたのである。

コッリ大通り竣工直後の 1872 年に出版された歴史家 G. カロッチの小冊子では、ガリレオ広場（図1-①）からベッロズグアルドの丘、オリヴェート山⁴⁸⁾、アルチェトリの丘、モンティチの丘⁴⁹⁾が広がり、そこに点在するヴィラや住居が見渡せると述べられている⁵⁰⁾。また、ティヴォリ庭園（現在は廃園）の写真史料⁵¹⁾から、植樹された木々がまだ低く、上記の風景が広がっていることが確認できる。このことから、ミケランジェロ広場からのみならず、ガリレオ広場からも眺望を獲得できる場所として計画されていたとも考えられる。

このような丘陵地帯からフィレンツェの都市部全体や背後の丘陵地の眺望が得られる地点の設定は、近代以前から行われていた⁵²⁾。しかし、それとコッリ大通り計画における風景の構築の決定的な違いは、大多数の人が移動時に獲得できる風景を考慮したことであった。

このようなシーケンス的風景が可能になった背景には、均質な勾配を計画するための近代的技術の使用があった。1840 年代ごろに持ち運びできるよう改良され、1860 年代にはヨーロッパ諸国で普及していた水銀計とアネロイド計⁵³⁾が導入されたのである⁵⁴⁾。この持ち運びが容易な測量機器の登場によって、丘陵地帯でのより正確な測量が可能となった。実際に、ポッジの事務所で測量されて作成された詳細な図面は、現存する図面だけでも 150 枚を超える⁵⁵⁾。このような作業に基づいて、ポッジが強く望んだ均質

な緩勾配をつくりだすことが可能となったのである。

小結

コッリ大通り建設の実態に関して以下の4点に集約させることができる。

1. コッリ大通り建設は、近代都市に求められていた交通インフラとしての快適さ、大量輸送という新しい機能をもった乗合馬車という手段に対応していた。
2. コッリ大通りは、都市部でも問題だった洪水対策が考慮された路程が採られ、飲料水や散水の問題を近代的技術によって解決した上で実施可能となったものであった。
3. コッリ大通りは、イタリア国家統一の動きの中で利用可能となった王室所有地を収用したことで、財源が厳しい中でも広範囲にわたる大規模な道路が実現できた。また、既存建築を避ける路程として工費を抑えて風景を再編したものであった。
4. コッリ大通り建設計画には、遠景のみならず、近景においても美しい眺望の提供を実現する手段として、規定書の存在があった。

ジュゼッペ・ポッジのフィレンツェ拡大事業は、1871年のローマ遷都によって引き起こされたフィレンツェ市の破産などが原因で、竣工後、その贅沢さから批判を浴びた。しかしながら、コッリ大通り計画は、歴史的都市の破壊を伴う近代都市改造に懐疑的であったG. カロッチが唯一賞賛した計画でもあった。G. カロッチの記述で描き出されているのは、フィレンツェの都市文化をつくりだしてきた周辺の山々であり、都市を代表する歴史的建造物の姿である⁵⁶。フィレンツェでも都市の近代化によって、建築投機が激化し始め、そこで引き起こされる乱開発を危惧していたポッジは、開発以前に美しいインフラをつくっておくことこそが、個々の営利を超えた魅力的な丘陵地帯をつくりだすことに繋がると考えていた⁵⁷。

アルノ川の洪水に関して付け加えるならば、建築物や美術品などの多くの文化遺産に甚大な被害をもたらした、フィレンツェが修復都市となるきっかけとなった1966年の記録的な大洪水まで、このポッジの洪水対策はおよそ100年の間、都市を守り続けた。この洪水で首都時代の堤防は決壊してしまったが、コッリ大通りとミケランジェロ広場はアルノ川左岸の避難場所として機能することとなったのである⁵⁸。

このように、コッリ大通り計画において、ポッジは環状道路建設という土木技術や経済効率が最優先される事業のなかにあっても、美観を重要視し、丘陵地帯における大通り計画の最大限の効果を引き出そうとしていたといえるだろう。

注釈

- 1) Poggi, G., Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze, Tipografia di G.Barbèra, Firenze, 1882, p.10.
- 2) Detti, E., Firenze scomparsa (con la collaborazione di Tommaso Detti), Vallecchi Editore, Firenze, 1970.
- 3) Borsi, F., La capitale a Firenze e l'opera di Giuseppe Poggi, Colombo Editore, Firenze, 1970.
- 4) Morolli, G., La città giardino di Giuseppe Poggi. Dal “Quartiere di Collina” al “Viale dei Colli”, in 《Il disegno della città: l'urbanistica a Firenze nell'Ottocento e nel Novecento》, catalogo della mostra, Alinea, Firenze, 1986.
- 5) Corsani, G., Giuseppe Poggi e il Viale dei Colli a Firenze, in 《Storia Urbana Rivista di studi sulle trasformazioni della città del territorio in età moderna》, 16, Numero 60, luglio-settembre 1992, pp. 37-58.
- 6) Agostini, E. M., Giuseppe Poggi: la costruzione del paesaggio, Edizioni Diabasis, Reggio Emilia, 2002.
- 7) Paolini, C., Il sistema del verde: Il viale dei colli e la Firenze di Giuseppe Poggi nell'europa dell'ottocento, Edizioni Polistampa, Firenze, 2004.
- 8) Poggi, op. cit., pp. 10-11.
- 9) Pesci, U., Firenze capitale, R. Bemporad & Figlio, Firenze, 1904, pp. 63-64.
- 10) ベルヴェデーレ要塞からサン・ミニアート門にかけての傾斜。
- 11) Poggi, op. cit., p. 152.
- 12) ボーポリ庭園沿いの市壁の箇所。
- 13) Ibid., p. 134.
- 14) 同 CTR 都市図をもとに作成し、検討した。
- 15) 標高約 100m 地点に建設された要塞で、フィレンツェの中心地全体が見渡せる。
- 16) Ibid., p. 4, p. 132.
- 17) ラスロー・タール (野中邦子訳) : 『馬車の歴史』, 平凡社, 1991. pp. 422-453.
- 18) フィレンツェでは 1869 年の時点で 518 台のフィアクル馬車が走っていたとされる。Fanelli, G., Firenze Architettura e città, Vallecchi editore, Firenze, 1973, p. 431.
- 19) タール, 前掲書, pp. 426-427.
- 20) Carrocci, op. cit., p. 6.
- 21) Archivio Storico del Comune di Firenze, fondo Viale dei Colli. (2012 年 9 月時点で整理番号未処理)
- 22) Poggi, G.(per cura dei nipoti), Ricordi della vita e documenti d' arte, R. Bemporado e figlio, Firenze, 1909. 建築作品、未実施作品を含む自作をまとめた自伝的著書。pp. 305-441 には、ポッジが所蔵していた書簡のうち重要なものが収録されている。この中で、1845 年にイギリス・フランスを旅行した際に現地から送られた書簡から、訪問都市の印象や、イタリアの都市がどうあるべきかという思案が垣間見れる。また、ポッジがパリの地図やブルヴァールの透視図、ウィーンのリンクシュトラッセが見て取れる鳥瞰図などを所蔵していたことから、フィレンツェの研究者の間でもパリやロンドン、ウィーンの影響を受けているとされている。Manetti, R., Le città del Poggi, in 《Giuseppe Poggi e Firenze. Disegni di Architetture e Città》, catalogo della mostra, Alinea, Firenze, 1989.
- 23) 拙稿「建築家ジュゼッペ・ポッジによるミケランジェロ広場の形態と機能」, 日本建築学会計画系論文集 2012 年 8 月第 77 巻第 678 号, pp. 1967-1972.
- 24) 橋から南に 2km の地点からアルノ川に注ぐ既存の水路。
- 25) Poggi, Sui lavori..., p. 30. これに加えて、1864 年の増水がフィレンツェ市の洪水への危機感を煽った。
- 26) Losaco, U., Notizie e considerazioni sulle inondazioni d' Arno in Firenze, in 《L' Universo》, n. 5, settembre-ottobre, 1967, pp. 763-774.
- 27) Fanelli, op. cit., p. 389.
- 28) Cresti, C., Cultura e architettura in Firenze capitale, in 《Necropoli》, a. I, 1969, n. 6-7, p28.
- 29) Archivio Storico del Comune di Firenze, amfce 1211. 1843 年に制作された F. ファントツィの都市図の上に、浸水範囲が青色で示されている。
- 30) Poggi, Sui lavori..., pp. 132-134. このことは 1834 年から 1835 年にかけて作成された土地台帳

- Catasto generale toscano (Archivio dello Stato di Firenze 所蔵) のバーニョ・ア・リーポリ市 (Sez. A)、ガルツォ市 (Sez. B) (1865 年以降ではフィレンツェ市の Sez. P, Q にあたる) から確認できる。コッリ大通り計画以前の周辺地区のほとんどが農地又は菜園で、農家が点在していた。
- 31) Ibid., pp. 148-150.
- 32) Cantagalli, A., *Sull' acquedotto fiorentino*, *Monitore toscano*, Firenze, 1862, pp. 1-3. 1862 年に技師 A. カntagalli によって、新たにフィレンツェの東北東に位置する川。フィレンツェから約 8km 東地点でアルノ川と合流するシエーヴェ川から、飲料水のための大規模な引水が計画なされた。これは 1871 年の市議会で延期決定された。
- 33) Ibid., p. 148.
- 34) Raffaele Canevari, 出所不明。1876-1880 年までフィレンツェ建築家・技師学会の会員。1870 年にフィレンツェ王立美術学校で「名誉会員」となる。1878 年にローマへ移る。
- 35) Luigi Del Sarto (?-1882) フィレンツェ生まれの技師。フィレンツェ美術学校卒業。1837 年に水系道路の技師隊の監督候補者として選ばれる。フィレンツェ以外の都市でも技術顧問を務め、1852 年にはフィレンツェ市技術局の顧問技師となり、ヌオーヴォ・ルンガルノ通りやカッシーネ公園付近の新住居地区の整備に携わった。この後、フィレンツェ建設局の局長となり、1876 年にはフィレンツェ建築家・技師学会の奨励委員、1877 年から 1878 年までは評議委員を務めた。フィレンツェ首都期前後の都市改造計画では、パンツァーニ通りとチェレターニ通りの拡幅 (1862 年)、マリオ・マツナイア新住居地区計画 (1862-64)、フィレンツェ中心地再整備計画 (1866 年)、カラリア橋・グラツィエ橋拡幅 (1866-73 年)、フィレンツェの下水道計画 (未実施) などを設計した。Cresti, C., Zangheri, L., *Architetti e ingegneri nella Toscana dell' Ottocento*, Uniedit, Firenze, 1978.
- 36) Poggi, op. cit., pp. 46-54.
- 37) 井口文男:『イタリア憲法史』, 有信堂高文社, 1998.
- 38) Legge 25 giugno 1865, n. 2559. フランスの法律に影響を受けたものとされる。ただし、相違点としては、調整計画等による土地収用を、フランスの法が既存の道路にのみ適応しているのに対して、イタリアの法では新設の道路にも適用できるとしている点にある。岡本詔治『イタリア不動産法の研究』, 晃洋書房, 2006, pp. 50-51 参照。
- 39) Poggi, op. cit., p. 133.
- 40) イタリア国家統一以前はトスカーナ大公国所有地。
- 41) Ibid., pp. 133-134.
- 42) Catasto Generale Toscano, 1834-35, Comunità del Galluzzo, Sez. B, foglio 6. この土地台帳と地図からピエトロ・モレリ氏の所有地が旧トスカーナ大公国所有地と隣接していたことがわかる。
- 43) Poggi, op. cit., p. 134.
- 44) Ibid., p. 4. ...vedeva arrivato il giorno di dare agli ameni colli che circondano Firenze, e su i quali risiedono casini deliziosi, ville storiche e monumentali, un accesso facile, piacevole e decoroso...
- 45) Ibid., p. 132 ...così mi occorre dare in proposito tutte quelle notizie e quei risultati i quali possono chiarire come connesso si ebbe pure il fine di preparare terreni alle fabbricazioni nell' occasione della nuova sede di Governo. 「(前略) こうして新しい政府の拠点準備の機会に、建設地の準備という目的を持つ接続路として、明確であろう結果と報告を私が提出することとなった (後略)」
- 46) Ibid., p. 132. “Solo nel commettere le espropriazioni per alcuni tratti io ebbi in vista di profittare delle belle visuali, e di estendere l'occupazione dei terreni affine d'impedire che i frontisti potessero in più modi danneggiarlo ed imporvi dannose servitù...” 「(前略) いくつかの路程のために土地建物収用を委託する際においてのみ、私は美しい眺望を利とし、また大通り沿いの土地所有者が大通りに損害を与えたり、有害な地役権を課すのを阻止する目的で、土地の占有を拡げるという配慮をした (後略)」 Ibid., p. 137. “In un viale in cui era importante che fosse conservata la visuale, impediti gli abusi, osservati tutti i patti stabiliti...” 「(前略) 大通りでは、眺望の保全、乱用の阻止、すべての契約の遵守が重要であった (後略)」など。
- 47) Ibid., p. 139. “non perdesse la bella visuale che da ogni punto si godeva” 「…それぞれの地点から楽しむことができる美しい眺めを失わないよう…」などからわかる。
- 48) Ibid., pp.134-136.
- 49) Poggi, G., *Viale dei Colli. Servitù Attive e Passive e Disposizioni Necessarie alla Conservazione di*

quel Passeggio, manoscritto, s. n. t., [1876], Archivio Storico del Comune di Firenze, CF7128.

- 50) ベッロズグアルドの丘 colline di Bellosguardo、オリヴェート山 monte Oliveto はフィレンツェのアルノ川左岸の西に広がる丘陵地帯。
- 51) アルチェトリの丘 colline d' Arcetri、モンティチの丘 colli di Montici はコッリ大通りの南に広がる丘陵地帯。
- 52) Carrocci, op. cit., p. 11.
- 53) Raccolte Museali Fratelli Alinari, FBQ-F-000776-0000.
- 54) フィエーゾレのヴィラ・メディチ、ヴィラ・ガンベライア、ポッジョ・ア・カイアーノなど。Zangheri, L., Ville della provincia di Firenze, Rusconi, Milano, 1989. 他参照。
- 55) Middleton, W. E. K., The History of the Barometer, The Johns Hopkins Press Baltimore, The United States, 1964, pp. 398-409. 気圧によって標高を測定する計器。
- 56) Poggi, Sui lavori..., p. 11. コッリ大通りの測量はシメネス観測所の支援を受け、ポッジの事務所にあった技師 P. パスタ主導で実施された。
- 57) Archivio dello Stato di Firenze, fondo Piante Poggi.
- 58) Carrocci, G., Il viale dei colli, Firenze, Tipografia Cooperativa, Firenze, 1872. において、大通りからの眺望、歴史的なヴィラが点在する風景を賞賛した。一方で、フィレンツェの中心地における近代都市改造においては、旧市場付近の大規模な解体、アルノ川沿いの造幣局等の近代以前を象徴する建造物の消失を憂い、多くの著作を残した。(Il ghetto di Firenze e i suoi ricordi, Galletti e Cocci tipografi editori, Firenze, 1886. Firenze scomparsa, multigrafica editrice, Firenze, 1897.など) また、中心地再整備の際、旧市場のヴァザーリが設計したとされる魚のロッジアの保存のため、個人の邸宅に一時移築させた。
- 59) Poggi, op. cit., p.4.
- 60) Regione Toscana Giunta regionale, Caro Arno,, Giunta regionale, 1986.

第4章

市門周辺地区の機能と建築形式の転換

はじめに

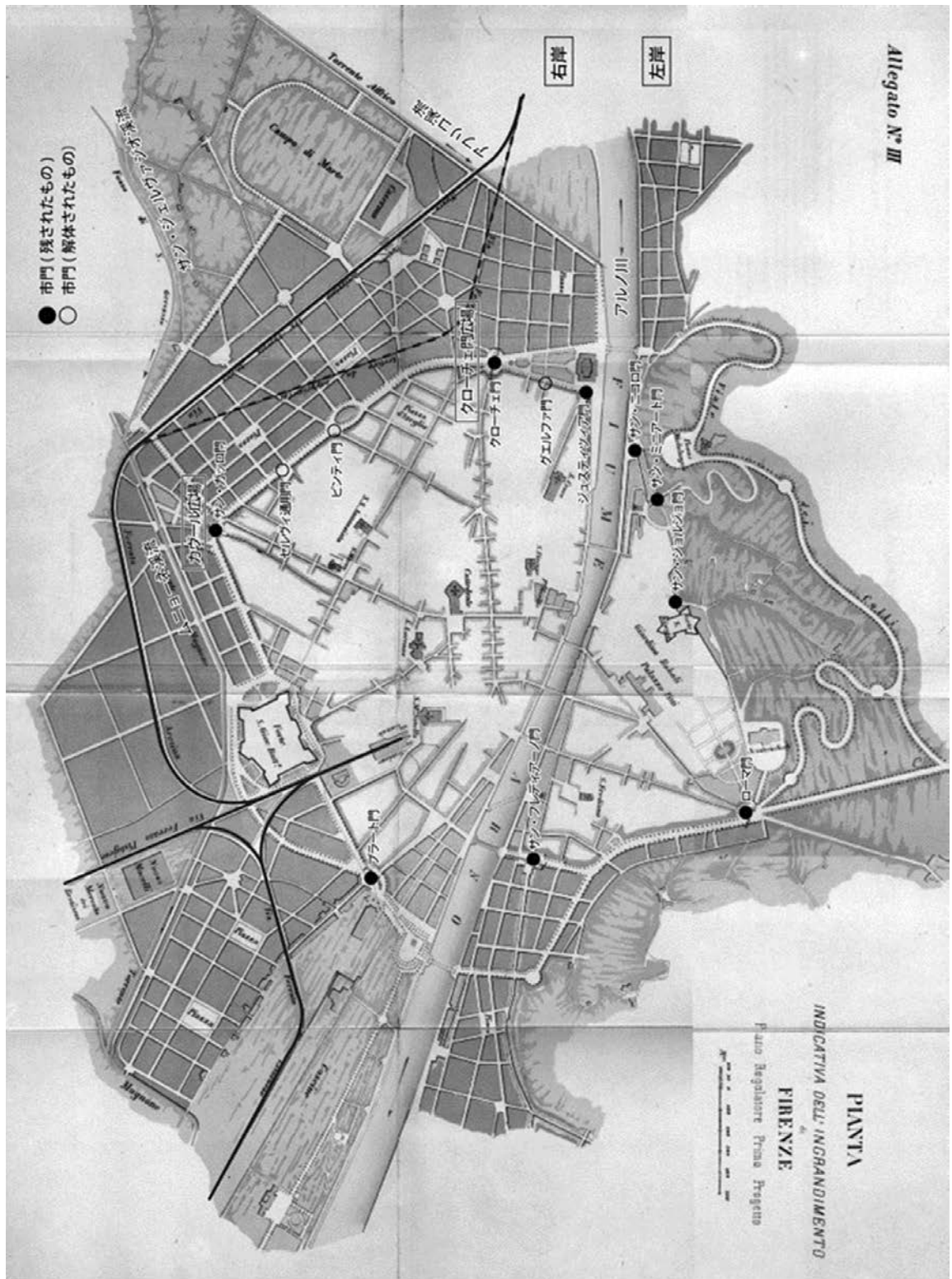
前章までは、フィレンツェのアルノ川左岸におけるポッジの都市改造について分析を行ってきた。本章ではアルノ川右岸に視点を移し、既存の都市部と新たに形成された郊外の境界となる市門周辺地区の改造に関して分析を行う。

市門周辺の整備事業は、ポッジに委託されたフィレンツェ拡大事業の中でも最も大規模な改造である市壁解体と同時に行われたものである。この市壁解体の際に、モニュメントとして9つの市門が保存された。このうち、第一章でも述べたように、プレゼンテーションの資料や報告書の詳細さから、本章では特に重要な計画と言えるクローチェ門周辺のクローチェ門広場（現ベッカリア広場）とサン・ガッロ門周辺のカヴール広場（現リベルタ広場）の整備事業を取りあげている。

クローチェ門とサン・ガッロ門はそれぞれ都市の東側と北側に位置し、前者はボルゴ・ラ・クローチェ通りからアレッツォへ通ずるナツィオナーレ・アレティーナ通りへ、後者はサン・ガッロ通りからボローニャへ通ずるボロニエーゼ通りへ抜ける門となっている。両者とも市門が保存され、その周囲を広場として街区が整備された。クローチェ門広場では長辺が130m、短辺が106mの楕円形が広場の形状として採用され、一方、カヴール広場では、サン・ガッロ門の北側にはロートリンゲン政府時代に建設された凱旋門が市門と縦列するかたちで位置していたため、2つの門が中央に配置されるかたちで、長辺約200m、短辺約130mの長方形が採用された（図4-1）。

これまでのフィレンツェ都市史研究のなかでは、1970年代の都市改造全体を総括したE. デッティ（1970年）¹、F. ボルシ（1970年）²、G. ファネッリ（1973年）³の研究で扱われていた。その後、R. ロッシ（1986年）⁴のアルノ川右岸の環状道路に関する論文や、C. G. ロンビーの論考（2002年）⁵で、ポッジの報告書のなかの証言をもとに、特に計画の意図について明らかにされている。

しかしながら、これらの研究では建築の様式や土地収用に関する記述はあるが、広場の形態の決定要因や、広場の機能と建築物の形式との関係性の分析は断片的である。そこで本章では、広場の周辺街区に採用された都市機能や、既存建築への配慮を確認しながら、洪水対策という土木的な視点から、広場の形態と周辺建築の決定要因を再検討したい。



(図4-1) G. ポッジによる「プロジェクト・ディ・マッシマ」修正案に加筆
(Poggi, G., *Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze*, Allegato N.III)

1 計画の概要とポッジの意図

各広場の整備事業に関しては、ポッジの報告書『フィレンツェ拡大事業』（1889年）に記述されており、その詳細を知ることができる。

市壁の解体とそれに伴う広場の整備と環状道路建設計画は1865年9月7日に市議会で「プロジェクト・ディ・マッシマ」の承認決議と同時に遂行することが決定された。1867年に解体が始まり、約7年の歳月をかけて完成した。市壁解体の最大の目的は、人口増加にともなって必要となった都市拡大のための障害物を除去することであった。

2つの広場の整備計画では、プレゼンテーション用の大規模なパース図が画家N. サネージによって描かれている⁶（図1、2）。実際に広場を建設する段階で、この図に描かれているものがすべて実現したわけではなかったが⁷、計画の初期段階でのポッジが理想とした広場を読み取れる資料といえる。

これらの2つの図に描かれた建築物等や構図を比較してみると、共通点として以下のことを挙げることができる。

1. 丘陵地帯を背景としていること。また、そこに歴史的モニュメントとして近代以前の建築物が描かれている。（クローチェ門広場では、サン・ミニアート聖堂とサン・サルヴァドーレ聖堂、カヴール広場ではメディチ家のヴィラが強調して描かれている。）

ここから、丘陵地帯だけでなく、既存の建築物を新規に構成する都市景観の構成要素として重要視していることが伺える。また、サン・ミニアート聖堂とサン・サルヴァドーレ聖堂に関しては、同じ距離にあるものに比べて強調した線で描かれていることから、聖堂をモニュメントとして際立たせようとする意図があったことがわかる。

2. 広場に2つのモニュメントが対に見える構図で描かれている。古い建築物を手前に描いていることによって、新しい建築物が正面を向いているように描かれている。

クローチェ門広場では、新しく計画していた公共浴場を奥に描くことで、本来、東西南面を正面としていたクローチェ門の正面が南北方向へと回転しているようにみえる。また、カヴール広場の凱旋門は、本来、ウィーンからくるロートリンゲン家を迎えるために建設されたため、北側が門の正面となっているにもかかわらず、パース図では南側から描かれることによって、北側の正面性が薄れている。

このように、既存の建築物と新しい建築物を対峙させることで、新たに建てられる建築物の首都のモニュメントとしての近代性を強調しているのではなかと考えられる。

3. 近代的要素が背後に入るように描かれている（図4-2の④、⑤、図4-3の②、③）。

鉄やガラスといった新しい素材による建築物やガス灯などを同時に描くことで、技術的な近代性を示した計画とすることが意図されているのではないかと考えられる。

4. 馬車と徒歩の人が混合で通っている様子が描かれている。

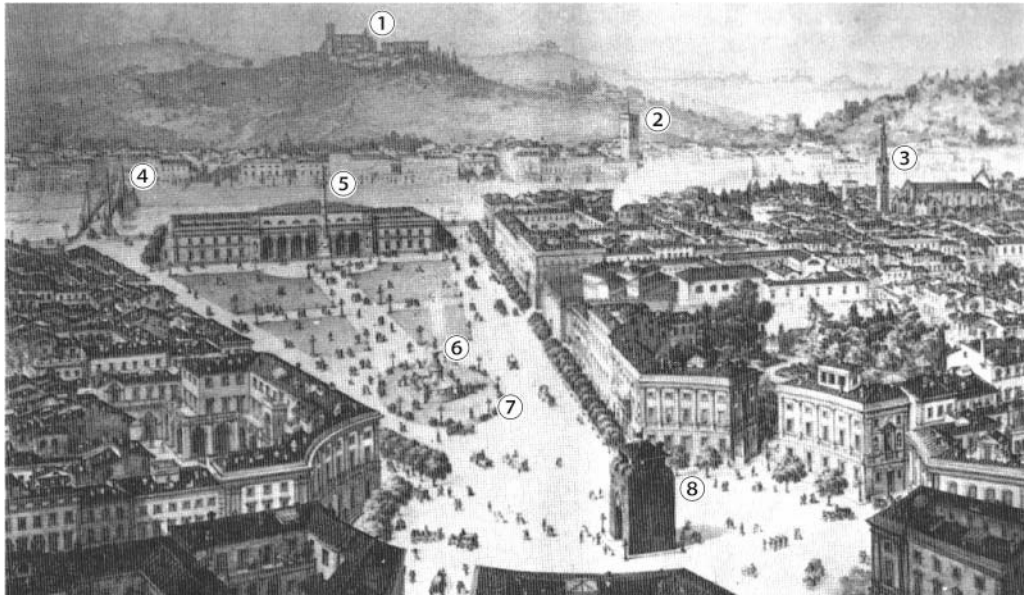
徒歩でも訪れることができる場所であり、人がまた留まっている様子が描かれていることから、馬車のためのみの道路や広場ではない、広場の使い方が示唆されている。

以上のことから、広場計画のパース図から読み取れるのは、約500年もの長期間にわたって都市機能を果たしてきた馴染みの建物を、周辺の街区のつくり方によって新しいものに見えるよう、かつ既存の建築物を対比的に描くことで、新たに建てる建築物の新規性、近代性をより強調して設計しようとしていることである。市壁が解体された跡に単体の市門を残すという手法をとることで、市壁が取り払われたことがより強調されている。

また、市門の正面性を変化させることで、都市の軸性を新たに設定しようとしていることが指摘できる。パース図で描かれたように、クローチェ門はもともと東西に正面を持っていたが、環状道路の焦点となることによって、南北方向にも正面をとることとなった。これはサン・ニコロ門に正面性を持たせるような装飾をポッジが計画していることから、市門の側面に正面性をもたせる手法が考えられていたことがいえる⁸。また、「市門は近代の象徴でなければならない」⁹とポッジが述べていることから、既存建築を単に過去のものとして保存するのではなく、新しい時代の建築物として再生させる意図があったといえるのではないだろうか。

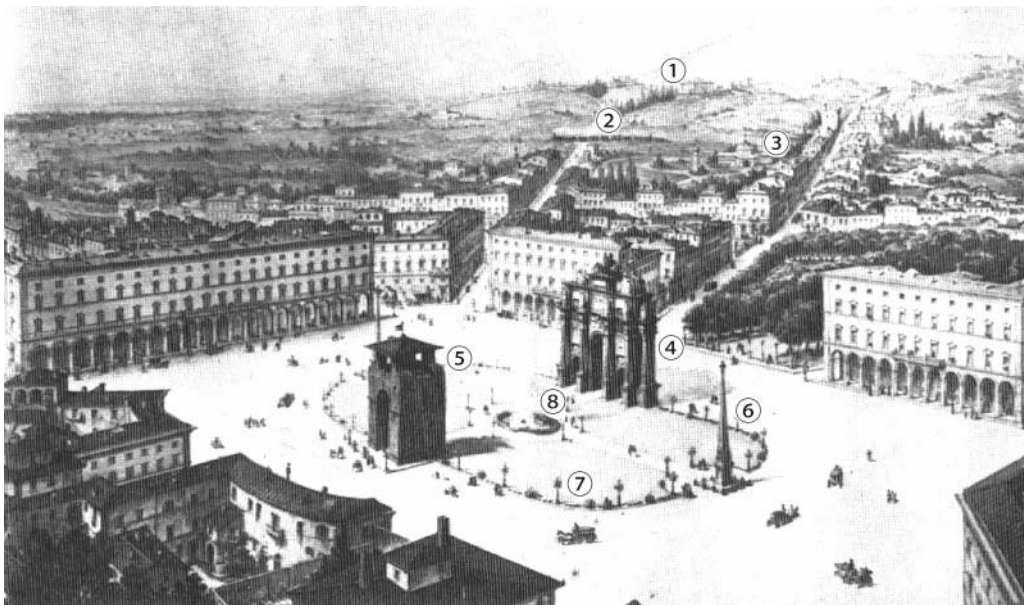
この既存のものを利用して新設のものを際立たせるという手法が、ポッジの意図した近代性を強調するための手法のひとつであったといえるだろう。それは、建設当時の機能や様相を保護するといった消極的な保存の仕方ではない、より高度な保存方法であると同時に、先進的な都市設計の手法であったといえるのではないだろうか。

では、このような効果を最大限の持たせるため、具体的にどのように広場の形態が決定されたのか、次項以降で詳細に検討を深めていきたい。



①サン・ミニアート聖堂とサン・サルヴァドーレ聖堂 ②サン・ニコロ門（1284～1333年市壁建設時） ③サンタ・クローチェ聖堂 ④鉄製吊橋（サン・フェルディナンド橋） ⑤公共浴場（ポッジ設計、未実施） ⑥オベリスク（未設置） ⑦ガス灯 ⑧クローチェ門（1284～1333年市壁建設時）

（図4-2）クローチェ門広場の整備計画完成予想図
（画家 N. サネージ作, AMFC n.3895, 740×1010mm, 1864年頃）



①メディチ家のヴィラ（15～18世紀） ②鉄道（1850-66年） ③蔬菜園芸庭園（1880年、建設予定） ④凱旋門（1737年） ⑤サン・ガッロ門（1284～1333年市壁建設時） ⑥オベリスク ⑦ガス灯 ⑧噴水

（図4-3）カヴール広場の整備計画完成予想図
（画家 N. サネージ作, AMFC n.3895, 740×1010mm, 1864年頃）

2 広場の機能

次に、広場の交通の要衝としての機能に着目して、形態決定の要因について分析したい。

クローチェ門広場の計画では、コムーネに提出された計画案が複数あった。採用されたA案（図4-4）と比較して不採用となったB案（図4-5）を見ると、クローチェ門周辺の街区は既存のまま維持され、環状道路は鉄橋の端に向かって市門の外側を迂回していることがわかる。この計画図から、初期段階で最も重要視されていたのは、広場整備よりも環状道路を左岸にスムーズに接続させることであったことがわかる。しかしながら、不採用となった別案を見ると（図4-6）、クローチェ門からアルノ川にかけて三角形の街区が計画されているものの、東側の道路は鉄橋に直には接続されていない。そのかわりに東側の新たに建設される住居地区が直角グリッドに割り振られている。ここから、新たな住居地区の街区形状は直角グリッドで分割するという案がもともとあった可能性が示唆される。

環状道路は、パリのブルヴァールが参照され、その道路幅は歩道と並木を含んで約40～50mで、この広い道路幅を保つことが重要視されていた¹⁰。このため、クローチェ門周りの円形空間の南側をアルノ川方面へ2本に分岐させるには、西側の都市部の既存建築の解体を最小にする半径の円では、2本の道路の合流地点が重なり合ってしまう（図4-7）。そこで、東側へ円形空間を広げて微妙な楕円とすることで、2本の道路をそれぞれ広場に接続させるという解決法をとっている。ここで円形に対する市門の位置に注目してみると、楕円の中心と市門の中心は重ならないことがわかる。市門は環状道路のパスペクティブの焦点とすることが意図されていた¹¹にもかかわらず、正確にはその焦点とはなっていない。そこで考えられるのは、楕円にすることで増加する土地建物収用箇所を、都市内部ではなく土地収用が比較的容易な市門の外側の部分を当てるためであろうということである。これは同時に、都市内部に比べて状態の良好でない建築物を新たに作りかえる¹²ことを企図していたということであろう。

次に、カヴール広場ではクローチェ門広場で採用された円形ではなく、長方形が採用された理由を考えてみたい。その北側のラインは既存の花壇¹³に合わせていることが図面から読み取れるが（図4-8）、仮に、カヴール広場の2つの門の中央から花壇の南面の距離を半径として円形を描くと、ほぼ同じ面積の建物を解体することになり、建物の収用条件は同じといえる。また、環状道路の接続に関しても、2つの門の中央が焦点となるように配置することは可能である。ただし、新たに計画された住居地区は、環状道路とムニョーネ川、鉄道を基準にグリッド状に計画されているため、カヴール広場は東西両側の住居地区へのアクセスを接続せねばならない。このため、図のような副次的な道路が広場に接続されるように長方形が採用されたと考えられる。ポッジの報告書でも、「古い道も新しい道も広場を介して接続されるようにした」¹⁴と述べていることから

も、都市部の既存の通りと新設の通りを結ぶノードとなるよう、広場を機能させる意図があったといえる。

しかし、カヴール広場の2つの門は、厳密には広場の中心には位置していないことがわかる。図4-8をみると、凱旋門から北側の街区ライン (a)、14世紀の市門から南側の街区ライン (b) を比較すると、後者のほうが短くなっていることがわかる。(a)と同じ長さをとった場合に必要となる南側の建築物の解体を回避した結果であると考えられる。

一方、クローチェ門では、長方形にすることによって解体すべき建物が増えてしまうことからいえる。クローチェ門広場に関してポッジは「解体を縮小すればするほど通りを接続するのが容易になった」と述べていることから、解体箇所を最小にする形態としているとわかる¹⁵。

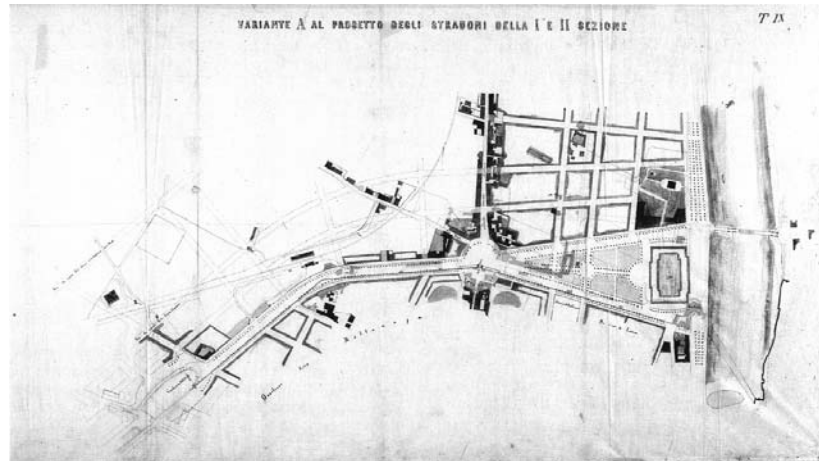
しかしながら、単に都市部と郊外を接続させるだけならば、土地建物収用をとまなう広場を採用する必要はないのではないだろうか。ここで、広場整備以前の市門周辺をポッジがどのように認識していたかに着目してみると、報告書のなかで市壁解体以前のクローチェ門の内部と外部の空間をそれぞれ「内部の不規則な小広場」「外部の主要な非常に不規則な広場」¹⁶と呼んでいることから、このエリアがもともと広場として使用されていたことがわかり、この広場の建設は、ポッジが従来の広場が近代的な意味をもった広場へと更新することを意図した結果であったといえる。

また、この2つの広場の機能に関して、緑化しているという特徴を挙げることができる。カヴール広場では、「2つのモニュメントを繋ぐ、樹で囲まれた花壇、オベリスク、噴水を配置した」¹⁷と述べており、図面上で緑に塗られた箇所は花壇であることがわかる。また、クローチェ門広場の図面でも同様の表現から、三角形の空間に計画された幾何学の緑地はおそらく花壇を想定していたと考えられる。

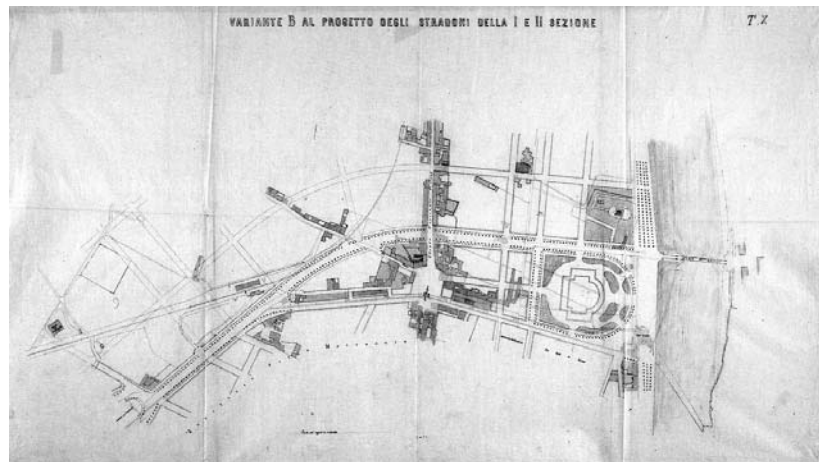
近代都市改造の重要な手法のひとつとして、ロンドンのリージェンツ・パークやパリのビュット・ショーモンのような公園の設置が挙げられる。カヴール広場とクローチェ門広場も都市部と郊外の境界部に位置していることから、同様の機能が付帯されてもよいはずである。しかしながら、これらの広場は上記の公園のように敷地が鉄柵などで囲われることはなく、またフィレンツェ内の個人所有の庭園のように閉ざされたものでもなく、前述したパース図(4-2、3)から読み取れるように、人々があらゆる方向から広場を通して行き交い、留まることができる場所である。ポッジの報告書では、この広場の緑化に関する記述は特に見当たらないが、ポッジの他の建築作品(巻末資料)の中での庭園の設計でみられたようなピクチャレスクなものとは異なっている。つまり、カヴール広場とクローチェ門広場で計画された広場は、従来の都市部の広場の使い方の延長にあるものであり、広場に植樹することで都市公園としての近代的要素を付帯させようとしていたと考えられるのである。

このように、ポッジの広場計画は、全く新しい使い方の都市機能を都市部と郊外の間

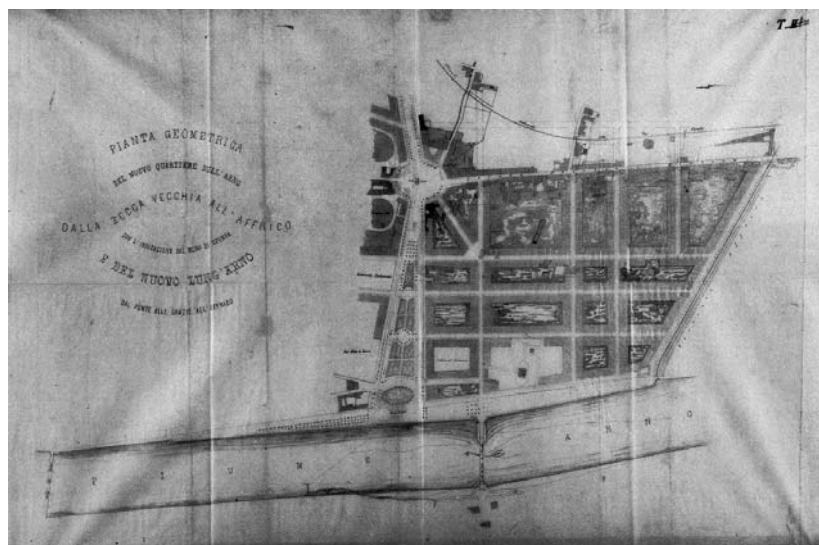
を分断するかたちで挿入するのではなく、それまでつかわれていた広場の機能を拡張するかたちで、都市部と郊外を繋ぐ役割を持たせようとした結果のデザインであったといえるのではないだろうか。



(図4-4) 『I, II 地区の大通り計画 A 案』(1866年1月19日に採択された案)
(ASF, Piante Poggi, 118, 920×1740mm)



(図4-5) 『I, II 地区の大通り計画 B 案』
(ASF, Piante Poggi, 118, 950×1600mm)



(図4-6) 『造幣所からアフリコ川までのアルノ川沿いの新しい住居地区計画案』
(ASF, Piante Poggi, 118, 1540×1050mm)

3 既存建築物の取捨選択

解体される以前の市門と市壁が持っていた重要な機能として、徴税範囲を確定する場所であったことが挙げられる。都市改造以前には市門の外側にはボルゴが形成されており、市場が存在していた¹⁸。サン・ガッロ門の外側には馬屋、倉庫、トラットリア、サービス施設、氷室¹⁹があり、商業用交通の要衝であった。また、曲芸師が芸を繰り広げている姿も見ることができたとポッジの報告書では述べられている²⁰。一方、クローチェ門の外側は豚を管理する場所と市場があった。ここで確認しておきたいのは、近代改造を行う直前のパリの状況とは異なり、市壁の外側に全体に及ぶ広範囲の住居地区は形成されていなかったことである。

次に、軍事的防衛としての機能が挙げられる。ナポレオン戦争の時代に登場した大砲の威力が、市壁を無用の長物として解体の対象とされたのはよく知られるところである。トリノではフランス軍の攻撃によって市壁が崩壊し、市壁が機能しなくなったことが経験として体得されていたが、フィレンツェの場合、実際に市壁が攻撃されることはなかったため、市壁解体は都市拡大のための手法として導入されたと考えられる。

さらに注目すべきは、市壁は洪水時の防衛としても機能していたことが挙げられる。アルノ川や周辺のムニョーネ川、アフリコ川が氾濫した際には、閉門することで都市部を守っていたとされている。これについては次項で詳しくみていきたい。

以上のような機能が、都市改造によって別のものに代替されていくなかで、市門を保存する選択をしている。では、ポッジは市門をどのように保存しようとしたのか。

ポッジによる歴史的モニュメントの保存について記述された小冊子『建築的モニュメントと考古学的遺構の保存について』*Sulla conservazione dei monumenti architettonici ed interessati l'archeologia*²¹をみると、中世の建築物をどのように修復するのかという問題に関して、「どの建物もそれらが属する様式で修復せねばならず、外観だけでなく、また内部構造においても同様である」²²と述べている。この記述と市門の残し方をみると、市門と市壁は別個の構造として見做していることがわかる。また、建築物の修復については、あらゆる修復論を納得した上で実施する必要があると述べ、唯一ヴィオレ・ル・デュクの名を挙げている²³。ここから、ポッジには保存修復の知識もあったことが窺える。パース図にポッジの近代性の表現が読み取れるように、当時の建築物の保存の共通認識をクリアしながら、保存対象を解体・改築することなく、新しい様相を呈するための設計としたのではないかとということが考えられる。

また、カヴール広場ではクローチェ門広場同様に、14世紀の市門を中心にする意図があったことがポッジの報告書に記述されている。しかしながら既存の凱旋門を移動することは工費がかかり過ぎるために現実的でないとし、2つの門を一体のモニュメントとなるよう、樹木で囲われた花壇やオベリスク、噴水を2つの門の間に設けるといった解決策を提示している²⁴。

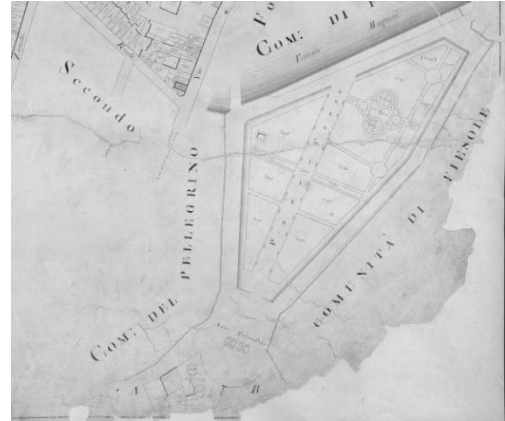
カヴール広場の初期案はパース図にも描かれているが、広場の南面の建物が湾曲している（図4-3、11）。1843年のカタスト地図を見ると、サン・ガッロ門の外側の両脇に氷室があったことがわかる（図4-10、12）。この氷室の湾曲部と広場南の建物の湾曲とを比べると、ほぼ同じ形状であり、氷室の形状を踏襲したかたちを採用したのではないかと考えられる。ただし、氷室の構造物は解体されており、氷室の位置から南側に後退した位置に新しい街区が設定されていることから、構造を利用したものではなく、イメージによる踏襲を意図していたのではないかと考えられる。最終的に実施された街区の広場は、直線となっており、これは、北側の直線と合わせ、広場に面して平行なロジgiaを持たせるためではないかと考えられる。また、その北側のラインが既存の花壇に合わせた位置となっているのは前項でも確認した。

一方、クローチェ門では、長方形にすることによって解体すべき建物が増えてしまうことからいえる。クローチェ門広場に関してポッジは「解体を縮小すればするほど通りを接続するのが容易になったし、センシブルになることもなかった」と述べていることから、解体箇所を最小にする形態としているとがわかる²⁵。

では、解体された箇所は計画上、どのように扱われたのだろうか。クローチェ門広場では、「この広場の建物はあまり価値がない」「不規則な建物を取り除くため」²⁶などと述べていることから、既存建築の価値付けをし、都市改造の際に不規則な建物を取り除き、統制された街並みを構築することを優先しようとした意図が読み取れる。また、サン・ガッロ門の外側の状況については、「状態の悪い建物群は広場に必要なところを占めていて、側面は不潔で醜い。市壁の外側はより貧しい」²⁷と述べており、統一された状態のよい建築物が近代都市にふさわしいものとされていたことが窺える。

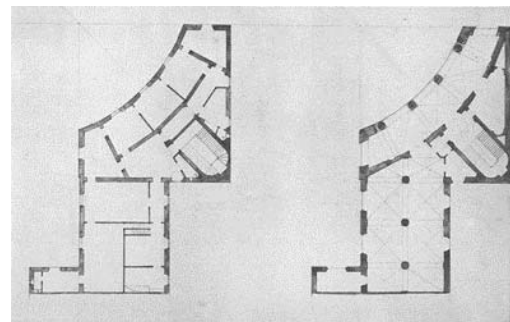
また、市門はすべて保存されたわけではなく、解体された市門のなかで最も価値が高かったとされるピンティ門は、解体の理由としてポッジの報告書のなかで、内外の高低差が激しかった上に構造上の欠陥があったためとしており、状態の芳しくない建築物に関しては保存の対象とはしていなかった²⁸。ピンティ門に関しては、第1章でも述べた通り、隣接していた英国人墓地との関係性においても処置の判断がなされていたことを再確認しておきたい。

クローチェ門広場とカヴール広場には、市場として利用されていたロジgiaが市門の両脇に建設されていた。これらを設計したのは建築家パスクアーレ・ポッチャンティによるものであったが、これらはすべて解体されている。このことは、解体すべき建築物は、構造状態や衛生状態が悪いもののみであったとは言い切れない。やはり、市門を独立させてモニュメントとするという手法が、有効に働く場所と条件が吟味されていたのである。このように、市壁の解体に伴って、既存の建築や都市構造は保存すべきものと解体すべきものが取捨選択されていた。



(図4-9) クローチェ門周辺の1834~35年の課税用不動産登記地図
(フィレンツェ市, B地区, 一部)
(Catasto Generale Toscano, 1834/35, Firenze, n. 21, 22.)

(図4-10) サン・ガッロ門周辺の1834~35年の課税用不動産登記地図
(フィレンツェ市, A地区, 一部)
(Catasto Generale Toscano, 1834/35, Firenze, n. 6)



(図4-11) カヴェール広場に面した南側の建物の一部平面図 (Borsi, F., *La capitale a Firenze e l'opera di Giuseppe Poggi*, Colombo Editore, Firenze, 1970)

(図4-12) 都市改造以前の市壁外のサン・ガッロ門のようす (F.ボルボットーニ作)

4 洪水対策と微地形

市壁の機能であった徴税範囲確定や軍事利用という目的は、国家統一や近代技術の登場によって社会が大きく変貌していくに沿って、新たなシステムを必要としていた。しかしながら、洪水対策に関しては無論、社会の変化とは連動せず、1800年代に入っても周辺の河川は頻繁に氾濫を繰り返していた。1864年の洪水でクローチェ門周辺は1m以上浸水し、損傷したとしている²⁹。では、市壁解体に伴ってどのように洪水時の防衛機能が代替されたのであろうか。

広場建設において、ポッジの報告書では「広場と大通りは元々人の集まる場所だが、洪水対策にはなっていない」³⁰ために対策を講じる必要があるとしているが、その詳細は記述されていない。

そこで、都市における水勾配を把握するために地形のわかる現在の都市図を用いて、アルノ川からクローチェ門広場を通るカヴール広場までの環状道路の標高を読み取り、作成した断面図から市壁跡の環状道路の傾斜を算出した(図4-13)。これをみると、カヴール広場がもっとも高い地点で標高55.0m、クローチェ門広場がもっとも低い地点で標高50.3mで、北から南に向かって緩やかに降下していることがわかる。また、ナツィオナーレ・アレティーナ通りのアフリコ川に接する地点では52.5m、ボルゴ・ラ・クローチェの西端にあたるマツナイア通りで48.2mで、アフリコ川が氾濫した際には都市部に水が流れ込む傾斜となっている。

また、ポッジの報告書では「ナツィオナーレ・アレティーナ通りとボルゴ・ラ・クローチェとの間の緩やかな傾斜を維持しなければならない」³¹としているが、この理由として、アフリコ川から都市部にむかって傾斜が急になると、洪水時に都市部への浸水を促してしまうことを回避するためだと考えられる。

図4-13の、アフリコ川からナツィオナーレ・アレティーナ通り、ボルゴ・ラ・クローチェ通りまでの断面図をみると、クローチェ門広場の部分は両側の道路よりも少し高くなっている。この地盤の操作は、市壁内外の高低差が大きかったという事実から推測できる。市壁解体事業を困難にし、大きいところで3.3mのレベル差があったという記述があり³²、また歴史的に頻発したアルノ川とムニョーネ川、アフリコ川の氾濫によって、市壁の外側に土砂が堆積していたとされている³³。市壁解体の際に、このレベル差を整地する必要があった際に、広場に盛り土をすることで、アフリコ川からの水を堰き止める役割をもたせ、都市部への浸水を遅らせようと意図していたのではないだろうか。

また、洪水時の対策として、排水溝の整備が実施されている。排水溝は都市改造以前から存在していたが、洪水による土砂の堆積によって、洪水時の許容量を大幅に超えていた。また、クローチェ門付近の排水溝は状態が劣悪なため悪臭が漂っていたことが報告書にも記述されている³⁴。

さらに、市壁のもっていた洪水に対する防衛機能は、広場の地盤の操作によってのみ代替されたわけではなく、ムニョーネ川とアフリコ川の護岸工事の根本的な改良の補助的な操作であった。この護岸工事では、堰の設置によって流水速度を遅らせることに成功している。また、アルノ川沿いではパラペットを立ち上げるという方法で、都市内部が浸水しない工夫がなされた。

このように、都市の地盤高さをコントロールする、あるいは河川自体を土木的措置によって治水能力を高めることによって、河川が市壁に代って徴税範囲を確定する境界となり、軍事的機能を持たない新たな都市のバリアとなったのである。

補足1 統合された近代の街並みへ

—「リソルジメントのトスカーナ様式」

このように、両広場の建設は新たな都市機能を果たす計画であり、市壁解体以前の洪水対策を考慮した計画となっており、それぞれの土地に有効な形状である長方形と楕円形が採用されていた。では、それぞれの形状に面した建築物についてはどのようにデザインが決定されたのか。

クローチェ門広場に面した建築物はすべて3層で、入り口が広場に面した形式である。ポッジの報告書では、「2階以上は住居で快適に」³⁵することによって「店舗は大きな窓を持つことができる」³⁶と述べている。この大きな窓とはショーウィンドウと考えられ、商業的要素を広場に持たせようとしていたことがわかる。

フィレンツェの新たな商業地区として設定されたのは、チェレターニ通りやトルナブオーニ通りであったが、ポッジが1862年に提案していた都市部の大通り開切案（序章参照）は、アンティノーリ広場からサンタ・クローチェ聖堂までが大通りとして設定されており、この計画案のパス図には通りに面したショーウィンドウが描かれている。広場のみを商業地区として意図していたというよりも、都市部から郊外に繋がる広場までの通りを商業地区として構想していたのであろう。

一方、カヴール広場に面した建築物はすべて中2階のある3層構造で、すべてにロτζアが設けられている。ポッジの報告書のなかでは広場の「建物群の様式、規則、建築的に便利なようにした」³⁷と述べている。その具体的な箇所の指定は記述されていないが、このようなロτζアが採用され、1階部分に商業施設を入れるため³⁸であったことから、用途に準じる利便性を配慮していたことがわかる。また、改造以前に市門の内側にロτζアが市場として利用されていたことから、このロτζアが新たなスケールで作り変えられたとも考えられる。しかしクローチェ門でも同様のロτζアがあったにもかかわらず、クローチェ門ではロτζアは採用されていない。

もうひとつロτζアが採用された理由として、都市部の改造計画に連動されたことが挙げられる。新しい商業地区の設定において、他の都市で採用された建築言語はミラノに代表されるようなガレリアであった。フィレンツェでも、中心地の再整備の計画案でガレリアの構想案があったが、実際には建設されていない。しかし、後に商業地区として整備されるヴィットーリオ広場（現レプブリカ広場）では西面にロτζアが設けられた。この中心地再整備計画と、実現はしなかったシニョリーア広場のモニュメント化計画では、ロτζアで広場を囲うというミケランジェロがかつて構想したとされる案から引用しており、これらに影響されて、商業施設を入れることとなったカヴール広場に面した建築物に、ロτζアが有効な建築言語として選定されたのではないだろうか³⁹。

このように、ルネサンス時代の建築言語を引用していることは、G.モロッリの指摘するところでもある。モロッリの分析によれば、クローチェ門広場に面した建築物のファ

サードは、ブラマンテのパラッツォ・カプリーニに類似するという。また、水車広場に面した建築物ではアンマナーティのルスティカ積みが採用されたとしている。その他、ポッジの建築作品においても、ラファエロの作品からインスピレーションを受けているのではないかと指摘している⁴⁰。この分析に従うならば、カヴール広場に面した建築物にロτζアが採用された理由として、上記の引用があったと考えてもよいだろう。

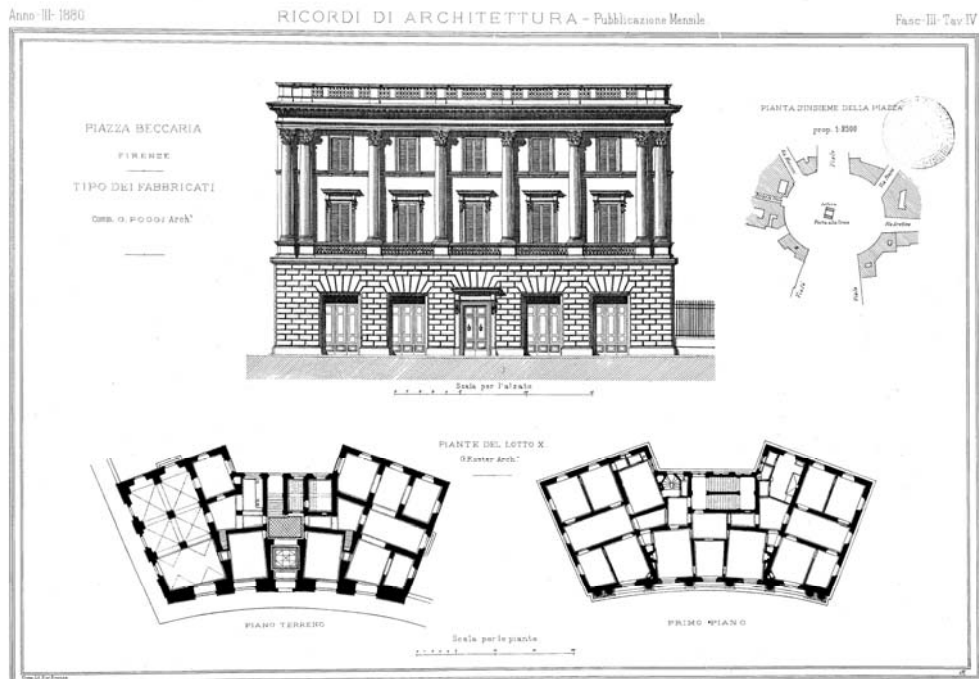
また、これらのルネサンス時代の建築と類似するもののファサードを比較してみると、いずれも細部がより簡素なものとなっていることがわかる。カヴール広場のロτζアの柱はドーリア式となっているが、この理由としてポッジは報告書の中で「最も単純で適切だと考えたため」⁴¹としている。カヴール広場では工費が高くなったことが記述されており、単純な様式にした理由として工費を抑えるためという理由が考えられる。これは、ポッジの都市改造計画の中でのほかの事業でも、たびたび工費を抑える配慮をしていた⁴²ことから推測できる。

カヴール広場の建築物について、ポッジは「リソルジメントのトスカーナ様式」lo stile toscano del Risorgimentoと呼んでいる⁴³。これは歴史上のリソルジメントにかけて、新たな時代に必要となる建築様式の革命として、トスカーナのルネサンスを復興させた様式を提示する意図をもって、このように呼んでいるのではないだろうか。

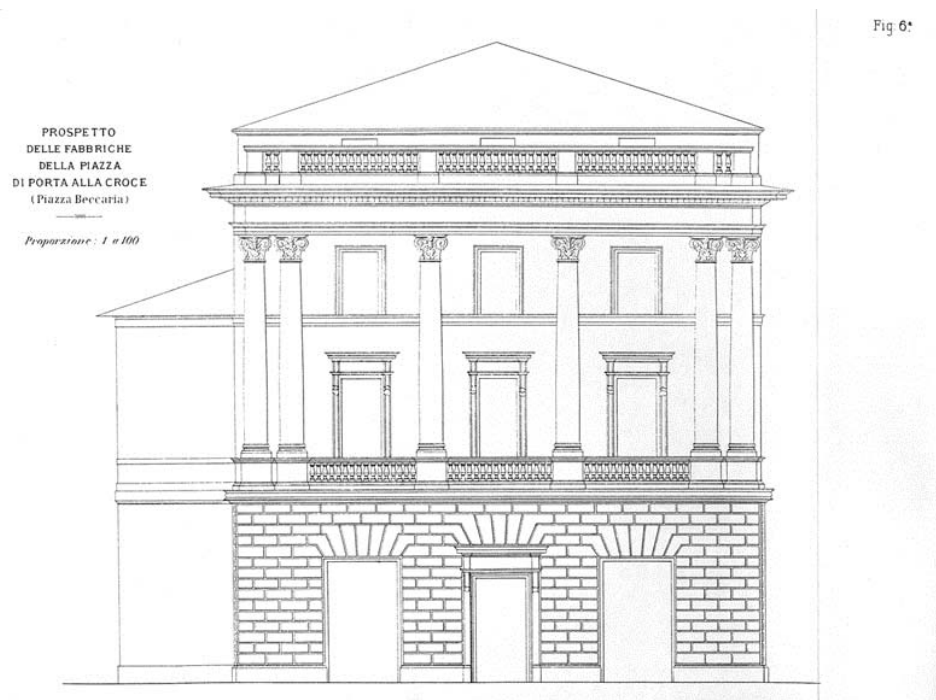
また、「プロジェクト・ディ・マッシマ」のなかで広場に面した建築物の様式を見ると、カヴール広場からクローチェ門広場、水車広場にかけて、引用された建築物の時代が下っていく。そしてグロッタのある坂道を上り、ミケランジェロ広場に到着すると、フィレンツェの中世・ルネサンスを代表するモニュメントが望める構成になっている。

クローチェ門広場では、「建物の所有者に中身の配分においては十分な自由を残したが、外装については私が提示したものに揃えること」とし、それには「1階にピエトラ・セレーナを使うなど」⁴⁴としていることから、実際に設計できる範囲を超えて、素材の指定などで統一感を出そうと意図していた。これには不動産の付加価値をつけて高く売却する目的があったが、その付加価値として考えられていたのが統一された街並みであったともいえる⁴⁵。

このように、イタリア国家統一を経て、新たな建築様式が模索される中、ポッジは広場に面した建築物を自分自身で設計することで、その後建設されていくと想定された環状道路沿いの建築物群のプロトタイプとして、首都フィレンツェとしての建築様式を提示しようとしたのではないだろうか。



(図4-13) クローチェ門広場沿いの建築物1
(Ricordi di Architettura, Fasc. III, Tav. IV, 1880)



(図4-14) クローチェ門広場沿いの建築物2
(Poggi, G., Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze, fig. 6a)

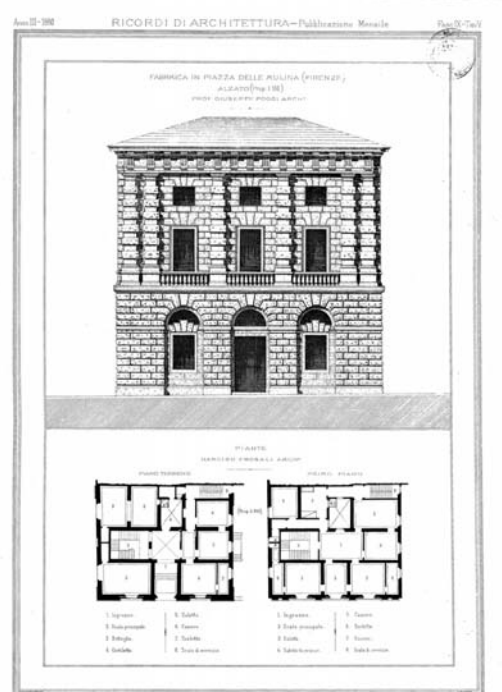
TIPO DELLE FABBRICHE DELLA PIAZZA CAVOUR. (Metà del Lazo di Levante) Prop. r.a. mv.



(図4-15) カヴール広場沿いの建築物ファサード
(Poggi, G., *Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze*, fig.9a)



(図4-16) カヴール広場沿いの建築物
(上：東面，下：南面，2012年筆者撮影)



(図4-17) 水車広場 (現ジュゼッペ・ポッジ広場) 沿いの建築物
(*Ricordi di Architettura*, Fasc.IX, Tav. V, 1880)

補足2 フランス・イギリスとの比較

ここで、都市の近代化として模範となったパリの例を見てみたい。ヨーロッパの多くの都市で、オスマンの影響があることは指摘されている。

フィレンツェでも環状道路を並木とした点や、道路周辺の土地建物の超過収用という点において影響が見られる。また、ポッジがパリに旅行した際に描いたもののなかに、ブールヴァールからサン・ドニ門を描いたものがあり（図4-18）、これを参考にしたのではないかと考えられる。しかしながら、市門周辺の整備事業に関しては、パリのケースと異なっているといえる。無論、他都市との比較は本研究の範囲では扱い切れるものではないが、非常に重要な点であるため、都市図や年代、形態など可能な範囲で比較して相違点のみを指摘しておきたい。

クローチェ門が「小さいエトワール piccolo etoile」と呼ばれているとはいえ、類似するのはその広場の形態のみであり、建設過程は全く異なっている。

パリのエトワール凱旋門が建設された土地は、1784年の徴税市壁が建設される以前の1705年の都市図⁴⁶で既に円形の広場状の空地が確認できる。その周辺は農地と並木道であり、建物が一切建てられていない（図4-19）。凱旋門の建設が開始された1806年の時点で、既に周辺は円形の広場の形状をとっており、徴税市壁も円形に沿う形で建設されている。その後、街区となる建物が建設されていく。さらに、エトワール凱旋門は市への入り口であるヌイイ税関所[barriere de Neuilly]と直線状に位置しているが、接続はされておらず、門としての機能ではなくモニュメントとして建設されていることがわかる。このため、完全な幾何学的配置が可能であったといえるだろう。

パリにおける別の市門を見てみると、市壁に付随していた市門のうち、市壁が撤去された後にも残されたものとして、サン・ドニ門とサン・マルタン門を挙げることができる。両者とも14世紀のシャルル5世の市壁上に位置するもので、現存する市門は、1670年代にこの市壁が解体された時期と同時期に1670年代初頭に建設されたものである。この二つの市門の配置を見ると、両者とも北側の街区が面取りされた形になっているのみで、象徴的な幾何学形態とはなっていない（図4-20、21）。その上、これらの門の周辺の整備は一貫した都市の近代化の段階で行われたものではない。

また、これらのいずれの市門も、周辺街区が変化しても正面性は変化していない。

クローチェ門の計画では、新たに建設しようとしていた公共浴場と対峙させる配置をとることで、南北にも正面性を持たせようとしたのではないかと考えられる。それは、パリの市門すべての平面形が長方形なのに対して、フィレンツェの市門の平面形は正方形であったから可能でもあったといえるだろう。

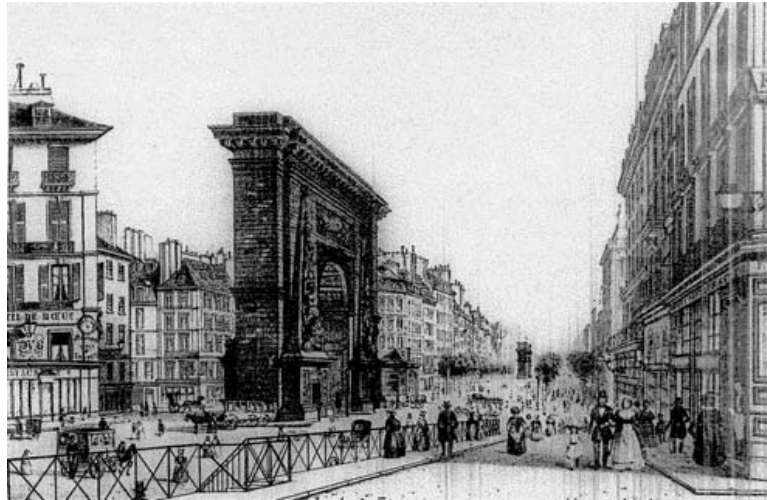
クローチェ門広場では、規模が小さいながらも、接続する大通りの道路幅を確保しようとしたために、楕円形となったと考えられる。

また、クローチェ門広場の建築物に関して、ロイヤルクレッセントを模しているとい

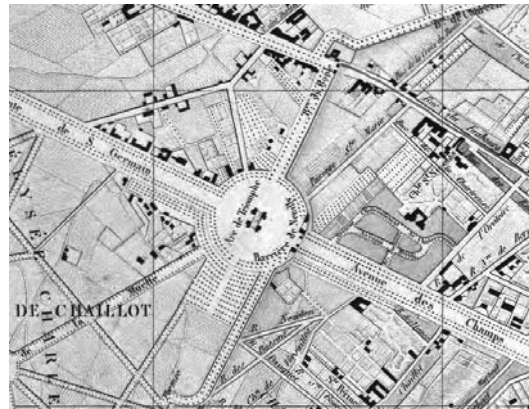
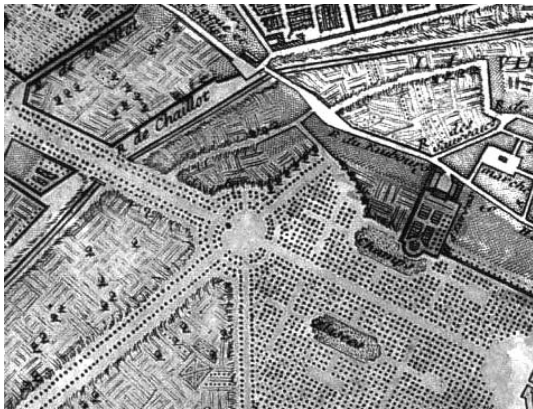
う指摘がある。ファサードのデザインは確かに類似するが、広場の形態はサーカス広場に類似している。ポッジは1845年にイギリスを旅行した際、バースを訪れていることからこのように考えられている⁴⁷。

ここで二つの広場に面した建築物を比較してみると、スケール、プロポーション、平面はまったく異なる。また、用途もバースでは1階部分もすべて住居となっているが、フィレンツェでは1階は商業施設としている。このため、平面形も異なってくる。フィレンツェのケースではルネサンス時代の建築とスケールが近く、階層も3層から4層であり、既存の都市構造の延長線にあたる場所に既存建築を利用しながら建設された結果であるのではないだろうか。

以上のように、ポッジが都市改造計画を設計する以前にパリやロンドン、バースなどを訪れている点や、広場の形状から、都市イメージの模倣があったということは十分に考えられる。しかしながら、ポッジはローマやバルセロナの都市改造のケースのように直接都市計画手法を学んでおらず、また結果としてフィレンツェで行われた都市改造の手法はフランスやイギリスの手法とは全く異なるものであり、フィレンツェの都市改造の具体的手法は、ポッジが既存の都市構造やフィレンツェの建築を踏まえて生み出した独自のものであったことを強調しておきたい。



(図4-18) G.ポッジ所有のパリのサン・ドニ門が描かれた図
(A.C.G.V. Fondo Poggi)



(図4-19) 都市図に描かれたパリの凱旋門
(左図 : *Nouveau plan de Paris et de ses faubourgs*, 1740 右図 : *Plan de ville de Paris*, 1843, 一部)



(図4-20) 都市図に描かれたサン・ドニ門
とサン・マルタン門
(*Plan de ville de Paris*, 1843, 一部)



(図4-21) サン・マルタン門
(1829年)

小結

市門周辺の広場整備の実態は以下の4点に集約させることができる。

1. クローチェ門広場とカヴール広場のパース図では、時代の異なる2つのモニュメントが対峙するように見える構図とすることで、都市の近代化をより強調させようとする意図があった。また、既存の建築や地形を背景に入れることで、近代化の歴史的な背景を表現していた。
2. クローチェ門広場とカヴール広場は、環状線の道路幅を一定に保つために決定され、かつ新たに建設された住居地区への快適なアクセスを確保するための形状が採られていた。また、都市と郊外を結ぶ交通の新たな交通の要衝として、単なるロータリーではなく、従来の使い方から逸脱しない機能をもった広場と、植樹された公園としての都市の近代的要素が融合されたかたちとなっていた。
3. 環状道路の機能上、必要な箇所は既存の建築物が解体されていたが、都市内外での構造上、衛生上の要因から取捨選択されていた。そこでは、ポッジが考えていた首都としてふさわしい統合された街並みを形成する意図があった。
4. 市壁解体によって防衛機能と徴税の境界域が周辺の補強された河川へ代替されたが、地盤の操作によって、広場にも洪水対策としての機能を付帯させていた。

このように、ポッジは新しい都市計画における近代的要素を取り入れながらも、フィレンツェの都市固有の都市改造手法を模索し、実現させていたといえるだろう。

市門周辺地区は、これまで都市部と田園部を区分していた場所から、都市部と郊外の住居地区を繋ぐ交通の要衝として機能することとなり、洪水対策としての機能は徴税の境界とともに外側の河川へと移り、新たな都市のバリアは目に見えない場所で役割を果たすこととなったのである。

注釈

- ¹ Detti, E., *Firenze scomparsa* (con la collaborazione di Tommaso Detti), Vallecchi Editore, Firenze, 1970.
- ² Borsi, F., *La capitale a Firenze e l'opera di Giuseppe Poggi*, Colombo Editore, Firenze, 1970.
- ³ Fanelli, G., *Firenze Architettura e città*, Vallecchi editore, Firenze, 1973.
- ⁴ Rossi, R., *Lo stradone di qua d'Arno*, in 《Il disegno della città: l'urbanistica a Firenze nell'Ottocento e nel Novecento》, Alinari, Firenze, 1986.
- ⁵ Carla Romby, G., *Nello "stile toscano del Risorgimento": la piazza Cavour di Firenze*, in 《Storia dell'urbanistica》, Toscana/VIII, Edizione Kappa, Roma, 2002, pp. 48-56.
- ⁶ カヴール広場のパース図: AMFC n.3895, 740×1010mm、クローチェ門広場のパース図: AMFC n.3892, 740×1010mm。ともに1865年頃。
- ⁷ クローチェ門広場では、公共浴場と前面の緑化された広場は実現されず、またカヴール広場では、絵の手前に描かれた曲面のファサードをもつ建築物は、平面のものに替わって建設された。
- ⁸ ...La causa movente di queste varianti fu l'idea di legar meglio gli Stradoni posti alla destra dell'Arno con quelli della sinistra col mezzo di ponte S. Niccolò. Così lo Stradone della porta alla Croce avrà di fronte lo Stradone dei Colli come quello delle Cascine lo Stradone che passa al piede di Bellosguardo...(Il disegno...p.57)
- ⁹ Poggi, *Sui lavori...*,
- ¹⁰ *Ibid.*
- ¹¹ *Ibid.*
- ¹² *Ibid.*
- ¹³ 18世紀に整備された。
- ¹⁴ Poggi, *Sui lavori...*, p. 118.
- ¹⁵ *Ibid.* p.116.
- ¹⁶ *Ibid.*, p. 114. la piazzetta irregolare interna della città, piazza maggiore esterna irregolarissima.
- ¹⁷ *Ibid.*, p. 118.
- ¹⁸ カヴール広場とクローチェ門広場の両市門の脇に接続していた市場として機能していたロジgiaは19世紀初期に建設されたものだったが、市壁解体の際に取り壊された。
- ¹⁹ 1603年2月3日設置。氷が解けないように温度変化を防ぐために壁が厚くなったとされる。Manetti, R., Pozzana, M., *Firenze: le porte dell'ultima cerchia di mura*, CLUSF, Firenze, 1979, p.101.
- ²⁰ Poggi, *Sui lavori...*, p. 11.
- ²¹ Poggi, G., *Sulla conservazione dei monumenti architettonici ed interessanti l'archeologia*, Tipografia della Gazzetta d'Italia, Firenze, 1876, pp. 22-23.
- ²² *Sulla conservazione...*, p. 20. "...ogni edificio debba essere restaurato nello stile che gli appartiene, non solo in ciò che apparisce, ma anco nella interna struttura".
- ²³ *Ibid.*, p. 21.
- ²⁴ Poggi, *Sui lavori...* p.118.
- ²⁵ *Ibid.*, p.116.
- ²⁶ *Ibid.*, p.114.
- ²⁷ *Ibid.*, p.119.
- ²⁸ *Ibid.*, p.115.
- ²⁹ Poggi, *Sui lavori...* p.114.
- ³⁰ Poggi, *Sui lavori...*, p.114.
- ³¹ *Ibid.*, p. 114.
- ³² Pesci, U., *Firenze Capitale*,
- ³³ Rinaldi,
- ³⁴ *Ibid.*
- ³⁵ Poggi, *Sui lavori...*, p.116.
- ³⁶ *Ibid.*, p. 117.
- ³⁷ *Ibid.*, p. 118.
- ³⁸ *Ibid.*
- ³⁹ Fantozzi Micali, O., *La città desiderata. Firenze come avrebbe potuto essere: progetti dall'Ottocento alla seconda guerra mondiale*, Alinea, Firenze, 1992.
- ⁴⁰ パラッツォ・ファヴァール (1857年) ではラファエロのパラッツォ・ブランコーニオ、パラッツォ・ヴァレリー (1860年) ではラファエロのパラッツォ・カッファレル・ヴィドーニに類似するとしている。ポッジの建築作品については巻末資料を参照。
- ⁴¹ Poggi, *Sui lavori...* p.119.
- ⁴² *Ibid.*
- ⁴³ *Ibid.*, p. 119.
- ⁴⁴ *Ibid.*, p. 117.
- ⁴⁵ 「市政府も各所有者との契約や条件を忘れないようにしてもらえば、もとのバラバラだった建物は、統一されたものになるだろう」(Poggi, *Sui lavori...*, p.117.) と述べていることからわかる。また、成功しなかったがプラート門広場の建築物でもひとつのパラッツォの高さに合わせることを意図していた。
- ⁴⁶ *Huitieme Plan de Paris. Divisé en ses Vingt Quartiers*, 1705.
- ⁴⁷ Poggi, G., *Ricordi della vita e documenti d'arte*.

補章

コッリ大通り建設と周辺住居地区形成

はじめに

前章までは、都市改造計画の中でも、ポッジが直接設計図を引いた計画をとりあげたが、本章では、コッリ大通りの周辺住居地区に関して、大通り建設時にジュゼッペ・ポッジによって作成された規定書が住居地区形成に与えた影響について分析する。

コッリ大通り周辺住居地区の建設は、第3章で取り上げた大通りの建設と平行して計画され、新設の道路沿いの土地を整備し、独立形式の住居であるヴィラが建設された。このヴィラ群は、コッリ大通りの路程に植樹された木々の合間から断続的に見え隠れするように点在している。

フィレンツェの都市研究史において、コッリ大通り周辺地区に関しては、フィレンツェの近代以前に建設されたヴィラを対象としたG.カルディーニの研究(1954年)¹、その研究をベースに近代以降のヴィラも網羅したL.ザンゲリの研究(1989年)²でコッリ大通り周辺地区のヴィラもとりあげられ、建設年代や現在までの所有者が明らかにされている。ザンゲリの研究では、ヴィラの意匠的特徴についても論じられている。また近年では、緑地計画の視点からC.パオリニの研究(2004年)³があり、ボボリーノ庭園やティヴォリ庭園についての分析や、ヴィラ建設当時の居住状況などが明らかにされている。他のポッジ研究の中では、コッリ大通りに関する研究は第3章で述べたように多様に検討がなされているが、大通り建設が都市へ与えた影響の分析として重要であるはずの周辺住居地区の各戸に焦点を当てた具体的な検証はあまりなされていない。さらに、これらの研究の中では、前述の土地所有規定書の存在について触れているものは多いが、その具体的な内容がいかに関係形成に影響を与えているかを詳細に分析したものはほとんど見当たらない。そこで、本章ではこの土地所有規定書を精査し、各土地区画に対してどのような規定が設けられていたのかを明らかにした上で、住居地区の地形や大通りとの関係性、あるいは敷地の形状といった形態的分析をすることで、どのようにポッジが住居地区をコントロールし、規定書がいかに関係形成していたかを明らかにしたい。

1 計画のあらましと土地所有規定

コッリ大通りの建設過程については、第3章で述べたとおりであるが、周辺住居地区に関してもポッジの報告書にその一部が記述されている。大通りと住居地区の建設は、ケーリ・エ・コンパリーニ社とラッツェーリ・エ・チャンピ社の2社の建設会社がコムーネに対するプレゼンテーションを行い、その結果、ラッツェーリ社が建設を請け負うこととなった⁴。そしてこの地区の土地建物収用は1866年11月から1875年1月まで行われていった⁵。住居地区は、コッリ大通りと既存のポッジョ・インペリアーレ大通りとの間のエリアで、この空間を分節する副次的な道路が新設された。

コッリ大通り周辺住居地区の各土地区画には、土地所有規定といえる『コッリ大通り地役権と同大通りの保全に関する配置』 *Viale dei Colli. Servitù Attive e Passive e Disposizioni Necessarie alla Conservazione di quel Passeggio*⁶ (図5-1) がポッジによって1868年頃に作成された。これは、各土地区画の地役権のあり方を示した手書きのものであり、各土地の建設によって眺望を守るために契約内容が遵守されるよう作成されたものである⁷。この規定書は、ポッジ単独で作成されたものではなく、上院議員G. パヴリーニの助言が参考にされ⁸、またコムーネによって規定された条件(1868年12月31日市議会で承認された)にもとづいて作成されている⁹。

この規定書は全315項、全3部で構成されており、第1部でローマ門とサン・レオナルド通りまで、第2部でサン・レオナルド通りからナツィオナーレ・アレティーナ通りまでのコッリ大通り周辺の土地区画に関する区分と、それぞれの土地に義務付けられた条件等が記述され、第3部でコムーネの所有地や公共施設についての規定が記述されている。各部の冒頭で共通の建築条件が述べられ、その後、各土地区画について詳細な指定や、追加建築物に関する対処法などが記述されている。

本章では、コッリ大通り建設から最も早い段階で住居地区が形成された、コッリ大通りの第1路程にあたるローマ門からサン・レオナルド通りまでの地区を分析対象とした。その理由としては、この地区はラッツェーリ・エ・チャンピ社という建設会社が一括して土地を購入した後に分割して売却したため、ある一定の期間にまとまった住居地区が形成されており、地区としての分析に有効であると考えたからである。この住居地区は、上述の規定書の第1部に相当している。また、サン・レオナルド以東の地区でもヴィラが建設されていくが、大通りに対して点在するかたちで分布しており、まとまった戸数が地区として形成されなかった。この理由として挙げられるのは、この地区の土地から歴史的遺構が発見され¹⁰、その調査と発掘のために時間を要したために、広範囲の同時的住居地区形成が遅れたことである。

各土地区画と住戸の所有者や建設年代に関しては、上述のカルディーニとザンゲリのヴィラに関する研究を中心に参考とし、フィレンツェ市立文書館やフィレンツェ大学建築図書館に図面が現存するものに関してはそれらを用いた。その他、図面史料等が存在しないものに関しては、現地調査によって写真撮影を行い、公共の場所から容易に観察できないものに関しては航空写真を用いた。各住戸は現在も公共の施設として内覧できる建築物は数少なく、大通りから観察できる、敷地の状況や建物のファサードに限定されてしまったことは注記しておかねばならない。また、敷地の囲いに関しては、当時の史料が残っていないため現地調査により確認した。ただし、第二次世界大戦中に鉄が回収された際に鉄柵部分も回収されており、建設当初のものが現存しているものは少なく、鉄柵のデザインは正確に明らかにはできないため、残された石造の壁などから門扉の位置を確認するにとどまっている。

規定書にはボボリーノ庭園からガリレオ広場までの土地区分図が付属されているが

(図5-2)、全土地区画番号と照合できる全範囲を掲載したものが付属されていないため、1870-75年に作成された都市図をもとに、1997年のCTR都市図とザンゲリの研究で明らかにされている改築箇所などを照合して¹¹1870年前後の建設状況の作図を試みた(図5-3)。また章末資料として、各土地区画に対する個別の義務や追加事項が記述された箇所のうち、建築配置や形状に関する部分を抽出して表としている(巻末資料-1)。ただし、ここで挙げている各土地区画と上記の作図した地図に記載されたヴィラ番号は一致していない。文中から土地の場所が特定可能なものは、作図した地図のヴィラ番号を記載している。

まず、規定書の具体的な内容から、規定書作成の目的を明らかにしたい。ローマ門からサン・レオナルド通りまでの、ラッツェーリ・チャンピ社がコムーネから譲渡された土地は、1868年12月31日のコムーネとの契約で建築条件が義務付けられている。その条件は規定書の第1部の冒頭に記述されているが、全20項目のうち建築物の配置や形状に関するものを以下に抽出した¹²。

1) (ラッツェーリ・チャンピ社によって)売却された土地は、内部に庭園のあるヴィラを建設すること。

2) 図面(図5-2)上の土地区画の青色に塗られた部分は、全土地境界部に1.5m以下の石のシマから鉄柵がたちあがった囲いをする。緑色に塗られた部分は、道路に面した部分のみ、同様の囲いをする。

3) ヴィラやその他建築物は建築的に良好な様式で建設すること。ヴィラの4階部分が眺望やヴィスタを害さないようなものとする。

4) 図面上に記されたヴィラの配置はおおよそのものであり、正確な配置は実際の敷地による。

5) 図面上で緑色で塗られた土地は、植樹は自由にできる。無彩色(灰色)の土地はと緑色の土地の一部は、幹の太い植樹が大通りからの眺望を阻害する場合は、違法となり、コムーネは適宜、それを除去できる権利をもつ。

7) 鉄柵や囲いを含むヴィラやその他建築物のファサードは、各土地区画内に建設せねばならない。

8) ヴィラやその他建築物は、各土地区画内に建設せねばならない。その高さについてはDirezione dei Lavoriによる。また、これらはコムーネにプレゼンテーションして承認を得ねばならない。

9) 庭園内のゴミや堆肥は市の運営に準じて、放置しないようにすること。公衆便所のある土地区画は完全に手入れされる。

10) どのヴィラやその他建築物、庭園においても、食堂や撞球場、その他公共の娯楽施設、騒音や不快な発散物が出る作業場や工房を開設は許可されない。また、大通り沿いの囲いに衣類を干すことも禁止される。

1 1) モレッリ氏所有の農家は解体する。

1 7) コムーネは建築物の敷地、建築物の高さ、外装、幹の太い樹木の配置、その他公共の適正や魅力に関わる事項すべてに関する図面を作成する権限を持つ。

この1) をみると、ラツェーリ・エ・チャンピ社に売却された土地、すなわちローマ門からガリレオ広場までの公園を除いた土地では、庭園付きのヴィラという形式が全土地区画に指定されていたことがわかる。

また2) では、石造による囲いの高さに制限を設け、その上のたちあがり鉄柵と指定している。この指定は新設道路沿いはすべての面で義務付けられているが、敷地の全面に渡って義務付けられているのはコッリ大通り沿いの土地で、副次的な道路沿いの土地よりも面積の広い土地に対して指定されている。また、現地調査をした結果では、石造と鉄柵の組み合わせの囲いは、コッリ大通り沿いのみならず、図5-2の緑色の土地でも採用されていた。

ヴィラの高さや形式については3) のように曖昧であるが、大通りからの眺望を遮らないことが条件づけられている。各戸の計画はコムーネに図面を提出して承認を受けねばならないため、「良好な様式」とはコムーネの決定に委ねられているといえる。同様に、植樹に関しても眺望を害さないものとし、それに反する場合にはコムーネが除去できる権限をもつなど、建築物のみならず庭園や樹木に関しても指定をしていることがわかる。

さらに注目したいのは1 7) で、コムーネが敷地全体の図面作成の権限を持つという統括性があり、それが大通りから見える建物の高さや外装、樹木が公共のものであるという認識であり、このような指定が都市部の集合住宅でなく、独立住居に適応されているところである。

上記の条件をみると、特に大通りからの見え方が配慮されていることがわかる。それにもかかわらず、各土地区画に共通の高さや後退距離は詳細な数値による指定はなされていない。

そこで、各土地区画に課された義務や追加事項が記述された箇所を見てみると(巻末資料-1)、部分的に数値が書かれた箇所があることがわかる。例えばアンジェロ・モンテコルボリ氏の土地をみると、もともと計画されていなかった厩舎を新たに建設されることになっているが、眺望を遮らないとして承認されたとしている。これが規定内の6m以下としていることが記述されており、高さ制限を与えていることがわかる。

また、フランチェスコ・チャンピの土地をみると、既存の建物の裏側に小さい建物を建てたとしているが、これは眺望を遮るとして許可されていない。この土地はダンテ・ダ・カスティリオーネ通り沿いに位置していることから、コッリ大通り沿いからのみならず、副次的な新設道路からの眺望も考慮していることがわかる。

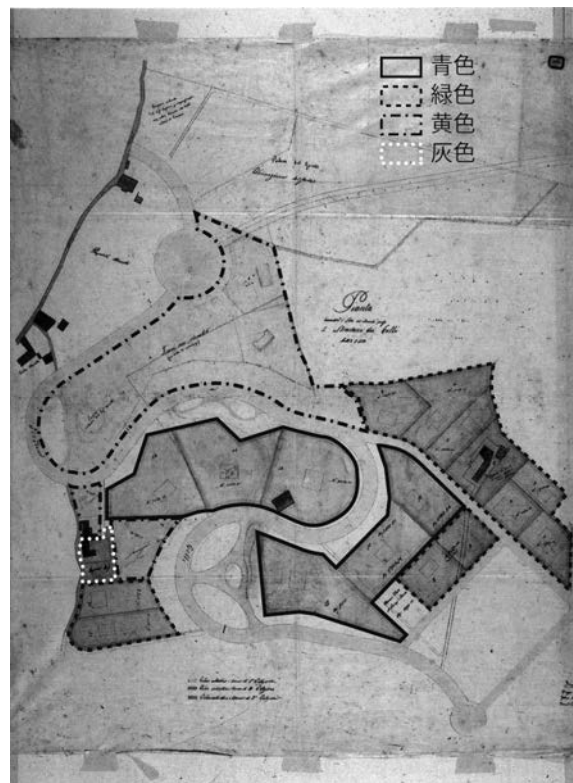
さらに、ローマ門からサン・レオナルド通りの土地所有者の地役権に関して記述され

た土地では、クーザ王子の土地とピエトロ・モレッリ氏の土地で、大通りや歩道からの後退距離が指定されている。

このように、いくつかの土地では大通りからの後退距離を指定していることから、他の記述のない土地においても、コムーネが承認する建物の高さや大通りからの後退距離をはかる一定の数値があったのでないかと考えられる。もしくは、「ヴィラ」という形式を指定したことによって、ある一定の建て方が規定できたのではないだろうか。



(図5-1) G.ポッジ『コッリ大通り 地役権と同大通りの保全に関する配置』
(Poggi, G., *Servitù attive e passive interessanti il Viale dei Colli*, manoscritto, s. n. t., [1868].)



(図5-2) ボボリーノ庭園からガリレオ広場までのコッリ大通りと周辺土地区画 (ポッジ作成)
(ASF, *Piante Poggi*, 140, 1320×1100mm)

2 コッリ大通りと建築配置

では実際に、各土地区画に建設された住戸をみてみたい。

まず、コッリ大通り周辺の建築物が道路にどのような関係にあるかを検証するため、各土地区画の形状と建築物の配置に注目する。資料としては前項の住戸をプロットした図を用いる。

まず、全体の住戸の配置をみると、③～⑮、⑰、⑳～㉑のように住戸同士が隣り合うかたちで住戸が並んでいる場所の場合、それぞれに並行に建設されていることがわかる。これによって⑨や⑮のように、大通りに接する敷地での建築物の配置は、大通りに対して並行でなくなるために正面性が薄くなる。一方、②では敷地の形状が不規則であるが隣接する③とは並行でなく、大通りと並行な配置が優先されている。相違点は、②は大通り沿いの面が直線であり、⑨、⑮では大通りが湾曲していることである。

さらに、作成した図から各戸の大通りとの関係性をみると、コッリ大通りに接した建築物と副次的な新設道路（ファリナータ・デッリ・ウベルティ通り、ミケーレ・ディ・ランド通り、ダンテ・ダ・カスティリオーネ通り）に接した建築物の両方で、隣り合う建築物の後退距離が一定でないことがわかる。

これらのことを検証するために、まず、各敷地と建築物の配置を以下の2つに分類し、それぞれ道路との接し方、敷地の形状、地形との関係性の特徴を挙げる（図5-4）。

- A. 大通りからの敷地の入口と、建物の入口が直線状にある（シンメトリー）
 - ：門扉と建物の入口が最短のアプローチとなる。
- B. 大通りからの敷地の入口と、建物の入口が直線状にない（アシンメトリー）
 - ：庭園を設けることを規定されていることにより、必然的に庭園を散策するアプローチとなる。

まず、敷地の形状を比較すると、分類Aでは長方形の敷地が多く、中心線がとりやすいことが挙げられる。⑰は円形に近い形状であるが、これも中心線がはっきりして正面がとりやすい。一方、分類Bでは不規則な形状の敷地が多く、正面がとりにくい。このため、道路からのアプローチとなる空間を幾何学でないピクチャレスクな庭園としているのではないかと考えられる。例外は⑩と⑫でどちらも長方形の敷地であるのに、敷地の入り口と建物の入り口が直線上からずれている。⑫の場合、道路沿いに建ち並ぶヴィラの後退距離が一定となるのを回避したかったからではないかと考えられる。⑩ではその考えも当てはまらない。

このため、背後の庭園の規模をみると、分類Aの敷地では、道路に面した敷地の入口から建物の入口まで直線状のアプローチであり、庭園は建物の背後に配置するようになっている。一方、分類Bの敷地では、道路から建物入り口までのアプローチが庭園に相

当しており、建物の背後には植樹されてはいるものの、庭園と呼べるほどの空間は設けられていない。

このことは、規定書では各敷地には「庭園付き戸建て」という一定の条件に、後退距離を指定することによってリズムのある配置が生み出されているといえる。さらに「植樹すること」という条件を付け加えることによって、大通りからヴィラが見え隠れするような路程をつくり出しているといえるのではないだろうか。

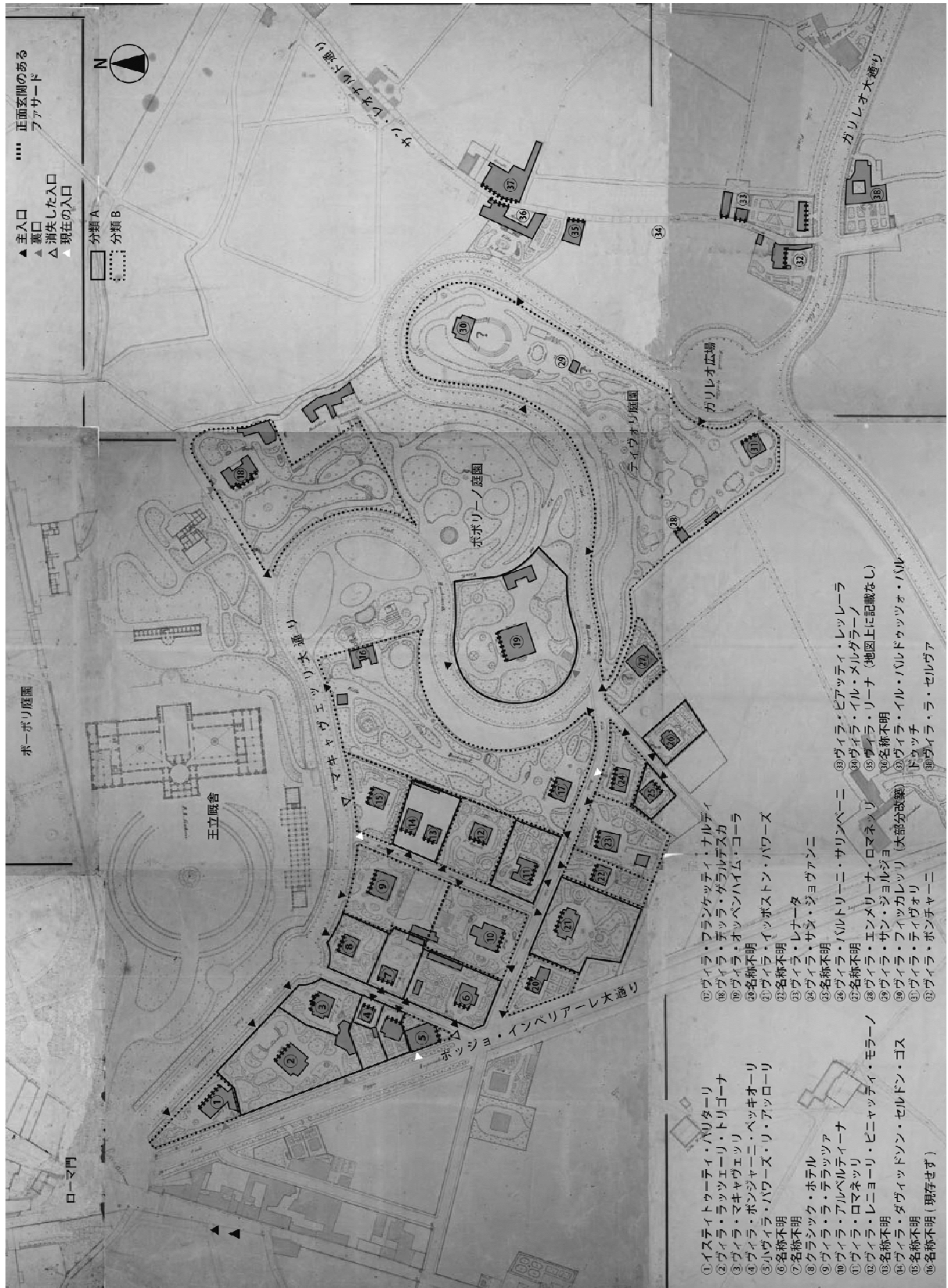
第3に、道路からの後退距離と建築物の平面規模に着目してみる。分類Aでは、建築物の規模が大きいほど、後退距離は大きくなっている。これは、大通りからの眺望を邪魔せず、迫り過ぎない距離が配慮された結果であると考えられる。

また、敷地への入口の配置をみると、角地に位置するヴィラ・マキャヴェッリ(③)、クラシック・ホテル(⑧)、ヴィラ・ラ・テラツァ(⑨)、名称不明のヴィラ(⑬)、ヴィラ・アルベルティーナ(⑩)のように、より道路幅の広い通り沿いに入口を設けることが優先されていることがわかる。例外は名称不明のヴィラ(⑥)と、ヴィラ・サン・ジョヴァンニ(24)である。

また、不規則な形状の敷地においては、建物の正面が大通りと並行になるようにはなっておらず、背後の敷地のラインに平行になるよう揃えられていることがわかる。その結果、前面に庭園が位置することとなり、道路からは見え隠れするような風景をつくりだすものとなっている。

大通りに面した土地にプライオリティがあるにもかかわらず、コッリ大通りと同幅の既存のポッジョ・インペリアーレ大通りに面した土地では、正面性がほとんど確認されていない。ここから、同規模の道路のなかでも、新設のコッリ大通りからの眺めを重要視していることが窺える。

しかしながら、この住居地区のグリッドはなぜ、ポッジョ・インペリアーレ大通りに対して並行にとらなかったのだろうか。



(図5-4) ローマ門からサン・レオナルド通りまでのコッリ大通り周辺住居地区
 門扉の位置、ファサード、分類A・Bを記載。
 (1870-75年の都市図, ASCF, n. 55/19-21, 55/11-13, 54/29-30, 55/01, Zangheri, L., *Ville della
 provincia di Firenze*, Rusconi, Milano, 1989. をもとに作成)

3 道路・建築配置の地形的影響

大通りからの眺望として、ヴィラの後退距離や庭園や植樹の配置によって、リズムのある風景が配慮されていた。その規則性が何に起因するのか、また、グリッドの方向をポッジョ・インペリアーレ大通りに対して並行としなかった理由を、地形的条件に着目し、各戸がどのように建設されているかを分析したい。

前項の住戸の配置図と等高線図を重ね合わせて検証する（図5-5）。傾斜が急な場所にS字のカーブを採用し、大通りの傾斜角を緩くしていることは第3章で確認したとおりである。住戸に関しては、そのS字周辺は細かい区分とせず、公園や、ヴィラ・オープンハイム（現ヴィラ・コーラ）のような大規模なヴィラのみが建設されている。また、マキャヴェッリ大通りとダンテ・ダ・カスティリオーネ通りが出合う地点から西側は、等高線に直交するかたちで住居地区が形成されており、傾斜にヴィラが建ち並んでいることがわかる。一方、東側では、マキャヴェッリ大通りが等高線に沿うかたちで同じ高さを保つように道路が建設されているため、ヴィラも大通りに沿って同じ高度の場所に建設されている。

ここで注意したいのは、傾斜が急であるとはいえ、この程度の傾斜に住居を建設する技術は以前から存在していたはずである。しかしながら、独立形式のヴィラを建設することが条件づけられていたため、斜面を整地する必要があった¹³。このことから、より緩やかな傾斜のほうが建設しやすいことになる。もしくは、コッリ大通りと同じ傾斜を保たせようとしたとも考えられる。

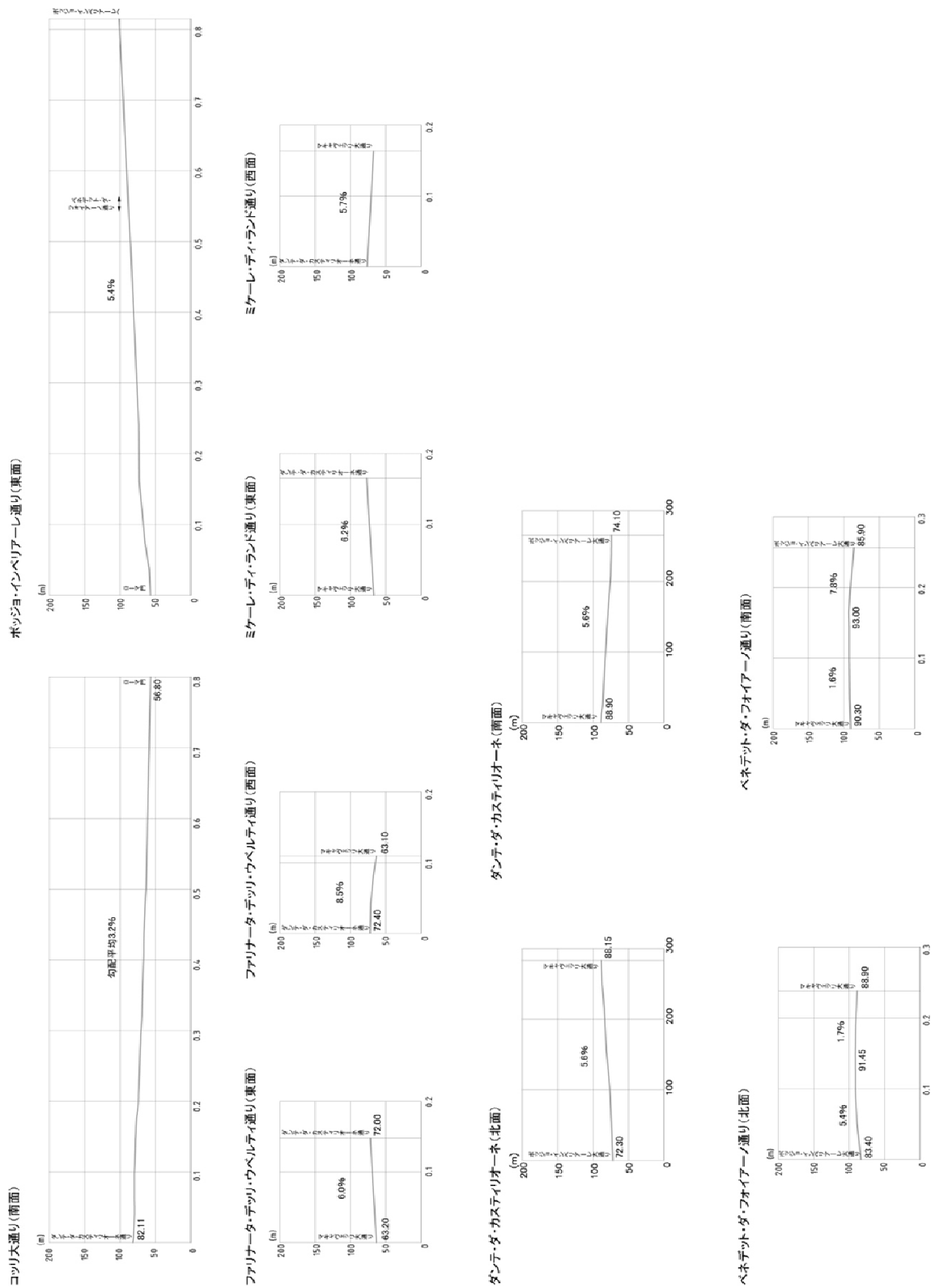
ここで、コッリ大通りと副次的な道路の傾斜角を算出し、各道路の傾斜とヴィラの関係を見る（図5-6）。これをみると、どの道路も緩やかな傾斜を保っていることがわかる。仮に、このグリッドをポッジョ・インペリアーレ大通りに垂直平行となるようにした場合、南北方向の傾斜が現行のものよりも急なものになってしまうことが指摘できる。計画された道路の傾斜は、ファリナータ・デッリ・ウベルティ通りの東面で約6.0%、西面で8.5%、ミケーレ・ディ・ランド通りの東面で6.2%、西面で5.7%、ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りの北面で5.6%、南面で5.6%、ベネデット・ダ・フォイアーノ通りの傾斜のある箇所に来た免が5.4%、南面が7.8%である。これが、仮にポッジョ・インペリアーレ大通りと垂直平行に新設の道路が設定されていたとすると、その傾斜はコッリ大通りのS字の湾曲部付近で9.1%ととなる。第3章で述べたように、コッリ大通りでポッジが意図していた緩やかな傾斜は4%であったことを考慮すると、副次的な道路の傾斜もコッリ大通りの傾斜に近づけようとした結果、このような道路配置となったのではないだろうか。

このように、建築物の配置を左右する副次的な道路の敷設は、地形を考慮した上で設定されており、このことによって新築のヴィラの方向性が決定されているのではないかと考えられる。

また、副次的な道路をグリッド状に配置することで、湾曲した路程となっているコッリ大通りと挟まれた部分の土地は不規則な形状となり、道路が湾曲している箇所では、建築物のファサードが真正面に向かないようになっている。このことによって、大通りからの眺望はヴィラの正面が見える場合と、斜めから見える場合がでてくる。もし、大通りの眺望をヴィラのみだとすると、大通りからの見え方は非常に不規則になってしまう。しかし、庭園の植樹と大通りの並木の存在でヴィラが見え隠れすることによって、不規則さがリズムあるシークエンス的風景となっている。



(図5-5) ローマ門からサン・レオナルド通りまでのコッリ大通り周辺住居地区の等高線図
(1998年トスカーナ州作成都市図 CTR と 1870-75年の都市図をもとに作成)



(図5-6) ローマ門からサン・レオナルド通りまでのコッリ大通り周辺住居地区の道路の傾斜 (1998年トスカーナ州作成都市図CTRをもとに作成)

4 大通りからみえる建築物のファサード

これまで、建築物の配置について分析してきた。では、建築物の配置は住戸のデザインにどのように影響していたのだろうか。

それぞれの建築物のファサードに注目してみると、ほとんどが新設の道路に面したファサードを持っていることがわかる。このうち、ヴィラ・ティヴォリ (⑩) のような2つの道路の角地に当たる敷地では、より規模の大きい道路沿いに並行となるよう、ファサードが決定されている。しかしながら、多くのヴィラの平面形は正方形に近く、副次的な道路沿いの側面も、正面のデザインと類似しており、正面性をもたせたデザインとなっていることが指摘できる。コッリ大通り周辺以外でポッジが設計したヴィラをみると、ヴィラ・ストロツィ (巻末資料-29) でも側面のデザインで正面と非常に類似したものを採用している。

このようなデザインは、庭園付きという条件のもと、道路からの後退距離が十分にとられていたために可能であったといえる。また、後退距離を指定することで、ポッジが各戸の建築デザインを誘導していたともいえる。このような正面性をもった建築物をある一定の距離をもって道路から鑑賞可能な通りの眺望をポッジが意図し、その緩やかな誘導方法として、道路からの後退距離を設定するという方法がとられていたのではないだろうか。

直線道路に面したところでは、建物のラインと道路のラインが平行に位置しているため、大通りに向かう正面性が強調されている。

ただし、すべてのヴィラが道路沿いにファサードが設けられているわけではない。名称不明のヴィラ (⑪) とヴィラ・フランケッティ・ナルディ (⑫)、ヴィラ・エンメリーナ・ロマネッリ (⑬)、ヴィラ・サン・ジョルジョ (⑭)、ヴィラ・フィカレッリ (⑮)、は、個人の庭園でなく、公園内に建設されたものであるが、そのファサードは公園内部に向けられている。これは、新設の道路よりも公園内からの見た目が優先された結果であると考えられる。ただし、正面ではないものの、新設の道路から建物の姿が見える距離に建設されていることに注目したい。これらの例から、大通りからヴィラが見えることが、眺望の一部として考えられていたことがわかる。ただし、ヴィラ・エンメリーナ・ロマネッリ (⑬) は道路から見えないところに建設されているが、これは当初、娯楽施設として使用されていたため、道路沿いから見えるように配置する必要性に欠いていたと考えられる。

5 既存建築物の転換

最後に、既存の建築物がどのように変化したかをみてみたい。コッリ大通り建設地区はもともと既存の建築物が少ないうえ、本章でとりあげたエリアでは対象物件が極僅かであるので、客観的な現象として捉えるのは困難であるが、大通り建設によって変化が見られているため、ここに記しておきたい。

既存の建築物は、サン・レオナルド通り、パッソ・アッレルタ通り沿いに存在しており、コッリ大通り建設によってサン・レオナルド通りが2つの通りに分断されることとなった。コッリ大通りは既存の建築物を回避するように設定されていることは第3章でも確認した。サン・レオナルド通り沿いにあったヴィラ・ヴィラ・ボンチャーニ (㉔)、ヴィラ・ピアッティ・レッレーラ (㉕)、ヴィラ・ラ・セルヴァ (㉖) は、コッリ大通りに接するかたちとなった (図5-3)。ここでは、新しく建設されたヴィラとは異なり、大通りからの後退距離は保たれていない。これは、ポッジが丘陵地帯の既存の建築物を評価している¹⁴ように、既存の建築物の保存が優先された結果であり、また、収用箇所を最小限にした結果であるといえる。第4章で扱った市門の扱いと同様、既存の建物と新築の建物との関係性がここでも窺える。

サン・レオナルド通りとコッリ大通りの交差部の建築ファサードをみると、ヴィラ・ボンチャーニ (㉔) は建物の形状や構造は変化していないものの、もともとサン・レオナルド通り沿いを正面としていたが、コッリ大通りに向かって正面となるようなデザインが南面に施された (章末-32)。

ヴィラ・ピアッティ・レッレーラ (㉕) では、敷地の南側に長方形平面の厩舎が新たに建設されている。この厩舎は既存の母屋を基準とした配置ではなく、コッリ大通りを基準に、平行に位置することが優先されている。また、大通り側の立面をみると、正面性をもったデザインになっており、大通りから見える面を重要視していることがわかる。

これらの既存の建築物については、今回、平面図が入手不可能であったので、都市図からの配置や形状、現状調査のファサード観察からの指摘に留まってしまった。既存建築物の周囲には本章でとりあげた1870年代以降も1900年初頭にかけて、多くのヴィラが建設されている。今後の課題としては、これらの大通りの完成以後の長期にわたる地区の変遷について、既存建築との関係にも注目しながら分析していくことである。

小結

コッリ大通り周辺住居地区形成について、以下の4点に集約することができる。

1. コッリ大通り周辺住居地区の各土地区画における建築計画は、コムーネが承認する権限があり、規定に違反した場合、樹木を伐採できるなどの拘束力があつた。また、部分的に高さ制限や後退距離の指定をしていることから、指定のない土地においても「良好な建築様式」や「ヴィラ」という形式のみの指定によって、ある一定の水準が保たれることが期待されていた。
2. コッリ大通り周辺住居地区では、大通りと敷地の接し方が、建築物の配置に大きく影響していた。その結果、道路に対する建築物の配置にリズムが生まれ、植樹することという条件付けによって、大通りから建物が見え隠れするような風景が作り出されていた。
3. コッリ大通り周辺住居地区では、地形が副次的な道路の配置に影響し、その結果、建築物の配置を決定されていた。コッリ大通りに加えて、新設の副次的な4本の道路も最も緩やかな傾斜とすることで、住居地区のグリッドが決定されているという地理的条件によって、道路にヒエラルキーが与えられていた。その結果、コッリ大通り沿いに建築物の正面を配置することが優先された。
4. 既存の建築物においても、大通りに面した部分に関して正面性を持たせるような改築がなされていた。そこでは、解体を必要とする大通りからの後退は義務づけられておらず、ファサードのデザインや厩舎の増築などの既存部分を活用した手法がとられていた。

以上のように、コッリ大通り周辺住居地区では、ポッジは住戸の設計を行う代わりに、規定書によってある一定の水準を超える建築物と風景をつくり出そうとしていたといえる。そこでは、現代の意味での「後退距離」や「適正」とは異なる効力をもっていたといえよう。つまり、当時の建築と都市における様式ともいえる強固な共通認識があつてこそ、後退距離や適正といった具体的かつ細微な制限が、建築の意匠性や都市の風景にまで影響し得たという事実である。フィレンツェ拡大事業の報告書でも規定書でも記述されていたポッジが理想とした首都としての風景は、丘陵地帯においては、近代以前の共通認識と近代的都市イメージとの狭間を穿つ手法が選ばれていたといえないだろうか。

注釈

-
- ¹ Cardini, G., *Le ville di Firenze di là d'Arno*, second edit, Vallecchi, 1965, original printed in 1954.
 - ² Zangheri, L., *Ville della provincia di Firenze*, Rusconi, Milano, 1989.
 - ³ Paolini, C., *Il sistema del verde: Il viale dei colli e la Firenze di Giuseppe Poggi nell'europa dell'ottocento*, Edizioni Polistampa, Firenze, 2004.
 - ⁴ Poggi, *Sui lavori...*, p.137.
 - ⁵ *Ibid.*, p.158.
 - ⁶ Poggi, G., *Viale dei Colli. Servitù Attive e Passive e Disposizioni Necessarie alla Conservazione di quel Passeggio*, manoscritto, s. n. t., [1876], Archivio Storico del Comune di Firenze, CF7128.
 - ⁷ Poggi, *Sui lavori...*, p. 137.
 - ⁸ *Ibid.*
 - ⁹ Poggi, *Servitù attive e passive...*
 - ¹⁰ コムーネとファルディ、パドッシが購入した土地からは象の化石が発見された。また、ファルディの土地からはピエトラ・フォルテ、アルベレーゼ（粘土質の石灰土）、ガレストロ（粘土質の石、片岩）が発見され、同時に1530年のイタリア包囲に使用されたと思われる鉄球（直径8cm）が発見されたとしている。Poggi, *Sui lavori...*, p. 140.
 - ¹¹ 規定書に記述されている初期の所有者と、ザングリの研究で明らかにされている土地所有者とを照合すると、19世紀後半から1920年代までの所有者や改築状況は不明のものが多。
 - ¹² Poggi, G., *Viale dei Colli. Servitù Attive e Passive e...*, pp. 15-22.
 - ¹³ Poggi, *Sui lavori...*
 - ¹⁴ *Ibid.*

終章

1 各章のまとめ

ここでは、各章で得られた結果をまとめている。

第1章 建築家ジュゼッペ・ポッジのフィレンツェ拡大事業における計画範囲

ポッジによって作成された報告書『フィレンツェ拡大事業』(*Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze*, 1882)を精査し、ポッジのマスタープランの全容を把握した。これによって、ポッジはコムーネに委託されるかたちで具体的な計画を行い、事業を指揮していたことがわかった。そこでは、基本方針はコムーネの決定によるものであったが、ポッジが提案することでコムーネや政府に重要な決定を促すかたちにとられていた。またマスタープランの基盤となる治水事業においては、技術者との相談を経ていたことなど、行政や専門家との相互的な意見交換のもと、計画が進められていた。

また、具体的な建築物や道路や広場の形状を決定する設計作業は完全にポッジに委託されていたとはいえ、ポッジの理想が実現できた箇所と、政治的状況や経済的制限、土地収用問題によって変更を余儀なくされた計画があった。

以上を踏まえて、ポッジの意向が最も反映されたと考えられる計画、すなわち右岸のクロッチェ門広場の整備、カヴール広場の整備、左岸のミケランジェロ広場の計画、丘陵地帯のコッリ大通り計画、未実施のベッロズグアルド計画、を抽出した。

第2章 ミケランジェロ広場の形態と機能

ミケランジェロ広場の建設は、宗教財産没収によって利用可能となった、イタリア国家統一の流れの中ではじめて可能となったものであり、広場の形態は土地利用の条件によって決定されている部分があった。また、歴史的に地盤改良が必要とされてきたことを踏まえて、土留めと排水機能を持たせるための規模と形態であった。そこではルネサンスの建築言語を用いるなど、近代的土木事業に美観的調整を加えた、新しい機能を担う建築的工夫がなされていた。さらに、清潔な空気を獲得できる場所として、衛生的観点からの要求をも満たす設計となっていた。

第3章 コッリ大通りの路程と機能

コッリ大通りの建設は、緩やかな傾斜となるよう計算されたものであり、近代都市に求められていた交通インフラとしての快適さや大量輸送の手段に対応するものであった。また、その路程は洪水対策が考慮されており、それは飲料水や散水の問題を近代的技術によって解決したからこそ実現可能となっていた。また、イタリア国家統一の動きの中で利用可能となった王室所有地を収用し、既存建築を回避した路程としたことで、財源が厳しい中でも広範囲にわたる大規模な道路が実現できた。このような技術的な要求を満たしながら、遠景と近景の両方の美しい眺望を提供する路程が配慮されており、

そこには大通り周辺の土地所有者へ向けた、建設を規定する文書の存在があった。

第4章 市門周辺地区の機能と建築形式の転換

クローチェ門広場とカヴール広場の計画では、大規模なパース図が描かれ、そこでは既存建築や地形を背景にしながら、時代の異なる2つのモニュメントが対峙するように見える構図とすることで、都市の近代化をより強調させようとする意図が読み取れた。また、広場の形態の決定は、交通の利便性を解決するものであり、かつ従来の機能をもった広と、植樹された公園としての都市の近代的要素が融合されたかたちとなっていた。また、環状道路の機能上、必要な箇所は既存の建築物が解体されていたが、都市内外での構造上、衛生上の要因から取捨選択されていた。そこでは、ポッジが考えていた首都としてふさわしい統合された街並みを形成する意図があった。市壁解体によって防衛機能と徴税の境界域が周辺の補強された河川へ代替されたが、地盤の操作によって、広場にも洪水対策としての機能を付帯させていた。

補章 コッリ大通り建設と周辺住居地区形成

ポッジ作成の規定書『コッリ大通り 地役権と同大通りの保全に関する配置計画』(*Viale dei Colli Servitù attive e passive e Disposizioni Necessarie alla Conservazione di quel Passeggio*, s. n. t., [1876]) の内容から、ローマ門からサン・レオナルド通りまでのコッリ大通り沿いの土地区画において共通の建築条件が提示されていたことがわかった。また、コムーネに建築計画を左右できる拘束力があった。

コッリ大通り沿いに建設された建築物の配置は、大通りと敷地の接し方が影響していた。その結果、大通りからは樹木の間をヴィラが見え隠れするような風景が作り出されていた。また、そのような風景をつくる建築配置は、副次的な新設道路の設定が地形的条件に配慮された結果であった。さらに、既存建築においても大通りを意識したファサードが取り付けられるなど、コッリ大通りに面することに優位性がもたれていた。

2 結論 建築家ジュゼッペ・ポッジの理念と手法

以上の各章の分析から、建築家ジュゼッペ・ポッジの都市改造計画における理念と手法を総括したい。

ポッジがフィレンツェ拡大事業で実現しようとしていたのは、一貫して、首都としてふさわしい都市をつくるということであった。報告書のなかで随所に表れていた「首都としてふさわしい」という記述や、大規模なパース図の製作は、ポッジがはっきりとした理想像を抱いていたことを示している。その首都としての理想像とは、フィレンツェの厚い歴史的背景にもとづく過去の遺構や、豊かな地形が浮き立つものであった。しかしながら、そこで選ばれたのは既存の構造を単になぞるのではなく、新たに手を加えることにより新しい見方を提示するという手法であった。

ミケランジェロ広場を建設では、それまで地上からしか見えなかったフィレンツェの中世・ルネサンス時代の建築物群が、公共の場から眺望として開かれた。このように都市全体を俯瞰することで歴史をも俯瞰し、国家統一を果たしたという新しい時代への転換点としようとした。

コッリ大通りの建設では、建築、樹木、丘が一体となるような設計により、シーケエンス的風景をつくり出し、丘陵地帯やヴィラの美しさを提示している。また、散歩道として娯楽の場であると同時に、新鮮な空気を獲得するという、先進的な志向であった。それは、都市部の衛生環境の改善が追いつかない中で生み出された、人を動かす散歩道でもあった。

都市部の計画では、500年もの長い間、都市を囲ってきた市壁が解体され、そこに付随していた市門をモニュメントとして残すことで、市壁が取り払われたことによる都市の近代化が強調された。そして、都市部と郊外を繋ぐ、公園にかわる、植樹された広場という新しい広場のありかたが提示された。それは、従来の広場としての都市の機能の延長上にあるものでありながら、都市の近代的要素が融合されたものであった。また、新たに建設された建築物は、その後に建設されていく建築物のプロトタイプとなることをポッジは望んでいたのである。そこにはルネサンスの建築言語を引用しながら、そのバリエーションを提示することで、土地建物所有者にある程度の自由を残しながら、統一された街並みとなることを誘導しようとしていた。このようなことから、ポッジのいう適正 *decoro* とは、「首都にふさわしい」「土地にふさわしい」「歴史的にふさわしい」という3重の意味が内包されたものであったといえるのではないだろうか。

このようなポッジ独自の設計手法は、近代にますます発展しつつあった土木技術に裏付けられたものであり、イタリア国家統一という激動の時代であればこそ必要とされたものであったといえる。

ミケランジェロ広場やコッリ大通りは国家統一後に可能となった大部分の土地建物の収用によって実現し、国家の事業であればこそ可能なものであった。また、都市改造

の具体的手法の決定は土木的処置と意匠的操作を両立する手法がとられていた。

以上のような計画を可能にしたのは、ポッジが建築家としての経験が、国家統一以前の土木技術教育の発展の背景として培われたものであったという側面があったからといえる。

洪水対策がという土木事業が、フィレンツェという都市が固有にかかえる大きな課題としてあったからこそ、土木技術を会得し、かつ首都らしさを付与しえる能力と経験をもった建築家が選ばれたのであろう。

また、フィレンツェが一時的な首都となるという、いわば歴史上の事件によって首都化に直面したため、フィレンツェの都市改造は、新たな官庁街を計画しないなど厳しい財源のなかで首都をつくりあげねばならないという難題が課されていた。これはつまり都市システムの改編を大規模な計画ではなく、多くの効用を発揮するいくつもの細かな設計を組み合わせ、編み合わせていくことを要求される都市改造であったといえるのではないだろうか。首都としての威光が表れやすい官庁街の計画ではない、首都を表現する手段をポッジは創出し、繋ぎあわせていた。このような要求を実現できるのは、当時であれば、技術者と建築家の両方の能力を満たす建築家であったといえる。

全体を通して、ポッジのマスタープランのなかには近代的要素が既存の都市構造にちりばめられている。それぞれの場所で、過去の蓄積と新たな都市の新規性が重なりあっている。このような状況を踏まえて、ポッジは、建築というスケールを超えた都市スケール、さらには地形スケールでの設計を目指していたといえるだろう。

結果的に、フィレンツェの近代都市改造は、官庁街や公園、劇場、市場といった近代的都市要素の挿入のような近代のアイコンのみでは語れない実地に基づいた設計となった。これはフィレンツェの都市改造は、その都市の固有性にもとづいた計画がなされたのだと再評価することができるのではないだろうか。

今後の課題としては、本研究でとりあげることのできなかったサン・レオナルド通り以東のコッリ大通り周辺地区、ベッロズグアルド地区へと対象範囲を広げ、また建築物の平面型にも踏み込んだ分析をしていきたい。また、イタリアの近代都市改造史の中でフィレンツェの事例を位置づけるため、フィレンツェが首都となる前後にイタリア王国の首都となったトリノとローマの近代都市改造にも視野を広げ、既存の都市構造や地理的条件の違いに焦点を当てて検討していきたい。

参考文献

<ジュゼッペ・ポッジの著作>

- Poggi, G., *Sul rispetto che devesi ai monumenti antichi*, 1845.
 - Poggi, G., *Delle condizioni di Firenze rispetto alle sue acque potabili. Memoria*, 1856.
 - Poggi, G., *Alcune parole sopra uno dei grandi miglioramenti della città di Firenze*, Coi Tipi di M. Cellini E C., Firenze, 1862.
 - Poggi, G., *Ancora poche parole sopra ad uno dei grandi miglioramenti della città di Firenze*, Tipografia Barbera, Firenze, 1863.
 - Poggi, G., *Dei pubblici mercati in Firenze*, Memoria letta alla r. Accademia dei Georgofili nell'adunanza del dì 23 marzo 1862 tip. galileiana di M. Cellini, Firenze [1863].
 - Poggi, G., *Sul progetto di espropriazione per conseguire la conservazione dei monumenti. Memoria letta alla Regia Accademia dei Georgofili dall'Ingegnere Giuseppe Poggi nell'adunanza del 25 settembre*, Firenze, 1864.
 - Poggi, G., *Servitù attive e passive interessanti il Viale dei Colli*, manoscritto, s. n. t., [1868].
 - Poggi, G., *Piazzale Michelangelo*, Coi Tipi di M. Cellini E C., Firenze, 1872.
 - Rapporto della commissione governativa-municipale incaricata di studiare e proporre i provvedimenti necessari per la conservazione del David di Michelangelo*, [relatori Emilio De Fabris, Giuseppe Poggi], coi tipi di M. Cellini e C. alla Galileiana, Firenze, 1873.
 - Poggi, G., *Relazione sulla costruzione delle nuove vie piazze e viali di Firenze*, Firenze, s.d., 1876 ca.
 - Poggi, G., *Sulla conservazione dei monumenti architettonici ed interessanti l'archeologia*, Tipografia della Gazzetta d'Italia, Firenze, 1876.
 - Poggi, G., *Sui lavori per l'ingrandimento di Firenze*, Tipografia di G.Barbèra, Firenze, 1882.
 - Poggi, G., *Osservazioni e proposte sulla sistemazione del centro di Firenze*, Firenze, 1882.
 - Poggi, G., *Per la facciata di S. Maria del Fiore*, Tipografia di G. Barbèra, Firenze, 1884.
 - Poggi, G., *Disegni di fabbriche eseguite per commissioni di particolari. vol.1 e 2*, Firenze, Tip. di G. Barbera, 1886, 1887.
 - Poggi, G., *Sul Progetto di Tramvia del Chianti pel Viale dei Colli*, Tipografia di G. Barbèra, Firenze, 1888.
 - Poggi, G. (per cura dei nipoti), *Ricordi della vita e documenti d'arte*, R. Bemporado e figlio, Firenze, 1909.
 - Poggi, G., *Pianta indicativa e ingrandimento di Firenze*, s. n. t., [18--?].
- Dizionario Tecnico dell'Architetto, Ingegnere Civile ed Agronomo*, Firenze 1883-1887, promosso dal Collegio dagli Architetti e Ingegneri della Toscana, opera collettiva di cui Poggi cura le seguenti voci: l' "Architettura di tutti popoli"; i "Restauro dei monumenti"; i "Diversi stili"; gli "Ordini architettonici"; "Rinascimento dell'architettura"; i "Teatri"; le "Chiese"; i "Ponti fortificati e trionfali".

<建築・都市に関して>

(1914年までの発行)

- Berti, G. F., *Cenni storico-artistici per servire di guida ed illustrazione alla insigne Basilica di S. Miniato al Monte e di alcuni dintorni presso Firenze*, Baracchi, Firenze, 1850.
- Giordano, F., *Relazione della commissione nominata nel giugno 1879 per lo studio dei rimedii alle frane del Monte alle Croci o di S. Miniato*, Tip. dell'Arte della stampa, Firenze, 1884.
- Mari, A., *La questione di Firenze*, Tipografia di L. Niccolai, Firenze, 1878.
- Rosadi, G., *Di Giuseppe Poggi architetto fiorentino*, Firenze, Civelli, 1912.

(1915年以降の発行)

<論文>

- Aranguren, P., *Edilizia e urbanistica a Firenze e in Toscana dal 1849 al 1859*, in 《Rassegna storica toscana》, a. II, 1956, pp. 157-170.
- Bellincioni, G., *Il problema della fognatura di Firenze*, Barbera, Alfani e Ventura, Firenze, 1941, estr. da 《Firenze. Rassegna del Comune》, a. X, 1941, n. 3, pp. 177-186.
- Bellini, A., Bini, M., Orefice, G., *Firenze: genesi storica e 《uso moderno》 di una infrastruttura urbana*, in 《Bollettino degli Ingegneri》, a. XXI, 1973, n. 6, pp. 18-24.
- Bergeron, C., *City planning in Turin, 1800-1865, From Napoleon I to the First Capital of Italy*, Princeton University, 1972.
- Carla Romby, G., *Nello "stile toscano del Risorgimento": la piazza Cavour di Firenze*, in 《Storia dell'urbanistica》, Toscana/VIII, Edizione Kappa, Roma, 2002, pp. 48-56.
- Carrara, F., Lorenzi, A., Sidoti, G., *Firenze capitale e la speculazione tollerata*, in 《Necropoli》, a. I, 1969, n. 4-5, pp. 65-77.
- Corsani, G., *Giuseppe Poggi e il Viale dei Colli a Firenze*, in 《Storia Urbana Rivista di studi sulle trasformazioni della città del territorio in età moderna》, 16, Numero 60, luglio-settembre 1992, pp. 37-58.
- Cozzi, M., *Una città moderna e i suoi architetti*, in 《Professioni e potere a Firenze tra Otto e Novecento》, FrancoAngeli, Milano, 2012.
- Cresti, C., *Cultura e architettura in Firenze capitale*, in 《Necropoli》, a. I, 1969, n. 6-7, pp. 27-37.
- Cresti, C., Orefice, G., *Caratteri sociali, situazioni ambientali e piani di risanamento del quartiere d'Oltrarno a Firenze (1865-1940)*, in 《Storia urbana》, a. II, 1978, n. 6, pp. 181-207.
- Fara, A., *Giovanni Castellazzi e l'architettura militare nella Firenze capitale d'Italia*, in 《Bollettino degli Ingegneri》, a. XXXII, 1984, n. 7-8, pp. 8-12.
- Focardi, P., *Geological considerations about the landslide of Monte alle Croci*, in 《Studi di geologia applicata e geologia dell'ambiente》, n.23, Firenze 1991.
- Losaco, U., *Notizie e considerazioni sulle inondazioni d' Arno in Firenze*, in 《L' Universo》, n. 5, settembre-ottobre, 1967, pp. 763-774.
- Neri, D., *S. Salvatore al Monte*, in 《Rassegna del comune di Firenze》, 1933.
- Redi, P., *Espansione e speculazione edilizia in Firenze capitale*, in 《La Toscana nell'Italia unita.》, Firenze, Unione regionale delle provincie toscane, 1962, pp. 451-471.
- Tommasetti, F., *Trasporti pubblici nella città e nel territorio di Firenze 1860-1915*, in 《Storia urbana》, a. III, 1979, n. 7, pp.115-162.

<書籍>

- AA. VV., *Il disegno della città: l'urbanistica a Firenze nell'Ottocento e nel Novecento*, Alinari, Firenze, 1986.
- AA. VV., *Giuseppe Poggi e Firenze. Disegni di architettura e città*, Alinari, Firenze, 1989.
- Agostini, E. M., *Giuseppe Poggi: la costruzione del paesaggio*, Edizioni Diabasis, Reggio Emilia, 2002.

- Archivio di Stato di Firenze, *Firenze dopo l'Unità. La trasformazione edilizia (1865-1896)*, Firenze, Giuntina, 1966.
- Archivio di Stato di Firenze, *In treno a Firenze. Stazioni e strade ferrate nella Toscana di Leopoldo II*, Polistampa, Firenze, 1998.
- Bandini, F., *Su e giù per le Antiche Mura*, Alinari, Firenze, 1983.
- Barlatti, E. (a cura di), *Vedute di Firenze tra il Seicento e il Novecento*, catalogo della mostra, Edizioni Polistampa. Firenze, 2009.
- Benevolo, L., *Storia della città. 3: La città moderna*, Laterza, Roma, Bari, 1975 (レオナルド・ベネヴェーロ, 佐野敬彦・林寛治訳『図説 都市の世界史4 近代』, 相模書房, 1985) .
- Benevolo, L., *Storia dell'architettura moderna*, Laterza, 1966 (レオナルド・ベネヴェーロ, 武藤章訳, 『近代建築の系譜 (上) (下)』, 鹿島出版, 1978, 79) .
- Bini, M., *I Ricordi di Architettura. Disegni e Progetti alla fine del XIX secolo. Appendice documentaria schedatura dei disegni*, Alinea, Firenze, 1990.
- Bonelli Conenna, L., Brilli, A., Cantelli, G. (a cura di), *Il paesaggio toscano. Storia e rappresentazione*, Silvana Editoriale, Firenze, 2004.
- Borsi, F., *L'architettura dell'Unità d'Italia*, Firenze, 1966.
- Borsi, F., *La capitale a Firenze e l'opera di Giuseppe Poggi*, Colombo Editore, Firenze, 1970.
- Borsi, F., Godoli, E. e altri (a cura di Orefice, G.), *Architettura in Toscana dal periodo napoleonico allo stato unitario*, UNIEDIT, Firenze, 1978.
- Cardini, G., *Le ville di Firenze di là d'Arno*, second edit, Vallecchi, 1965, original printed in 1954.
- Cresti, C., *Firenze, capitale mancata. Architettura e città dal piano Poggi a oggi*, Electa, Milano, 1995.
- Cresti, C., Cozzi, M., CarPELLI, G., *Il Duomo di Firenze 1822-1887. L'Avventura della facciata*, il Bossolo, Firenze, 1987.
- Cresti, C., Zangheri, L., *Architetti e ingegneri nella Toscana dell'Ottocento*, UNIEDIT, Firenze, 1978.
- Carocci, G., *Firenze scomparsa*, ristampa dell'edizione originale Firenze 1897, Multigrafica Editrice, Roma, 1985.
- Cesati, F., *Firenze sparita nei 120 dipinti di Fabio Borbottoni*, Newton Compton Editori s.r.l., 2003.
- Cesati, F., *La grande guida delle strade di Firenze*, Newton Compton editori, Roma, 2003.
- Coppini, Romano Paolo, *L'opera politica di Cambray-Digny, Sindaco di Firenze capitale e Ministero di Firenze*, Roma, Storia e Letteratura, 1975.
- Cresti, C. (a cura di), *Il centro di Firenze dalle modificazioni ottocentesche ad oggi*, in *I centri storici della Toscana*, Milano, Silvana, 1977, pp. 60-78.
- Cresti, C., Orefice, G., C. Romby, G., *Analisi storica della vicenda progettuale e realizzativa dei pubblici macelli e del mercato del bestiame*, in *Museo Nazionale di Storia Naturale a Firenze. Ipotesi di insediamento*, Firenze, Alinea, 1987, pp. 129-150.
- Detti, E., *Firenze scomparsa* (con la collaborazione di Tommaso Detti), Vallecchi Editore, Firenze, 1970.
- Fanelli, G., *Anton Hautmann. Firenze in Stereoscopia*, Octavo, Firenze, 1999.
- Fanelli, G., *Firenze Architettura e città*, Vallecchi editore, Firenze, 1973.
- Fantozzi Micali, O., *La città desiderata. Firenze come avrebbe potuto essere: progetti dall'Ottocento alla seconda guerra mondiale*, Alinea, Firenze, 1992.
- Fei, S., *Firenze 1881-1898: la grande operazione urbanistica*, Officina Edizioni, Roma, 1977.
- Fei, S., *Nascita e sviluppo di Firenze città borghese*, G. & G., Firenze, 1971.
- Fei, S., Sica, G. G., Sica, P., *Firenze. Profilo di storia urbana*, Firenze, Alinea, 1995.
- Focardi, P., *Geological considerations about the landslide of Monte alle Croci*, in «Studi di geologia applicata e geologia dell'ambiente», n.23, Firenze 1991.
- Insolera, I., *Le città nella storia d'Italia. Roma*, Editori Laterza, Bari, reprinted in 2002, org. 1980.
- Kirk, T., *The Architecture of Modern Italy, vol. 1. The Challenge of Tradition 1750-1900*, Princeton Architectural Press, 2005.
- Manetti, R. e Pozzana, M., *Firenze le porte dell'ultima cerchia di mura*, CLUSF Cooperativa Editrice

- Universitaria Firenze, Firenze, 1979.
- Mori, G., Roggi, P. (a cura di), *Firenze 1815-1945. Un bilancio storiografico*, Le Monnier, 1990.
 - Orefice, G., *Spazio urbano e architettura nella Toscana napoleonica*, Edifir, Firenze, 2002.
 - Paolini, C., *Il sistema del verde: Il viale dei colli e la Firenze di Giuseppe Poggi nell'europa dell'ottocento*, Edizioni Polistampa, Firenze, 2004.
 - Pozzana, Mariachiara, Firenze, *Giardini di città*, FMG Studio Immagini, Firenze 1994.
 - Pozzana, Mariachiara, *Greenways. Percorsi verdi nell'Oltrarno di Firenze*, Edizioni Polistampa, Firenze, 2003.
 - Renouard, Yves, *Histoire de Florence*, Press Universitaires de France, Paris, 1964, (translated by Felice Del Beccaro, *Storia di Firenze*, Remo Sandron, Firenze, 1970).
 - Ricci, G., D'Amia, G. (a cura di), *La cultura architettura nell'età della Restaurazione*, Mimesis,
 - Rinaldi, Alessandro, *Sul limitare della città: storia e vita delle mura urbane a Firenze tra Seicento e Ottocento*, Ente Cassa di Risparmio di Firenze, Firenze, 2008.
 - Trotta, G., *Palazzo Poniatowsky Guadagni. L'architettura, l'arte, il verde in un quartiere di Firenze*, Messaggerie Toscane, Firenze, 1990.
 - Trotta, G., *San Salvatore al Monte: antiquae elegantiae per un'acropolis laurenziana*, Becocci, Firenze, 1997.
 - Zangheri, L., *Ville della provincia di Firenze*, Rusconi, Milano, 1989.
- 岡崎文彬『ルネサンスの楽園』, 養賢堂, 1993.
 - 横手義洋『イタリア建築の中世主義—交錯する過去と未来』, 中央公論美術出版, 2009.

<インフラ・土木技術に関して>

(1914年まで)

- [Cantagalli, A.], *Sull'Acquedotto Fiorentino*, Stamperia del Monitore Toscano, Firenze, 1862.
- Chierici, L., *Le Cascine e il Viale de' Colli*, Tipografia Eredi Botta, Firenze, 1871.
- Fossombroni, V., *Ponte di ferro sull'Arno presso la Porta S. Niccolò a Firenze*, considerazioni idrauliche, Le Monnier, 1851.
- Raddi, A., *Illuminazione pubblica e privata. Gas e luce elettrica*, Lit.-Tip. G. Abbiati, Milano, 1898.
- Raddi, A., *La questione dell'acqua potabile a Firenze*, Tip. e Lit. degli Ingegneri, Milano, 1905.
- Raddi, A., *Le riseve d'acqua per l'irrigazione agricola*, Tip. E. Cipriani, Pescia, 1905.
- Raddi, A., *Il problema dell'acqua potabile per Firenze in base ai provvedimenti adottati dal Comune e ai relativi studi per l'approvvigionamento idrico della città*, Tip. Pietro Agnelli, Milano, 1908.

(1915年以降)

- Ottati, D., *Acquedotto di Firenze. Dal 1860 ad oggi*, Nuovedizioni Enrico Vallecchi, Firenze, 1983.
- Ottati, D., *Il ventre di Firenze. Storia della fognatura dell'epoca romana ad oggi*, Nuovedizioni Enrico Vallecchi, Firenze, 1988.

<カタストに関して>

- Conti, E., *I catasti agrari della Repubblica fiorentina e il catasto particellare toscano (secoli XIV-XIX)*, Roma, 1966.
- Bellinazzi, A., Martelli, F., “Le tavole di stima dei fabbricati nel catasto generale della Toscana: una fonte per la ricostruzione dell'assetto urbano di Firenze nella prima metà dell'Ottocento”, in *Gli archivi per la storia dell'architettura*, Roma, Ministero per i Beni e le Attività culturali, 1999, vol. I., pp.54-74.
- Biagioli, G., *L'agricoltura e la popolazione toscana all'inizio dell'Ottocento*, Pisa, 1975.

- La toscana dal granducato alla regione. Altante delle variazioni amministrative territoriali dal 1790 al 1990*, Firenze, 1992.
- Ludovico, A., *Rilevamento architettonico e topografico: metodi e strumenti nei secoli 18° e 19° : i catasti geometrici preunitari e la misura generale del granducato di Toscana*, Roma, kappa, 1991.
- Zangheri, R., *I catasti*, in *Storia d'Italia*, Einaudi, Torino, 1973, vol. IV, I documenti, tomo I. (pp.759-806).

<社会・政治的背景に関して>

(1914年まで)

- Guida di Firenze e suoi contorni con vedute e nuova pianta della città*, Andrea Bettini Librajo-Editore, Firenze, 1868.
- Pesci, Ugo, *Firenze capitale 1865-1870*, R. Bemporad & Figlio, 1904.
- Weld, Charles Richard, *Florence, the New Capital of Italy*, Longmans Green and co., London, 1867.

(1915年以降)

- Accademia dei Georgofili*, Polistampa, Firenze, 2009.
- Antonetti, Pierre, *Histoire de Florence*, Presses universitaires de France, 1983, (アントネッティ・ピエール, 中島 昭和・渡部 容子訳『フィレンツェ史』, 白水社クセジュ)
- Bigliazzi, Lucia e Bigliazzi, Luciana (a cura di), *I Georgofili per l'Unità d'Italia: 1848-1914*, saggio storico documentario (mostra, 31 marzo-18 maggio 2011, Accademia dei Georgofili, Firenze, 2011).
- Bigliazzi, Lucia e Bigliazzi, Luciana (a cura di), *Di alcuni illustri accademici, 1753-1859*, catalogo della mostra, Firenze, 6 giugno-30 settembre 1986, Firenze, 1986.
- Bigliazzi, Lucia e Bigliazzi, Luciana (a cura di), *Fiumi, inondazioni e idraulica pratica: dagli archivi dei Georgofili*, catalogo della mostra, Firenze, 3-8 aprile 1995, Firenze, 1995.
- Bigliazzi, Lucia e Bigliazzi, Luciana (a cura di), *I Georgofili per l'Unità d'Italia: 1848-1914*, saggio storico documentario (mostra, 31 marzo-18 maggio 2011, Accademia dei Georgofili, Firenze, 2011).
- Brilli, A., *Il viaggio della capitale. Torino, Firenze e Roma dopo l'Unità d'Italia*, UTET Libreria, Torino, 2010.
- Camerani, S., *Cronache di Firenze Capitale*, Leo S. Olschki, Firenze, 1971.
- Dentler, C. L., *Famous foreigners in Florence 1400-1900*, Bemporad Marzocco, Firenze, 1964.
- Duggan, Christopher, *A Concise History of Italy*, Cambridge University Press, 1994, (クリストファー・ダガン, 河野肇訳『イタリアの歴史』, 創土社, 2005)
- Hibbert, C., *Florence*, Daivid Highm Associates Ltd., London, 1993, (クリストファー・ヒバート『フィレンツェ (上)(下)』, 原書房, 1999).
- J. Woolf, Stuart, *A History of Italy 1700-1860*, 1979, (スチュアート・ジョーゼフ・ウルフ『イタリア史 -1700-1860』, 叢書・ユニベルシタス, 2001)
- Kirk, Terry, *The Architecture of Modern Italy volume 1. The Challenge of Tradition 1750-1900*, Princeton Architectural Press, 2005.
- Mori, G. (a cura di), *La Toscana*, in *Storia d'Italia. Le regioni dall'Unità a oggi*, Einaudi, Torino, 1986.
- Renouard, Yves, *Histoire de Florence*, Press Universitaires de France, 1964, (translated by Felice Del Beccaro, *Storia di Firenze*, Remo Sandron, Firenze, 1964).
- *Sommario storico delle famiglie celebri toscane*, vol. II, Ulisse Diligenti, Firenze, 1868.
- Spadolini, G., *Firenze capitale con documenti inediti e un'appendice di saggi su Firenze nell'Unità*, Felice Le Monnier, Firenze, 1967.
- Spadolini, G., *Firenze capitale gli anni di Ricasoli*, Cassa di Risparmio di Firenze, Firenze, 1979.
- Spadolini, G., *Firenze fra '800 e '900. Da Porta Pia all'età giolittiana*, Le Monnier, 1983.
- Spadolini, G., *Firenze mille anni*, Cassa di Risparmio di Firenze, Firenze, 1977.
- SVIMEZ: Associazione per lo sviluppo dell'industria nel mezzogiorno, *Un secolo di statistiche italiane nord e sud 1861-1961*, Stabilimento Tipografico Fausto Failli, Roma, 1961.

- Vannucci, M., *Storia di Firenze in Fotografia dal 1870 al 1990*, Newton Compton editori s.r.l., 1990.
- 岡本詔治『イタリア不動産法の研究』, 晃洋書房, 2006.
- 北原敦編『イタリア史』, 山川出版社, 2008.
- 北村暁夫, 伊藤武編『近代イタリアの歴史』, ミネルヴァ書房, 2012.
- 北村暁夫, 小谷眞男編『イタリア国民国家の形成—自由主義期の国家と社会』, 日本経済評論社, 2010.
- 小針由紀隆『ローマが風景になったとき』, 春秋社, 2010.
- 小林勝, 「カフェ《ジュッペ・ロッセ》とフィレンツェの雑誌文化『カンポ・ディ・マルテ』を中心に」, 『日伊文化研究』, 46号, 2008.
- 堺憲一『近代イタリア農業の史的展開』, 名古屋大学出版会, 1988.
- 清水廣一郎, 北原敦, 『概説イタリア史』, 有斐閣選書, 1988.
- 藤澤房俊『第三のローマ—イタリア統一からファシズムまで』, 新書館, 2001.
- 藤澤房俊『大理石の祖国』, 筑摩書房, 1997.
- 本城靖久『グランド・ツアー』, 中公文庫, 1994.
- 松浦保, 伊沢久昭, 上原一男, 竹内啓一, 林亮『イタリア経済』, 東洋経済新報社, 1968.
- 森田鉄郎, 重岡保郎『イタリア現代史』, 山川出版社, 1977.

<イタリア以外>

- Giedion, S., *Space, Time and Architecture*, 1941, (ジークフリート・ギーディオンの, 太田實『空間 時間 建築』, 丸善株式会社, 1969).
- Howard, S., *Haussmann: Paris Transformed*, George Braziller, New York, 1971, (ハワード・サールマン, 小沢明訳『パリ大改造—オースマンの業績』, 井上書院, 1983)
- Lavedan, P., *Histoire de l'Urbanisme à Paris*, Hachette, Paris, 1975, (ピエール・ラヴダン, 土居義岳訳『パリ都市計画の歴史』, 中央公論美術出版, 2002).
- S. E. ラスムッセン, 兼田啓一訳『近代ロンドン物語 都市と建築の近代史』, 中央公論美術出版, 1992.
- 新谷洋二, 越澤明 (監修)『都市をつくった巨匠たち—シティプランナーの横顔』, ぎょうせい, 2004.
- 杉本俊多『バルリン—都市は進化する』, 講談社現代新書, 1993.
- 松井道昭『フランス第二帝政下のパリ都市改造』, 日本経済評論社, 1997.
- 西村幸夫編『都市美』, 学芸出版社, 2005.

初出一覧

第1章 建築家ジュゼッペ・ポッジのフィレンツェ拡大事業における計画範囲：

會田涼子「建築家ジュゼッペ・ポッジのフィレンツェ拡大事業における計画範囲」日本建築学会計画系論文集, 第76巻第667号, 2011年, pp. 1701-1709

第2章 ミケランジェロ広場の形態と機能：

會田涼子「建築家ジュゼッペ・ポッジによるミケランジェロ広場の機能と形態—フィレンツェの近代都市改造に関する研究」日本建築学会計画系論文集, 第77巻第678号, 2012年, pp. 1967-1972

第3章 コッリ大通りの路程と機能：

會田涼子「建築家ジュゼッペ・ポッジによるコッリ大通りの路程と機能—フィレンツェの近代都市改造に関する研究」日本建築学会計画系論文集, 第78巻第688号, 2013年, pp. 1415-1421

卷末資料

巻末資料 - 1 *Viale dei Colli. Servitù Attive e Passive e Disposizioni Necessarie alla Conservazione di quel Passeggio* に記述されている建築条件（建築配置、制限に関する部分を抽出），pp. 30-114.

<ラッツェーリ・エ・チャンピ社から譲渡された土地>

区画	購入者	譲渡人	面積(m ²)	譲渡契約日	場所(図5-3の番号)	条件	条件の契約日	建築物	鉄柵の位置	契約外の建築物	備考
1	グスタヴァ・オ・オッペンハイム	ラッツェーリ・チャンピ社	??864.40	1869.12.?	⑯	・メルライア水道の地役権(19/1000 リットル/秒の水):A. カンタガツリの報告書をもとに決定する。	1868.12.31	-	-	-	-
2	-	ラッツェーリ・チャンピ社	-	--	-	-	-	-	-	-	-
3	ヴァットーリア・ミラフィオーリ・ネッリ・スピリ侯爵夫人	ラッツェーリ・チャンピ社	6923.12	1870.4.7	⑱	-	-	-	-	-	-
4,5,6	キアヴァツチ・モンテコルボリ・ベイロン	フィレンツェ市	4694.53	1870.4.22	-	-	-	-	-	-	-
4	エジスト・キアヴァツチ	ジュリアーノ・チャンピ	2,880	1873.5.30	-	・敷地を鉄柵で囲うこと	-	-	-	-	・修道士の農家(elle Monache)を解体
5	アンジェロ・モンテコルボリ	ジュリアーノ・チャンピ	-	1873.8.1	-	-	1868.12.31	・建築家カルデリーニにヴィラと鉄柵を要望。2つの建物をテラスで繋ぐ案があった。結局、小ヴィラ、鉄柵(出入り口の鉄柵厚含む)を建設。	ミケーレ・デ・イ・ランド通り	・厩舎は高さ6m以内という規定内であったので、眺めを遮らないとして承認された。	-
6	マツジミリアーノ・マラグーティ	アンジェロ・モンテコルボリ	-	1873.8.1	-	-	-	-	-	-	-
	ジュゼッペ・ベイロン	マツジミリアーノ・マラグーティ	-	1874.8.14	-	-	-	-	-	-	-
7	レオポルド・レニョーリ	ラッツェーリ・チャンピ社	3,000	1870.4.2	ミケーレ・デ・イ・ランド沿いの土地 ⑳	・小ヴィラと馬屋の建設、水路の整備	1868.12.31	・小ヴィラ、鉄柵(1870.4.2の契約どおり)	-	-	・厩舎はまだ建設されていないが、今後観察する必

8	ジェゼツペ・マツツアンテイ	ラツツエーリ・チャンピ社	2,400	1869.1.9		西側がインベリアール通り面に面した土地。南側が小道、東がラツツエーリ・チャンピの土地、北がダンテ・ダ・カステイリオール通り ^⑩	・2年以内にヴァイラ形式の建物を、コムーネが承認した設計計画にもとづいて建設せねばならない。 ・石のベンチがついた壁の上に鉄柵を建てる。	1868.12.31		ダンテ・ダ・カステイリオール通り		要がある。
9	ロンダワー・スパワー・ズ・ティヒラム・パワーズ	ラツツエーリ・チャンピ社	1,775	????.1.25		南:バルディノッティの土地、小道、東:ラツツエーリ・チャンピの土地、北:ダンテ・ダ・カステイリオール通り ^⑩	・庭園付き小ヴァイラの建設。 ・東南北面を石のベンチがついた壁で囲う。	1868.12.31		ダンテ・ダ・カステイリオール通り	・花植物のための小屋を増築してよいか要請→許可 ・バルディノッティの土地を購入し、インベリアール通りの水路を閉じるために鉄柵を認めるよう要請→許可	
10	カルロ・マツツジョーリ、ジュリアーノ・チャンピ	ジェラツシ・ラツツエーリ、リツカルド・チャンピ	5,110	1869.2.22		南:バルディノッティの土地、小道、東:ラツツエーリ・チャンピの土地、北:ダンテ・ダ・カステイリオール通り、西:パワーズの土地 ^⑩	・2年以内にコムーネに提出したデザインで小ヴァイラを建設する。 ・ダンテ通り沿いにベンチのある鉄柵、壁で囲う。	1868.12.31		ダンテ・ダ・カステイリオール通り		
-	アルフレード・イッポストン、パワーズ	カルロ・マツツジョーリ、ラツツエーリ・チャンピ社	-	1869.5.15						インベリアール通り	・小ヴァイラ、鉄柵 ・歩道沿いに入り口の鉄柵の許可を得た(1874.6.26) バルディノッティから購入した小区画の土地へのアクセス・コムーネはこれを鉄柵で囲うよう義務付けている。	

11	フランチェスコ・チャンピ	ラッツェーリ・チャンピ社	1,700	1870.12.31	ダンテ・ディ・カステイリオーネ通り沿い		1868.12.31	・小ヱイラ、鉄柵	・後に既存建物の裏側に小さい建物を建てたが、これは眺めを遮るとして、却下している。	
-	ターミンガム・ジュゼップ・レオナルド	フランチェスコ・チャンピ	-	1873.2.21	-					
12	リツカルド・チャンピ	ラッツェーリ・チャンピ社	3,543.18	1870.12.31	東: ジェラツィン・ラツェーリ、南: ルイーザ・イッポストン、西: ラツェーリ・チャンピ社、北: ダンテ・カステイリオーネ通り ^④		1868.12.31	・小ヱイラ、農家を縮小、鉄柵	・小さい井戸があり、人工の給水管を通して王室の給水管からリカルド・チャンピの貯水池まで接続	
13	ジュゼッペ・ラツァーロ、ドン・ラツァーロ・ラツァーリ	ラッツェーリ・チャンピ社	1678.58	1870.5.3				・2つの区画の庭園、鉄柵を統合		
13-a	ジュゼッペ・ラツァーロ、ドン・ラツァーロ・ラツァーリ	ガエターノ・ロマネッリ	688.2	1870.5.3			1868.12.31			
13-b	ジュゼッペ・ラツァーロ、ドン・ラツァーロ・ラツァーリ	ラッツェーリ・チャンピ社	990.38	1870.12.15			1868.12.31			
14	ジュリアーノ・チャンピ	ラッツェーリ・チャンピ社	?	1870.12.31			1868.12.31	・小ヱイラ、鉄柵		ベネデット・ダ・フォイアーノ通り
15	ファウステイノ・チャンピ	ラッツェーリ・チャンピ社	?	1870.12.31	ベネデット・ダ・フォイアーノ通り沿い	芸術家のためのスタジオは制限された		・小住居、仮囲い		

16	ヒラム・ハワーズ	ラッツェーリ・チャンピ社	1445.58 (1296.11+ 149.47)	1870.4.26		(売却者)建設を強要された際に発生する迷惑や損害を補償せねばならない(買取者)小ヴィラ、庭、石のベンチのある簡易な鉄柵の建設	1868.12.31	新しい通り沿い		
17	フランチェスコ・チャンピ	ラッツェーリ・チャンピ社	1004	1874.3.3	ベネデット・ダ・フォイアーノ通り沿い	ベネデット・ダ・フォイアーノ通り沿いに鉄柵と平行した壁(隣と共有壁)設置	1868.12.31	ベネデット・ダ・フォイアーノ通り		
18	ロンバルディ・V・バラミッテン	ラッツェーリ・チャンピ社	1591.42	1870.4.14	ベネデット・ダ・フォイアーノ通り沿い ⑯			・小ヴィラ、囲い、植物用の小さい小屋		
19、 20	フェデリコ・イニスキ、ルイージ・ソイニスキ	ラッツェーリ・チャンピ社	3561(Federe, 1554, Luigi 2071)	1870.5.6	ティヴォリ、バルディノッティの土地、ロンバルディ・バラミッテンの土地、ベネデット・ダ・フォイアーノ通り面に面する ⑰			・ベネデット・ダ・フォイアーノ通りとティヴォリ沿いの2面を鉄柵で囲い、庭に囲まれた建物を建設	・小さい住居と湧き水の貯水池(国所有、現在はコム・ネが権利を持っている)があった	

＜国有地からラッツェーリ・エ・チャンピ社へ売却された後に分譲された土地＞

区画	購入者	譲渡人	譲渡契約日	場所	条件	建設物	契約外の建設物	備考
1	エンリコ・ボージ	リッカルド・チャンピ	1869.9.28	マキアヴェッリ大通り、ミケーレ・ディ・ランド通り沿い ⑨または⑮		・デザイン承認案から厩舎を追加		・鉄柵はコム・ネとLCが決定
2	トマーゾ・ボール	リッカルド・チャンピ	1868.5.2	ダンテ・ダ・カステイリオネ通り、ミケーレ・ディ・ランド通り沿い	・チャンピは契約で売却時に都市調整計画のすべての条件に合うことを			

				⑩または⑪	宣言			
3	イッポストン・パワーズ	リックアルド・チャンピ	1868.5.2	フアリーナ・デッリ・ウベルティ 通り、ダンテ・ダ・カスティリオ 一帯通り沿い ⑤		・小ヴィラ、庭、通り沿いに鉄柵		・彫刻アトリエの小さい建物を申請
4	フランチェスコ・チャンピ	リックアルド・チャンピ	1868.5.29					
	スガーナ	フランチェスコ・チャンピ	1868.11.23				・厩舎を申請→許可 ・小さい温室が建てられたが、これは眺めを妨害しないのでよしとされた	
	レイジー・ルーティ	スガーナ	?					
	ナターレ・アゲモ	ルイジー・ルーティ	1872.1.10					
5	サルヴァドレ・レ・ピアンキ	ラッツェーリ・チャンピ社	1868.1.9/1870.12.2			・小ヴィラ		
6	カルロ・フラー	ラッツェーリ・チャンピ社	1867.8.31	モナケ農地だったところ		・アトリエ利用のため		・土地のコンデンションがよくない
7	レオポルド・パルケッティ、フランチェスコ・ファンファニー	リックアルド・チャンピ	1868.3.17		・ボッジョ・インペリアーレ通り沿いに壁を立ち上げないこと			
8	ジェラジオ・ラッツェーリ	リックアルド・チャンピ	1870.12.31	北：ファヴロー、ラッツェーリの土地、東：フアリーナ・デッリ・ウベルティ、南：パルケッティの土地、西：インペリアーレ通り ④	・土地を交換		・厩舎を申請	・既に小ヴィラが建てられていた
9	ジェラジオ・ラッツェーリ	ラッツェーリ・チャンピ社				・小ヴィラ、厩舎		
	ジュリオ・ファヴロー	ジェラジオ・ラッツェーリ						
	ジャコモ・マリエ	ジュリオ・ファヴロー	1871.7.13					
10	ジェラジオ・ラッツェーリ	国家		マリアヴェッテ通り沿い、モナケ農地だったところ ③	・小ヴィラ、厩舎つき、植物で満たすこと		・ボッジョ・インペリアーレ通りにも鉄柵申請→許可	

<ローマ門からサン・レオナルド通りの土地所有者の地役権に関して>

区画	土地所有者	内容
Ω	クーザ王子へ	ヴァイ建設のためのプレゼンテーションで、大通りからの後退距離を8mから6mにした。
A,B	アルフレード・イッポストン	ポットジョ・インベリアーレ大通りとベネデット・ダ・フオイアーノ通り沿いにシーマのある石造の壁から鉄柵の立ち上がりのある囲いをつけねばならないとして、簡易な壁の立ち上りを拒否した。
C,D	リバゼーレ、バルディノッティ	
I	オラツィオ・ボージ	
L,M,N,O,P,Q,R,S	ピエトロ・モレッリ	<p>a. MからNまで鉄柵をすること。歩道から4m以上はなす。高さ1.8m以下。</p> <p>b. LからMまでの残地に防備となるものを建てる。鉄柵と同様の生垣を。眺望を守るために1.8mの高さで。後退距離4m</p> <p>d. コムーネの同意なしに大通り沿いに入り口または入り口または門扉を設けてはならない。G, O, P, Q, R, Sの土地を囲う方針において、大通りとできる限り調和するように計画すること</p>
R,S	ボンチャニーニ・チェーザレ	
T,U,V	カバッチ兄弟	

巻末資料ー2 ローマ門からサン・レオナルド通りまでのコッリ大通り周辺のヴィラ
(番号は第5章の図5-3、4と対応)

Cardini, G., *Le ville di Firenze di là d'Arno*, 1954.

Zangheri, L., *Ville della provincia di Firenze*, 1989 を参照。

航空写真は Bing, その他特記のない写真は筆者撮影。

1. イスティトゥーティ・パリターリ



建設年代：1865-73 年の間

設計者：？

用途：住居（現在は教育施設）

建築類型：ブロック連結型

環境的類型：庭園付独立住居

階数：4層と3層の連結



マキャヴェッリ通りから



マキャヴェッリ通りから



マキャヴェッリ通りから



ポツジョ・インペリアーレ大通りから



ポツジョ・インペリアーレ大通りから

2. ヴィラ・ラッツェーリ・トリゴーナ



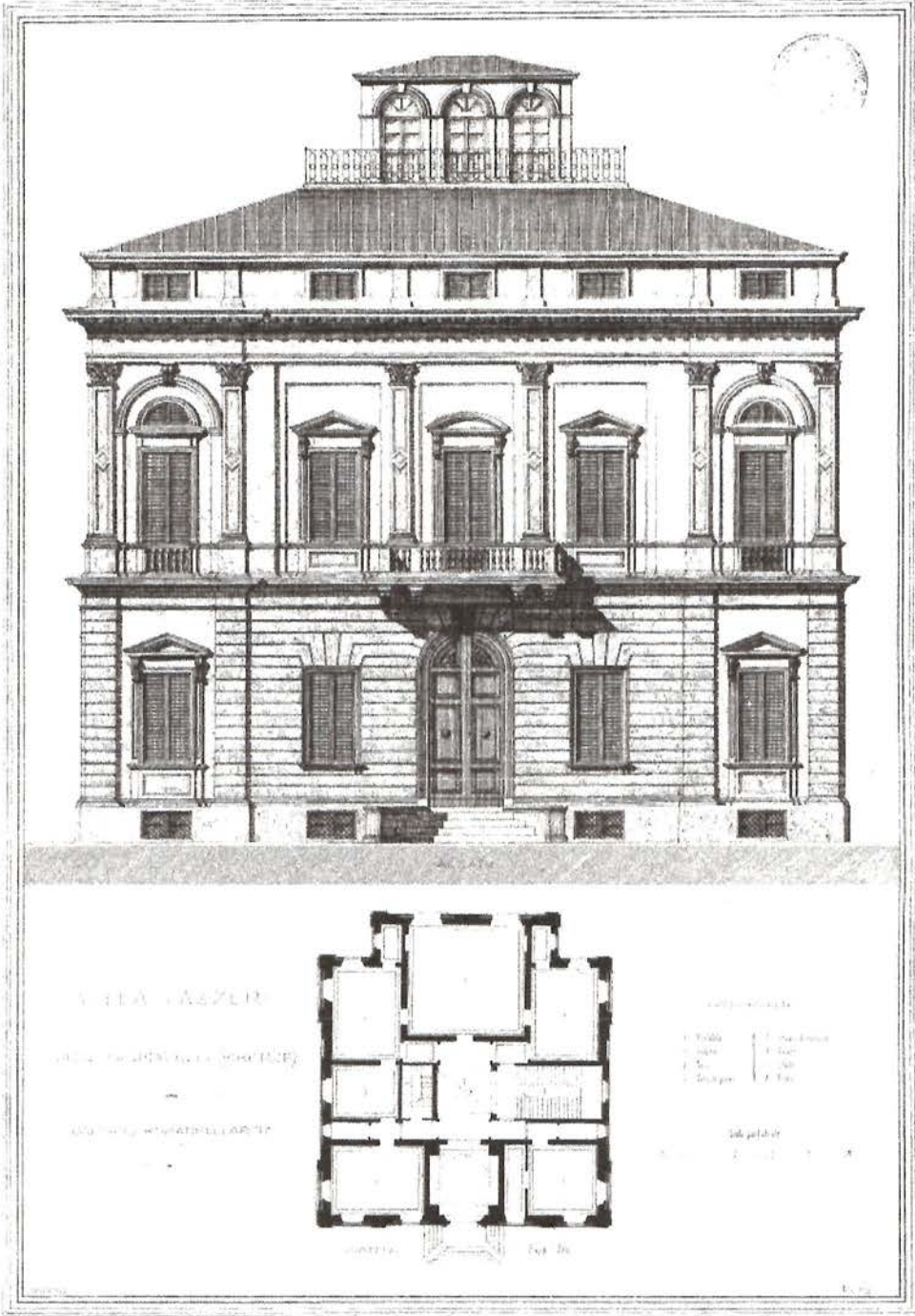
建設年代：1865-73年の間
設計者：ガエターノ・ロマネッリ
用途：ヴィラ（現在は企業の事務所）
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3層+物見塔



マキャヴェッリ通りから



ポッジョ・インペリアーレ大通りから



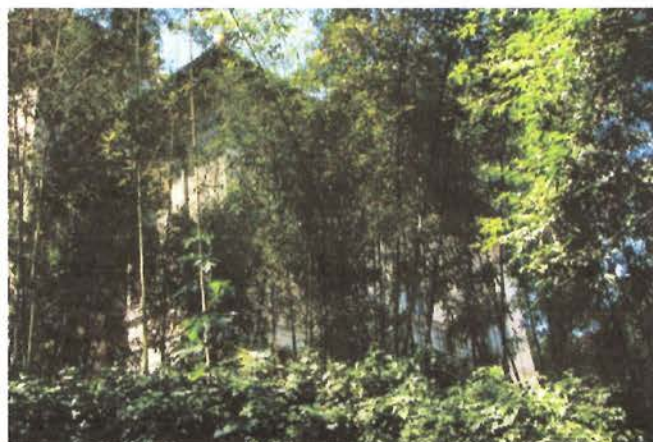
3. ヴィラ・マキャヴェッリ



建設年代：1865-73年の間
設計者：？
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3層



マキャヴェッリ通りから



マキャヴェッリ通りから

4. ヴィラ・ボンジャーニ・ペッキオーリ



建設年代：1865-1884年の間

設計者：？

用途：ヴィラ

建築類型：ブロック型

環境的類型：庭園付独立住居

階数：3層

植樹：ローリエの垣根



ファリナータ・デッリ・ウベルティ通りから（北側）



ファリナータ・デッリ・ウベルティ通りから（南側）

5. 小ヴィラ・パワーズ・リ・アッローリ



建設年代：1869-73 年の間
設計者：？
用途：ヴィラ、アトリエ
建築類型：ブロック連結型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3層と3層



ファリナータ・デッリ・ウベルティ通りと
ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りの角から



ポッジョ・インペリアーレ大通りから



ポッジョ・インペリアーレ大通りから

6. 名称不明

ファリナータ・デッリ・ウベルティ7番地



建設年代：1865-73年の間
設計者：？
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：2層



ファリナータ・デッリ・ウベルティ通りから



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから

7. 名称不明

ファリナータ・デッリ・ウベルティ1番地



建設年代：1865-73年の間
設計者：？
用途：アトリエのアネックス（ヒラム・パワーズ所有）
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：2層



ファリナータ・デッリ・ウベルティ通りから



ファリナータ・デッリ・ウベルティ通りから



ファリナータ・デッリ・ウベルティ通りから

8. クラシック・ホテル

マキャヴェッリ通り 23 番地



建設年代：1869-73 年の間
設計者：？
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：2 層



マキャヴェッリ通りから



マキャヴェッリ通りから



西側立面

9. ヴィラ・ラ・テラツァ

マキャヴェッリ通り 21 番地



建設年代：1869-73 年の間
設計者：？
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：2 層



マキャヴェッリ通りから



マキャヴェッリ通りから



ミケーレ・ディ・ランド通りから

10. ヴィラ・アルベルティーナ

ダンテ・ダ・カスティリオーネ通り8番地



建設年代：1865-73年の間
設計者：？
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：2層
植樹：
改築箇所：プール設置（1940-50s）、最上階の付け柱とパラペットは破損のためレンガ材で取り替えられた。
建設以前の土地は修道士の農地 Podere detto "delle Monache" だったが、ラツェーリ・チャンピ社から国が購入、その後コムーネに無償で譲渡された。



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから

11. ヴィラ・ロマネッリ

ダンテ・ダ・カスティリオーネ通り6番地



建設年代：1865-73年の間
設計者：ジュゼッペ・マッツァンティ
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：2層
植樹：モミ、トキワガシ、セイヨウハナズオウ、ヤナギ、ローリエの垣根
改築箇所：
所有者：マッツァンティ (-1893年)、ロレンツォ・ロマネッリ (1920s)、ニッコリーニ (1940s)、エルダ・ファジョーリと企業家カスチニョーリ (1960s)、賃貸で医師ジョルジョ・コンチャーニ (-1975年)、現在は不動産会社の事務所



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから



ミケーレ・ディ・ランド通りから



ミケーレ・ディ・ランド通りから

12. ヴィラ・レニョーリ・ピニャーティ・モラーノ

ミケーレ・ディ・ランド通り7番地



建設年代：1867-73年の間
設計者：ラッツェーリ・チャンピ社
用途：ヴィラ
建築類型：エクセドラ付ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3層
植樹：モミ、トキワガシ、ローリエの垣根
改築箇所：ガレージ設置（1920s）
所有者：ナターレ・アゲモ（土地）、レオポルド・レニョーリ（居住者）→息子ジョルジョと母アンナ・マルファンティが相続→スイス人ジョルジョ・シュラッター（1893年）→チネッリ→モデナ人カルロ・ピニャッティ・モラーノ（1922年）



ミケーレ・ディ・ランド通りから（正面）(Zangheri, p.428)



ミケーレ・ディ・ランド通りから（北側）



ミケーレ・ディ・ランド通りから（南側）

13-14. ヴィラ・ダヴィッドソン、ヴィラ・セルドン・ゴス ミケーレ・ディ・ランド通り 3/5 番地



建設年代：1865-84 年の間
設計者：？
用途：ヴィラ
建築類型：2ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3層
植樹：シナノキ、カキ、ツバキ、アザレア
改築箇所：
1920年代初頭から1930年代にかけてロバート・ダヴィッドソンが滞在し、『フィレンツェ史』を執筆。その後、マッジョ氏へ渡りペンションへ。1960年代にはホテルとなる。



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから（北側の建物）



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから（南側の建物）

15. 名称不明

マキャヴェッリ大通り15番地/ミケーレ・ディ・ランド通り1番地



建設年代：1865-84年の間
設計者：？
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3層



マキャヴェッリ通りから



ミケーレ・ディ・ランド通りから

16. 名称不明

マキャヴェッリ大通り 17/19 番地



建設年代：1865-84 年の間
設計者：？
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：公園内独立住居
階数：3 層



ボーボリーノ庭園から

17. ヴィラ・フランケッティ・ナルディ

マキャヴェッリ大通り 17/19 番地



建設年代：1865-1868 年の間
設計者：？
最初の所有者：バローニ・フランケッティ家（音楽家のアルベルトの名）
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3層
植樹：イトスギ、オーク、トキワガシ、プラタナス
後の所有者：第二次世界大戦で抵当に入れられ、リヴォルノのジュスティ家、画家エンツォ・ファラオーニが賃貸する。1960年代には放置されていたが、不動産屋カルロ・アルベルトが引き継ぎ、その後医師ナルディが購入し、修復を行った。



北正面 (Zangheri, p.404)



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りとマキャヴェッリ通りの角



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから（背面）



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから (西側)



公園内のチロル風小屋 (Zangheri, p.404)

18. ヴィラ・デッラ・ゲラルデスカ・デッラエロナウティカ

ボボリーノ通り 13/15 番地



建設年代：1865-1868 年の間
設計者：？
最初の所有者：首都時代、ヴィットーリオ・エマヌエーレ 2 世の愛人ミラフィオーリ婦人が滞在していたとされる。
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3 層
植樹：アカシア、アシ、トキワガシ
所有者：1900 年代初めから 40 年代まではゲラルデスカ家（後にアレッサンドロ・バルトリーニ・サリンベーニと再婚）と婚姻関係のあったスイス人エマ・フォン・ウィラーが購入。通路は国防省の所有、庭園側は財務省所有）。1943 年の勅令で収用されるが、1955 年には軍人の家に渡る。



ボボリーノ通りとマキャヴェッリ大通りの角



航空写真 (Google)



正面 (Zangheri, p.406)

19. ヴィラ・オッペンハイム

マキャヴェッリ大通り 18 番地



建設年代：1872 年完成
設計者：ピエトロ・コンパリーニ・ロッシ（庭園はアッティロ・ブッチ）
（施主は当初ジュゼッペ・ボッジに依頼しようとしていたが、都市改造で多忙のためかなわなかった）
最初の所有者：グスターヴォ・オッペンハイム（鉄道建設に投資した銀行家カルロ・フェンツイの姪ウジェニアと結婚）
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3 層

1876 年にはナポレオン 3 世の妻ウジェニー・ド・モンティジョ、フォン・メックが滞在。その後、エジディオ・コーラが購入し、その息子ジュリアーノ・コーラが所有している。1967 年と 1976 年に大規模な修復を行い、1980 年代にグランド・ホテルとして開業。



マキャヴェッリ通りから（北側、正面）



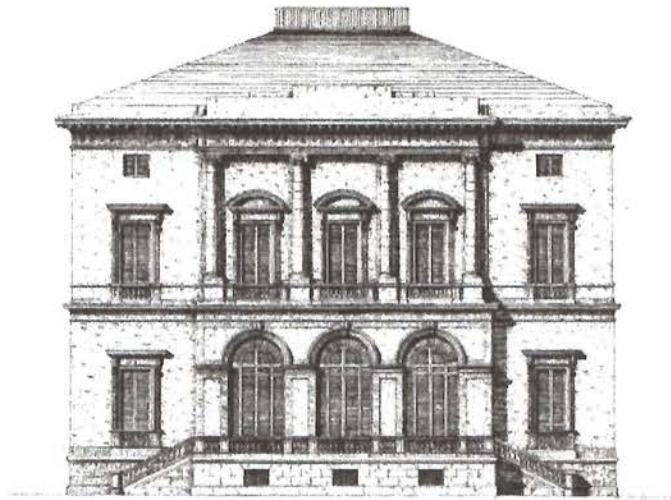
マキャヴェッリ通りから（南側、背面）



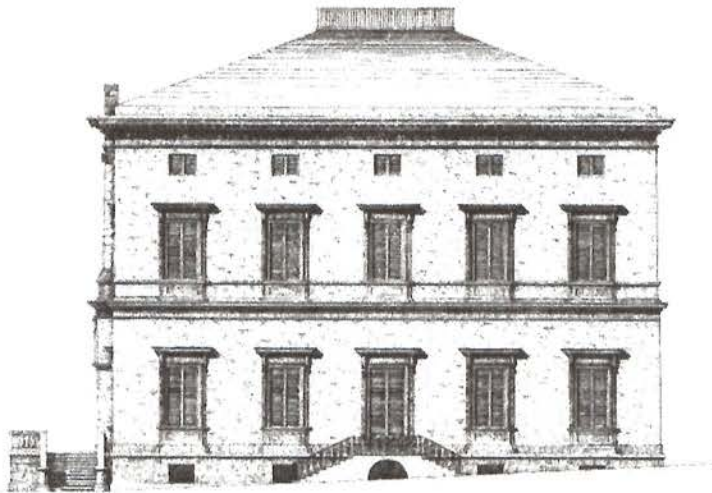
ボボリーノ庭園から（北東側）

VILLINO OPPELHEIM (Viale dei Colli Firenze)
PROF. PIETRO COMPAGNI ARCHT.

FACCIATA PRINCIPALE



Scala di m. 1/100



VIANNO

RICORDI DI ARCHITETTURA

1878 Anno I^{mo}

Pubblicazione Mensile

Fasc. VI Tav. 3

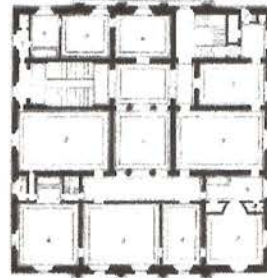
VILLINO OPPENHEIM (Viale dei Colli-Firenze)

Projetto Pietro Caspani Arch.^{to}



SECONDO PIANO

- 1. Camera
- 2. Camera
- 3. Camera per Signora
- 4. Camera per Signora
- 5. Bagno
- 6. Lettoia
- 7. Sala della bottega Signora



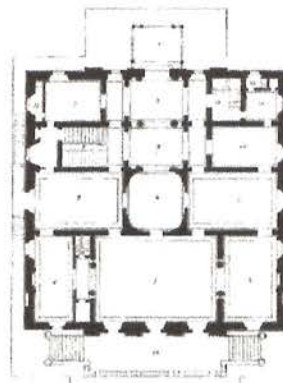
TERZO PIANO

- 1. Sala da tè
- 2. Sala da tè
- 3. Camera Signora
- 4. Bagno
- 5. Bagno
- 6. Lettoia
- 7. Lettoia



QUARTO PIANO

- 1. Sala da tè
- 2. Sala per Signora
- 3. Camera
- 4. Camera
- 5. Camera per Signora
- 6. Camera
- 7. Camera del Corridoio



QUINTO PIANO

- 1. Sala da tè
- 2. Camera
- 3. Camera
- 4. Camera
- 5. Sala da tè
- 6. Sala da tè
- 7. Sala da tè
- 8. Sala da tè
- 9. Sala da tè
- 10. Sala da tè
- 11. Sala da tè
- 12. Sala da tè
- 13. Sala da tè
- 14. Sala da tè

20. ヴィラ・イッポストン・パワーズ・イル・リフージョ ダンテ・ダ・カスティリオーネ通り 15/19 番地



建設年代：1867-1875 年の間
設計者：？
最初の所有者：エリザベス・イッポストン・パワーズ
用途：ヴィラ
建築類型：連結ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3層と2層
改築箇所：最上階は 1950 年代に増築。
植樹：イトスギ、モミ、セイヨウハナズオウ、モクレン、アカシア、トキワガシ（ボッジョ・インペリアーレ大通り沿い）
所有者の変遷：エリザベス→マリア→医師フランコ・ピナッツィ→？→ベッキ（現在）



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから（西側）



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから（東側）

21. ヴィラ・イッポストン・パワーズ・イル・リフージョ

ダンテ・ダ・カスティリオーネ通り 13 番地



建設年代：1867-1875 年の間
設計者：？
最初の所有者：カルロ・マッジョーリ、ラツェーリ・チャンピ社→アルフレード・イッポストン、パワーズ
用途：ヴィラ
建築類型：連結ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3 層（オリジナルは 2 層）
改築箇所：1940 年から 1950 年代にかけて最上階を増築、東側の棟の増築は 1960 年代。
植樹：ローリエの垣根、アカシア、モミ、ヒマラヤスギ、セイヨウハナズオウ
敷地の角には既存の建物への接続路が通っていたが、完全に消失し、ヴィラ・レナータが建設された。



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから（西側）

2.2. 名称不明

ダンテ・ダ・カスティリオーネ通り 11 番地



建設年代：1865-1875 年の間
設計者：？
最初の所有者：
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3 層



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから

23. ヴィラ・レナータ

ダンテ・ダ・カスティリオーネ通り 7/9 番地



建設年代：1872-1875 年の間
設計者：？
最初の所有者：リカルド・チャンピ
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3 層
植樹：ローリエ、幹の太い木
所有者の変遷：フィオラヴァンティ→フランス大使
チエーザレ・コロンナ（1930 年代）→薬剤会社（1950
～1960 年代）



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから（西側）



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから（東側）

24. ヴィラ・サンジョヴァンニ

ダンテ・ダ・カスティリオーネ通り 3/5 番地
ベネデット・ダ・フォイアーノ通り 2 番地



建設年代：1872-1875 年の間
設計者：？
最初の所有者：
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3 層
植樹：ローリエの垣根、ヤシ
所有者の変遷：
ファットーリの弟子の画家リッカルド・ノービリが
居住。現在は分割所有となり Tealdi 氏、Pezzati 氏が
所有。



ダンテ・ダ・カスティリオーネ通りから



ベネデット・ダ・フォイアーノ通りから (東側)



ベネデット・ダ・フォイアーノ通りから (東側)

25. 名称不明

ベネデット・ダ・フォイアーノ通り2番地



建設年代：1865-1873年の間
設計者：？
最初の所有者：？
用途：ヴィラ
建築類型：エクセドラ付ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3層



ベネデット・ダ・フォイアーノ通りから（北東側）



ベネデット・ダ・フォイアーノ通りから（正面）



ベネデット・ダ・フォイアーノ通りから

26. ヴィラ・バルトリニ・サリンベーニ

ベネデット・ダ・フォイアーノ通り5番地



建設年代：1920-25年（1873年の登記はあり）
設計者：アドルフォ・コッペデ
最初の所有者：？
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3層+4層の塔
植樹：イトスギ、トキワガシ
折衷様式。持ち送りは新16世紀風、角は平板なルスティカ積み。



ベネデット・ダ・フォイアーノ通りから



ベネデット・ダ・フォイアーノ通りから



ベネデット・ダ・フォイアーノ通りから

27. 名称不明

ベネデット・ダ・フォイアーノ通り 11 番地



建設年代：1865-73 年
設計者：？
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：庭園付独立住居
階数：3 層 + 基壇部（北側のみ）



マキャヴェッリ通りから



マキャヴェッリ通りから



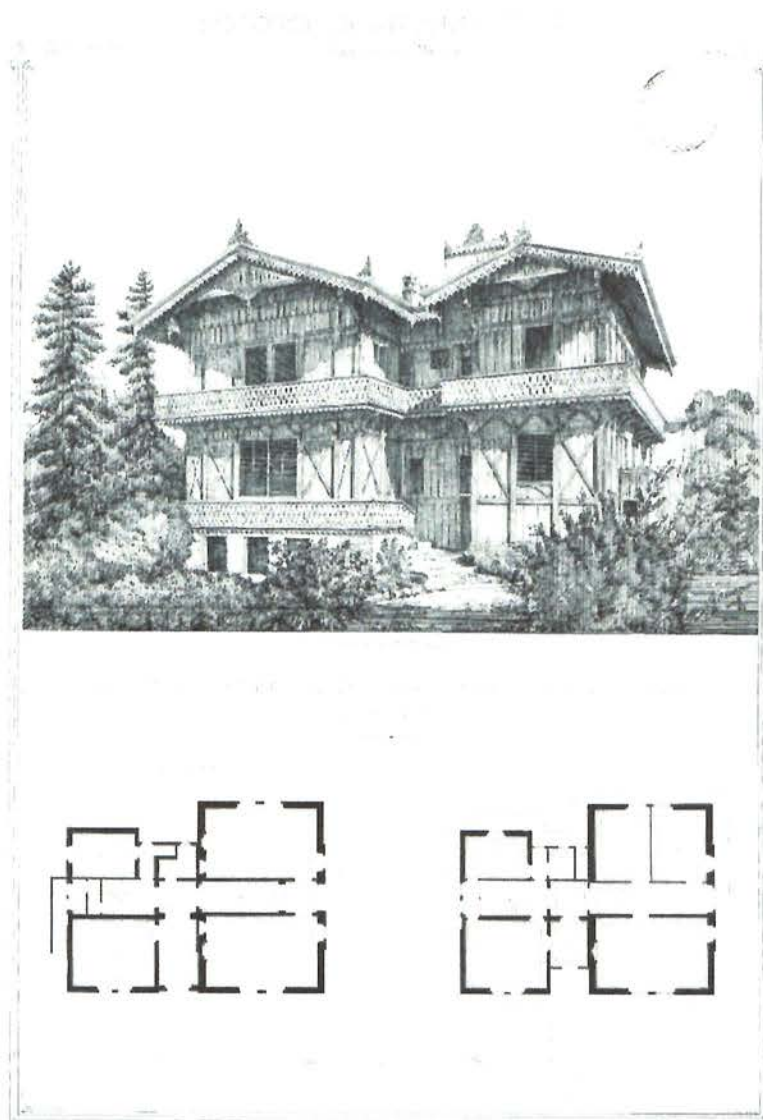
マキャヴェッリ通りから

28. ヴィラ・エンメリーナ・ロマネッリ

マキャヴェッリ大通り 9/11 番地



建設年代：1869-70年
設計者：ジュゼッペ・ロスター、マイヤー兄弟（企画）
最初の所有者：？
用途：娯楽施設（ガスタンク、射的場、メリーゴランド）
建築類型：2ブロック連結型（組積造、軒のみ木造）
環境的類型：公園内独立住居
階数：2層+2層+3層の小塔
植樹：トキワガシ、ローリエ、モミ、アシ、プラタナス、イチヨウ
改築箇所：南西の増築
所有者の変遷：Miller氏 → Emmelina Andrews (Navarra Plotti 伯爵の夫人) → メディチ・トルナクインチ侯爵 → 弁護士ラファエッロ・ロマネッリ（1930年代） → 息子レンツォ、ルイーダ、ドラリーチェ（1980年代）



29. ヴィラ・サン・ジョルジョ

マキャヴェッリ大通り 1/3 番地



建設年代：1884年以降？（1884年のカタストでは八角形のヴィラが登録されている）
設計者：ジュゼッペ・ロスター、マイヤー兄弟（企画）
最初の所有者：ピエトロ・モレッリ（コムーネの顧問）
用途：娯楽施設（ガスタンク、射的場、メリーゴランド）
建築類型：2ブロック連結型（組積造、軒のみ木造）
環境的類型：公園内独立住居（プール、テニスコート）
階数：2層＋半地下
植樹：トキワガシ、アカシア、コバノシナノキ、マロニエ、針葉樹
所有者の変遷：モレッリ→Lowe氏（1920年代）
→Fusch氏→Liselotte Barbara Kirchhoff→公証人Rovai（1957年-）→Koerting家→Mulas, Scatizzi, Canovari（1960年代に分割所有）



南正面（Zangheri, p. 431）



マキャヴェッリ通りから



マキャヴェッリ通りから

30. 小ヴィラ・フィッカレツリ

マキャヴェツリ大通り 5/7 番地



建設年代：1865-73年
設計者：？
最初の所有者：？
用途：ヴィラ
建築類型：2ブロック連結型
環境的類型：公園内独立住居
階数：3層+2層
植樹：アカシア、ヒマラヤスギ
改築箇所：数多く改築跡あり
所有者の変遷：Egidio Formenti（1900年初め）
→ Roberto Ficcarelli（1930年代）



マキャヴェツリ通りから（Zanfheri, p.403）



マキャヴェツリ通りから



マキャヴェツリ通りから

3.1. ヴィラ・ティヴォリ

ガリレオ広場 1,2 番地



建設年代：1865/66年～1883年
設計者：ジャコモ・ロスター
最初の所有者：Miller
用途：ヴィラ
建築類型：ブロック型
環境的類型：公園内独立住居（山荘小屋、厩舎）
階数：2層
植樹：草むら、花壇



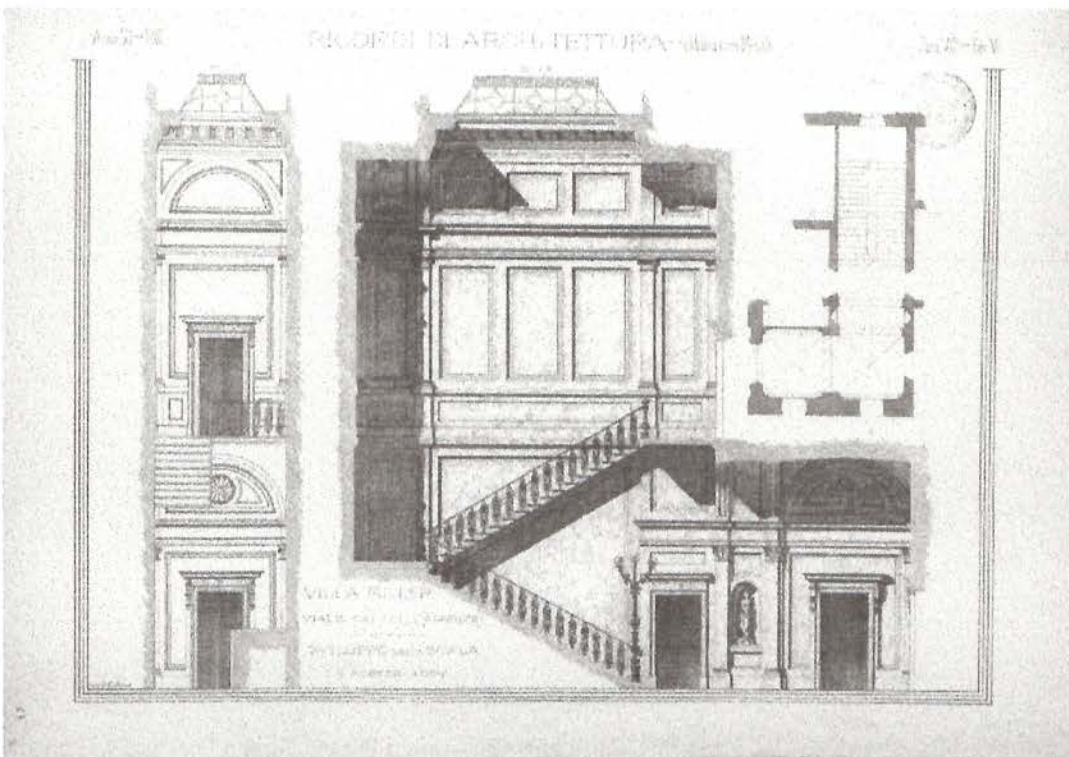
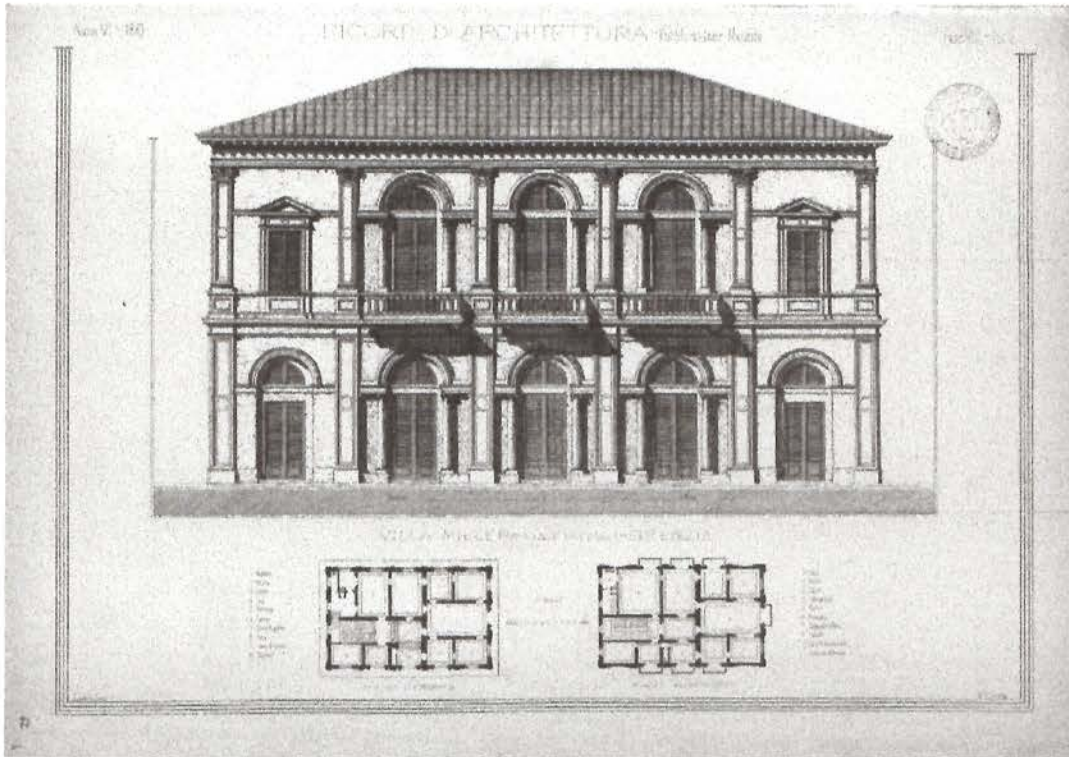
マキャヴェッリ通りから



マキャヴェッリ通りから



ガリレオ広場から



Ricordi di Architettura より

3.2. ヴィラ・ボンチャーニ

サン・レオナルド通り 40 番地



建設年代：19 世紀半ば（既存を改築）
設計者：？
最初の所有者：Barbadori と degli Ugolini
用途：ヴィラ、レストラン
建築類型：分節型
環境的類型：庭園付道路沿い住居
階数：2 層（部分的に 3 層）
備考：チャイコフスキーが 1857 年に滞在していた。



Zangheri, p.392



サン・レオナルド通りから



ガリレオ通りから

3.3. ヴィラ・ピアッティ・レッレーラ

サン・レオナルド通り 53/55 番地



建設年代：1867 年以降（既存を改築）
設計者：？
最初の所有者：Barducci Chierichini
既存の用途：ヴィラ
用途：ヴィラ
建築類型：分節型
環境的類型：庭園付道路沿い住居
階数：2 層
改築箇所：Barducci が所有していたときに、16 世紀風
に改築。19 世紀半ばに南面の鉄柵のついたバルコ
ニーを設置、厩舎を新築。
所有者の変遷：Barducci Chierichini → Giulio Piatti（19
世紀半ば）→ Anzilotti Gamberini



コッリ大通りから



サン・レオナルド通りから



サン・レオナルド通りから

3 4. ヴィラ・イル・メラグラノー

サン・レオナルド通り 60 番地



建設年代：19 世紀（既存を改築）
設計者：？
最初の所有者：
既存の用途：農家
新しい用途：ヴィラ
建築類型：線型
環境的類型：庭園付道路沿い住居
階数：2 層



サン・レオナルド通りから



サン・レオナルド通りから



サン・レオナルド通りから

3.5. ヴィラ・リーナ

サン・レオナルド通り 58 番地



建設年代：20 世紀（既存を改築）
設計者：？
最初の所有者：
既存の用途：住居
新しい用途：ヴィラ
建築類型：線型
環境的類型：庭園付道路沿い住居
階数：2 層（部分的に 3 層）
植樹：イトスギ
所有者の変遷：Thomas Dick Lauder（1900 年代初め）
→ Del Bene



サン・レオナルド通りから



サン・レオナルド通りから



サン・レオナルド通りから

3 6. 名称不明

サン・レオナルド通り ** 番地



建設年代：20 世紀（既存を改築）
設計者：？
最初の所有者：
既存の用途：
新しい用途：ヴィラ
建築類型：分節型
環境的類型：庭園付道路沿い住居
階数：2 層～4 層



マキャヴェツリ大通りから



サン・レオナルド通りから



サン・レオナルド通りから

37. ヴィラ・イル・バルドゥッツォ・バルドゥッチョ

サン・レオナルド通り 41/51 番地



建設年代：20 世紀（既存を改築）
設計者：？
最初の所有者：
既存の用途：
新しい用途：
建築類型：分節
環境的類型：道路沿い住居
階数：2 層（部分的に 3 層）
改築箇所：-
所有者の変遷：Lorenzo di Francesco



サン・レオナルド通りから（北側）



サン・レオナルド通りから（南側）



サン・レオナルド通りから（北側）

38. ヴィラ・ラ・セルヴァ

ガリレオ大通り 5 番地 / サン・レオナルド大通り 60 番地



建設年代：1843 年以前
設計者：？
大通り建設以前の所有者：Capacci
Michele di Pier Antonio
既存の用途：ヴィラ
新しい用途：ヴィラ
建築類型：分節
環境的類型：道路沿い住居
階数：2 層（部分的に 3 層）
改築箇所：-



ガリレオ大通りから



ガリレオ大通りから



サン・レオナルド通りから（東側）

巻末資料—3 ジュゼッペ・ポッジの建築作品一覧

<1835年～フイレンツェ拡大事業以前まで>

建設年	建物名	依頼人	種類	用途	場所	資料	図面
1 1835	10タイプの公共建築のデザイン		スケッチ	-	-	FDSR, 350 "Borsa"; 351, 355, "Terme"; 352, 360, "Tempio"; 356, "Ospedale Militare"; 357, "Teatro"; 359, "Dogana"; 361, "Minimotoca"; 415, "Reggia"	-
2 1835-36	市民施設と遺体収容所?の版画		版画	-	-	FDSR, 344 e 346, ACGV, 1-4	-
3 1835-40	サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂と修道院背面の建物(ジーノ・カポーニ通りからの接続路)		改増築	建物	ジーノ・カポーニ通り	FDSR, 212, 232, 233	平面図、立面図(正面、背面)
4 1839	ヴィラ・アルキント・「アッレ・フォルピチ」		新築	ヴィラ	サン・ドメニコ聖堂(フィエーゾレ)付近	Ricordi, 1909, pp.78-80, FDSR, 698	立面図(正面)
5 1841ca.	ポニヤトフスキー家賃貸住宅	ジュゼッペ・ポニヤトフスキー王子	新築	住居	プラート門付近	Ricordi, 1909, pp.84-86, FDSR, 65	-
6 1842sgg.	バラッツォ・ポニヤトフスキー、クラブ・ポニヤトフスキー	カルロ・ポニヤトフスキー王子	新築	バラッツォ、クラブ	プラート門外	Ricordi, 1909, pp. 84-86, FDSR, 65	改築後平面図(1階、2階)、断面図(ダンスホール)、ファサードのバリエーション(3案)、ダンスホールのバリエーション(7案)
7 1843sgg	バラッツォ・グイッチャルディーニ・「ネル・ルンガルノ・オモネモ」	カルロ・グイッチャルディーニ伯爵	新築	バラッツォ	サント・スピリト通り	Disegni, 1886-1887..., vol. II, n. X, pp. 53-56	改築前平面図(1階、2階)、改築後平面図(1階、2階)、断面図(玄関ホール、階段)
8 1845	ヴィラ・グアダーニ・「デッレ・ルネ」	オッタヴィアー・グアダーニ侯爵夫人とその夫ベルテ	新築	ヴィラ	サン・ドメニコ聖堂付近(フィエーゾレ)	Disegni, 1886-1887, vol. II, n. VI, pp. 31-35	配置図、改築前平面図(1階)、改築後平面図(1階)、断面図(階段)、裝飾図(新設の部屋)

9	1845	サンタ・ヴェルディアーナ修道院の改築	サンタ・ヴェルディアーナ修道院の改築	改築	修道院	テラニコ通り	Ricordi, 1909, p.306	-
10	1846	パラッツォ・ゲラルディの改築	トマーゾ・ゲラルディ伯爵	改築	パラッツォ	ギベッリーナ通り	Ricordi, 1909, p. 87	-
11	1846	ヴァイラ・ラ・ムーラへの改築	トマーゾ・ゲラルディ伯爵	改築	ヴァイラ	?	Ricordi, 1909, p. 87	-
12	1850-60ca.	パラッツォ・ジェーニの改築	カルロ伯爵	改築	パラッツォ	リカーニ通り 42 番地	Disegni, 1886-1887, vol. I, n. II, pp. 18-27, Ricordi, 1909, pp. 37, 59-60, F. Borsi, 1970, fig. 20	改築後平面図(1階、2階)、装飾図(ダンスホール入口壁面、ヴォールト部)、オーダークリ型詳細図
13	1853	ヴァイラ・アルキント・アッレ・フォルピチの出入口		増築	出入口	サン・ドメニコ聖堂(フイエーゾレ)付近	Ricordi, 1909, p. 80, FDSR, 710	門衛の住居立面図(正面)
14	1853	パラッツォ・バルトリーニの改築		改築	パラッツォ	カヴール通り	Ricordi, 1909, p. 87	-
15	1853	パラッツォ・フランケンツェイ通称「100の窓」の改築	イザコ・フランケンツェイ騎士	改築	パラッツォ	サンタ・マリア・マッジョーレ広場	Ricordi, 1909, p. 87	-
16	1853	パラッツォ・フレスコバルディの改築	アンジョロ・フレスコバルディ	改築	パラッツォ	サント・スピリト地区	Ricordi, 1909, p. 87	-
17	1853	ヴァイラ・ステイバートの改築	フェデリコ・ステイバート騎士	改築	ヴァイラ	モントウーギ	Ricordi, 1909, p. 87	-
18	1853	大通り計画	アンジョロ・フレスコバルディ	計画案	道路	ムジェッロ	Ricordi, 1909, p. 87	-
19	1853sgg	パラッツォ・アンティノーリの増改築		増改築	パラッツォ	セラーリ通り、マツフィア通り	Disegni, 1886-1887, vol. I, n. III, pp. 28-34	改築前平面図(1階、2階)、改築後平面図(1階、2階)、新設階段の断面図、ガレリアの断面図、新しい小ロジジアの立面図、
20	1854	パラッツォ・ディ・ザッカリア・テッラ・リーバの改築		改築	パラッツォ	ギベッリーナ通りとフオッソ通りの間	Ricordi, 1909, p. 86	-
21	1854	トッレアルサ侯爵の住宅の諸工事		?	住居	ラルガ通り(現カヴール通り)	Ricordi, 1909, p. 88	-
22	1854	カルロ・レオネッティ伯爵のパラッツォの再整備		?	パラッツォ	ルンガルノ・グイッチャルディーニ通り	Ricordi, 1909, p. 87	-

23	1855	バラッツォ・ジュンティエーニ	旧バラッツォ・カツポニー、後ポニヤトフスキー王子所有、1852年にCav. グイド・ジュンティエーニ氏に買い取られた。	改築	パラッツォ	ラルガ通り(現カヴェール通り)	Disegni, 1886-1887, vol. II, n. VII, pp. 41-46, Ricordi, pp. 73-75	改築前平面図(1階、2階)、改築後平面図(1階、2階)、改築前立面図(正面)、改築後立面図(正面)
24	1855	バラッツォ・ポニヤトフスキー(サン・レオポルド通り)	カルロ・ポニヤトフスキー王子	改築	バラッツォ	サン・レオポルド通り(現カヴェール通り)	Ricordi, 1909, p. 85, FDSR, 475, 481, 485, 486	-
25	1855ca.	ヴァイラ・ポニヤトフスキーの新階段		部分改築	ヴァイラ	ロヴェッツァノ(ファイレンツェ東)	Ricordi, 1909, p. 85	-
26	1855ca.	ヴァイラ・ポニヤトフスキーの新階段改築	ジュゼッペ・カルロ・ポニヤトフスキー王子所有	改築	ヴァイラ	モンテロントンド(ローマ北東)	Ricordi, 1909, p. 85	-
27	1855ca.	バラッツォ・デッリ・アレッサンドリの諸工事		改築	バラッツォ	?	Ricordi, 1909, pp. 80-81	-
28	1855ca.	バラッツォ・デ・ブラットの改築		改築	バラッツォ	デッラングイラー通り	Ricordi, 1909, p. 86	-
29	1855-1859ca.	小ヴァイラ・ストロツツイ(通称「イル・ボスケット」)	フェルディナンド・ストロツツイ依頼	増改築	ヴァイラ	ソフィアーノ(ファイレンツェ南西)	Disegni, 1886-1887, vol. II, n. I, pp. 1-8, Ricordi, 1909, pp. 61-63	ヴァイラ:配置図、平面図(1階、2階)、立面図(正面、西面)、温室:平面図、立面図(正面)、敷地門扉:平面図、立面図
30	1856	サンティンマ・アスンツィアータ聖堂の修復		修復	聖堂		Disegni, 1886-1887, vol. II, n. XII, p. 59	-
31	1856-1861sgg.	ヴァイアレージョの海辺の救貧院	医師ジュゼッペ・バレッライとジュゼッペ・ケーリの助言を得て、「貧困層の結核の子供を癒すこと」を目的に建設。	新築	宿泊所	ヴァイアレージョ	Ricordi, 1909, pp. 37-52	-
32	1856ca.	バラッツォ・デル・ベニーノの改築		新築	バラッツォ	ルンガルノ・スオーヴォ通り(現ルンガルノ・ヴァエスブッチ通り)	Ricordi, 1909, pp. 83-84	-

33	1857ca.	バラッツォ・ファヴァール	ジュゼッピーナ・フ アヴァール・デ・ラ ングラーデ男爵夫 人依頼	新築	バラッツォ	ロンガルノ・ヌオーヴ オ通り(現ロンガルノ・ ヴェスブッチ通り)	Disegni, 1886-1887, vol. I, n. I, pp. 1-17, Ricordi, 1909, pp. 37, 53-54	配置図、平面図(地階、1 階、2階、3階)、立面図 (南面、北面、西面)、断面 図(縦、横)、厩舎正面立 面図、オーダー詳細図、ダ ンスホール入口壁面装飾 図、主要階段壁面装飾図 (踊場壁面、階段部壁面、 ヴォールト部)、鉄柵立面 図
34	1860ca.-1877	ファヴァール礼拝堂(ヴァイラ・フ アヴァール内)		改築	礼拝堂	ロヴェッツァノ(ファイレン ツェ東)	Disegni, 1886-1887, vol. II, n. III, pp. 16-20, Ricordi, 1909, p. 54	平面図(地階)、断面図 (地階、1階)、立面図(正 面)
35	1857sgg.	バラッツォ・カルカニーニ	カルカニーニ侯爵 依頼	新築	バラッツォ	ロンガルノ・ヌオーヴ オ通り(現ロンガルノ・ ヴェスブッチ通り)	Disegni, 1886-1887, vol. II, n. V, pp. 26-30, Ricordi, 1909, p. 56	配置図、平面図(1階)、立 面図(正面、東面)、断面 図(階段部)
36	prima del 1858	バラッツォ・インコントリの改築	アッティリオ・イン コントリ侯爵依頼	改築	バラッツォ	ブッチ通りとセルヴァイ 通りの間	Ricordi, 1909, pp. 81-82	-
37	1858	サンティッシマ・アスンツィアー タ聖堂の新鐘楼計画		計画図	鐘楼	-	Disegni, 1886-1887, vol. II, n. XI, pp. 59, FDSR, 605, Ricordi, 1909, p. 58	立面図、断面図
38	1859ca.	ヴァイラ・ノーマンビーの玄関ホ ール	ノーマンビー卿依 頼	部分改築	ヴァイラ	ボロニエーゼ通り	Disegni, 1886-1887, vol. I, n. V, pp. 36-37, Ricordi, 1909, pp. 54-55	平面図(1階)、立面図(正 面)
39	1859ca.	ヴァイラ・デ・ブラットの改築(シー ニャ)		改築	ヴァイラ	シーニャ(ファイレンツェ 西)	Ricordi, 1909, p. 86	-
40	1860	バラッツォ・デッラ・ゲラルデス カの改築	ウゴリーノ伯爵依 頼	改築	バラッツォ	ピンティ通り	Disegni, 1886-1887, vol. II, n. XI, pp. 57-58, Ricordi, 1909, p. 78	-
41	1860	マンドルロ通りの住居	ウゴリーノ伯爵依 頼	新築?	住居	マンドルド通り(現ジュ ゼッペ・ジュステイ通 り)	Disegni, 1886-1887, vol. II, n. XI, Ricordi, 1909, p. 78	-
42	1860	マルテツリ家の建物改築	アレッサンドロ・マ ルテツリ依頼	改築	不明	マルテツリ通り	Ricordi, 1909, p. 88	-
43	1860	ヴァイラ・マルテツリの改築	アレッサンドロ・マ ルテツリ依頼	改築	ヴァイラ	ソフィアーノ(ファイレンツ ェ南西)	Ricordi, 1909, p. 88	-
44	1860	エレオノーラ・デ・バツツイの小		減築	ヴァイラ	ボッジョ・インペリアー	Ricordi, 1909, p. 88	-

	ヴィラ	ヴァレリー騎士依頼	新築?	パラッツォ	レ付近	
45	1860a. パラッツォ・ヴァレリー	ヴァレリー騎士依頼	新築?	パラッツォ	レ付近 バステリア(コルシカ)	Disegni, 1886-1887, vol. I, n. VI, pp. 38-41, FDSR, 388, 402, 408, Ricordi, 1909, pp. 37, 55-56
46	1860 サン・カルロ広場のバンテオン化		都市計画案	広場	トリノ	Disegni, 1886-1887, vol. II, n. IX, pp. 49-52, Ricordi, 1909, pp. 115, 322-324
47	1861 以前 パラッツォ・オルロフ(現パラッツォ・ヴェントゥーリ・ジノーリ)の改築	オルガ・オルロフ王女依頼	改築	パラッツォ	スカラ通り85番地	Disegni, 1886-1887, vol. II, n. IV, pp. 21-25, Ricordi, 1909, pp. 370-371
48	1862 クイエーテ音楽院の改築	ジョヴァン・バッテイスタ・トスカネッリ騎士依頼	改築	学校	不明	Ricordi, 1909, p. 88
49	1862 パラッツォ・トスカネッリの大広間		部分改築	パラッツォ	ピサ	Ricordi, 1909, p. 88
50	1863 サンタ・クローチェ広場からサンタ・トリニタ広場への主要道路踏計画		計画案	道路	-	Alcune parole...tav. *
51	1864 カツジャーナ温泉拡張		増築	温泉施設	現カツジャーナ・テルメ(ピサ南東)	Disegni, 1886-1887, vol. II, n. VIII, pp. 47-48, Ricordi, 1909, pp. 75-76
52	1864 ヴィラ・デッラ・リーバ	チェーザレ・デッリーバ依頼	新築	ヴィラ	カレージ(フィレンツェ北西)	FDSR, 741, 745, 748, 749, 750, Ricordi, 1909, p. 86
53	1865gg. ヴィラ・インコントリ		新築	ヴィラ	カレージ(フィレンツェ北西)	Ricordi, 1909, p. 83

<フィレンツェ拡大事業以前まで>

*第1章参照

<フィレンツェ拡大事業以降～1911年>

54	1870-71 ガンベライア水路の保存					Sui lavori, 1882, pp. 150-151
55	1870ca. ゲラルデスカ庭園の入口	ウゴリーノ・デッラ・ゲラルデスカ伯爵依頼	新築	門扉	フィレンツェ、	Disegni, 1886-1887, vol. II, n. XI, pp. 57-58, Ricordi, 1909, p. 78.
						改築前立面図、改築前後重複平面図

56	1870ca.	小ヴィラ・ストロツツイ(現パラッツォ・ディ・コングレッシ)	ルイージ・Pの息子カルロ侯爵依頼	改築、新築	ヴィラ	ヴァルフオンダ通り	Ricordi, 1909, p.87	-
57	1870ca.	ヴィラ・コーラ	オッペンハイム男爵	新築	ヴィラ	マキヤヴェツリ大通り	Ricordi di Architettura, 1878, fasc. VII, tav. I, fasc. VI, tav. VI	立面図(正面、背面)、平面図(地階、1階、2階、3階)
58	1864&gg.	パラッツォ・ストロツツイの改築		改築	パラッツォ		Disegni, 1886-1887, vol. II, n. I bis; Ricordi, 1909, pp.37, 63-64; FDSR, 425, 653, 737.	-
59	1870ca.	パラッツォ・グアダニーニの改築		改築	パラッツォ		Disegni, 1886-1887, vol. II, n. VI bis, pp. 36-40; Ricordi, 1909, pp.72-73.	改築前平面図(1階、2階)、改築後平面図(1階、2階)、断面図(階段部)、
60	1871-84	パラッツォ・ゴンデイの改築と増築	ウジェーニオ・ゴンデイ侯爵依頼	改築、増築	パラッツォ	ゴンデイ通り	Disegni, 1886-1887, vol. II, n. II, pp. 9-15, Ricordi, pp. 37, 64, 67	改築前平面図(1階、2階)、改築後平面図(1階、2階)、改築前立面図(東面、南面)、改築後立面図(東面、南面)
61	1870ca.-72	パラッツォ・カッポニーニ(レンガルトリジャーニ)		新築	パラッツォ	レンガルトリジャーニ	Disegni, 1886-1887, vol. I, n. IV, p. 35, Ricordi, 1909, pp. 60-61, 361	立面図(正面)
62	1869	ヴィラ・ディ・カアアツジョロ	Principe Borghese	工事	ヴィラ		Ricordi, 1909, p.88	-
63	1869-73	サン・ジョヴァンニ・ディ・ディオの改築		改築	病院	ボルゴ・オンニサンテ	Ricordi, 1909, p.88	-
64	1867-70	クルターネのモニュメント		新築	モニュメント		FDSR, 74, Ricordi, 1909, pp.51, 356, fig. pp. 50-51	-
65	1873&gg.	トレスピアーノの墓地		新築	墓地		Ricordi, 1909, p.362	-
66	1873	カリニャーノ地区計画(ジェノヴァ)		計画画案	都市計画	ジェノヴァ	Disegni, 1886-1887, vol. I, n. XIII, p. 60; Ricordi, 1909, pp. 116-117, 374-375, 406-407	PRG
67	1875	サン・レーモの都市調整計画		計画画案	都市計画	サン・レーモ	Ricordi, 1909, pp.17, 118.	-
68	1876-77	バーディア・フィエゾラーナの改築		工事	修道院	フィレンツェ	Cresti-Zangheri, 1978, pp. 76 e 192.	-
69	1884	ヴィットーリオ・エマヌエーレ広場の計画		計画画案	広場	フィレンツェ	C. Del Lungo 1911, pp. 16-17.	-
70	1896-97	ヴィラ・デッランティナーロの公園の改修		改修	公園	マルマンティーレ	Ricordi, 1909, pp. 427-428.	-

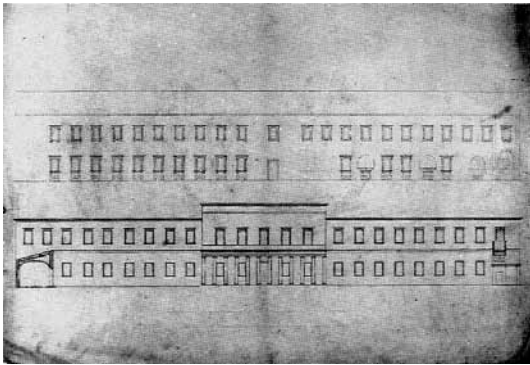
71	1898	新図書館への意見							Ricordi, 1909, pp. 429-430.	-
72	1901	ジュゼッペ・ボッジの墓碑					墓碑	トレスピアーノ	Ricordi, 1909, p.23.	-
73	1911	ジュゼッペ・ボッジのモニュメント					モニュメント	ミケランジェロ広場	A. Franchetti, 1901, p. 5; C. Del Lungo, 1911, p. 19	-

AA. VV., *Giuseppe Poggi e Firenze. Disegni di architettura e città*, (catalogo della mostra), Alinea, Firenze, 1989.

Poggi, G., *Disegni di fabbriche eseguite per commissione di particolari dall'Architetto Giuseppe Poggi*, vol. I, II, Tipografia di G. Barbera, Firenze, 1886.

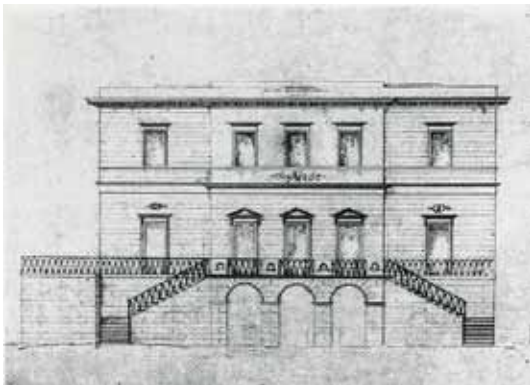
Poggi, G. (per cura dei nipoti), *Ricordi della vita e documenti d'arte*, R. Bemporado e figlio, Firenze, 1909.

3 サンティッシマ・アヌンツィータ聖堂背面の建物改増築 (1835-1840 年)



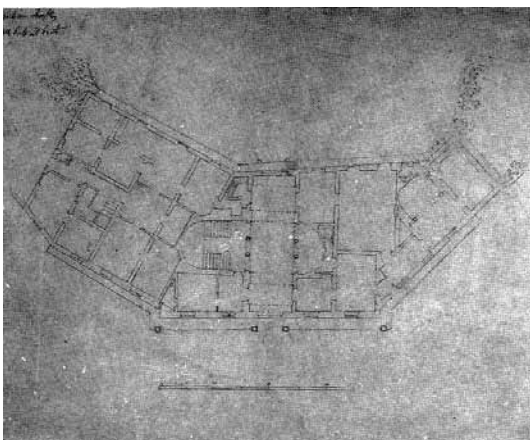
立面図

4 ヴィラ・アルキント「アッレ・フォルビチ」(1839年)



立面図 (正面)

5 パラッツォ・ポニヤトフスキー (1842年)

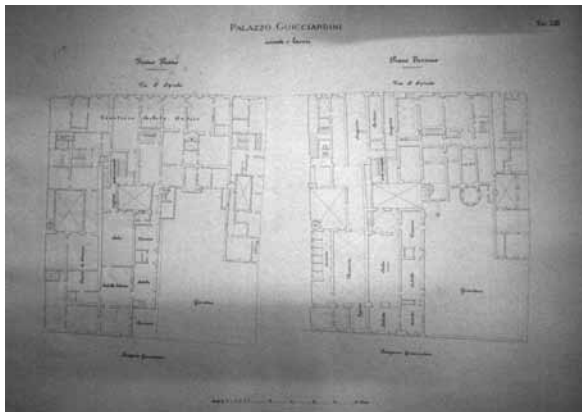


1階平面図

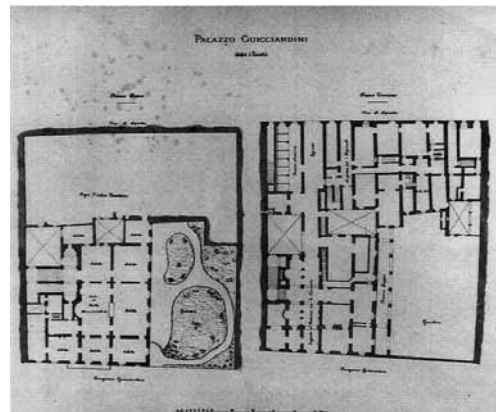


立面図 (正面)

7 パラッツォ・ガイッチャルディーニ・「ネル・ルンガルノ・オモニモ」(1843年頃)

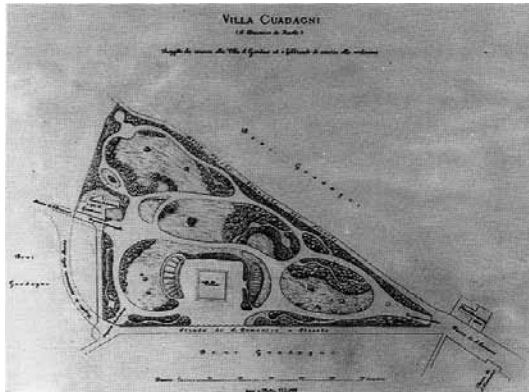


改築前平面図 (1階、2階)

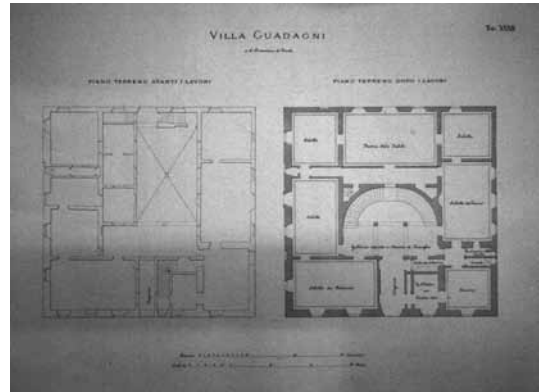


改築後平面図 (1階、2階)

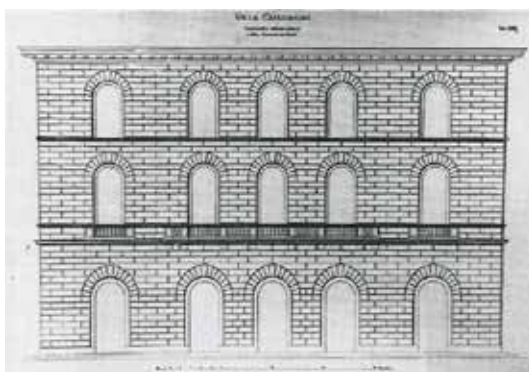
8 ヴィラ・グアダニ・「デッレ・ルーネ」(1845年)



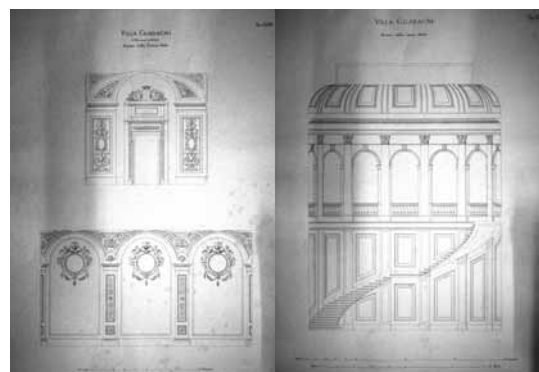
配置図



改築前後平面図 (1階)



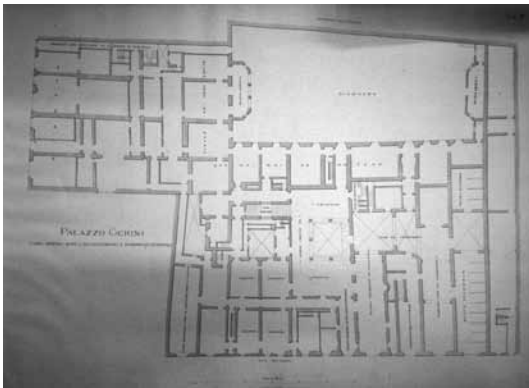
立面図 (正面)



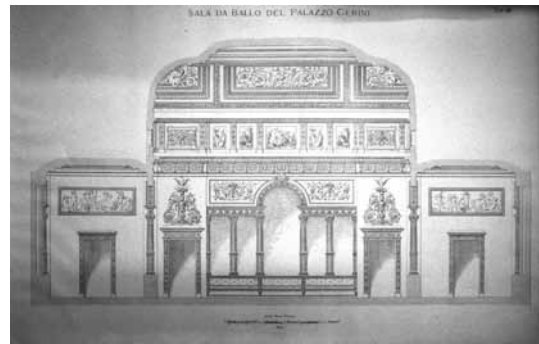
新設の部屋 (装飾図)

断面図 (階段)

12 パラッツォ・ジェリーニ (1850-60 年頃)

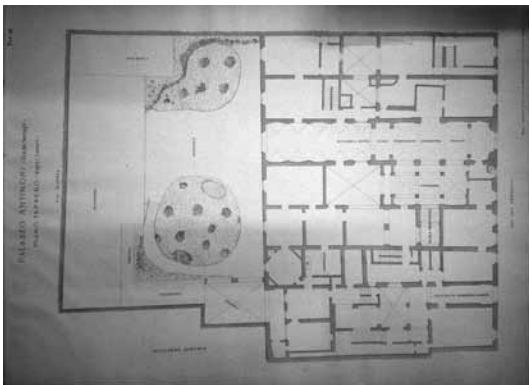


1 階平面図

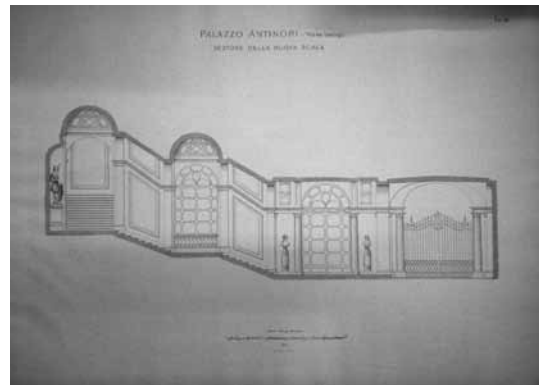


ダンスホール展開図

19 パラッツォ・アンティノーリ (1853 年頃)

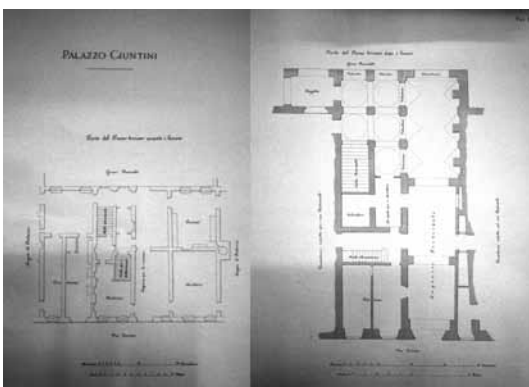


1 階平面図

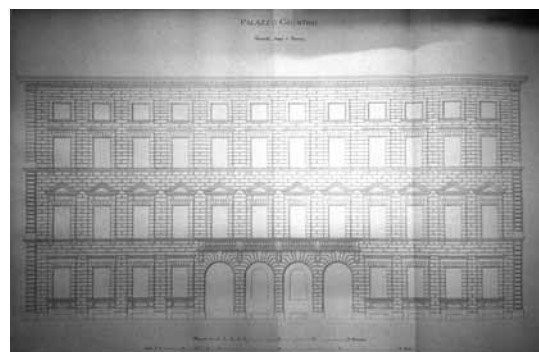


新設階段断面図

23 パラッツォ・ジュンティーニ (1855 年)

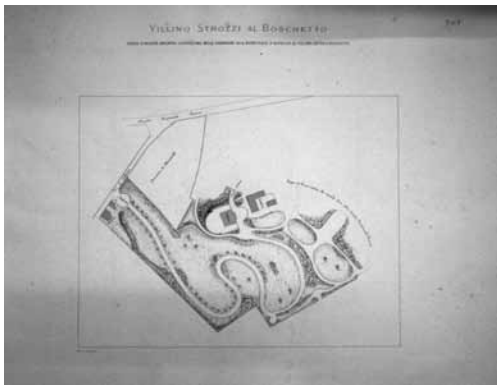


1 階平面図 (左: 改築前 右: 改築後)

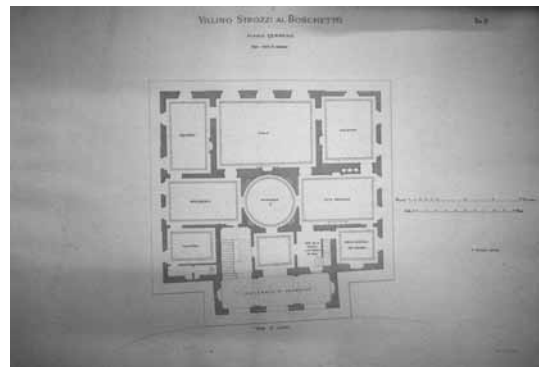


ファサード立面図

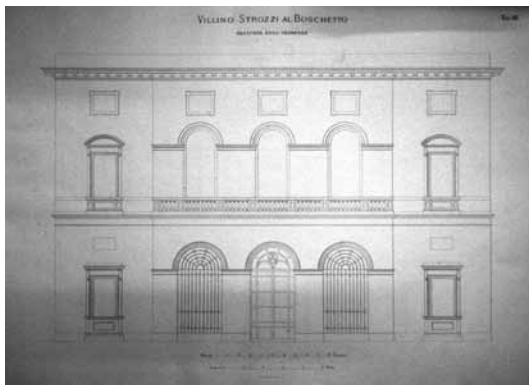
29 小ヴィラ・ストロツィ (通称「イル・ボスケツト」) (1855-1859 年頃)



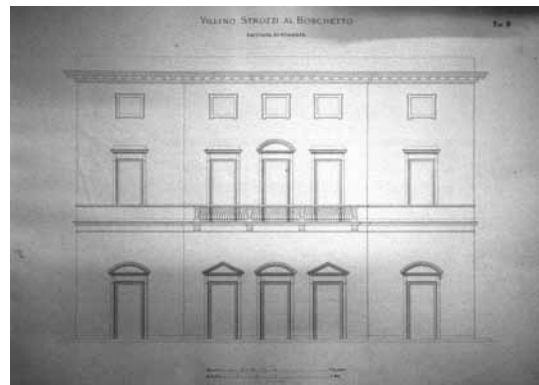
配置図



1階平面図



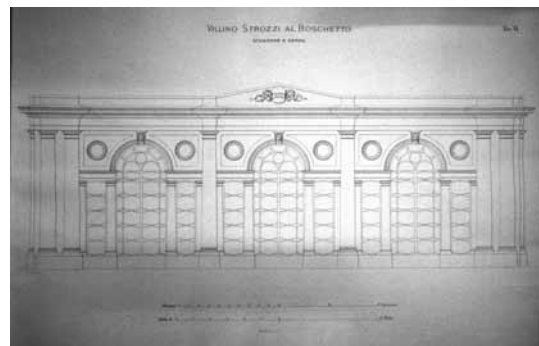
正面立面図



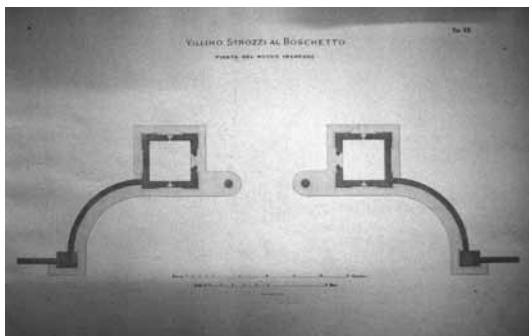
東面立面図



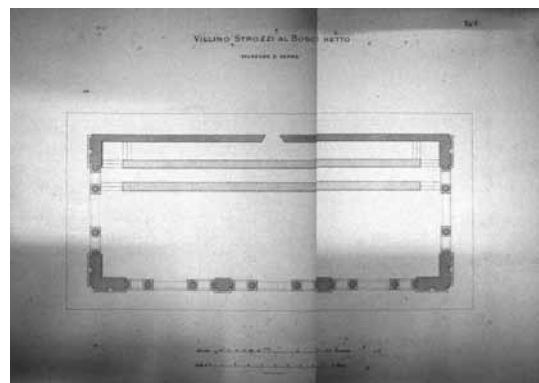
門扉立面図



温室正面立面図

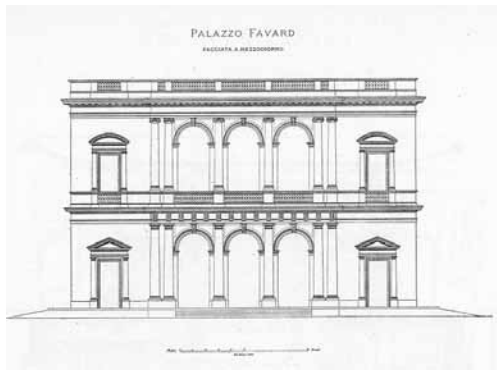


門扉平面図

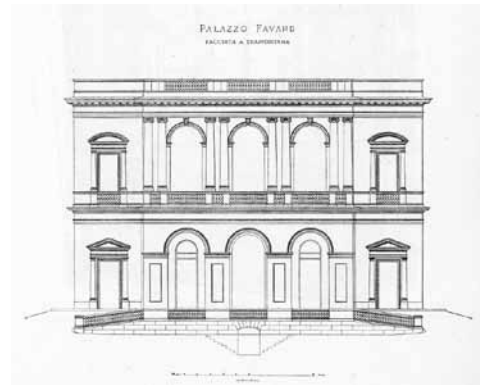


温室平面図

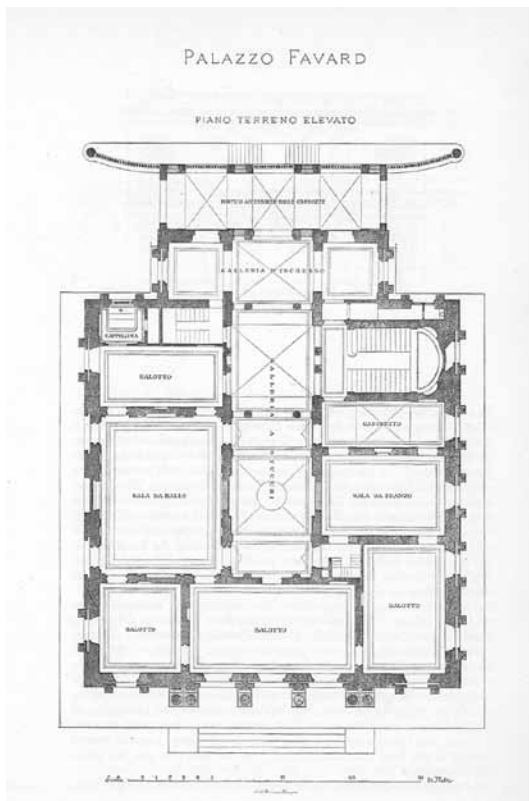
33 パラッツォ・ファヴァール (1857年頃)



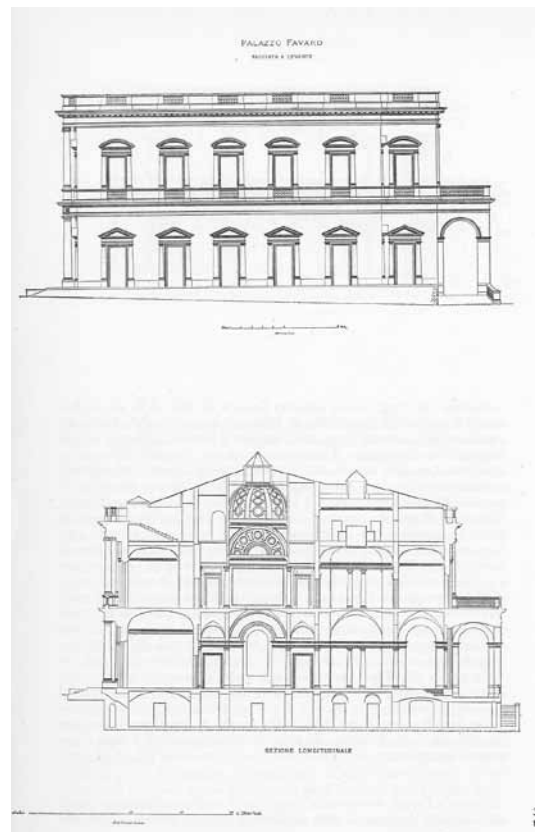
立面図 (南面)



立面図 (北面)

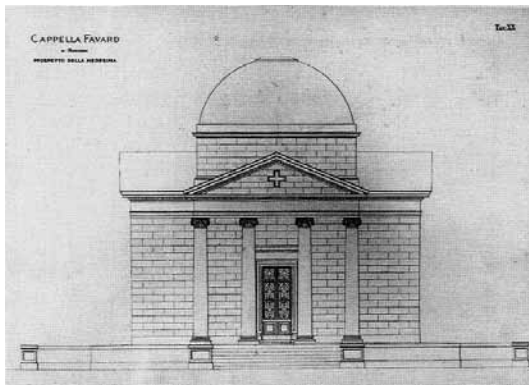


平面図 (1階)

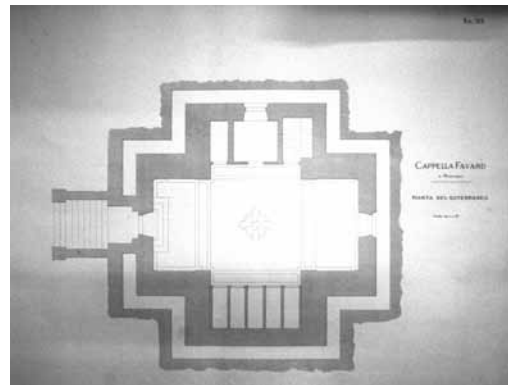


立面図 (東面)、縦断面図

34 ファヴァール礼拝堂 (1860年頃～1877年)

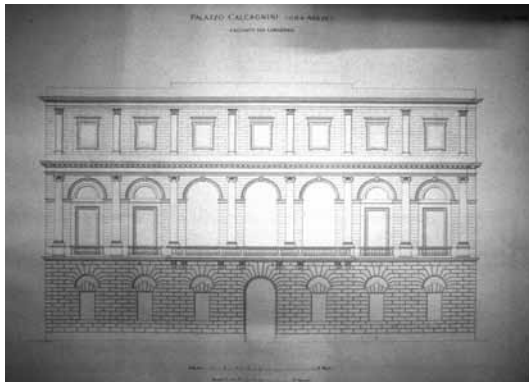


立面図 (正面)

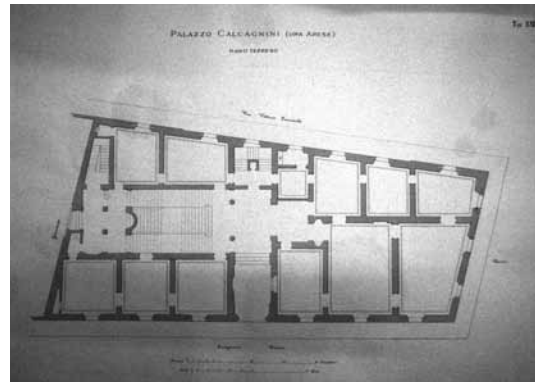


1階平面図

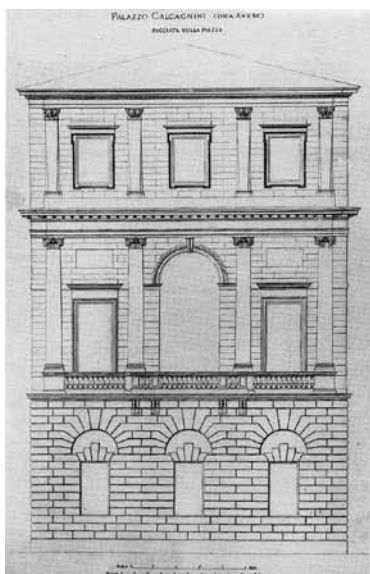
35 パラッツォ・カルカニーニ (1857年頃)



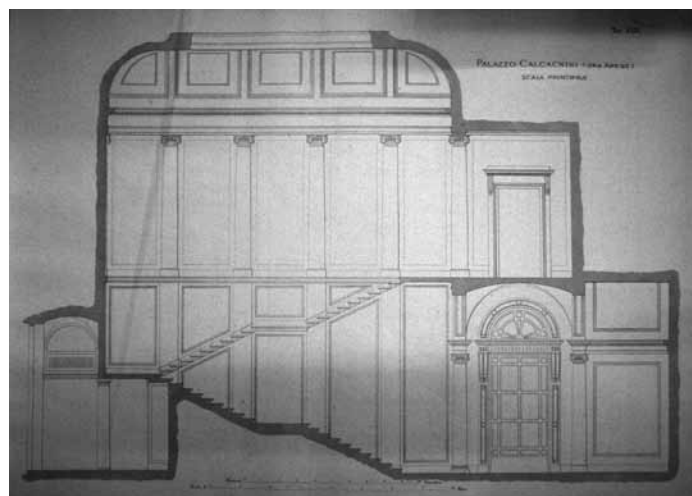
立面図 (南正面)



平面図 (1階)

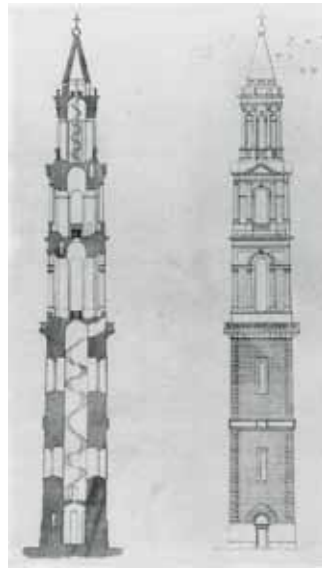


立面図 (東面、広場側)



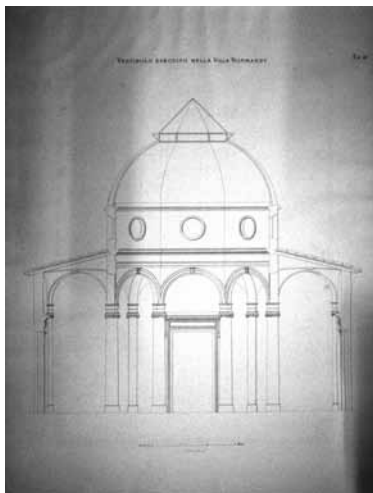
断面図

37 サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂の新鐘楼計画 (1858年)

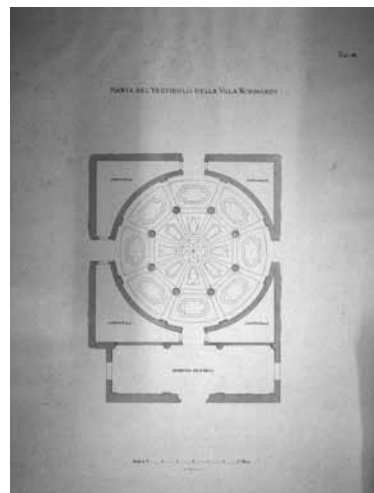


断面図、立面図

38 ヴィラ・ノーマンビーの玄関ホール (1859年頃)

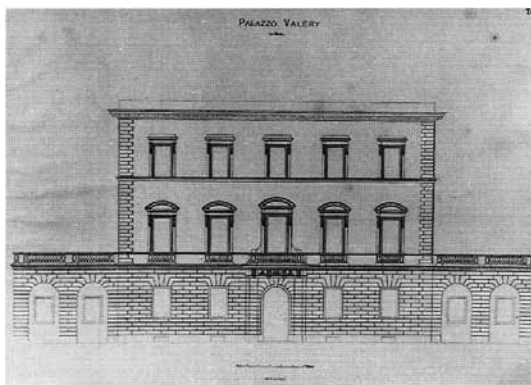


立面図 (正面)

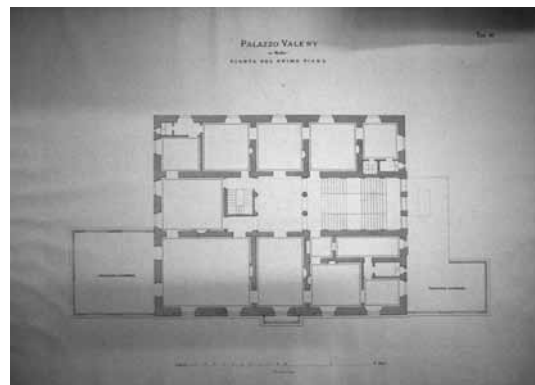


平面図 (1階)

45 パラッツォ・ヴァレリー (1860年頃)



立面図 (正面)

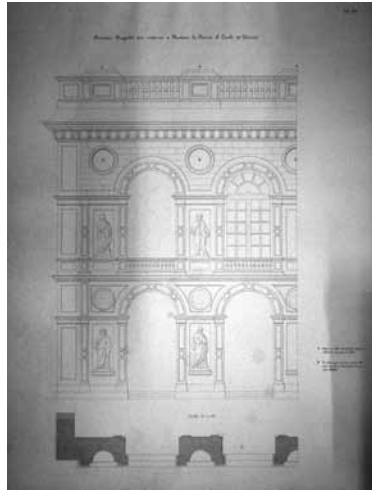


平面図 (1階)

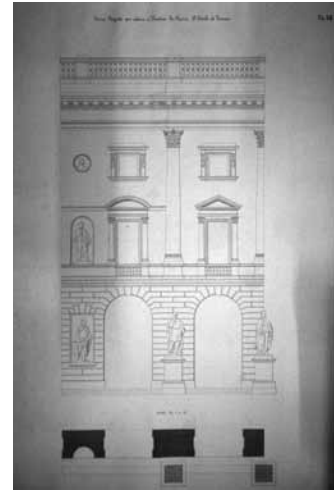
46 サン・カルロ広場のパンテオン化 (1860年)



第1案

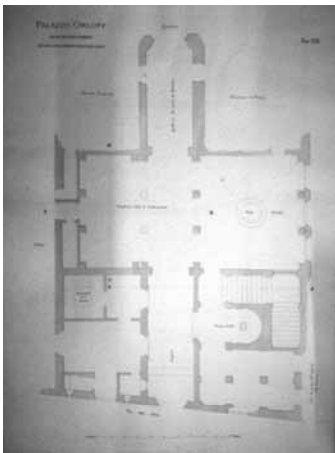


第2案

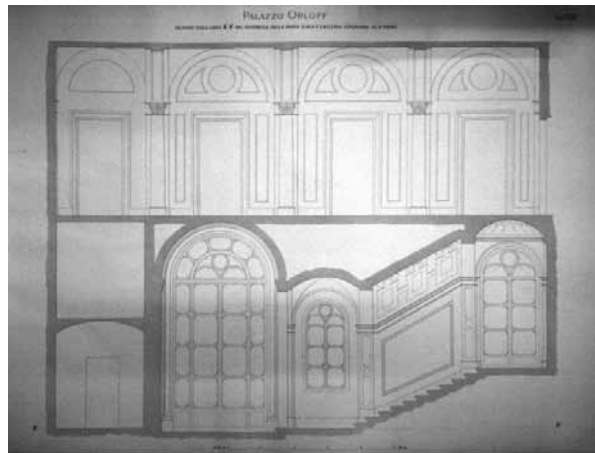


第3案

47 パラッツォ・オルロフ (1861年以前)

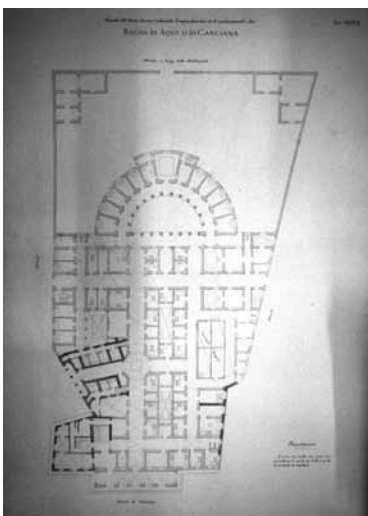


平面図 (1階)

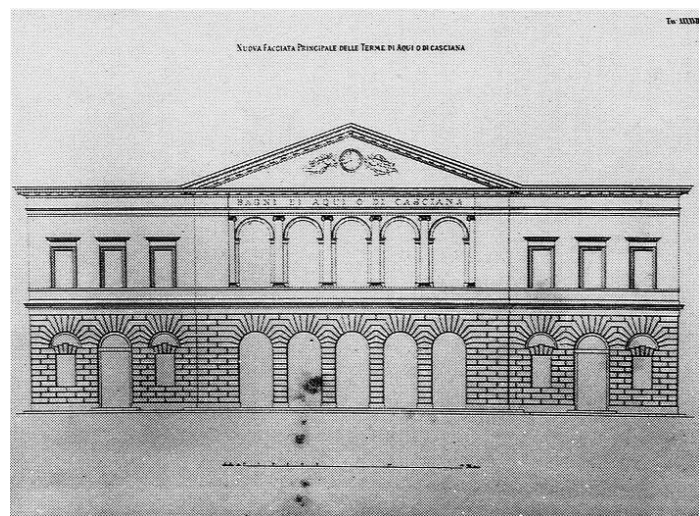


断面図 (階段)

51 カッシャーナ温泉 (1864年)

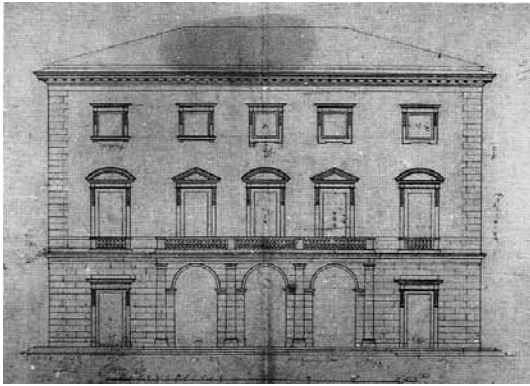


立面図 (東面、広場側)



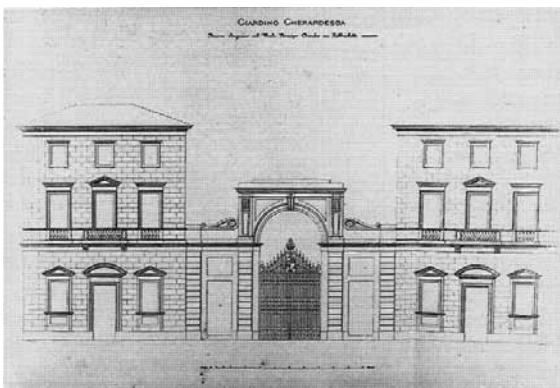
断面図

52 ヴィラ・デッラ・リーパ (1864年)

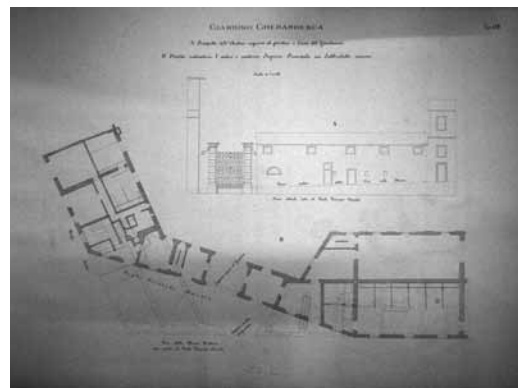


立面図 (正面)

54 ゲラルデスカ庭園の門扉 (1870年頃)

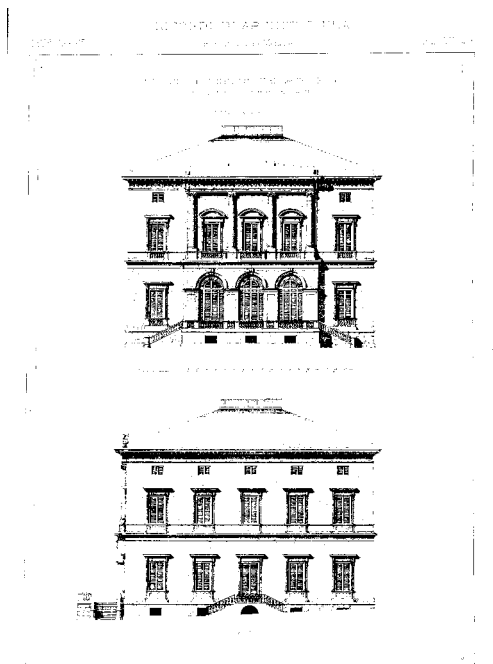


立面図 (正面)

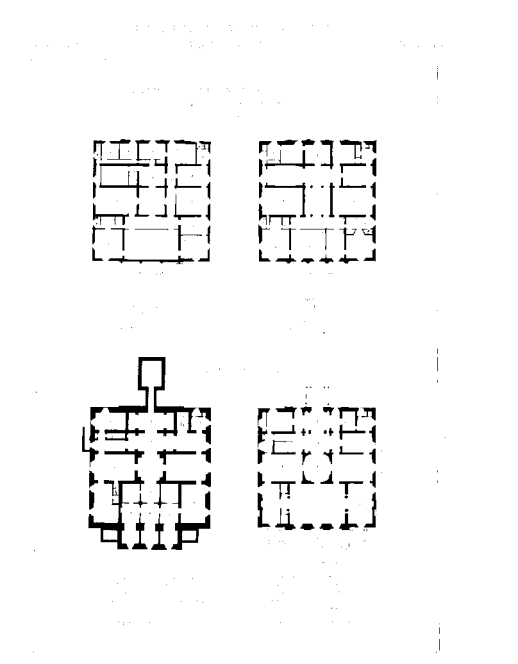


改築前立面図、平面図

56 ヴィラ・コーラ (1870年頃)

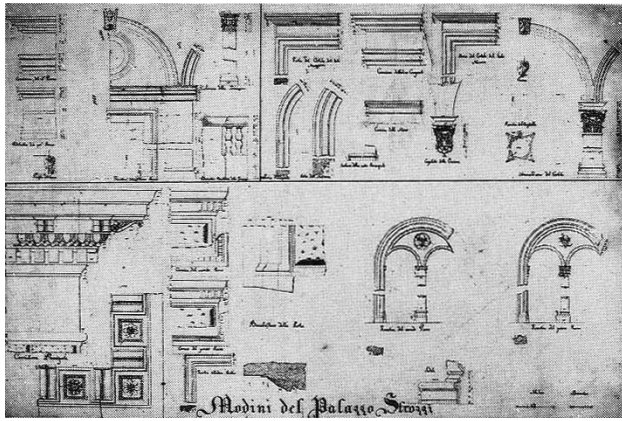


立面図 (正面、背面)



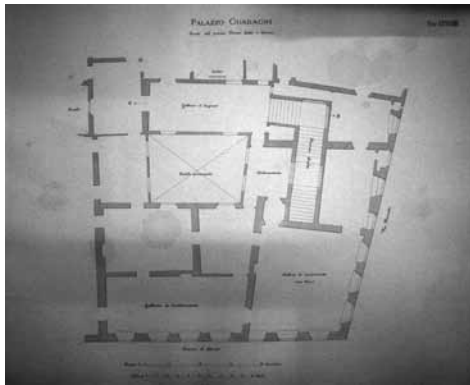
平面図 (地下、1階、2階、3階)

57 パラッツォ・ストロツツィ

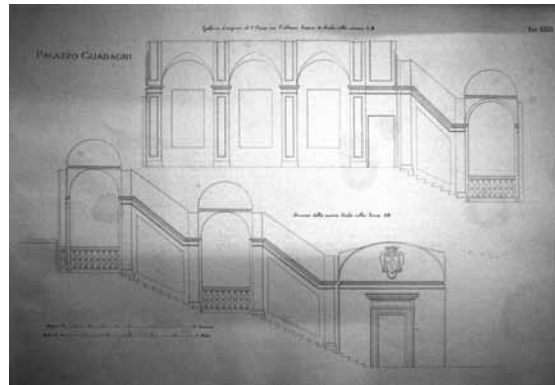


オーダー詳細図

58 パラッツォ・グアダーニ (1870年頃)

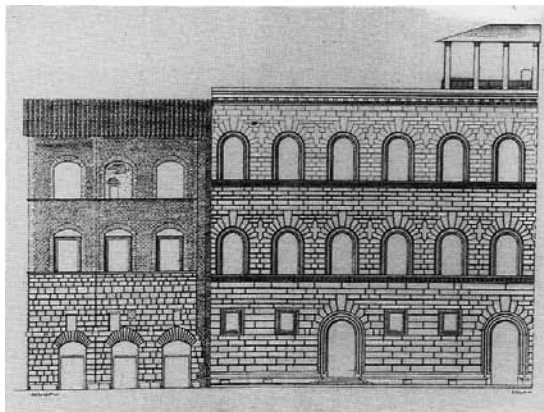


平面図 (2階)

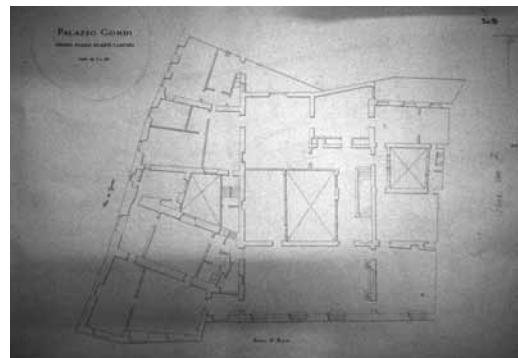


断面図 (階段)

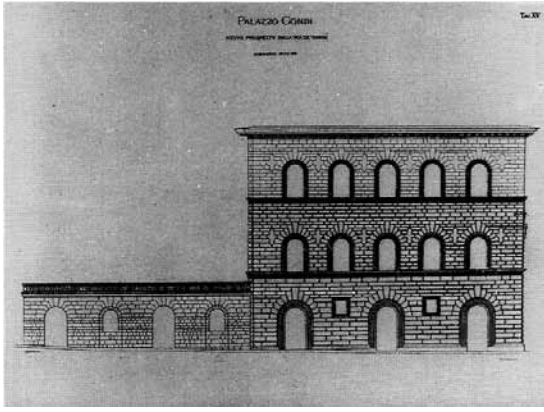
59 パラッツォ・ゴンディ (1871～1884年)



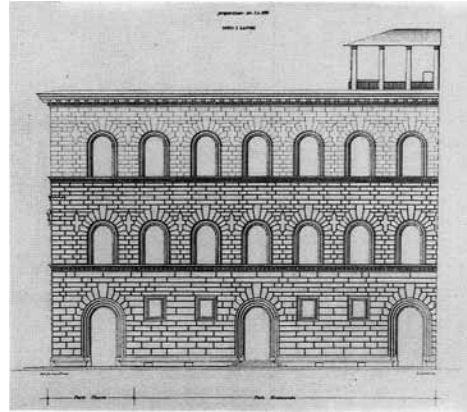
改築前立面図 (東面)



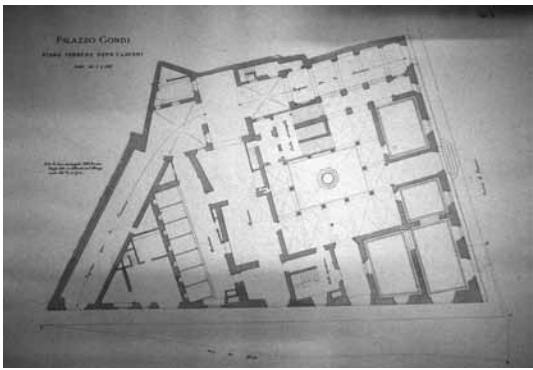
改築前平面図 (1階)



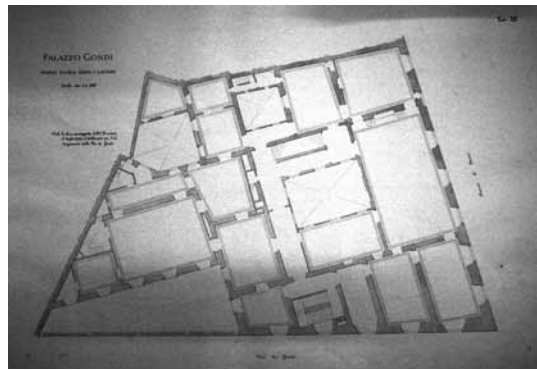
改築前立面図（南面）



立面図（東面）

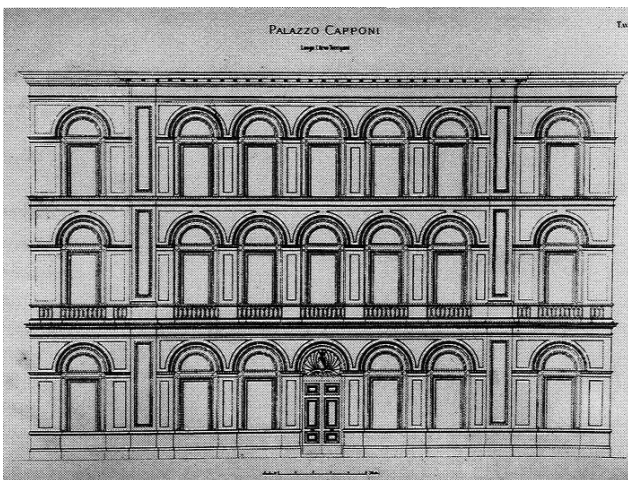


平面図（1階）



平面図（2階）

60 パラッツォ・カッポーニ（ルンガルノ・トリジャーニ）（1870年頃～1872年）



立面図（正面）